

熊本県文化財報告第227集

古 麓 城 跡

九州新幹線新八代・西鹿児島間建設工事に伴う埋蔵文化財調査

2005.3

熊本県教育委員会

Copyright by Board of Education ,Kumamoto Prefectural Office



古麓城跡（北上空より）



古麓城跡（西上空より）



調査 I 区五輪塔群出土状況



調査 I 区水輪（132）火葬骨検出状況



調査Ⅱ区全景



調査Ⅱe区全景



調査Ⅱ h区全景

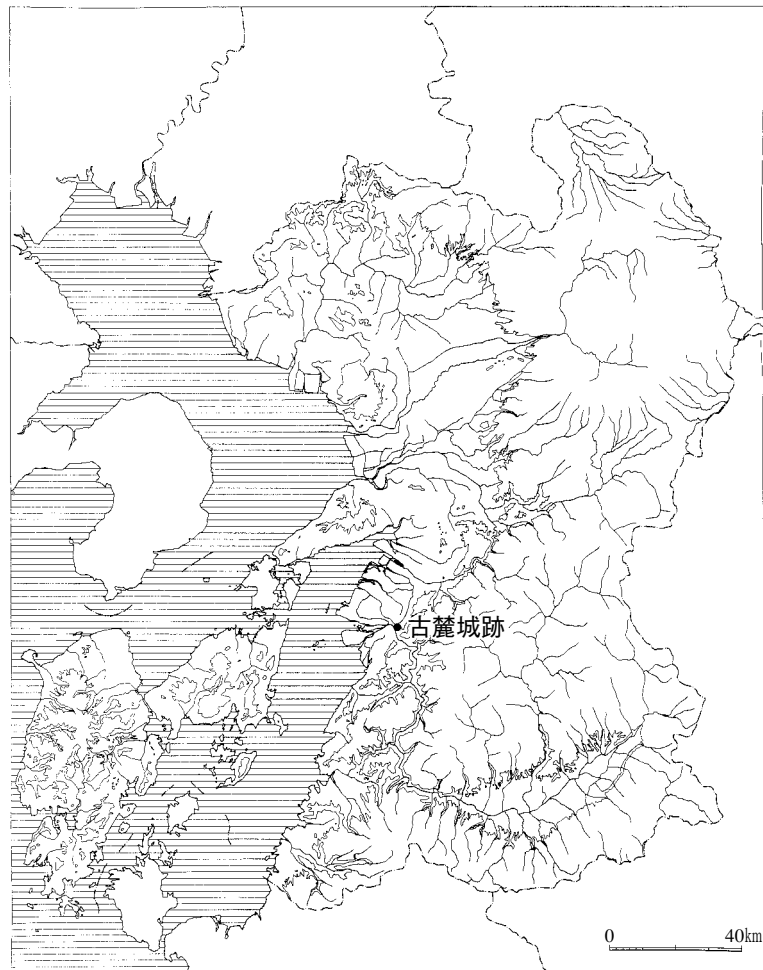


調査Ⅱ h区SE03調査状況

熊本県文化財報告第227集

古麓城跡

—九州新幹線新八代・西鹿児島間建設工事に伴う埋蔵文化財調査—



2005.3

熊本県教育委員会

序 文

『古麓城跡』は昭和40年4月12日付けで八代市の指定史跡となりました。その範囲の一部が、九州新幹線建設事業の予定地内に含まれていました。県としては重要な案件である九州新幹線建設と、この城跡の一部とはいえ八代市の指定史跡をどのように扱うかを巡って、熊本県・八代市の文化財保護部局と開発側との協議が重ねられました。

その結果、史跡の一部を現状変更するという事で事業との調整を図りました。しかし、指定の解除には至らなかったものの、このような手続きで済ませたことは、今後の文化財保護行政にとって大きな禍根を残すこととなりました。

調査成果としては、南北朝時代の南朝年号「元中」の紀年銘が記された五輪塔を初めとする墓地を発見し、名和氏とその後の社会情勢の変化の一端を掴めました。また、先に刊行された『能寺遺跡・古麓城下遺跡』との関連が予想される遺構の出土や、麦島城築城に関係する加藤正方の母と伝えられる墓所の調査など意義深いものがありました。

しかしながら、工事と平行した本調査、その後の資料整理・報告書作成を含めた発掘調査全体の体制のあり方について、今後課題を残したのも事実です。

この調査成果が今後の文化財保護行政にとって何らかの資料を提供できれば幸いです。

最後になりましたが、八代市を初め地元行政及び地元の方々、当時の鉄道建設公団並びに工事関係者の方々にはお世話になりました。改めて謝辞をもうしあげます。

平成17年3月31日

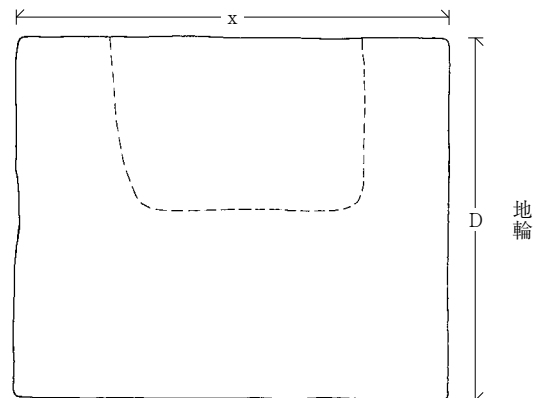
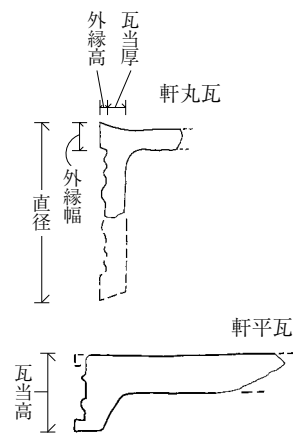
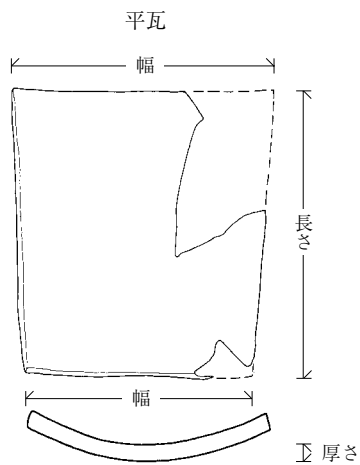
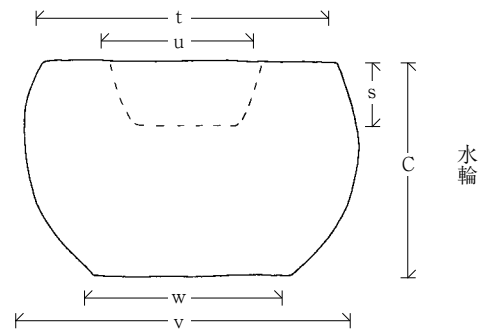
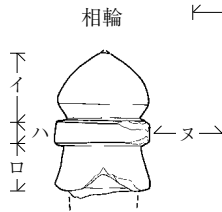
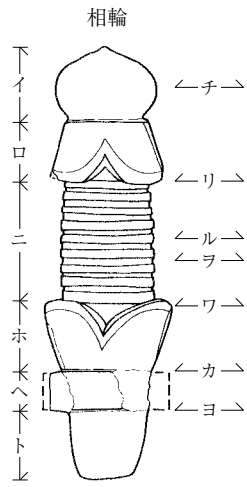
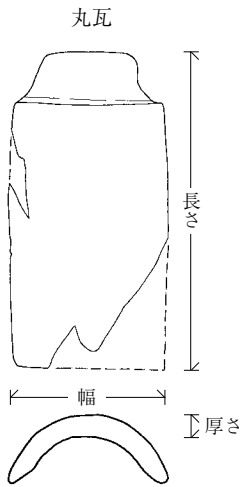
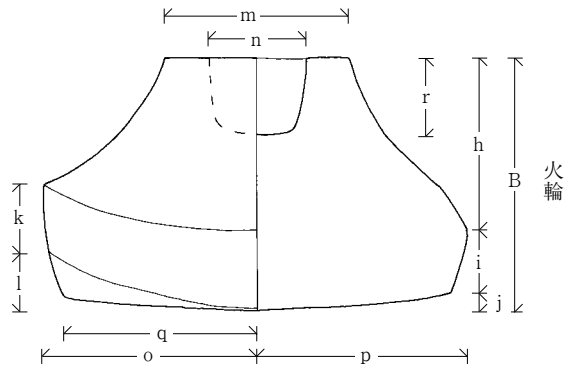
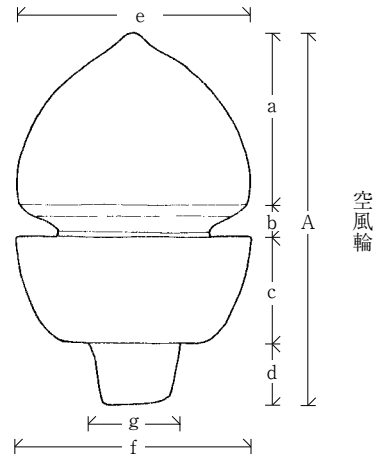
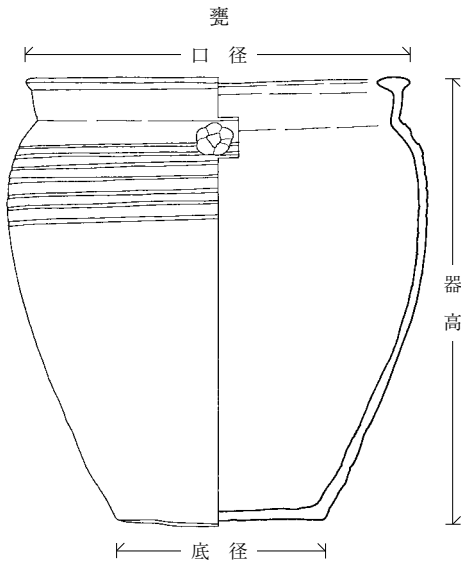
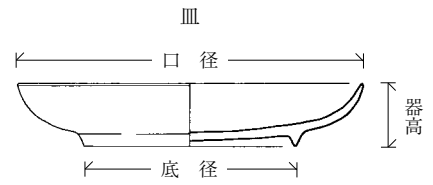
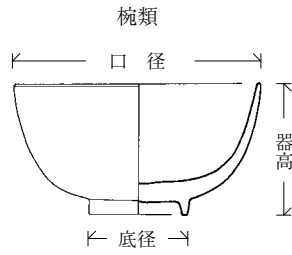
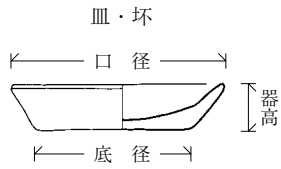
熊本県教育長 柿 塚 純 男

例 言

- 1 本書は、九州新幹線鹿児島ルート建設事業に伴って実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 本書は熊本県教育委員会が鉄道建設公団九州建設局(現独立行政法人鉄道・運輸建設整備事業機構九州建設局)の委託を受けて実施した、熊本県八代市古麓町に所在する古麓城跡の調査報告書である。
- 3 古麓城跡の調査Ⅰ区は平成12年12月から平成13年5月まで、調査Ⅱ区は平成13年10月から平成14年4月までの期間、現地において熊本県教育庁文化課が発掘調査を実施した。
- 4 発掘調査にともなう遺構の実測ならびに現地の写真撮影は、調査Ⅰ区を出田久斉・米村 大が、調査Ⅱ区を出田・米村・宮崎 拓・青柳博晃・水野哲郎・古城史雄(当時宇城事務所所属)が行った。地形測量・遺構実測の一部は埋蔵文化財サポートシステム熊本支店・株式会社パスコに委託した。
- 5 調査区全体の4級基準点測量、各区の地形測量、取り上げ遺物データ化作業等は株式会社埋蔵文化財サポートシステム熊本支店・株式会社パスコで実施した。
- 6 各調査区の全体写真は九州航空株式会社が撮影した。
- 7 整理作業・報告書作成は平成15年4月から平成16年3月まで、主たる調査員が異動により転出もしくは他業務についたため、坂田和弘・岡田基子・西畑美希が熊本県文化財資料室で実施した。
- 8 遺物の実測は岡田、西畑、山田友子、渡辺いわず、府内博子、東ひとみ、木村典子が行った。
- 9 遺構、遺物の製図は浜崎清子、清水千郷が行った。また写真図版掲載の遺物の写真撮影は村田百合子が行った。
- 10 自然科学的分析はパリノ・サーヴェイ株式会社が行った。
- 11 陶磁器の色調は『中国の伝統色第2版』(大日本インキ化学)を、その他の色調は『新版標準土色帖2002年版』(日本色彩研究所)を基準に使用した。
- 12 本書の執筆は、第6章自然科学的分析をパリノ・サーヴェイ株式会社が、それ以外を坂田が行った。
- 13 本書の編集は坂田が行い、岡田が補助した。

凡 例

- 1 全調査区配置図は1,800分の1とした。
- 2 現地での実測作業では遺構配置図を調査区毎に100分の1で作成することとし、本書への掲載はⅠ区500分の1、Ⅱ区100分の1、150分の1、200分の1とし図中に縮尺を示した。
- 3 現地での各遺構の実測縮尺は20分の1、10分の1でおこなった。本書への掲載縮尺は基本的に80分の1、40分の1、20分の1で行い、図中に縮尺を示した。
- 4 遺構内より一括して出土している遺物出土状況図には、重要度に応じて平面図中に遺物番号を記し、その位置を実線で示した。
- 5 出土遺物は全て通し番号とした。縮尺は土器では3分の1を基本とし、大型品を5分の1とした。石器では4分の1、木器では6分の1、3分の1とした。縮尺は図中に表示した。
- 6 出土遺物の解説は本文中に記した。種別・形式・法量出土層位等については、別途一覧表を作成し、巻末に掲載した。
- 7 遺構名称は調査区ごとに「略記号+遺構番号」で表すこととした。略記号は以下のとおりである。
墓所(ST)、土坑跡(SK)、溝跡(SD)、井戸跡(SE)、掘立柱建物跡(SB)、柵列(SA)、
不明遺構及び「～状遺構」(SX)
- 8 五輪塔の遺物番号と取り上げ番号を併記する場合は、遺物番号(SG取り上げ番号)とした。
- 9 本文中で示した座標は主として国土座標(第Ⅱ系による)を使用した。抄録では世界測地系とした。



本文目次

表紙
見返し
中扉
巻頭カラー
序文
例言
凡例

目次

第1章 調査に至る経緯	
第1節 九州新幹線鹿児島～八代間建設事業について	1
第2節 八代市指定史跡『古麓城跡』について	1
第3節 調査に至る経過	1
第4節 調査の組織	3
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 遺跡の地理的位置	5
第2節 遺跡の歴史的環境	5
第3章 調査の経過	
第1節 調査の方法	15
第2節 調査の工程	19
第3節 整理作業・報告書作成の方法と工程	21
第4節 広報活動	22
第4章 調査Ⅰ区の調査成果	
第1節 調査Ⅰ区の調査概要	23
第2節 基本層序について	24
第3節 遺構	32
第4節 遺物	60
第5章 調査Ⅱ区の調査成果	
第1節 調査区の概要	77
第2節 調査Ⅱa区	77
第3節 調査Ⅱb区	86
第4節 調査Ⅱc区	114
第5節 調査Ⅱd区	119
第6節 調査Ⅱe区	120
第7節 調査Ⅱf区	135
第8節 調査Ⅱg区	141

第9節 調査Ⅱh区	144
第10節 調査Ⅱi区	168
第11節 調査Ⅱj区	174
第6章 自然科学的分析	
古麓城跡出土木製品の樹種同定	179
第7章 まとめ	
第1節 調査Ⅰ区の墓地群について	185
第2節 古代の遺構と遺物	198
第3節 調査の総括	198

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図 古麓城跡遺跡周辺遺跡分布図	第27図 Ⅰ区紀年名地輪実測図
第2図 周辺地形図	第28図 Ⅰ区五輪塔、相輪実測図
第3図 調査区配置図	第29図 Ⅰ区空風輪実測図(1)
第4図 Ⅰ区遺構配置図	第30図 Ⅰ区空風輪実測図(2)
第5図 Ⅰ-①区土層断面図	第31図 Ⅰ区火輪実測図
第6図 Ⅰ-②区・南東峡谷土層断面図	第32図 Ⅰ区水輪実測図(1)
第7図 Ⅰ-③区土層断面図	第33図 Ⅰ区水輪実測図(2)
第8図 Ⅰ-①区時期別遺構配置図	第34図 Ⅰ区地輪実測図(1)
第9図 Ⅰ-①区ST01-1・ST01-2実測図	第35図 Ⅰ区地輪実測図(2)
第10図 Ⅰ-①区ST02実測図	第36図 Ⅰ区地輪実測図(3)
第11図 Ⅰ-①区ST03・ST04実測図	第37図 Ⅰ区一字一石実測図
第12図 Ⅰ-①区ST05実測図	第38図 Ⅰ区遺構出土遺物実測図
第13図 Ⅰ-①区ST06・ST07実測図	第39図 Ⅰ区包含層出土遺物実測図(1)
第14図 Ⅰ-①区ST08実測図	第40図 Ⅰ区包含層出土遺物実測図(2)
第15図 Ⅰ-①区紀年銘地輪実測図	第41図 Ⅰ区包含層出土遺物実測図(3)
第16図 Ⅰ-①区ST10実測図	第42図 Ⅱa区遺構配置図
第17図 Ⅰ-①区ST13・ST14・ST15実測図	第43図 Ⅱa区土層断面図
第18図 Ⅰ-①区ST16・ST17実測図	第44図 Ⅱa区ST01・ST02実測図
第19図 Ⅰ-①区ST09・ST11実測図	第45図 Ⅱa区SK01・SK02実測図
第20図 Ⅰ-①区ST12・五輪塔群実測図	第46図 Ⅱa区遺構出土遺物実測図
第21図 Ⅰ-①区SX02・SX03実測図	第47図 Ⅱa区包含層出土遺物実測図
第22図 Ⅰ-①区SR01実測図	第48図 Ⅱb区上面遺構配置図
第23図 Ⅰ-①区SK01実測図	第49図 Ⅱb区下面遺構配置図
第24図 Ⅰ-②区ST17・ST18実測図	第50図 Ⅱb区土層断面図
第25図 Ⅰ-②区SK02～06実測図	第51図 Ⅱb区SW01・SW02実測図
第26図 Ⅰ-②区SW01実測図	第52図 Ⅱb区SK04実測図

- 第53図 II b区SK05、SK06実測図
- 第54図 II b区SW01出土遺物実測図(1)
- 第55図 II b区SW01出土遺物実測図(2)
- 第56図 II b区SW01出土遺物実測図(3)
- 第57図 II b区SW01出土遺物実測図(4)
- 第58図 II b区SW01出土遺物実測図(5)
- 第59図 II b区SW01出土遺物実測図(6)
- 第60図 II b区SW01出土遺物実測図(7)
- 第61図 II b区SW01出土遺物実測図(8)
- 第62図 II b区SW01出土遺物実測図(9)
- 第63図 II b区SW01出土遺物実測図(10)
- 第64図 II b区SW01出土遺物実測図(11)
- 第65図 II b区SW01出土遺物実測図(12)
- 第66図 II b区SW01出土遺物実測図(13)
- 第67図 II b区SW01出土遺物実測図(14)
- 第68図 II b区SW01出土遺物実測図(15)
- 第69図 II b区包含層出土遺物
- 第70図 II c区・II d区遺構配置図
- 第71図 II c区土層断面図
- 第72図 II c区SE02実測図
- 第73図 II c区SE02出土遺物実測図
- 第74図 II e区遺構配置図
- 第75図 II e区土層断面図
- 第76図 II e区ST03(妙慶禪尼墓)実測図
- 第77図 II e区ST03下部遺構実測図
- 第78図 II e区ST04・ST05実測図
- 第79図 II e区ST03出土遺物実測図(1)
- 第80図 II e区ST03出土遺物実測図(2)
- 第81図 II e区ST03出土遺物実測図(3)
- 第82図 II e区ST03出土遺物実測図(4)
- 第83図 II e区ST03出土遺物実測図(5)
- 第84図 II e区ST03出土遺物実測図(6)
- 第85図 II f区土層柱状図
- 第86図 II f区遺構配置図
- 第87図 II f区SK09・SK10実測図
- 第88図 II f区SA01～05・SB01実測図
- 第89図 II f区SK10・包含層出土遺物実測図
- 第90図 II g区遺構配置図
- 第91図 II g区SX01実測図
- 第92図 II g区包含層出土遺物実測図
- 第93図 II h区遺構配置図
- 第94図 II h区土層断面図
- 第95図 II h区ST06・ST07実測図
- 第96図 II h区SK13実測図
- 第97図 II h区SX04・SX05実測図
- 第98図 II h区SE03上面実測図
- 第99図 II h区SE03下面実測図
- 第100図 II h区SE03土層断面実測図
- 第101図 II h区ST06・ST07出土遺物実測図
- 第102図 II h区SX04出土遺物実測図
- 第103図 II h区SE03出土遺物実測図(1)
- 第104図 II h区SE03出土遺物実測図(2)
- 第105図 II h区SE03出土遺物実測図(3)
- 第106図 II h区SE03出土遺物実測図(4)
- 第107図 II h区SE03出土遺物実測図(5)
- 第108図 II h区SE03出土遺物実測図(6)
- 第109図 II h区SE03出土遺物実測図(7)
- 第110図 II h区SE03出土遺物実測図(8)
- 第111図 II h区包含層出土遺物実測図(1)
- 第112図 II h区包含層出土遺物実測図(2)
- 第113図 II h区包含層出土遺物実測図(3)
- 第114図 II h区包含層出土遺物実測図(4)
- 第115図 II i区遺構配置図
- 第116図 II i区土層断面図
- 第117図 II i区SD04実測図
- 第118図 II i区SX06実測図
- 第119図 II i区SX06・包含層出土遺物実測図
- 第120図 II j区遺構配置図
- 第121図 II j区土層断面図
- 第122図 II j区廻国塔
- 第123図 I 区時期別遺構配置図
- 第124図 I 区墓地変遷図
- 第125図 I 区空風輪分類図
- 第126図 I 区火輪分類図
- 第127図 I 区水輪分類図
- 第128図 I 区地輪分類図
- 第129図 宝塔・宝篋印塔分類図

表 目 次

第1表	九州新幹線鹿児島ルート熊本県内発掘調査 遺跡一覧表	第7表	一字一石観察表
第2表	周辺遺跡地名表	第8表	土錘観察表
第3表	第2次調査区の対照表	第9表	石器・石製品観察表
第4表	調査Ⅰ区出土遺構新旧対照表	第10表	土器観察表
第5表	古麓城跡の樹種同定結果	第11表	陶磁器観察表
第6表	五輪塔観察表	第12表	瓦観察表

図 版 目 次

図版1	古麓城跡の木材(1)	図版16	Ⅰ区水輪109・114・121・125・126・132・135
図版2	古麓城跡の木材(2)	図版17	Ⅰ区地輪155・156・162・163・164・165
図版3	古麓城跡の木材(3)	図版18	Ⅰ区土師質土器・一字一石・SK01(1)
図版4	Ⅰ区遺構検出状況	図版19	Ⅰ区土師質土器・184～187・189～192
図版5	Ⅰ区遺構検出状況	図版20	Ⅱa区235～237、Ⅱb区270・272・278・280～ 282・288・292・369
図版6	Ⅰ区五輪出土状況	図版21	Ⅱb区298・303・339・340
図版7	Ⅰ区五輪・遺構検出状況	図版22	Ⅱh区ST06(409～412)
図版8	Ⅰ区遺構検出状況	図版23	Ⅱh区ST07(415～416)・464
図版9	Ⅱa、Ⅱb、Ⅱc区遺構検出状況	図版24	Ⅱh区419・429・461、479・482・484・485・487・ 488・497・498
図版10	Ⅱe、Ⅱf、Ⅱg区遺構検出状況	図版25	Ⅱc区空風輪377・378、Ⅱh区火輪452、水 輪453、宝篋印塔454～456
図版11	Ⅱh、Ⅱi、Ⅱj区遺構検出状況	図版26	瓦 Ⅱb区362・366～368、Ⅱe区380・382
図版12	Ⅰ区五輪集合	図版27	瓦 Ⅱe区383・389・390・392・447・448
図版13	Ⅰ区地輪2、相輪3・4、五輪塔8・9・10・11		
図版14	Ⅰ区空風輪19・26・32・34・37・42・60・63		
図版15	Ⅰ区空風輪65・67・68・69、火輪71・75・90・93		

第1章 調査に至る経緯

第1節 九州新幹線鹿児島～八代間建設事業について

九州新幹線鹿児島ルートは、昭和47年6月27日に基本計画が決定され、さらに昭和48年11月13日に整備計画が決定された。この間、熊本県文化課はルート計画地の事前審査を実施し、現状での遺跡の所在を報告している。

昭和61年8月29日には、工事実施計画が申請された。しかし、緊急景気対策や緊急雇用対策等の社会施策の変化に伴い、全体計画のうち八代～西鹿児島間の126.07kmを平成3年8月9日に工事実施計画が申請され、同年8月22日に認可された。これを受けて平成3年9月7日に建設工事が起工し、平成15年度に八代～西鹿児島間の開通を目指す九州新幹線鹿児島ルートの具体的な建設が開始された。

平成9年5月6日の日本鉄道建設公団九州新幹線建設局からの津奈木町域での文化財の照会並びに試掘調査の依頼を皮切りに、熊本県内でも新幹線路線建設に伴う埋蔵文化財調査が本格化した。

八代市域でも日本鉄道建設公団九州新幹線建設局の依頼を受けて、県文化課が平成10年度に遺跡台帳の照合と現地踏査を実施した。その結果、島田遺跡、西片町遺跡、中片町遺跡、伝キリシタン寺院跡、観行寺遺跡、能寺跡(古麓能寺遺跡)、古麓城下遺跡などの周知の埋蔵文化財包蔵地が予定路線内に存在することが照合された。県文化課は、これらの地点に埋蔵文化財包蔵地が存在する可能性が高いと判断し、踏査結果を日本鉄道建設公団九州新幹線建設局に報告し、併せて当該地区での試掘調査並びに確認調査が必要な旨を通知した。

なお、九州新幹線鹿児島ルート(鹿児島～八代間)における熊本県内の発掘調査遺跡は第1表のとおりである。

第2節 八代市指定史跡『古麓城跡』について

ここでいう『古麓城跡』は、名和氏時代の飯盛城・丸山城・鞍掛城・勝尾城・八町嶽城の五城、相良氏時代の新城・鷹峰城を総称したものである。古麓城跡は、時代により城域が変遷しているが、この城は様々な時代の舞台として全体を将来に残すべきものとして八代市の指定史跡とされた。

九州新幹線鹿児島ルート路線選定期間に埋蔵文化財の有無の照会が県教育委員会になされている。遺跡台帳や現地踏査を実施して回答している。そのころにはまだ指定史跡とはなっていなかったようである。その後、市の調査などにより具体的指定範囲が特定されていく。その中で、指定範囲の一角が新幹線ルートに含まれることが分かったのは事業が具体化してからである。範囲にかかる城跡の範囲では、大部分はトンネルにより地下を通る。しかし、城跡の裾部の一角である仮設ヤード工事部分付近と妙見トンネル出口等付近は確実に地上に工事が及ぶものであった。

第3節 調査に至る経過

このような状況を踏まえ、工事を最優先する当時の鉄道建設公団と熊本県・八代市との三者間で協議を持つことになった。協議自体は、文化財保護行政の根幹に関わる問題であったが、工事工程や地元住民と公団との絡みなどにより、数回の協議を持ったものの最終的には、史跡の部分解除ではなく、八代市文化財保護条例に基づき、八代市文化財保審議会に公団から現状変更申請を提出し、審議会で審議し変更が妥当かの判断をしてもらうことに落ち着いた。文化財調査についてはその後実施することになった。また、審議会への報告も逐次必要に応じて行うこととなった。さらに調査を進めるに当たっては、最低限でも工事により改変される状況を記録することを主とした。

第1表 九州新幹線鹿児島ルート（鹿児島～八代間）熊本県内発掘調査遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	調査期間	時代	主な遺構・遺物
1	長野遺跡 (本線) 調査面積1,500㎡	水俣市長野町	H9.12.8～ H10.3.31	縄文・弥生 中世	掘立柱建物2棟 縄文後期～晩期土器、石器 楔形石器、石核、剥片類 龍泉窯青磁碗
2	古麓城跡 (本線) 調査面積3,800㎡ (第1次) 調査面積2,200㎡ (第2次)	八代市古麓町	H12.12.5～ H13.5.31	中世	五輪塔群、井戸跡、木棺墓 掘立柱建物跡、石組井戸 須恵器、土師器、瓦質土器、龍泉窯系青磁
			H13.10.9～ H14.4.30		
3	古麓能寺遺跡 (本線及び変電所) 調査面積4,528㎡	八代市古麓町 字能寺	H13.4.28～ H14.3.20	古代・中世 近世	竪穴住居跡、貝塚、石組井戸 掘立柱建物跡、柵列、墓壇 須恵器、土師器、龍泉窯系青磁 景德鎮系染付、福建系陶器 朝鮮王朝系白磁 常滑系陶器
4	古麓城下遺跡 (本線) 調査面積505㎡	八代市古麓町 字砥崎	H14.1.8～ H14.4.20	古代・中世	溝、土壌、柵列 須恵器、土師器、龍泉窯系青磁 景德鎮系染付、瓦質土器等
5	宮地観行寺遺跡 (本線) 調査面積1,802.7㎡ (側道) 調査面積352.4㎡	八代市宮地町 字観行寺	H13.10.9～ H14.5.14	古代・中世 近世	配石遺構、溝、竪穴住居址 掘立柱建物址、土壌等 須恵器、土師器、龍泉窯系青磁等
		八代市宮地町 字観行寺	H15.5.6～ H15.9.30	古代・中世	製鉄関係遺構(炭窯、溝) 敷石溝、土壌等 須恵器、土師器 鉄滓、鍛造剥片
6	宮地小畑遺跡 (本線) 調査面積1,702.1㎡ (側道) 調査面積1,530.4㎡	八代市宮地町 字小畑	H14.2.1～ H14.6.3	古墳・古代 中世・近世 近代	掘立柱建物、溝、土壌、柱穴等 埋没河川、貝塚(中世) 須恵器、土師器、龍泉窯系青磁 同安窯系青磁、緑釉陶器、木器 人骨・獣骨・貝等
		八代市宮地町 字小畑	H15.4.1～ H15.10.12	古代・中世 近世	掘立柱建物、溝、土壌、柱穴等 埋没河川 須恵器、土師器、龍泉窯系青磁、緑釉陶器等
7	宮地池尻遺跡 (本線) 調査面積597㎡	八代市宮地町 字池尻	H14.1.31～ H14.4.30	古墳・古代 中世・近世	竪穴住居、土坑、掘立柱建物 須恵器、土師器、陶磁器等
8	キリシタン寺院跡 (本線) 調査面積635㎡	八代市宮地町 字五反田・池尻	H13.11.26～ H14.5.31	古代・中世 近世	土坑、柱穴 須恵器、土師器、布目瓦、陶磁器
9	宮地年神遺跡 (本線) 調査面積912㎡	八代市宮地町 字年加美・源八	H13.11.1～ H14.5.31	弥生～ 中世	土坑、掘立柱建物、井戸 弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器、瓦質土器
10	中片小路遺跡 1区・2区 (本線) 調査面積3,700㎡ 3区・4区 (側道) 調査面積1,200㎡	八代市中片町 字小路	H12.8.1～ H13.3.31	古墳・中世 近世	近世掘立柱建物跡、近世墓 旧河川等
		八代市中片町 字小路	H13.10.1～ H14.2.28	中世・近世	掘立柱建物、井戸、溝等
11	西片稲村遺跡 (本線) 調査面積2,800㎡	八代市西片町 字稲村	H13.4.15～ H13.9.28	弥生・古代 中世	井戸、住居址、掘立柱建物等 須恵器、土師器等
12	西片百田遺跡 (駅舎及び本線) 調査面積6,284㎡	八代市西片町 字百田	H12.8.7～ H14.4.3	弥生後期 古墳初頭	竪穴住居跡、溝、土壌 弥生中期(重弧文土器)、 古墳時代初頭土師器
13	上日置女夫木遺跡 (駅舎) 調査面積3,000㎡	八代市上日置町 字女夫木	H13.11.1～ H14.1.31	弥生前期 弥生後期	方形周溝墓、円形周溝墓 住居址 弥生土器、土師器等
14	島田遺跡 (本線) 調査面積1,530.4㎡	八代市島田町	H13.8.6～ H14.3.29	弥生前期 弥生後期	住居址、土器溜、溝 弥生土器、石器等

※7・8・9は八代市教育委員会が実施

実際には、県文化課は工事期間との関係で状況把握をするため、地権者の同意を取り市保護審議会に打診しながら、確認調査等を行っている。

第4節 調査の組織

【本調査第1次】

2000(平成12)年度

調査責任者 阪井大文(文化課長)、島津義昭(課長補佐)
 調査総括 高木正文(主幹兼調査第1係長)
 調査担当 出田久斉(文化財保護主事、現熊本市立中学校教諭)、米村 大(嘱託)
 調査事務局 川上康治(課長補佐)、中村幸宏(主幹兼総務係長)、上村修治(参事)、広瀬泰之(参事)、
 杉村輝彦(主事)

【本調査第2次】

2001(平成13)年度

調査責任者 阪井大文(首席教育審議員兼文化課長)、島津義昭(課長補佐)
 調査総括 高木正文(主幹兼調査第1係長)
 調査担当 水野哲郎(文化財保護主事)、青柳博晃(土木部新幹線都市整備総室兼教育庁文化課主事)、
 出田久斉(同上)、米村 大(同上)、古城文雄(宇城教育事務所参事)、宮崎 拓(嘱託)
 調査事務局 小田信也(課長補佐)、中村幸宏(主幹兼総務係長)、広瀬泰之(参事)、杉村輝彦(主事)

2002(平成14)年度

調査責任者 成瀬烈大(文化課長)、島津義昭(教育審議員兼課長補佐)
 調査総括 高木正文(主幹兼調査第1係長)
 調査担当 水野哲郎(文化財保護主事)、青柳博晃(土木部新幹線都市整備総室兼教育庁文化課主事)、
 出田久斉(同上)、米村 大(同上)
 調査事務局 小田信也(教育審議員兼課長補佐)、中村幸宏(主幹兼総務係長)、杉村輝彦(主任主事)、
 天野寿久(主任主事)

【整理並びに報告書作成】

2003(平成15)年度

調査責任者 成瀬烈大(文化課長)、島津義昭(教育審議員兼課長補佐)
 調査総括 高木正文(課長補佐兼調査第1係担当)
 調査担当 坂田和弘(参事)、岡田基子(嘱託)、西畑美希(嘱託)、森 愛華(嘱託)
 調査事務局 吉田 恵(課長補佐)、中村幸宏(主幹兼総務係長)、杉村輝彦(主任主事)、
 天野寿久(主任主事)

【調査指導・助言及び協力者】 工藤敬一(九州産業大学)、鶴島俊彦(人吉市教育委員会)、山本信夫(山本考古研究所)、狭川真一((財)元興寺文化財研究所)、安養寺、八代史談会(松山丈三、市村義成)、八代市教育委員会(吉永明、澤田宗順、濱田健資、山内淳司、西山由美子)、八代市立博物館未来の森ミュージアム(阿蘇品保夫、福原透、早瀬輝美、石原浩、山崎撰、林千寿)、日本鉄道公団九州新幹線建設局八代鉄道建設所、鹿島・小田急・志多・緒方特定建設工事共同企業体九州新幹線妙見トンネル他工事事務所、八代市宮地校区、八代市古麓町町内会、熊本県新幹線都市整備総室

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の地理的位置

古麓城跡は、球磨川が八代平野にさしかかる右岸の麓山一帯に構築された中世山城跡である。

本調査区は熊本県八代市古麓町字新城に所在する。調査Ⅰ区の位置は北緯32度29分32秒、東経130度38分16秒で、調査Ⅱ区は北緯32度29分42秒、東経130度38分16秒から北緯32度29分37秒、東経130度38分18秒にかけてである。(世界測地系による)

この一帯は九州脊梁山地が八代平野に接する部分で、かつ九州脊梁山地を西進する球磨川が八代平野に進出する球磨川右岸で、球磨川から北に約600mの位置に当たる。現地はどちらもこの山地の谷部及び中腹付近である。調査Ⅰ区は谷地形の中を一端畑地となったのちに荒れた状態にあった。調査Ⅱ区は、先に報告のあった古麓城下遺跡と地形的につながる場所である。

八代平野は熊本県の南部、八代海(不知火海)の東岸に形成された南北25kmにわたる沖積平野で、平野西側の大半は近世以降の干拓地である。平野東部は九州脊梁山地の西縁部に当たり、九州脊梁山地と八代平野が接する北北東-南南西に結ぶラインには日奈久断層と呼ばれる大断層崖が走り、300~500m内外の高さから30度ほどの傾斜で山塊が西に落ちている。また、白杵-八代構造線の西端に八代市宮地町が位置しており、構造線以北は古生界の肥後変成岩地域で、石灰岩、変成岩、花崗岩、蛇紋岩等から成り、構造線以南は中生界の八代層、日奈久層、砥用層等の砂岩、頁岩、礫岩で成立している。

八代平野は、これらの山間から大小河川によって運び出された堆積物で形成された扇状地や、球磨川をはじめとする水無川や氷川、砂川等によって山麓線から5km以上に及んで自然陸化した複合三角州によって形成された沖積平野である。

また、球磨川等の多くの河川があるため、八代平野では地下水が豊富で、遺跡が所在する宮地校区でも古くからの民家には必ず井戸が設けられている。八代海は潮の干満の差が大きく、広大な干潟ができるため、明暦期(1655~57)以降に積極的な干拓事業が行われて八代平野西部を形成している。

九州脊梁山地の縁辺に沿って山麓部を南下する国道3号は、一部路線変更はあるが中世及び近世の薩摩街道で、八代市街地を通過して球磨川を渡り、八代市日奈久町を経て芦北郡、さらに水俣市に至る九州西部の主要幹線道である。国道3号の西側を併行する県道鏡八代線(県道14号線)は、近世には「槍の柄往還」と呼ばれ、松橋町新四ツ角で国道3号から分岐し、八代郡鏡町を経て八代市街地に至り国道3号と再び合流する地方主要道である。また、県道小川八代線(県道155号線)は、八代市宮地町を経由して小川町と八代市を結ぶ国道3号と併行する道路である。県道八代中津道線(県道158号線)は、八代市宮地町と坂本村中津道を結ぶ球磨川右岸の沿岸道路で共に主要地方道である。国道219号は、八代市萩原町で国道3号から分岐して人吉市を経由して宮崎県西米良町に至る、球磨川左岸を通る地方幹線道である。JR鹿児島本線は、国道3号と併走して八代駅を通過し、八代駅からは人吉駅を経由して吉松駅に至る肥薩線が分岐している。球磨川河口の八代外港は、天草諸島を結ぶと共に海外にも開かれた地方拠点港である。一方、八代内港は八代海内海漁業の拠点港である。このように八代市は現在も水・陸上交通の要衝に位置している。

第2節 遺跡の歴史的環境

八代市域では、旧石器時代の遺跡は現在のところ知られていないが、今後の調査で確認される可能性は大きい。縄文時代以降の遺跡は多く発見されている。

以下、時代毎にその概要を『古麓能寺遺跡・古麓城下遺跡』により転載し記す。

【縄文時代】

八代平野では、縄文時代の遺跡は少なく、鐘楼堂遺跡(井上町)からは夜白式が出土し、川田小筑遺跡(川田町西)からも縄文晩期の土器が、球磨川左岸域では、五反田貝塚(敷川内町)や田川内貝塚(日奈久新田町)から縄文中期～後期の土器が出土している。また、産島貝塚や高島遺跡(高島町)といった八代海の旧島嶼でも土器や石器が表採されている。

これらはいずれも現在人々の生活と関わりの深い部分に限られているので、今後山地部分に開発が及べばさらに遺跡は増加するものと思われる。

【弥生時代】

八代平野では、弥生時代になると遺跡が増加し、弥生時代以降に大きく開発が進んだ事が推定される。球磨川右岸域の龍峯山麓から水無川流域にかけての一带に分布密度が濃くなっている。

島田遺跡(島田町)では、前期相当の遺構や遺物を確認し、西片百田遺跡(西片町)でも同様な遺物の出土を確認している。沖片遺跡(西片町)と長田遺跡(長田町)からは野部田式相当の後期の土器が出土している。東川田遺跡(川田町東)、川田京坪遺跡(川田町西)、鐘楼堂遺跡(井上町)、竹原遺跡(竹原町)等からは中期から後期にかけての土器が出土している事例がある。西片百田遺跡では免田式の後期の土器と共に竪穴住居跡を検出している。西片園田遺跡(西片町)でも免田式等の後期の土器と共に水路跡を検出している。

球磨川左岸域の沖積平野の末端部に位置する下堀切遺跡では集落周囲を巡る周溝が見つかり、土器や石器の他に鉄斧の柄等の木製品が出土している。

これらの点在する遺跡群から八代平野部における弥生時代前期からの集落形成状況が確認されつつあり、弥生時代後期には相当規模の集落を形成するまでに発達したものと考えられる。

【古墳時代】

八代平野では、古墳時代になると多くの古墳群が形成される。球磨川右岸域には大きく二つのグループがある。一つは車塚古墳や岡塚2号墳(川田町)といった前方後円墳を中心とした、車塚古墳群や岡塚古墳群、川上古墳群といった川田町の古墳群である。もう一つは八代大塚古墳や茶白山古墳、高取上の山古墳(上片町)といった前方後円墳群を中心とした、大塚古墳群や乙丸古墳群、東片町古墳群といった上片町から東片町一帯に分布する古墳群である。また、この地域には鬼の岩屋古墳群など、鬼の岩屋式古墳も多く見られる。

球磨川左岸域には、横穴式石室の石障や箱式石棺の内面に円文などを刻んだ装飾古墳が多く見られ、球磨川河口にある大鼠蔵古墳群・小鼠蔵古墳群(鼠蔵町)、平野南端部の五反田古墳(敷川内町)、田川内古墳(日奈久新田町)などがその代表である。

干拓で陸化している旧島嶼の産島、大島、高島でも古墳が確認されている。特に大鼠蔵古墳群に含まれている楠木山古墳(鼠蔵町)は4世紀に築造されたと推定される竪穴式石室で、八代平野南部での最古級の古墳として注目される。

【奈良時代～平安時代】

八代郡は奈良時代の『和名類聚抄』では「夜豆志呂」と表記され、「木行・高田・小河・肥伊・豊福」の五郷を載せる。このうち「高田」は奈良木町一帯と考えられ、駅路の「朽網」は二見本町、「片野」は上片町に比定され、上片町の北隣の川田京坪遺跡(川田町西)では「川大」と篋書きされた土師器が出土している。今回の新幹線関連調査においても、宮地観行寺遺跡から「川大」「秋女」等と篋書きされた土師器が多量に



第1図 古麓城跡遺跡周辺遺跡分布図 S=1/50,000

第2表 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
1	古麓城跡	古麓町 上り山	中世	城	市	土師器、須恵器、五輪塔群
2	古麓城下遺跡	古麓町 砥崎	中世	集落		土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器、建物跡多数
3	高島古墳	高島町 高島	古墳	古墳		箱式石棺、高島山中腹、横穴式巨石裝飾墳
4	浄沢寺貝塚	古閑中町 碓	古墳	貝塚		土師器、須恵器、浄沢寺境内及び周辺
5	船蔵貝塚	上野町 船蔵	古墳	貝塚		土師器、須恵器
6	碓塚貝塚	上野町 碓塚	古墳	貝塚		土師器、須恵器
7	芝口貝塚	田中町 芝口	古墳	貝塚		獣骨
8	阿弥陀堂	田中町 阿弥陀堂	中世	包蔵地		土師器、人骨16体、獣骨
9	夫婦石貝塚	古閑上町 聖神	古墳	貝塚		土師器、須恵器、夫婦石周辺
10	古閑上町貝塚	古閑上町 聖神	古墳	貝塚		土師器、須恵器
11	条里跡	島田町	古代、中世	生産		
12	島田遺跡	島田町	弥生	集落		
13	竹原遺跡	竹原町 空正	弥生～古墳	包蔵地		野部田・西新式土器、土師器、須恵器、土鍬、石鍋 労災病院敷地内
14	竹原町古墳群	竹原町、上日置町 他	古墳	古墳		10基
15	上日置女夫木	上日置町 女夫木	弥生～古墳	集落、墓地		
16	条里跡	西片町	古代、中世	生産		
17	橋ノ上貝塚	西片町 橋ノ上	古墳	貝塚		弥生土器、土師器
18	沖片遺跡	西片町 辻田他	弥生	包蔵地		黒髪・野部田式土器、土師器、須恵器、軽石製人面
19	条里跡	西片町	古代、中世	生産		
20	西片百田遺跡	西片町 百田	弥生	包蔵地		黒髪・野部田式土器、須恵器、土師器
21	西片園田遺跡	西片町 園田				
22	西片稲村遺跡	西片町 稲村	弥生、古代、中世			土師器、須恵器
23	川田京坪遺跡	川田町西 京坪	弥生～近世	包蔵地		弥生、土師器、須恵器、瓦、近世陶磁器
24	川田小築遺跡	川田町西 小築	近世	包蔵地		木製品、近世陶磁器
25	西川田古墳群 第1号墳	川田町西 久木原	古墳	古墳		
	第2号墳	川田町西 久木原	古墳	古墳		
	第3号墳	川田町西 久木原	古墳	古墳		
26	車塚古墳	川田町東 車塚	古墳	古墳		前方後円墳
27	岡塚古墳群 第1号墳	川田町東 岡塚	古墳	古墳		通称「前塚」円墳
	第2号墳	川田町東 岡塚	古墳	古墳		通称「岡の坊古墳」前方後円墳
28	川上古墳群 第1号墳	川田町東 川上	古墳	古墳		鬼の岩屋式石室、石室露出
	第2号墳	川田町東 川上	古墳	古墳	市	鬼の岩屋式石室、石室露出
	第3号墳	川田町東 川上	古墳	古墳		雑木林に石材散在
29	東川田遺跡	川田町東 西	弥生	包蔵地		磨製石斧、弥生土器、土師器、五輪塔、板碑
30	関城跡	興善寺町 志水、関	中世	城		堀切(興善寺城か?)
31	竜峰城跡	興善寺町 志水、関	中世	城		中世城跡
32	松浜軒	北の丸町	近世	建造物	県	
33	松浜軒の茶庭	北の丸町	近世	庭園	県	
34	細川三斎公茶毘所の甘草園、 泰勝院跡、泰巖院跡	北の丸町	近世	寺社	市	五輪塔、八代一中校庭内
35	織田信長墓五輪塔	北の丸町	中世	石造物	市	
36	松井神社の茶庭	北の丸町	近世	庭園	市	臥龍梅、鶯宿梅
37	八王神社の庚申碑	北の丸町 北ノ丸	近世	石造物	市	代陽小校庭内
38	永御蔵御門と番所跡	西松江城町	近世	建造物	市	建物のみ春光寺境内に移築
39	宝泉院屋敷跡	北の丸町 北小路	近世	包蔵地		
40	伝習堂と教衛場跡	松江城町	近世	包蔵地	市	
41	八代城跡	松江城町 他	近世	城	県	中心に八代宮を祀る、本丸、内堀、外堀
42	永御蔵跡	西松江城町	近世	包蔵地	市	
43	泉福山本成寺高麗門跡	本町二丁目	中世	包蔵地	市	
44	医王寺の庚申碑	袋町	近世	石造物	市	木造薬師如来立像国指定、木造聖観世音菩薩立像県指定
45	御客屋敷跡	本町二丁目	近世	包蔵地	市	
46	札の辻跡	本町二丁目	近世	高札場		薩摩街道十一里跡

番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
47	洗切貝塚	清水町 洗切	古墳	包蔵地		土師器、須恵器、獣骨
48	洗切遺跡	清水町 洗切	古墳～平安	包蔵地		土師器、須恵器、陶磁器、三彩片、鉄滓
49	浪川貝塚	十条町 浪川		貝塚		十条製紙工場内
50	日置町貝塚	日置町 東畑	古墳	貝塚		土師器、須恵器、土鍾、太田郷小校庭内
51	日置町古塔群	上日置町 白石	中世	石造物		10基、五輪塔、八代二中校庭内
52	白石貝塚	上日置町 白石	弥生～古墳	貝塚		黒髪式土器、土師器、須恵器、土鍾、布目瓦、人骨
53	いら塚古墳	井上町 正里	古墳	古墳		須恵器、円墳
54	鐘楼堂貝塚	井上町 鐘楼堂	弥生～古墳	貝塚	市	黒髪・免田・野部田式土器、土師器、須恵器、土鍾
55	鐘楼堂古墳	井上町 鐘楼堂	古墳	古墳		石室は埋没 上に堂が建つ
56	鐘楼堂遺跡	井上町 鐘楼堂	縄文～古墳	包蔵地		夜臼式土器、土師器、須恵器、磨製石斧
57	用七古墳	長田町 用七	古墳	古墳		剣、箱式石棺 石材を石碑に転用 線路西側に移設
58	長田町遺跡	長田町 一本橋	縄文～古墳	包蔵地		黒髪・野部田式土器、土師器、須恵器
59	長田町古墳群	長田町 白石	古墳	古墳		巨石横穴石室 円墳
60	虚空蔵古墳	長田町 大間	古墳	古墳	市	鬼の岩屋式石室
61	条里跡	中片町	古代、中世	生産		
62	中片小路遺跡	中片町 小路	古墳～中世	集落		
63	長塚古墳	上片町 下野森	古墳	古墳		土師器、須恵器、円筒埴輪 前方後円墳
64	大塚古墳	上片町 下野森	古墳	古墳	市	須恵器、人物埴輪(女性)最大の前方後円墳
65	茶臼山古墳	上片町 下野森	古墳	古墳	市	二段築円墳 茶臼の形
66	高取上ノ山古墳	上片町 高取	古墳	古墳		横穴式石室 側壁一部残存 前方後円墳
67	鬼の岩屋古墳群 第1号墳	上片町 高取	古墳	古墳	市	鬼の岩屋式石室
	第2号墳	上片町 高取	古墳	古墳		
	第3号墳	上片町 高取	古墳	古墳		墳丘一部残存
	第4号墳	上片町 高取	古墳	古墳		須恵器、鬼の岩屋式石室 安山岩巨石3個
	第5号墳	上片町 高取	古墳	古墳		通称「天神岩」円墳 墳頂に安山岩巨石が露出
68	田平山遺跡	上片町 田平	古代			骨器
69	条里跡	東片町	古代、中世	生産		
70	東片町古墳群	東片町 岡神(上)	古墳	古墳		
71	天神古墳	東片町 岡神(上)	古墳	古墳		円墳 天神を祀る 墳頂に石灰岩巨石が露出
72	岡ノ上古墳	東片町 岡神(上)	古墳	古墳		
73	むかいやば古墳	東片町 岡神(上)	古墳	古墳		石材残存
74	御経塚古墳	東片町 岡神(上)	古墳	古墳		円墳 墳丘残存
75	方見堂遺跡	東片町 方見堂	古代、近世	包蔵地		土師器、須恵器、瓦、陶磁器
76	鏡の池跡	迎町二丁目	近世	庭園	市	
77	麦島城跡	古城町	中世	城	市	瓦
78	栽柳園	植柳上町	近世～明治	庭園		植柳小校庭内
79	十三重塔	植柳元町	中世	建造物	国	湯前町明導寺より移設 現在十一重塔
80	源六遺跡	西宮町				
81	宝泉院勝延行者の墓	西宮町 小寺	近世	墓地		板碑(正保二年銘)
82	正法寺跡	西宮町 階下	中世	寺社		礎石、井戸
83	階下古墳群	西宮町 西階下 他	古墳	古墳		土師器、須恵器、小型円墳12基
84	乙丸古墳群 第1号墳	宮地町 五反田	古墳	古墳		
	第2号墳	宮地町 乙丸	古墳	古墳		
	第3号墳	宮地町 乙丸	古墳	古墳		土師器、須恵器、白磁、青磁、天目
	第4号墳	宮地町 乙丸	古墳	古墳		
	第5号墳	宮地町 乙丸	古墳	古墳		石室一部残存
	第6号墳	宮地町 乙丸	古墳	古墳		前方後円墳 墳丘一部残存
	第7号墳	宮地町 乙丸	古墳	古墳		
	第8号墳	宮地町 乙丸	古墳	古墳		
	第9号墳	宮地町 二反田	古墳	古墳		
	第10号墳	宮地町 二反田	古墳	古墳		
85	宮地年神遺跡	宮地町 年上	弥生～古代	集落		弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器
86	荒神塚遺跡	宮地町 石原	弥生～古墳	包蔵地		黒髪式土器、須恵器
87	キリシタン寺院跡	宮地町	古代～近世			土師器、須恵器、布目瓦、陶磁器

番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
88	村上河内屋敷跡	宮地町 池尻	近世	包蔵地		五輪塔一部残存
89	宮地池尻遺跡	宮地町 池尻	古代～中世	集落		土師器、須恵器、陶磁器
90	神宮寺跡	宮地町 池尻	中世～近世	寺社		宮地小敷地内
91	池尻遺跡	宮地町 池尻	中世～近世	包蔵地		土師器、須恵器、円面硯、五輪塔
92	符霊焼窯跡	宮地町 池尻	近世	生産		符霊焼
93	観行寺跡	宮地町 小畑	中世～近世	寺社		土師器、須恵器、布目瓦
94	宮地小畑遺跡	宮地町 小畑	古墳～近世	集落		土師器、須恵器、人骨、獣骨
95	一乗坊跡	宮地町 小畑	中世～近世	寺社		土師器、須恵器 宮地公民館敷地内
96	院主跡	宮地町 小畑	中世～近世	寺社		
97	宮前遺跡	宮地町 小畑	近世	包蔵地		
98	宮地観行寺遺跡	宮地町 観行寺	古墳～古代	集落		土師器、須恵器、鉄滓
99	球磨川はね	宮地町 萩原町	近世	建造物		石ばね、石段、敷石
100	加藤正方父母菩提所安養寺	古麓町 能寺	近世	寺社		妙慶禅尼(加藤正方の母)墓
101	能寺廃寺跡	古麓町 能寺	古代	寺社		布目瓦
102	片岡云正墓	古麓町 新城	中世	墓		五輪塔
103	山下古墳	古麓町 新城	古墳	古墳		須恵器 円墳
104	新城	古麓町 新城	中世	城		
105	春光寺製鉄跡	古麓町 地領	平安～中世	生産		鉄滓
106	江東山春光寺 実相院の庚申碑	古麓町 地領	近世	石造物	市	板碑
107	御内古墳	古麓町 御内	古墳	古墳		土師器、須恵器、金環
108	御内遺跡	古麓町 上り山	古墳～中世	包蔵地		土師器、須恵器、瑞花双鳳八稜鏡
109	相良義陽墓	古麓町 上り山	中世	墓	市	通称「首塚」大正11年移設
110	飯盛城跡	古麓町 上り山	中世	城		中世城跡、堀切
111	勝尾城跡	古麓町 上り山	中世	城		中世城跡
112	新城跡	古麓町 上り山	中世	城		中世城跡、堀切、古麓歴史自然公園展望所
113	丸山城跡	古麓町 上り山	中世	城		
114	鞍掛城跡	古麓町 上り山	中世	城		中世城跡、鉄塔が立つ
115	古麓能寺遺跡	古麓町 能寺	古代、中世	集落		土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器、建物跡多数
116	鷹峯城跡	古麓町 上り山	中世	城		中世城跡、石垣、鉄塔が立つ
117	遥拝堰	古麓町 上り山	近世	建造物	市	通称「枕瀬」
118	八丁嶽城跡	古麓町 上り山	中世	城		中世城跡
119	御小袖塚	妙見町 悉知院	中世	墳墓	市	五輪塔、無縫塔、懐良親王建立の両親の陵墓
120	護国山顕孝寺跡	妙見町 悉知院	中世	寺社		五輪塔、懐良親王創建の両親の菩提所
121	木村喜三次屋敷跡	妙見町 山下	近世	包蔵地	市	
122	大平城跡	妙見町 大平	中世	城		堀切
123	泉福山本成寺跡	妙見町 谷	近世	寺社	市	
124	中宮山悟真寺	妙見町 谷	中世	建造物	市	
125	悟真寺宝篋印塔	妙見町 谷	中世	石造物	市	懐良親王自筆
126	加藤忠正墓	妙見町 谷	近世	墓	市	五輪塔、泉福山本成寺
127	中宮山護神寺跡(塔心礎)	妙見町 中宮	中世	寺社	市	布目瓦、礎石群、塔心礎石、スラッグ
128	護神寺製鉄跡	妙見町 中宮	平安～中世	生産		鉄滓
129	懐良親王御墓	妙見町 中宮	中世	石造物	市	宝篋印塔、墓内に移設
130	妙見中宮跡	妙見町 中宮	中世	寺社	市	布目瓦
131	榎場遺跡	妙見町 榎場	古墳	包蔵地		土師器、須恵器、石斧、瓦塔
132	妙見上宮跡	妙見町 上宮	平安	寺社	県	土器、布目瓦 石囲み有
133	平家城跡	東町 猫谷榎実迫	中世	城		
134	小鼠蔵山古墳群 第1号墳	鼠蔵町 小島辺	古墳	古墳	市	竪穴式石室(装飾)、石室開口
	第2号墳	鼠蔵町 小島辺	古墳	古墳	市	箱式石棺
	第3号墳	鼠蔵町 小島辺	古墳	古墳	市	箱式石棺(装飾)
	第4号墳	鼠蔵町 小島辺	古墳	古墳	市	箱式石棺(装飾)、石材一部残存
	第5号墳	鼠蔵町 小島辺	古墳	古墳	市	土師器、箱式石棺
135	大鼠蔵古墳群 楠木山古墳	鼠蔵町 大島辺	古墳	古墳	県	土師器、鉄剣、刀子、玉製紡錘車、人骨 円墳 竪穴式石室
	尾張宮古墳	鼠蔵町 大島辺	古墳	古墳	県	円墳、割石小口積石室、横穴式石室(円文装飾)
	南東第1号墳	鼠蔵町 大島辺	古墳	古墳	県	土師器、人骨、箱式石棺(装飾)

番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
	南東第2号墳	鼠蔵町 大島辺	古墳	古墳	県	刀子、鉄鏃、人骨 箱式石棺
	南東第3号墳	鼠蔵町 大島辺	古墳	古墳	県	剣、鉄鏃、人骨
	南東第4号墳	鼠蔵町 大島辺	古墳	古墳	県	剣
	南東第5号墳	鼠蔵町 大島辺	古墳	古墳	県	貝輪、櫛、銅鈴、人骨
	南東第6号墳	鼠蔵町 大島辺	古墳	古墳	県	箱式石棺
	北東第1号墳	鼠蔵町 大島辺	古墳	古墳	県	箱式石棺
	北東第2号墳	鼠蔵町 大島辺	古墳	古墳	県	箱式石棺
	北東第3号墳	鼠蔵町 大島辺	古墳	古墳	県	箱式石棺
	北西第1号墳	鼠蔵町 大島辺	古墳	古墳	県	箱式石棺
	北西第2号墳	鼠蔵町 大島辺	古墳	古墳	県	土師器 箱式石棺(装飾)
	北西第3号墳	鼠蔵町 大島辺	古墳	古墳	県	箱式石棺
	北西第4号墳	鼠蔵町 大島辺	古墳	古墳	県	箱式石棺
136	大鼠蔵貝塚	鼠蔵町 大島辺	古代	貝塚		
137	高田手永会所跡	豊原上町 小路	近世	包蔵地		
138	八代征西府跡、中院義定卿館跡、征西大將軍西宮の高田御所跡	奈良木町 宮園	中世	包蔵地	市	
139	奈良木古墳群 第1号墳	奈良木町 三森	古墳	古墳		通称「短冊塚」、石材一部残存
	第2号墳	奈良木町 三森	古墳	古墳		消滅
	第3号墳	奈良木町 三森	古墳	古墳		通称「三森塚」、土師器、土錘、円墳、墳丘一部残存
	第4号墳	奈良木町 三森	古墳	古墳		
	第5号墳	豊原上町 遥拝	古墳	古墳		
	第6号墳	奈良木町 中野口	古墳	古墳		
	第7号墳	奈良木町 中野口	古墳	古墳		
	第8号墳	奈良木町 中野口	古墳	古墳		
	第9号墳	奈良木町 三森	古墳	古墳		
	第10号墳	奈良木町 三森	古墳	古墳		下の口古墳群における最大円墳
140	薬師堂	奈良木町 寺ノ迫	近世	寺社		堂跡
141	うその谷製鉄	奈良木町 うその谷	近世	生産		古代炭窯、近世瓦窯
142	木下し	奈良木町 西山ノ田	中世	生産		鉄滓、製鉄炉、鍛冶炉
143	木下し窯跡	奈良木町 釜尾	近世	生産		高田焼、窯道具、登窯
144	羽火原火葬墓	奈良木町 羽火原	中世	墓地		蔵骨器
145	北新地旧堤防	高植木町	近世	建造物		石積み
146	十二里木跡	平山新町 平山	近世	交通	市	
147	万年寺跡	平山新町 平山	近世	寺社		
148	松岡屋敷跡	平山新町 平山	中世、近世	館		中世館跡
149	平山遺跡	平山新町 船河内	中世、近世	生産	県	八代城の瓦、瓦窯県指定
150	平山古墳	平山新町 下山	古墳	古墳		剣、鎧、玉類、副葬品多数、小円墳、横穴石室、石材一部残存
151	平山城跡	平山新町 下山	中世	城	市	土塁
152	高田焼平山窯跡	平山新町 下山	近世	生産	県	高田焼、窯道具、登窯
153	相良氏墓地	西部ろ 谷向	中世	墓地		相良氏14代目 長毎
154	亀の尾窯跡 第1、2炉跡	西部ろ 山際	中世	生産		
155	今泉製鉄跡	西部ろ 鉄山	中世	生産	県	
156	原女木経塚	西部ろ 下原木	中世	経塚		板碑、経石埋納
157	丸山古墳群 第1号墳	敷川内町 丸山	古墳	古墳		地下式板石積石室
	第2号墳	敷川内町 丸山	古墳	古墳		地下式板石積石室
	第3号墳	敷川内町 丸山	古墳	古墳		地下式板石積石室
158	丸山製鉄跡	敷川内町 丸山	平安～中世	生産		鉄滓、鞆
159	丸山窯跡	敷川内町 丸山	古墳	生産		土師器、須恵器、登窯
160	吉平瓦窯跡	敷川内町 丸山	近世	生産		吉平瓦
161	三宮屋敷跡	敷川内町 三宮、迫山	中世	包蔵地		
162	三宮火葬墓	敷川内町 三宮	中世	墓地		蔵骨器
163	川田西前田遺跡	川田西町前田				
164	中片町算渡遺跡	中片町				
165	用七遺跡	長田町				

出土している。

洗切遺跡(清水町)では奈良三彩片と「王成古」と墨書された須恵器と、「宣」「旦仲」「高人」「四郎」「五月」「六寺」等と篋書きされた土師器が出土している。興善寺廃寺(興善寺町)、五反田遺跡、観行寺跡(宮地町)、能寺跡(古麓町)、護神寺跡、妙見上宮跡(妙見町)等では布目瓦が表採されている。沖片遺跡(西片町)、宮地池尻遺跡、宮地観行寺遺跡(宮地町)、古麓能寺遺跡(古麓町)では円面硯が出土し、御内遺跡(古麓町)からは瑞花双鳳八稜鏡が表採されている。

護神寺跡と興善寺廃寺からは塔心礎が発見されており、興善寺廃寺に建立されている明言院には平安初期の作とされる毘沙門天立像が伝来している。

『続日本紀』には、「八代郡正倉院」での記事の他に、宝亀3(772)年10月11日条で「肥後国葦北郡人家部嶋吉、八代郡人高分部福那理、各献白亀」が見える。天養元(1144)年頃の肥後国訴状写『高野山文書』に「当国住人八代藤三重永、同所従家四郎別当舎弟」が「久万郡住人貞倫並舎弟六郎重平等」に与力して高城内の雑物人馬を押取り、田畑所領を押領したことが知られる。また、仁安元(1166)年には平清盛に大功田として「肥後国御代郡南郷」が与えられている。

【鎌倉時代】

鎌倉時代には、平家領であった八代庄は、平家没官領として建久3(1192)年11月に一条能保室に譲られた。文永7(1270)年2月の預所沙弥某宛行状『小早川文書』に「三箇所村内八千把中九郎跡名跡云々」とあり、建治2(1276)年10月7日付の兵庫助某宛行状『小早川文書』に「八代庄三ヶ所村内八千把村新開事」とあるので、13世紀中盤頃までに八代海に面した八千把村(八千把町)周辺までが八代庄の荘域として開発が進み、開田が行われていたことがうかがわれる。

また、正和3(1314)年4月日付の八代庄伊賀左衛門入道代光蓮申状『舛田文書』では「八代庄三ヶ所村弥松」「同庄大田郷宮地白木社云々」と見え、延暦14(795)年遷座の伝承を持つ妙見社が14世紀初頭には確実に宮地村に存在したことが窺われる。また、北条得宗家人の伊賀左衛門入道が八代庄を管理者であることから、八代庄が他の肥後国の郡名荘園と同様に北条得宗領の中に組み込まれていたと推定される。

この時期に当たる同安窠系並びに龍泉窠系青磁が、悟真寺(妙見町)、辻遺跡(西片町)、西片稲村遺跡(西片町)、中片小路遺跡(中片町)、鐘楼堂遺跡(井上町)から出土している。

【南北朝期・室町時代】

南北朝期には、名和義高は後醍醐天皇から八代庄地頭職を与えられ、建武2(1335)年5月15日に「八代庄高田郷内志紀河内村」(敷川内町)を出雲国杵築大社に寄進している(『千家文書』)。

名和氏は、現地支配代官として内河義真を派遣し、名和一族として阿蘇・菊池氏と共に南朝方に属して転戦した。建武5年8月日の相良定頼申状案『相良家文書』では建武2年4月22日に「於八代庄、対干内河彦三郎致合戦之刻、親類若党等数輩、或被討、或被疵間」と見えて、内河氏が南朝方として活動していることが窺われる。

貞和3(1347)年9月12日付の少式頼尚預状『相良家文書』では八代庄三ヶ所村郷弥松村・同郷大村(大村町)・大田郷杭瀬村(古麓町)・同郷内福正原村(福正寺町)・同郷萩原村(萩原町)・同郷吉王丸村(千丁町吉王丸)・同郷内京泊等を北朝方の相良定頼に「萩原城料所」として預け置くことが見える。さらに明德2(1391)年9月日付の武雄大宮司跡代新兵衛尉軍忠状『武雄神社文書』に「八町嶽城」が見え、同年7月2日に北朝方の今川了俊方が同城を攻撃し、南朝方の名和顕興を降伏させている。

【戦国期・豊臣期】

名和顕忠は家督相続を巡り、相良為統の後援を受けた代償として、文明15(1483)年に高田350町を相良氏に割譲した。しかし、相良氏の北薩侵攻の最中に名和氏が高田を奪回したことを契機に、文明16(1484)年3月7日相良為統が「八代三ヶ所城」を攻撃し落城させ、名和氏を逐い、相良為統が八代を領有した。相良氏は、文明17年から人吉と八代を結ぶ道路整備等の領域支配を開始したが、明応8(1499)年には肥後国守護職の菊池能運の仲介で名和顕忠が八代に復帰した。しかし、文亀元(1501)年11月15日に再び相良長毎が高田城を拠点にして、「於麓近陣也」(『八代日記』)として八代を攻略した。

このため、永正元(1504)年2月5日に名和顕忠は宇土城(宇土市)に移り『八代日記』、相良長毎が八代に進出し、以降天正9(1581)年12月1日の相良義陽の討死まで八代は相良氏の支配領域の中に組み込まれることになった。

相良氏支配下での八代では、天文3(1534)年1月16日に「新築城於八代鷹峯」とあり『球磨外史』、中世八代城(古麓城)と城下の整備が行われた。天文12(1543)年1月19日に「八代七日市、九日市焼候」、同18年4月19日に「八代杭瀬三町焼失」、同23年12月18日に「杭瀬一日市、九日市、両町西方一方焼亡、七日町其余不焼候」等焼失記事が見え『八代日記』、中世八代城下に城下町が建設されていた。

また、天正10年以降に肥後に進出した島津氏家臣が八代に駐留し、旧相良氏家臣の八代衆の屋敷を宿館として利用している(『上井覚兼日記』)。

天正15(1587)年4月に八代滞在中の豊臣秀吉を訪ねたルイス・フロイスは「幾つもの美しい川が流れ、多数の岩魚が満ちあふれている。海は城の麓にある主要な町に入る一里手前まで入り込み、その町へは海路からでなくては入ることも登ることもできないようになっている。これは一層その地を安全に確保せんがためである。見渡す限り、小麦や大麦の畑が展開し、清浄で優雅な樹木に覆われた森には多くの寺院が散見し、小鳥たちの快い囀りが満ちあふれている」(『日本史』)と、当時の八代の景観を描写している。

また、この時期に当たる龍泉窯系青磁や景德鎮系染付等が、古麓城跡、古麓能寺遺跡、古麓城下遺跡(古麓町)、宮地小畑遺跡、宮地池尻遺跡(宮地町)から出土している。

しかし、天正16年閏5月3日に小西行長が肥後南半国の領主として豊臣秀吉から派遣されると、麦島に豊臣期八代城(麦島城)が建設され、八代の中心は麦島に移り、中世八代城とその城下町は廃絶した。

第3章 調査の経過

第1節 調査の方法

調査は、工事工程のため経緯でも述べたように2年度に分かれて行った。第1次調査は平成13年度に行い、調査第Ⅰ区とした。主に山田・米村が行った。調査時には、調査面積と調査工程を勘案し、大きく3箇所に分けて調査した。

平成14年度には第2次調査を行い、調査第Ⅱ区とした。ただし、調査時には調査範囲よりも期間的な制約により、予備調査等によって調査地点を絞り込み、大きく10箇所に分割して調査を行った。それに伴い調査員を増員し、3班集体制で行った。調査は主に山野・山田・米村・青柳・古城等である。

(1) 第1次調査区の方法

この場所は、地形的には谷奥部で新幹線が一部地表面に出るところであるが、工事ではトンネルのままとするため、土地を嵩上げて、地表面に見えないようにすることになっていた。そのため調査範囲には新幹線の本線範囲だけでなく、それに関連する客土部分や工事用道路等も含まれていた。工事範囲全体の面積は1,960㎡に対し、調査のための期間は2ヶ月ほどであった。

調査箇所は地形的に谷部である点や登城口のような古麓城跡関連の施設の存在が予想でき、さらに五輪塔が散在している状況から、何らかの中世遺構が存在する可能性が高く、全体を調査することはかなりの期間を要する可能性があった。その一方で、調査工程上部分的に急ぐ必要があった。このため、調査可能な部分から調査を進めることと、あいたところから試掘・確認調査を行い、調査範囲の絞り込みをすることとなった。その結果、大きく3箇所を調査対象地とし、調査箇所をⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区と付けた。整理作業及びこの報告に際しては、先の呼称を使わず、調査時期と調査地点の違い(それぞれ仮設ヤードと妙見トンネル出口付近)により、それぞれを調査Ⅰ区と調査Ⅱ区と改めた。さらに調査Ⅰ区内で当初Ⅰ区・Ⅱ区・Ⅲ区とした所を大きく調査Ⅰ区とし、それに枝番を振り、それぞれの区についてⅠ-①区、Ⅰ-②区、Ⅰ-③区とした。

まず、Ⅰ-①区から重機による表土剥ぎを行い、作業員の手作業による清掃を行った。引き続き、実測図作成のために国土座標軸に合わせた方眼を調査区内に設定した。設定した方眼の一辺の長さは10mとし、国土座標によりグリッドを設定した。グリッドは起点を基準にして北から南に1、2、3、と数字をふり、東西はアルファベットの大文字からふって、記号と番号により、グリッドの位置を設定した(第3図)。

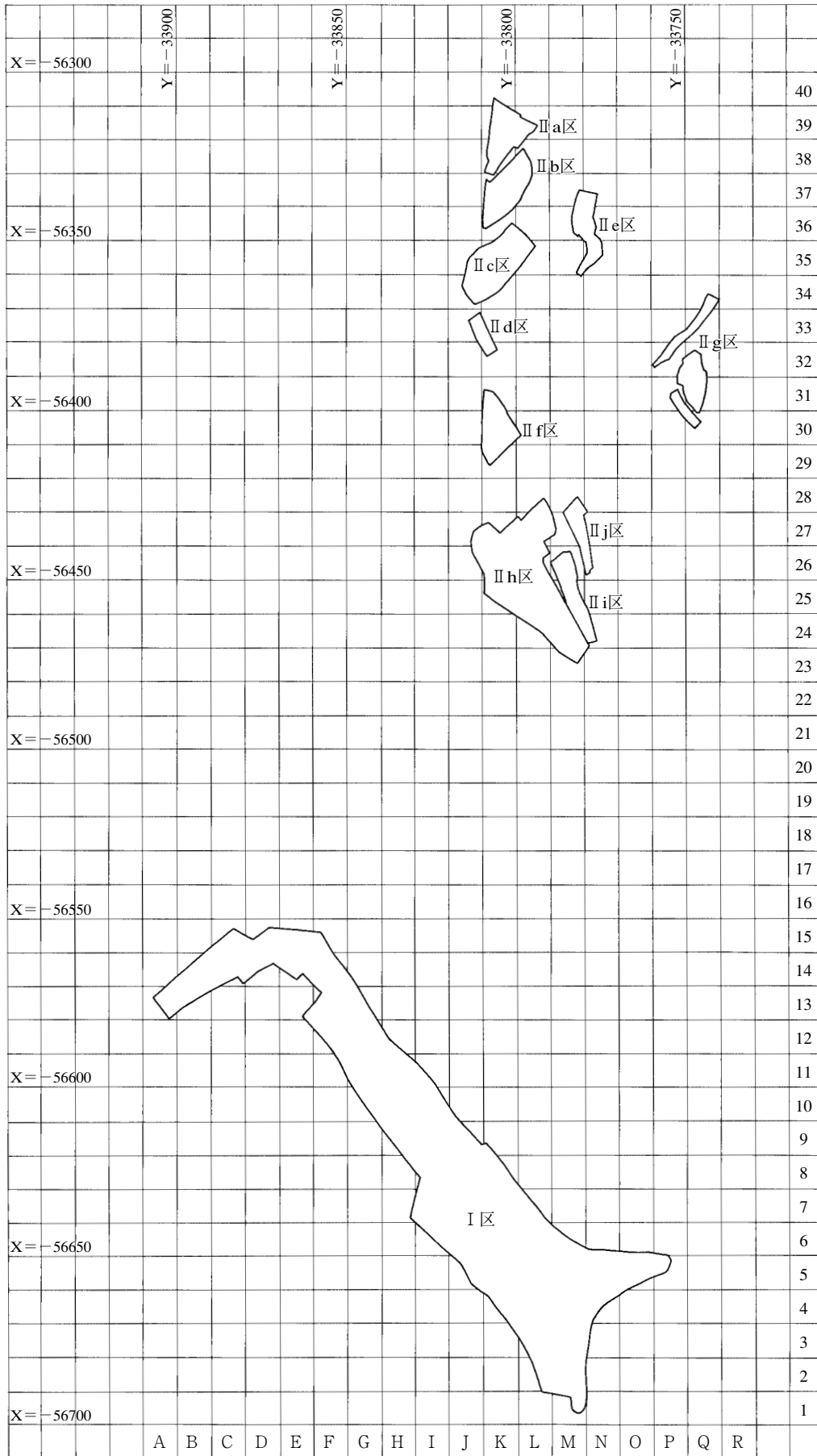
調査地は先にも記したとおり、狭い谷部であった。谷奥と両脇は山林であった。その中で調査箇所にあった五輪塔の存在していた場所から調査に入っていった。表土剥ぎを行う前に試掘トレンチを開けて、土層の確認と遺構の有無を調査した。その結果、堆積層が上にあり、その下に五輪塔が存在することを確認した。そこで慎重に表土剥ぎを行い、その後精査を重ね、遺構の検出を行った。

五輪塔の調査方法が十分分からなかったため、他の調査員の意見を聞きながら、調査を進め、遺構の状況をつかめてきた。その中で、さらに下層にも古い時期の五輪塔が並ぶことをつかんだ。その間、トレンチをいくつも入れながら、サブトレンチも随時入れて、慎重に掘り下げを行っていった。

記録作業は、上位にあった五輪塔の分布図を作成し、浮遊している五輪塔を取り上げ、最初に確認した遺構面で、各遺構の図面、写真撮影をおこなった。それが終了した時点で、随時下の遺構面まで掘り下げ作業を行った。その間、整地層と崖面の掘削面などを慎重に見極めながら、この墓所の変遷を探っていった。実測作業においては、時間短縮と調査員の負担軽減のため実測作業を業者に委託した。さらに写真撮影もより詳しい調査員を呼び、撮影をしてもらった。

課の調査員はもとより、地元的地権者や土地の歴史に詳しい人々からの聞き取り、八代市教委職員や八代





第3図 調査区配置図 S=1/1,800

市文化財保護審議会員の助言、専門調査員の招聘により指導を受けながら、順次調査を進め、一定の成果を挙げていった。

記録については、遺構の単独図は基本的に1/20、詳細な図が必要な場合が1/10、平板図での遺構配置図は1/100もしくは1/200の各縮尺で図化した。委託業者にもこれに準じて行うよう指示した。

写真撮影は、個別の遺構写真などは、35mmのモノクロとリバーサル、重要度に応じて中版カメラでの撮影も同じくモノクロ・リバーサルを使用した。さらに大きい画角での撮影に際しては、大型カメラによる撮影も行った。空中写真撮影は、行えなかった。

(2) 第2次調査区の調査方法

先に記したように、調査時には調査範囲は決まっていたものの、調査地は狭い谷地形の場所に、鉄塔、人家、急傾斜地(蜜柑園)などが詰め込まれたようにある一帯であった。しかも用地取得や構築物の撤去などの遅れなどにより一律に全体を調査することが不可能であった。そこで、試掘・確認調査を随時実施し、調査地点の絞込みを行っていった。すなわち、空間の開いたところから調査を行うということになった。そのため、調査も非効率的で工事とのせめぎ合いの中で行うこととなった。その中で、第3表の第2次調査区対照表に示すように調査開始時、調査終了時では調査区名の付け替えがあったりした。報告書掲載時には便宜上さらに名称を変更したことを付け加える。それぞれの調査区の対照を第3表に示す。

第3表 第2次調査区の対照表

調査開始時	調査終了時	報告書掲載
01,10	02,04,04	03,06,24
Ⅱ区	Ⅱ-a	Ⅱ a
Ⅱ-e	Ⅱ-b	Ⅱ b
Ⅱ-b	Ⅱ-d	Ⅱ c
Ⅱ-a	Ⅱ-c	Ⅱ d
V-a	V-a	Ⅱ e
Ⅲ-e、Ⅲ-d	Ⅲ-e、Ⅲ-d	Ⅱ f
Ⅵ-a、Ⅵ-b	Ⅵ-a、Ⅵ-b	Ⅱ g
Ⅲ-b、Ⅲ-c	Ⅲ-b、Ⅲ-c	Ⅱ h
Ⅲ区	Ⅲ-a	Ⅱ i
Ⅵ区	Ⅵ-c	Ⅱ j

作業自体は非常に限られた期間で終了することとなっていたため、調査班の体制を当初から変則的な2班集体で行った。調査員がやや錯綜する状況となった。応援を含めると、10人を超える場合もあった。

調査の基本的な申し合わせを設定しながら、調査を進めたが調査地点の状況や、調査範囲の設定、時間的な問題もあり十分に満足のいく調査ができなかった。

基本事項は第1次調査に準じてグリッドの設定をしたが、記号の振り方などで第1次調査との整合性は取れていない。この調査区は勝尾城跡にかかる部分もあったので、事前に周辺の地形測量調査を業者に委託した。

ここでも、調査範囲の絞込みのため、試掘トレンチを随時開けながら調査を進めた。その結果、調査区が大きくはⅡa区からⅡj区までの10箇所となった。ただ、このほかにもトレンチをいくつも開けており、調査区とすればさらにふえる。

記録は、実測作業においては、複数業者導入した。業者との打ち合わせと成果品の事前チェックを行う必要が生じた。また、時間が許せば、調査員でも対応した。

写真撮影は第1次調査に準じて行った。大型カメラを除けばほとんど同じである。空中写真撮影はラジコンヘリや実機を使っている。

ここの調査の問題点としては、新幹線の工事が調査中にも入ってきたことである。用地取得の問題ともからみ、調査工程を練り直す必要が生じる場合もあった。そのため、工事側との協議を頻繁に行う必要があり、調査地点に接した場所での工事は、作業員の安全にも関わる問題であり、今後の調査に課題を残すことになった。

第2節 調査の工程

古麓城跡の第1次の本調査は平成13(2001)年1月16日に開始し、平成13(2001)年5月31日に終了した。第2次調査は、同年平成13(2001)年10月9日にⅡa区の表土剥ぎを開始し、翌年平成14(2002)年4月30日に本調査を終了した。

以下、その経過を遺跡毎に調査日誌をもとに整理して記す。

(1) 第1次調査(平成13年1月～平成13年5月)

平成12年度(2001年)

【12月】

調査地の周辺をまず踏査した。併せて、地元の聞き取り調査と鞠智城跡の温故創世館の大田館長を招き、城跡の調査方法と所見を聞いて、調査方針を決めた。その結果を受け、一定の調査方針を決定した。

【1月】

1月16日から天神谷北東方向の谷部(I-①区)の表土剥ぎを開始した。同時に作業員も投入し、土層状況を掴む。谷地形のため本来の調査層を確認するため、ところどころに試掘トレンチを設定しながら調査地点の絞り込みを進める。作業員も投入して本格的な調査に入った。地表面に当初から見えていた五輪塔の周囲の調査を進める。すると地表から1mほど下から五輪塔の一部を検出。その周囲の掘り下げを行う。1月26日には、本格的に作業員による精査作業を進める。それにより、五輪塔は自然の山崩れなどにより移動している状況が分かった。また、その下位にも存在する可能性がでてきた。五輪塔の背後にサブトレンチを設定し、調査を進める。すると、多くの五輪塔が検出できた。さらに火葬骨や炭化物を伴う土坑も確認した。多くの五輪塔が出土したので、今後の調査方法を検討する。

【2月】

2月1日には五輪塔の地輪が1列に並ぶ状況を確認した。大きめのもので原位置の可能性があった。サブトレンチを設け、地山の状況を掴む。一字一石経らしき礫の集中場所を検出。2月5日、これまで見つかった大きい空風輪に梵字が彫られているのを確認。今後その他のものについても確認作業を進める。さらに地輪の銘文の有無も確認していく。I-②区では、古代の遺物が出土し、遺構も期待ができそうである。2月7日、4級基準点とメッシュ杭を設置する。2月13日、雨天で作業に支障がでてきたが、作業は続行。石組墓で人骨片を検出。2月14日、五輪塔総数123個となる。徐々に実測作業を進める。八代市教委、前川主幹来跡。五輪塔についての助言を聞く。2月21日から、五輪塔の実測、写真撮影を進める。配置図を作成五輪塔群の検討を始める。また、この遺構状況と今後の調査について協議が必要になる。

【3月】

3月5日、五輪塔を清掃し写真撮影。石組遺構の掘り下げ。3月6日、「元中九年」の紀年銘のある地輪が出土。上部の五輪塔の取り上げ。3月13日、動いている五輪塔を取り上げ、五輪塔の出土位置を明確化。

A群、B群の2つの集中域確認。I-②区本格調査。3月15日、高谷参事、前川主幹応援。一石経に文字確認。3月18日、山城主事、元興寺研究所狭川真一室長を伴い来跡。助言をいただく。清掃を進めながら、実測作業を委託する。3月21日からI-②区実測作業。3月28日、八代市文化財保護審議会遺跡視察。佐藤審議員より助言いただく。3月28日までに一字一石経掘りあげる。3月30日、流路の調査。

平成13年度(2001年)

【4月】

4月4日より、実測・写真撮影行う。4月10日からST08遺構ラインを確認。元中九年銘の地輪はV層直上に置かれていることを確認。図面作成、写真撮影を進め、五輪塔の取り上げ作業を行う。また、工藤敬一熊本大学名誉教授、稲葉助教授が学生伴い来跡。助言をいただく。4月17日～18日、遺構配置、地形測量を平板で行う。4月19日以降、清掃、掘り下げ、実測作業、写真撮影を行い、徐々に調査終了へ向けての準備。4月25日、元興寺研究所狭川氏調査指導のため来跡。4月26日～27日、最後の遺構面を平板測量し、地形を押さえてI-①区はほぼ終了。

【5月】

5月8日からI-③区の表土剥ぎ開始。遺構検出も平行して進める。遺構はなく、遺物が少々出土する。結果としては、崩落した土層を確認し、出土した遺物も自然堆積に伴って流れ込んできたものと判断した。さらに別地点を掘り下げ、遺構確認を行った。また、I-①区の五輪塔の実測の残りも行う。5月31日までにI-③区の調査を終了した。さらに五輪塔の仮保管のため、倉庫を松高小学校の向かいに設置し、保管する。

(2) 第2次調査(平成13年10月～平成14年4月)

平成13(2001)年度

【10月】

10月9日からIIa区の表土剥ぎ開始。水野、青柳がはいる。10月10日～30日までは古麓能寺遺跡の応援のため一時的に作業中止。31日から作業再開し、清掃に入る。

【11月】

初旬はIIa区の精査作業。残りの部分も表土剥ぎを進め、精査し、遺構検出を行った。平行して基準杭打ち作業を委託する。徐々にピットや溝状遺構を確認。全体の調査区が確定しておらず、公団との協議を行う。ピットは並びが確認できそうである。また、墓と推定できる遺構も2基確認した。北側では溝遺構を確定した。遺構の確認と掘削を進めて、完掘図化していく。九電鉄塔横のIIi区の表土剥ぎを開始する。精査し、出土遺物は古代のものが多く、古代の遺構の存在が予想できる。下旬に米村、調査に参加。

IIa区は11月30日に全域の写真撮影と実測、遺物取り上げ、作業を終了し、公団へ引き渡した。

【12月】

調査はIIi区、IIj区を主に行う。IIi区の調査区は雨の影響で崩落することがあった。そのため一部の遺構が崩壊し、記録できなかった。土坑を数カ所で確認し、調査を進める。炭化物の集中した土坑を検出。遺構は検出後、写真撮影、実測を行っていった。IIj区は斜面地と平坦部があり、トレンチ調査により調査部分や遺構の確認を進めた。この作業を進める途中で、石垣や近世墓を確認した。また、五輪塔の散布がみられる部分を確認。この他にもトレンチを掘削し、遺跡の状況把握に努める。中旬から古城、調査に参加。

【1月】

IIc区のうち、主に旧宅地跡を中心に移転がすんだ場所から表土剥ぎを進める。その一箇所から井戸跡検

出。五輪塔の一部が井戸枠に使用されたり、埋土中に混じったりして検出。近くに墓域の存在が想定できる。Ⅱe区では、伝妙慶禅尼の一段下の平坦場所から五輪塔を2基検出。五輪塔は実測。Ⅱh区、Ⅱf区などの表土剥ぎも進める。各区では遺構の検出を進める。遺構検出後掘削。

【2月】

今月より出田、宮崎調査に加わる。Ⅱh区、Ⅱf区、Ⅱc区の遺構検出、掘削をさらに進める。Ⅱh区からは桶棺墓を検出。内部より近世初頭の白磁皿出土。その後、下旬にはもう1基同様の桶棺墓を検出。中から天目椀出土。また、調査区の東側では、宝篋印塔、無紋銭などの出土する井戸跡検出。その後の掘り下げで丸石を主体とし円形に石組みを行った井戸であることが分かる。井戸内から漆器椀の破片出土。さらに底近くから井戸枠を検出。Ⅱf区では精査の結果、ピットを多数検出し、2棟以上の建物跡を想定。ただ、ピットの検出が困難で明確に完掘できない。Ⅱe区の妙慶禅尼墓は基壇の造成などは明治以降になされている可能性が強くなった。Ⅱc区は、井戸跡の実測終了後公団へ引き渡し。Ⅱd区も同じく27日までに引き渡し。Ⅱb区表土剥ぎ開始。

【3月】

Ⅱb区、Ⅱh区、Ⅱf区、Ⅱe区の遺構検出、掘削、実測などを進める。年度末のため作業員など予算執行の把握にも努める。Ⅱh区から古代(8世紀代)の火葬墓検出。他にもある模様。溝状遺構は掘削の結果、自然流路と判明。ただし、最下層に混入する遺物から古代からのものである可能性が高い。Ⅱg区表土剥ぎ。精査しピットを検出。Ⅱe区の妙慶禅尼墓は基壇まで掘り切り、終了。3月25日には、Ⅱh区、Ⅱe区を引き渡す。Ⅱf区では土坑の集中を確認。墓群の可能性考える。下旬には今年度調査は一旦終了。

平成14(2002)年度

【4月】

4月3日より作業再開。Ⅱb区、Ⅱf区、Ⅱg区の調査を行う。Ⅱf区では、土坑群の調査を進める。また、ピット群も確認した結果、調査面積が狭いながらも、数棟の建物としての組み合わせを確認。Ⅱb区で検出していた石垣遺構は裏込めに混じっていた遺物から19世紀代のものでさらに改築されている部分もある。ピット群は組み合わせができるもので3棟ぐらいにはなりそうである。

Ⅱg区では遺構の精査をしたが、顕著な遺構は検出できず終了。

4月30日をもって、古麓城跡調査Ⅱ区全体の調査を終了。

第3節 整理作業・報告書作成の方法と工程

整理作業のうち1次整理は平成14年度に一部開始し、水洗い、注記、接合を途中まで行った。ただ、調査担当者が異動などにより十分対応できなかったため、青木が代行して行った。

2次整理及び報告書作成は平成15年度に行うことになった。ただ、既述のとおり整理担当者は交代せざるを得なかったため、整理・報告書作成の方針を変えざるを得なかった。そのため、調査区のふり直し、遺構番号の再検討を経て、前に示したようにこの調査報告書のとおりとした。

整理作業については、10数名の作業員による遺物接合などを経て、さらに実測遺物の選別を行い、実測は随時行った。実測には嘱託職員はもとより、数名の作業員から実測要員をつのり作業を進めた。実測図の点検を行いながら、トレース作業も平行して行った。また、遺構図の点検作業も行ったが、遺構番号の振りかえや不十分な図面などがあったため、かなり図の整合性などをとるための時間を要することとなった。このことは遺物にも影響し、途中で遺構が変わって遺物の出土場所の異動を招き、混乱することにもなった。これは、整理担当者が本調査にほとんど関わっていなかったことと、本調査担当者から十分情報を得なかった

ことも要因である。

このような作業を行い、図面の版組が終わった後に、遺物写真の撮影を行った。

報告書はA4版、横組で組むこととし、図版の写真の選別を行い、文章と併せて体裁を整えた。

第4節 広報活動

第1次調査区では、南北朝期の紀年銘が掘られた地輪が出土し、これまで埋もれていた「八代城」につながる遺構・遺物として注目されたこともあり、マスコミはもとより地元八代市民にとっても重要なものとして認識された。そのため、新聞記事を受けて、地元の史談会や保護審議会に対して遺跡公開を行った。

さらに九州新幹線鹿児島八代間の開通記念行事の一環として八代市未来の森ミュージアムで開催された特別展に遺物の貸し出しを行った。

第4章 調査I区の調査成果

第1節 調査I区の調査概要

調査I区とした場所は、九州新幹線建設事業に伴う妙見トンネル工事に関わる仮設備ヤード部にあたる。土地自体は、八代市古麓町字新城地内である。土地の人々は、「天神谷」と呼ぶ。この谷に現在も天神様がI-③区付近に祀られている。この建物自体は、ごく最近のものであるが、地名として残るような古さで、場合によっては中世まで遡ってもよいかもしれない。

先に述べたように、調査時と報告書掲載時に調査区の名称をそれぞれの区について調査I区の枝番号とし、I-①区、I-②区、I-③区としている。また、遺構番号も振りなおしている(第4表参照)。

南東方向にまっすぐ延びる谷筋の片側斜面(北東側)を造成し、五輪塔群を造営している。遺構面は大きく2面あり、いずれも墓地として利用されている。以下、下層面を第I期、上層面を第II期と表記する。

第I期は、石組や石敷の遺構を伴う区画墓と大型の五輪塔群とからなり、斜面の岩盤を垂直に削って墓地を造営したものと思われる。2基の石組遺構から、遺体を焼いた灰と思われる炭化物層が検出されている。その中の1基の炭化物層中からは火葬骨の小片が検出されている。また、2個の五輪塔水輪部の納骨孔からも火葬骨が検出されている。

その他、崩落した五輪塔群の埋土(第III層)からも火葬骨の小片が所々出土している。遺物は第III層中より底部に糸きり痕のある土師器皿片が出土している。

地輪は大きいもので幅60cm高さ50cm程度ある。葉研彫りで梵字が刻まれた地輪が2個と空風輪が1個出土している。また、左側に「元中九年壬申二月十五日」、右側に「昌壽」と刻まれた地輪が1個出土している。元中九年とは、西暦1392年、南北朝合一の年で南朝方の年号である。当初の位置を動いていないと思われる地輪や水輪がある一方で、五輪塔群を整理するため、配置換えをしたと思われる形跡も見られる。

第II期は、主として小型の五輪塔群からなり、斜面の岩盤をさらに削って扇形状に拡幅して墓地を造営したものと思われる。小型の地輪が拡幅された斜面際に沿って1列に並ぶ。石組や石敷等の遺構を伴うものはなく、地面に直接据えられている。その他、葺石墓と思われる遺構が2基、礫石経塚と思われる遺構が1基ある。

次に、調査後、調査担当者がそれぞれの区から出土した遺構及び遺物について次のようにまとめている。

○ I-①区

【遺構】 石組遺構7基、石敷遺構15基、礫石経1基、葺石墓2基、集石遺構2基

【遺物】 五輪塔部材171個(内訳：空風輪60個 火輪26個 水輪43個 地輪37個)、その他残次相輪部材5個、土師質皿多数、瓦質土器片、大甕1点
火葬骨片(石組(ST08)内の炭化物層、水輪132、100(SG197、37)の納骨孔、埋土より検出)、礫石経の墨書石

○ I-②区

【遺構】 土坑4基(うち1基より火葬骨片検出)、炭化物散布地1箇所(火葬骨片検出)

【遺物】 火葬骨片2点、土師質皿少数、五輪塔部材1個(流れ込み)

○ I-③区

【遺構】 検出せず

【遺物】 土師質皿少数

第4表 調査I区出土遺構新旧対照表

新遺構 番号	旧遺構 番号	層位	新遺構 番号	旧遺構 番号	層位	
SR01	S-01	上	ST15	S-18	上	
ST01	S-02	下	×	S-19		
ST09	S-03	上	SX02	S-20	下	
×	S-04		SX03	S-21	下	
ST10	S-05	上	SX04	S-22	下	
ST09	S-06	下	ST06	S-23	下	
ST04	S-07	下	SX01	S-24	下	
ST03	S-08	下	SK01	SK-01	上	
ST05	S-09	下	SW01	石垣	上	
ST16	S-10	上	SK02	S-101	上	
ST08	S-11	下	ST17	S-102	上	
ST14	S-12	上	SK03	S-103	上	
ST12	S-13	上	SK04	S-108	上	
ST07	S-14	下	SK05	S-104	上	
ST11	S-15	上	SK06	S-105	上	
ST13	S-16	上	ST18	S-106	上	
×	S-17					

第2節 基本層序について

この調査区での基本層序の設定は、谷地形という条件により、土の堆積と流れだしを含めた風化の度合いが平地に比べて大きい可能性がある。この谷は現況でもそうであるが、かなり谷裾から丘陵頂部へ向けての傾斜が大きく、谷の低い部分は谷奥からの流水による掘削が大きい。したがって、基本層序を求めるための土層確認面の設定場所しだいで、層の状況は大きく違ってくる。ただし、遺構が営まれた部分は自然の営力の影響を受けたとはいえ、通常よりも人工的な層位形成があり、その痕跡はより明確に確認できる。

このような状況を考慮し、遺構との関連を確認していくため調査区の中にトレンチを入れながら土層確認を行っている。調査区はここでは、大きく3箇所に分けられていたので、それぞれの調査区の中での土層状況を相互比較しながら、最終的に基本層序を設定した。

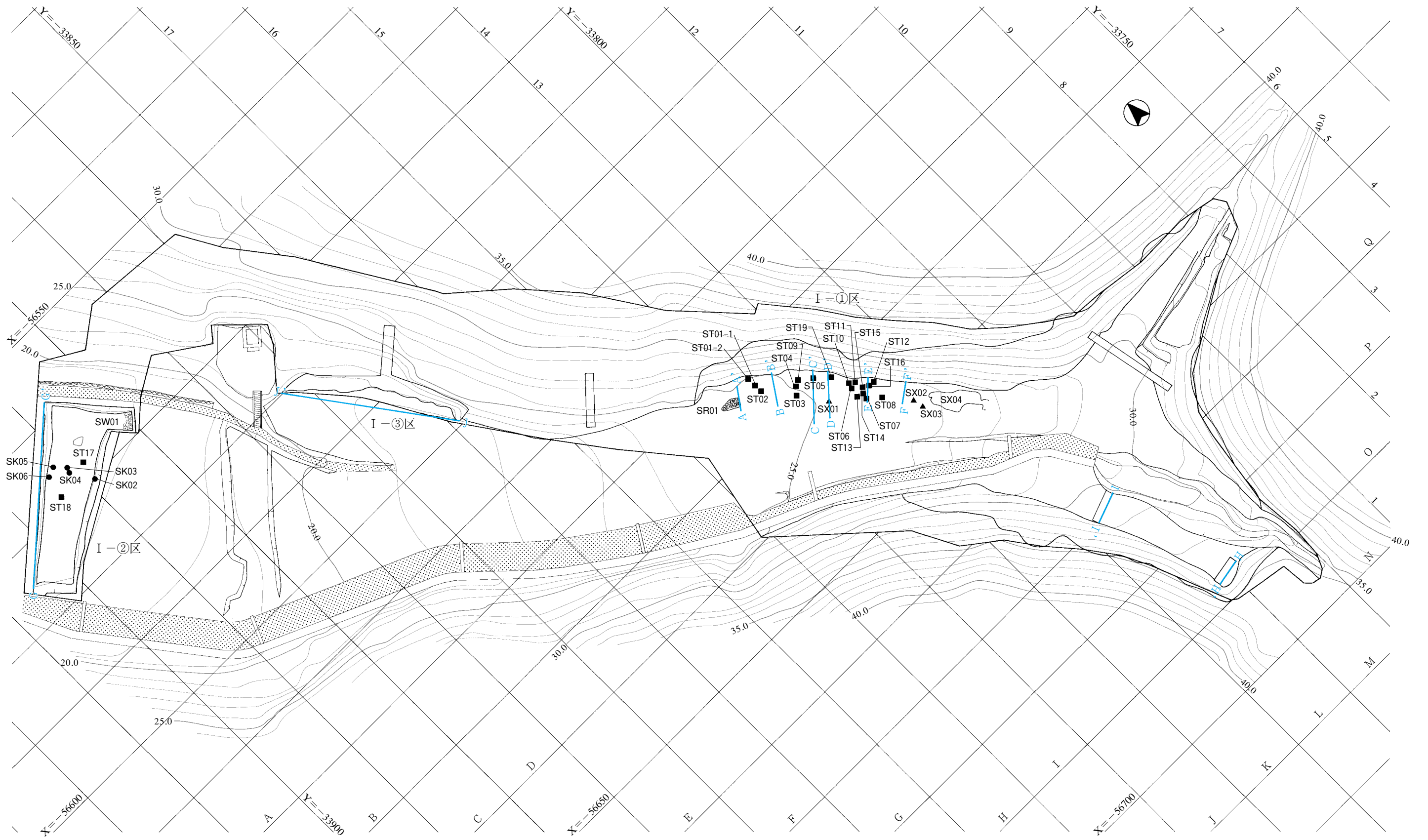
まず、I-①区から述べる。

・A-A' (サブベルトNo1)

I層は淡褐色粘質土層で、微小な礫が多く混入し、軟らかい。V'層は、褐色粘質土層で、砂質に近い粘質土である。このベルトには礫石経の一部がかかっており、埋土状況を記録している。Ⅲ層は確認できなかった。ここで確認したI層は礫石経の埋土の上位にあり、この層は礫石経が形成された以降の堆積であることが分かった。V'層はここでのみ確認したものである。この層の下は岩盤が露出する。ここではⅡ層・Ⅲ層・V層との関係がつかめなかった。

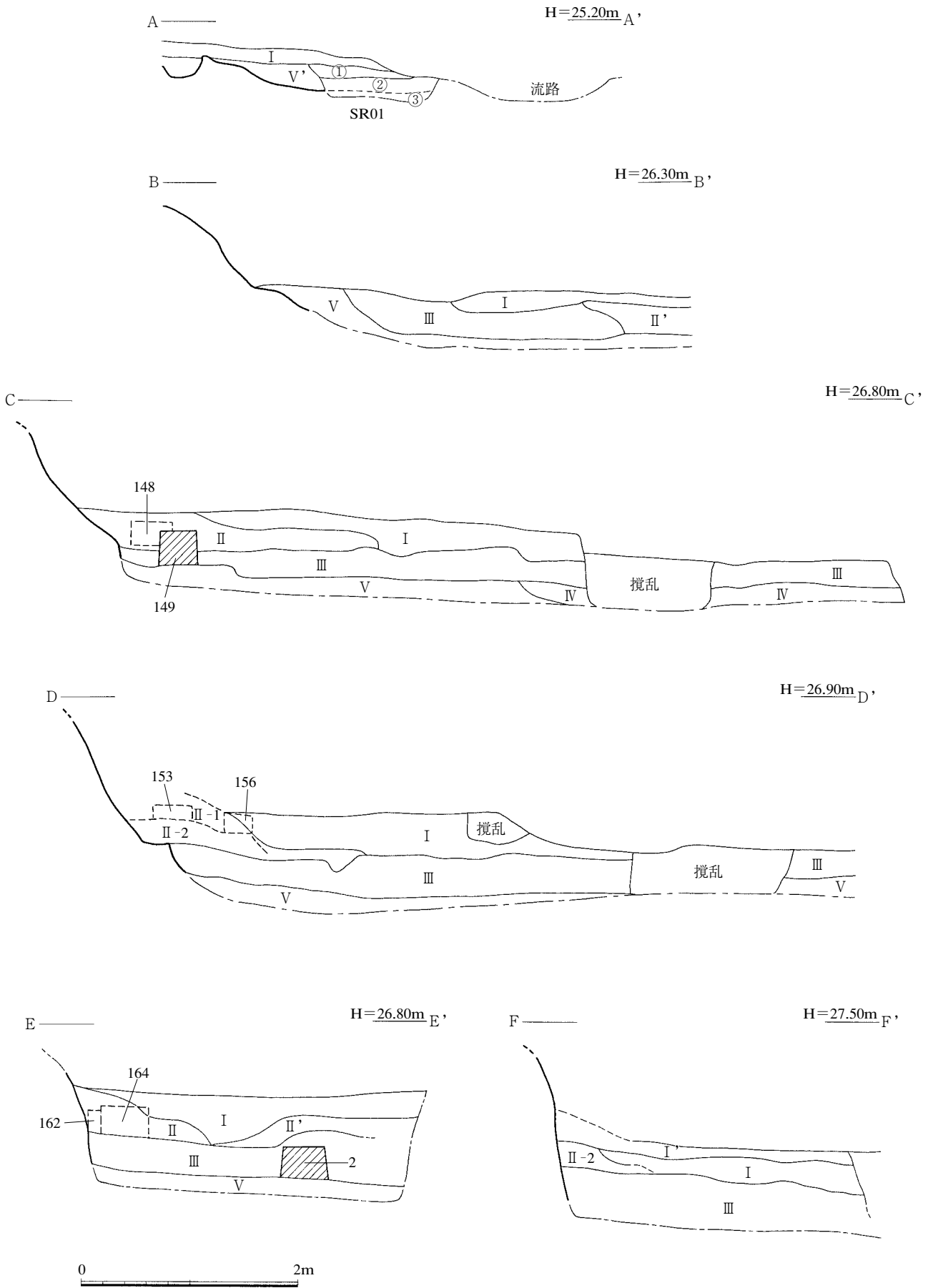
・B-B' (サブベルトNo2)

Ⅲ層は、黄褐色粘質土層で、他のⅢ層に似るが、粘土ブロックは少なく、Ⅲ層に比べ粘性はなく、砂質土



● SK ▲ SX ■ ST

第4図 I区遺構配置図 S=1/500



第5図 I-①区土層断面図 S=1/50

- A-A' I 淡褐色粘質土。微少の礫が多く混じり、軟らかい。
 V' 褐色砂質土。砂質に近い様な粘質土。
 SR01 ①灰褐色礫層。小礫を含む。あまり締まらない。
 ②黄褐色礫層。サラサラして、あまり締まらない。
 ③暗褐色粘質土。黄褐色粘質土粒や土師器片を含む。
- B-B' II' 褐色礫層。
 III 黄褐色粘性土。III層に似るが、粘土ブロックは少なく、III層に比べ粘性はなく、砂質土が混じる。
 V 自然崩落土。
- C-C' IV 黄褐色混礫粘質土。当時の地山か。
 V 褐灰色粘質土。粘性強。小礫が混じる。
- D-D' I 黄褐色砂質土。
 II 褐色礫層。岩盤崩壊によるもの。
 III 黄褐色粘質土。黄褐色粘土ブロック状が混じる。
- E-E' III II'・II層に比べ礫は細かい。
- F-F' I' 黄褐色砂質土。粘質土が少し混じる。斜面側に礫が混じる。
 II-2 褐色礫層。
 III 褐色粘土。

も一部みられる。II'層は、礫層で、II層に比べ、礫が多い。V層は、第I期の自然崩壊土層であり、サブトレンチNo2において第II期の岩盤掘削は行われておらず、緩斜面が認められる。そのため、他のサブベルトの中でI期の埋没状況(岩盤際)が唯一分かる。見通しの147(SG42)の地輪はII層に置かれず、I期の埋没状態を改変することなく利用され、II'層に埋没する。II層が認められる理由は、サブトレンチNo2よりすぐ東側より岩盤掘削の痕跡がみられることから、その掘削土により埋没したものと理解できる。I期の埋土は、I～III層であり、II期の埋土がI～II層である。

・C-C' (サブベルトNo3)

I層～III層は、他のものと同じである。IV層は黄褐色礫層で、粘質土中に礫が多く混入する。当時の地山である。この層は、石組遺構に使用されている石材が集中して認められることから、墓道に落ち込んだ石材を含む土で整地したものである可能性がある。また、この層に含まれる石材は、砂岩で崖面からの崩壊してきた石と考えられる。V層は褐灰色粘質土層で、小礫が混入し、粘性が強い。V層上面に置かれている149(SG59)の地輪はI期の基盤面で他とも共通している。

・D-D' (サブベルトNo4)

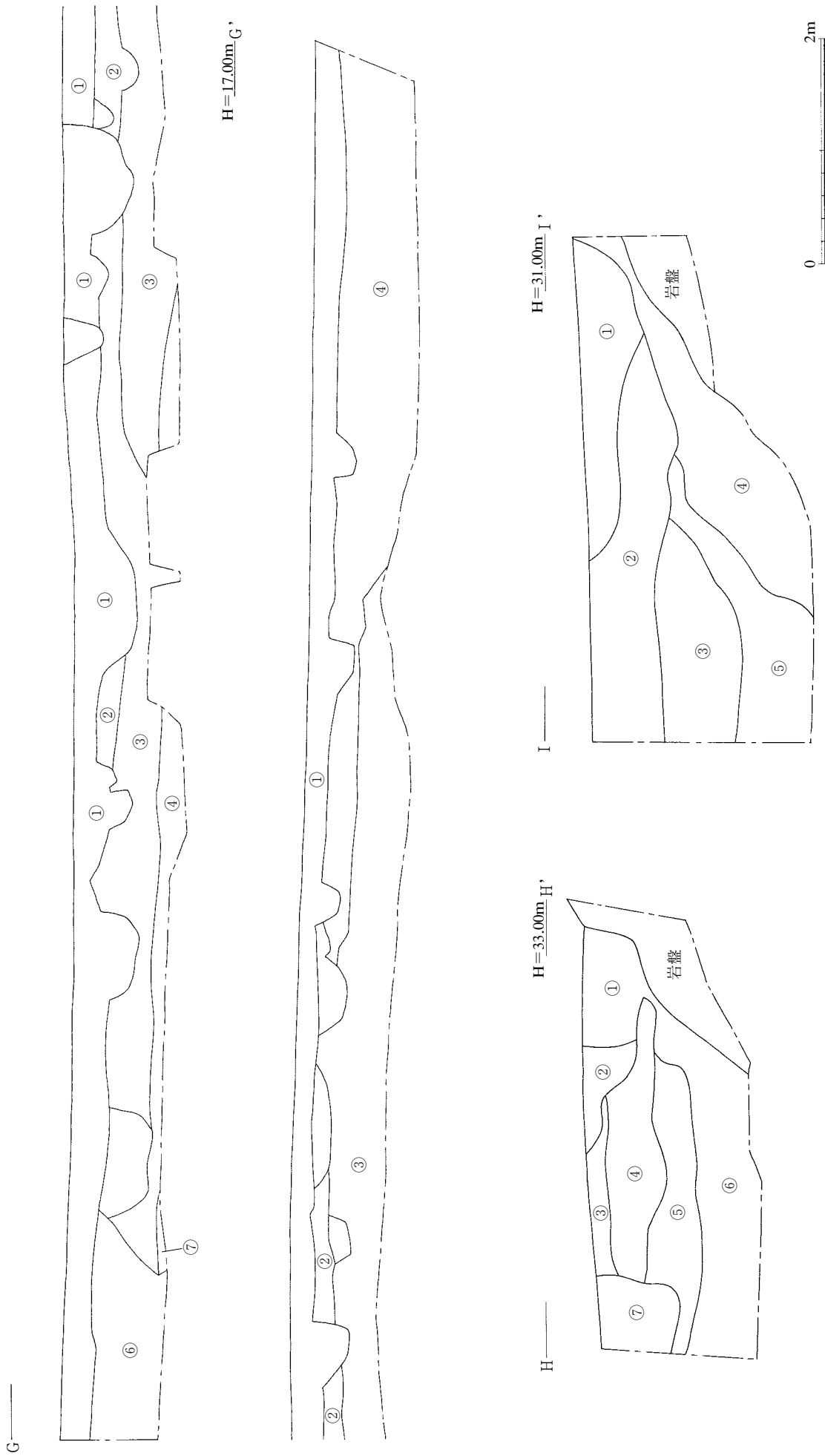
I層は黄褐色粘質土層で、砂質に近く、III層より色調が暗い。II層は褐色礫層で、礫は岩盤崩壊によるものである。III層：黄褐色粘質土で、ブロック状の黄褐色粘土を混入する。

・E-E' (サブベルトNo5)

この土層断面は、元中九年銘の地輪2(SG193)にかかるもので、この地輪がV層直上に置かれていることが分かる。この層はII'層・II層に比べて礫が細かい。見通しに見える162(SG132)・164(SG148)はIII層の上面に置かれているので、III層形成以降に設置されたものである。調査担当者は、III層が堆積している崖面はI-1期の造成時に掘削されたものとし、II'層が被る崖面をII-2期の造成面としている。

・F-F' (サブベルトNo6)

I'層は黄褐色砂質土層で、やや粘性のある土が混入し、斜面側には礫が混入している。II-2層は、褐色礫層である。III層は、褐色粘土の割合が通常のIII層よりも高い。



第6図 I-②区・南東狭谷土層断面図 S=1/50

- G-G' ① 耕作土。
② 黄褐色粘質土。粘性弱。黄褐色ブロックが混じる。Ⅲ層に類似。
③ 褐色粘質土。小礫を多く含む。
④ 暗褐色粘質土。粘性が強い。
⑤ 礫層。砂土混じり。
⑥ 褐色粘質土。全体的に締まりがない。小礫を含む。
- H-H' ① 耕作土。
② 耕作土。
③ 黄褐色粘質土。
④ 明褐色砂礫層。
⑤ 黄褐色砂質土。
⑥ 灰白色粘質土・明黄褐色砂質土が交互に堆積。
⑦ 褐色礫層。
- I-I' ① 明黄褐色粘質土。小礫がわずかに混じる。
② 礫層。明黄褐色粘質土がところどころに混じる。
③ 礫層。褐色粘質土がわずかにみられる。
④ 明黄褐色土。
⑤ 灰白色粘質土・明黄褐色砂質土が交互に堆積。H-H'の⑥層と同一層。

I-②区土層断面

G-G'

①層は、耕作土。②層は、黄褐色粘質土でブロック状の黄褐色土が混入し、粘性は弱い。I-①区のⅢ層に類似。③層は、褐色粘質土で、小礫を多く含む。④層は、暗褐色粘質土で、粘性が強い。⑤層は、礫層である。⑥層は、褐色粘質土で、全体的に締まりがなく、小礫を含む。

H-H' (南東狭谷トレンチNo1)

①層は耕作土。②層は、同じく耕作土。③層は、黄褐色粘質土。④層は、明褐色礫層。⑤層は、黄褐色砂質土層。⑥層は、灰白色粘質土と明黄褐色砂質土の互層堆積層。⑦層は、褐色礫層。

I-I' (南東狭谷トレンチNo3)

①層は、明黄褐色粘質土。小礫がわずかに混じる。②層は、礫層で明黄褐色粘質土がところどころに混入する。③層は、礫層で褐色粘質土がわずかにみられる。④層は、明黄褐色土層。⑤層は、H-H'の⑥層と同一層である。

I-③区土層

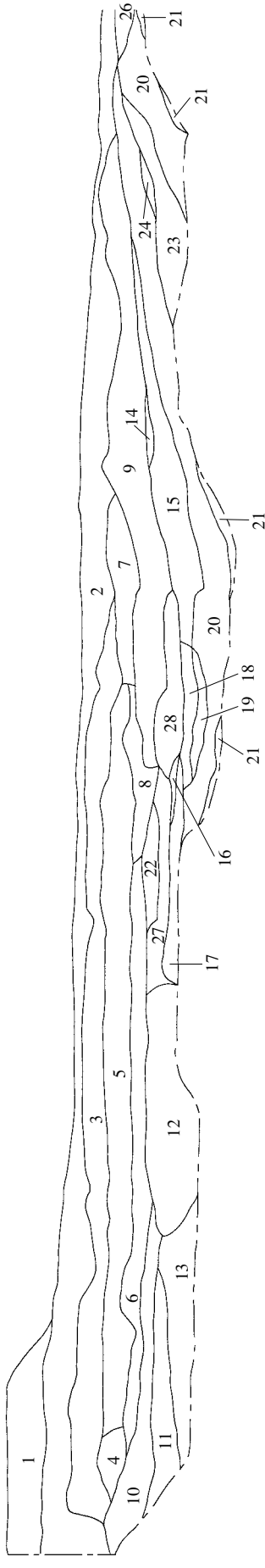
土層堆積状況は、東側では黄褐色粘質土層と砂礫層が交互に積み重なりほぼ平坦であるため、整地の可能性が指摘されていた。中央部付近では、それらの層は続かず、岩盤面に沿う堆積状況である。東側から伸びる互層の砂礫上位層下の黄褐色粘質土の延長は確かに一定するようにもみえるが、岩盤面に沿った堆積状況、さらに砂礫層などは岩盤が表面に顔を出す部分の手前で消滅していることから自然堆積と考える。また、土師器片を含む層(10・6・22・8・28・9・14・26層)の黄褐色粘質土下位層は砂質を帯び、砂礫層と同様にI-①区でも類似する層が堆積していた様子からも自然堆積とみなす。ただ、3・5・6層については一定のレベルであるので整地層の可能性もある。ただ、I-①区でもこのような堆積はみられ、自然堆積としたほうがよい。

以上のようなI-①区、I-②区、I-③区の状況をもとに、それぞれの層序をもとに全体の基本層序を設定することとする。部分的な層と考えられる場合は省いたものもある。

I層は耕作土もしくは表土層で、黄褐色の粘質土、もしくは、砂質でもある。

Ⅱ層は礫層で、崖面の岩盤が徐々に崩壊しながら礫となって堆積していったために、この層の主体となったのであろう。

H=22.05m



H=22.05m J'

0 2m

- | | |
|--|---|
| <p>1 におい黄褐色土。耕作土。
 2 褐色土粘質土。一部に褐色粘土ブロック、黄褐色砂質土が混じる耕作土。
 3 黄褐色粘質土。小さな礫や砂質土を含む。
 4 黄褐色砂礫層。少し砂を含む。
 5 黄褐色砂礫層。礫、粗砂を含む。
 6 黄褐色粘質土。粘性強。
 7 黄褐色粘質土。粘性強。大礫を含む。
 8 明褐色粘質土。7よりも硬くしまる。
 9 黄褐色粘質土。小礫、黄褐色砂質土及び褐色粘質土からなる。
 10 黄褐色粘質土。小礫、黄褐色粘質土ブロックが混じる。
 11 黄褐色粘質土。大さめの礫が目立ち、粘質土も含む。山崩れによる堆積と考えられる。
 12 褐色粘質土。小礫や褐色ブロックが混入。
 13 褐色粘質土。細砂粒から成る。
 14 黄褐色粘質土。あまりしまりがない。
 15 黄褐色粘質土。あまりしまりがない。
 16 黄褐色粘質土。</p> | <p>17 褐色粘質土。粘質土中に小礫、砂粒含む。
 18 黄褐色粘質土。19層に比べ粘性強。
 19 黄褐色粘質土。しまりのない粘質土。小礫を含む。
 20 黄褐色粘質土。黄褐色粘土ブロックが混じる。あまりしまりがない。
 21 灰黄褐色粘質土。非常に粘性強い。
 22 褐灰色砂礫層。やや大きめの礫が混じる。
 23 黄灰色砂礫層。小ぶりの礫を多量に含む。
 24 におい黄褐色土。砂質土もわずかに含む。
 25 におい黄褐色粘質土。砂質土も混じる。
 26 黄褐色粘質土。20層に類似する。
 27 褐灰色粘質土。色調は22層に比べやや灰色が強い。全体としてしまりが無い。
 28 黄褐色粘質土。褐色砂礫と黄褐色粘質土が混じる。17層に類似する。
 29 明黄褐色土。黄褐色粘質土、灰色粘質土が混じる。全体として砂質を帯びる。
 30 灰黄褐色粘質土。全体として砂質が強い。
 31 におい黄褐色粘質土。全体的に黄褐色粘質土ブロック、砂礫が混入し乱れている。
 32 黄褐色粘質土。ややしまりがある。</p> |
|--|---|

第7図 I-③区土層断面図 S=1/50

Ⅲ層は、基本的に黄褐色粘質土層であるが、場所によっては礫や砂が混じる。上面はほぼ一律に平坦化しているので、整地されていると考える。この上を概ね第Ⅱ期の墓所の造営時期とする。墓群の様相も下位のものとなっていく。この層は言い方を変えると、第Ⅰ期の墓地造営が終了した後、使用されない期間があり、その期間にこのⅢ層が堆積したものと考えられる。

Ⅳ層は黄褐色礫層で、粘質土中に礫が多く混入する。この礫は岩盤が礫となったものと考えられ、石組遺構にも使用されている。また、この下の自然地形に沿った部分とは異なり、一定の面を作り出している。当初の墓地造営にあたっての整地層であろう。ただ、全体的にはなく、下層のⅤ層の造成の際に新たに埋められた層である。

Ⅴ層は本来の崖面付近では平坦面を作り、谷の中央部付近になると、Ⅳ層下位になることから、第Ⅰ期の墓地造営時期に掘削され、整地された層であろう。この層は、整地される以前からの層で、崖面の崩落した石材や谷上部から流されてきた砂礫などを含み、自然に堆積した層である。この下には、崖面に近い部分では岩盤があり、谷中央部ではⅥ層が堆積している。

以上のように大まかに基本層序はまとめられる。場所によってはさらに途中の層が分層できたり、谷の出口付近ほどⅤ層よりも下位で層の堆積が厚くなったりする。

第3節 遺構

(1) 概要(第8図)

遺構については、先に示した対照表により、遺構番号が変わる。また、遺物としての五輪塔の一つ一つにふった番号も付け替えている。五輪塔のみの番号を示す際には、SGの記号を振って番号を後ろにつけることで、五輪塔番号とした。各区の遺構の種類と主な遺物について概要としてまとめる。

I-①区

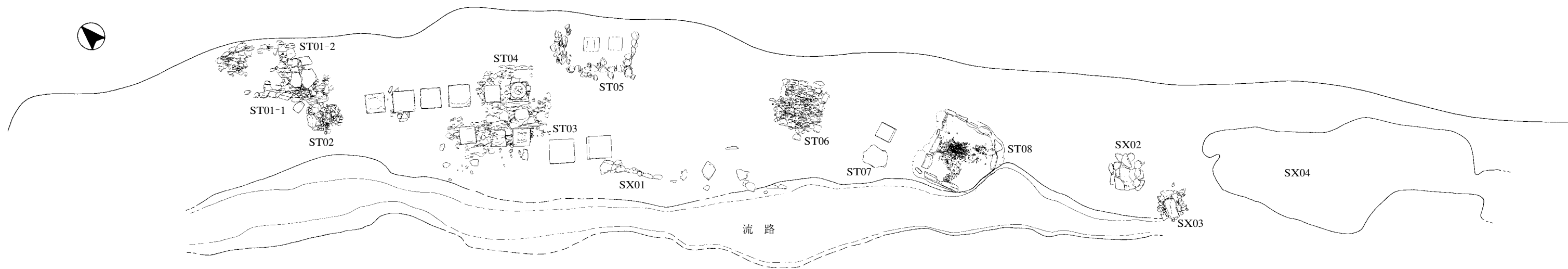
- | | | | | | | |
|----|--|----------------|-----------|------------------------------------|--------|----------|
| 遺構 | ・石組遺構 | 7基 | 下層面より検出 | ST01、ST04、ST03、ST05、ST08、ST06、SX01 | | |
| | ・石敷遺構 | 全15基 | 五輪塔のみも入れる | | | |
| | ・礫石経 | 1基 | 上層面より検出 | SR01 | | |
| | ・葺石墓 | 2基 | 上層面より検出 | ST11、ST13 | | |
| | ・集石遺構 | 2基 | 下層面より検出 | SX02、SX03 | | |
| 遺物 | ・石塔部材 | 171個(内訳：空風輪60個 | 火輪26個 | 水輪43個 | 地輪37個) | ・相輪部材 5個 |
| | | その他残次多数 | | | | |
| | ・土師質皿多数 | ・瓦質土器片 2点 | ・大甕 1点 | | | |
| | ・火葬骨片(石組(ST08)内の炭化物層、水輪132、100(SG197、37)の納骨孔、埋土より検出) | | | | | |
| | ・礫石経の墨書石 | | | | | |

I-②区

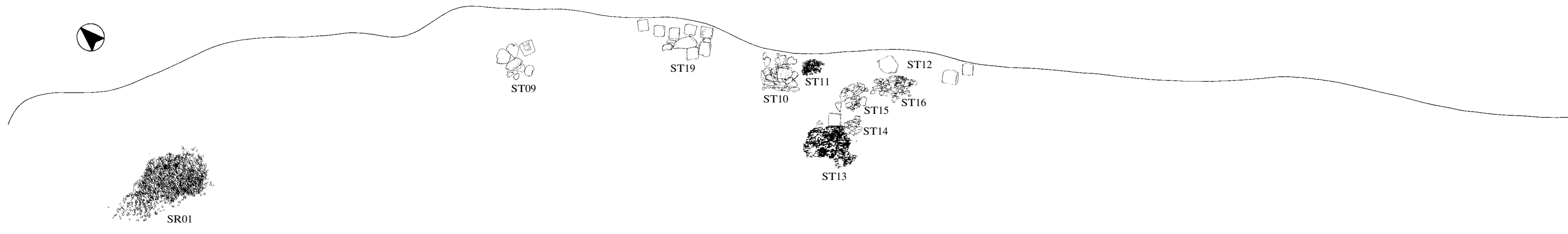
- | | | | |
|----|-----------------------|---------------------|-----------------|
| 遺構 | ・土坑 4基(うち 1基より火葬骨片検出) | ・炭化物散布地 1箇所(火葬骨片検出) | |
| 遺物 | ・火葬骨片 2点 | ・土師質皿少数 | ・五輪塔部材 1個(流れ込み) |

I-③区

- | | |
|----|---------|
| 遺構 | ・検出せず |
| 遺物 | ・土師質皿少数 |



I 期



II 期



SK01



第 8 図 I-①区時期別遺構配置図

次に、調査者は墓地の使用時期をⅠ・Ⅱ期に大別している。さらに、最初の造営時期を第Ⅰ－Ⅰ期としている。それが、Ⅴ層上面で検出したもので、最下位で出現する遺構群のうちの次のものである。

・Ⅰ－Ⅰ期(墓地造営期)

遺構：ST01、ST02、ST03、ST04、ST05、ST06、ST07、ST08、SX02、SX03、SX04(沼状遺構)

五輪部材：2、142、132、141、143、146、145、149、151

次に、再配置などの時期をⅠ－Ⅱ期とし、世代が変わる中で墓所使用も変化し、墓地の敷地を有効に利用するため、もしくは父祖の再葬を図るため、墓石の再配置を行った時期である。それが以下のものである。

ここでは、検出面はⅤ層になる。墓葬の分布は、時期ごとに若干異なる。調査者は、以下のように墓葬の造営時期を想定している。

・Ⅰ－Ⅱ期(墓地再配置期)

遺構：SX01

五輪部材：137、138、139、140、170、171

その後、一旦墓地の使用が途絶え、上に土砂が堆積していく。そしてある時期、再び墓地が造営されるようになる。それが第Ⅱ期である。墓地の拡大のため、崖面の削りこみを行っている。この第Ⅱ期も途中に墓の再配置などが行われ、大きく2時期に分ける。Ⅱ－Ⅰ期とⅡ－Ⅱ期である。まず、Ⅱ－Ⅰ期には以下の遺構が含まれる。

・Ⅱ－Ⅰ期(新規墓地造営)

遺構：ST10、ST11、ST13、ST14、ST15、ST16、ST19

五輪部材：160、163

調査者によれば、ST13はⅢ層中位、ST10はⅢ層直上にて検出。ST14は検出したレベルからⅢ層、ST16、15もレベルよりⅢ層(レベル高からの推測であり、Ⅲ層直上から上位かは不明)。墓域の利用から推測すれば、ST14・15・16はST13・10よりも新層と思われる。

ST13→ST10→ST14・15・16

Ⅱ－Ⅱ期は、再配置後の並びである。崖面を掘削し、礫層上面で検出。

・Ⅱ－Ⅱ期(墓地再配置)

遺構：ST09、ST11、ST12

五輪部材：153、154、155、157、158、164、162

SR01(一字一石経塚)、SK01(埋甕・棺?)は時期が不明確であるが、ここに入れる。

このような時期想定については、まとめでのべるが、この分類により、遺構の配置状況をみると、Ⅰ期と考えられる遺構は、現在の岩盤面よりやや前面よりに築かれている。Ⅱ期ではⅠ期との間に間層を置いて新たに造営されている。合わせて崖面側への墓地の拡張が図られている。

ここで時期を振り分けているのは、あくまでも遺構が原位置を動いていないと考えるものについて述べている。したがって、明らかに移動しているものについては触れていない。ただ、遺物として五輪塔の石材はどこかの時期に属すと考えられる。詳細については以下のなかで触れていく。

(2) 各遺構の状況

遺構としては、調査Ⅰ区のうちⅠ－①区とⅠ－②区から明確な遺構が出土している。調査区が若干離れており、遺構のあり方も異なる部分もあると思われる。Ⅰ－①区は、谷奥に向かって左奥斜面である。Ⅰ－②区は、調査区の北端で谷の入り口付近である。Ⅰ－①区、Ⅰ－②区の遺構は次のとおりである。

I-①区：ST01、ST02、ST03、ST04、ST05、ST06、ST07、ST08、ST10、ST13、ST14、ST15、ST16、
ST19、ST09、ST11、SX02、SX03、SR01、SK01

I-②区：ST17、ST18、SK02、SK03、SK04、SK05、SK06、SW01

I-③区からの遺構は検出できていない。

【ST01】（第9図）

第I期の造営と考える石組み構造だけ残る遺構である。墓群の谷奥に位置し、上位にST09が存在したが、徐々に上部遺構を取り去る中で確認できたものである。

この遺構を当初1つのものと考えたが、詳細に検討すると、ST01-1とST01-2に分離した方がよいと気づき、調査を通じ、分離した。ST01-1をまず調査した。ST01の西側にあるものである。敷石を配置した上にやや大きめの板状の石を配置したものである。周囲に配石としてやや大き目の石を配置している。南側には礫をほぼ列状に配置しているが、幅1.2mほどの間隔でこの列に直角方向に礫の列痕跡が見られる。このことから本来は方形の石囲いがあったものとする。中央の板状石の上に石塔が置かれていた可能性がある。下部遺構は確認できなかった。礫石を除去していく中で、骨片が集中する部分を検出し火葬骨として取り上げた。四肢骨と思われるものが含まれていたが、多くが小片のため特定はできなかった。

ST01-2は、ST01-1の北東側になる。先のST01-1の北側部分にかすかに認められた礫による区画線の東側になる。中央部付近には、持ち去られたように石材が存在しない。また、明確に区画を設けたような跡もない。これらのことから、墓地の改葬などを行って、人骨などとともに石材も移動したのかもしれない。

【ST02】（第10図）

この遺構は、ST01のすぐ西側に位置している。I期の墓葬と想定している。

やや大型の礫を配しており、小型の礫はない。礫は長軸で2m、短軸で80cmほどに分布している。明確な配置状況は見られないが、中心部が欠けており何らかの破壊を受けた可能性がある。この破壊時期は不明である。石のない部分は不正形の掘り込みが確認できた。

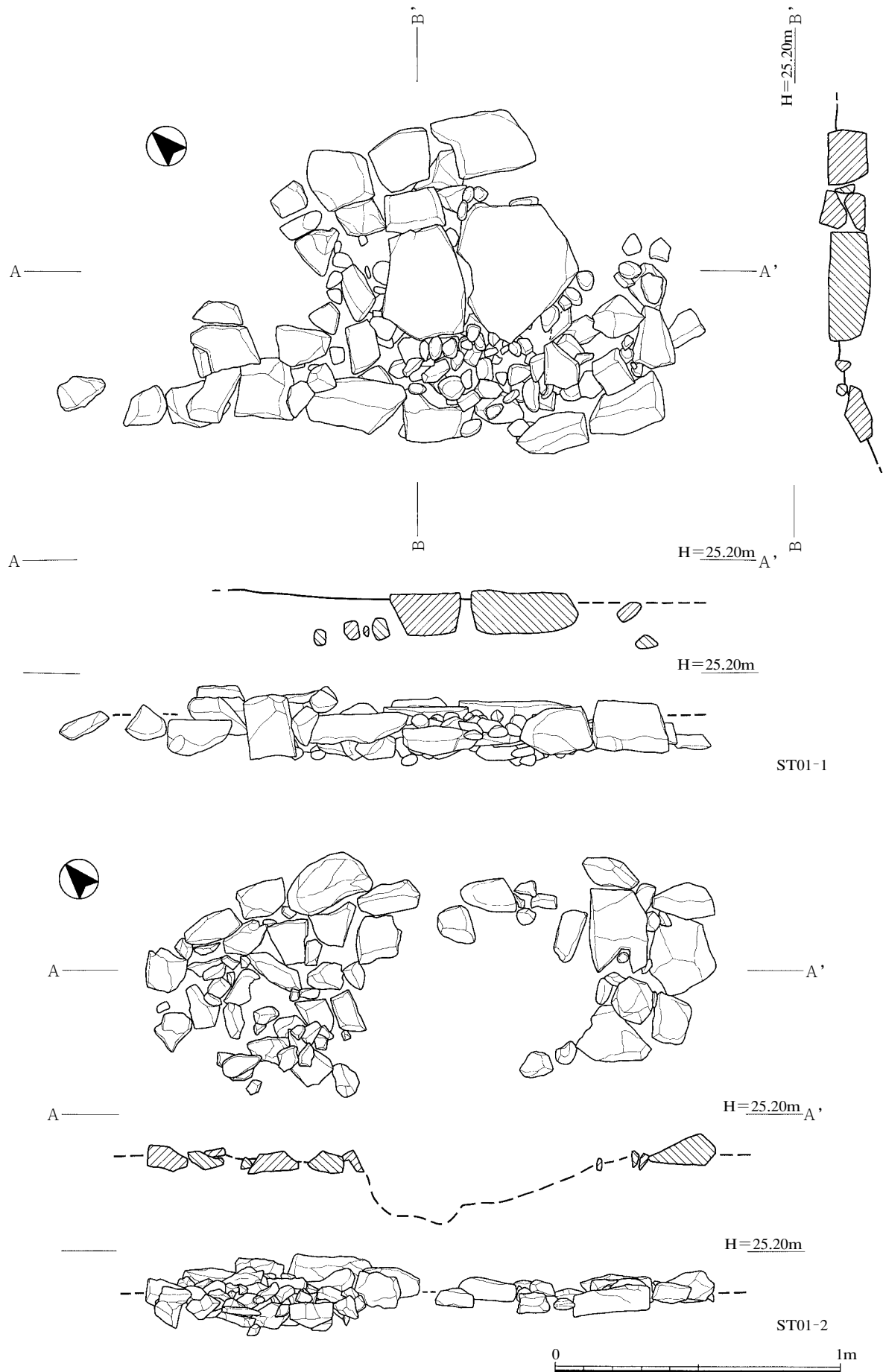
この遺構は当初もう一つの分布と重なったものがあり、小礫の集中する部分と片側には大型の石を配置している。やや楕円径に配置され、長軸で80cm、短軸で60cmの範囲に配される。大型の石は地形的に落ち込んだ部分におかれている。

【ST03・ST04】（第11図）

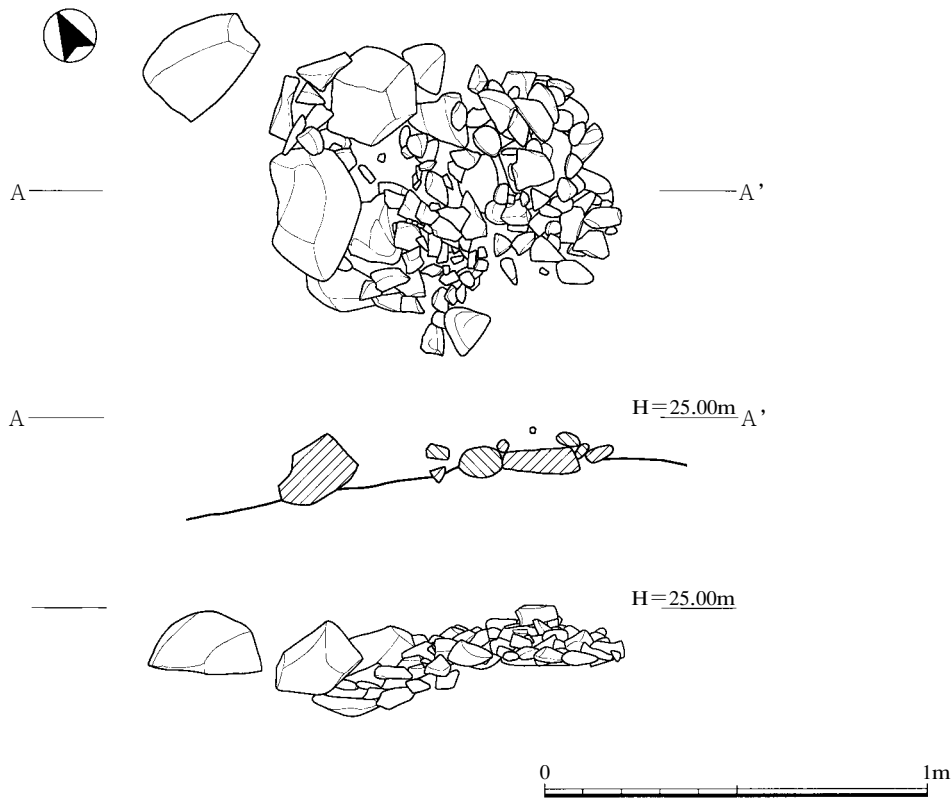
この2つの遺構は、第11図に示すようにいくつかの遺構が集中する部分にある。本来の石塔配置にあたる部分がST03とST04である。南側の地輪146(SG38)を中心として配石されている部分をST03とし、これと切りあうように配置されている北側部分の地輪145(SG36)・水輪132(SG197)の重なる石塔を中心とし、周囲におおよそ1.7m×1.1mの方形範囲に配石された部分をST04とした。地輪142(SG29)もST04の一角に乗っているので並列墓としてもよいが、やや移動しているようなので、配置換えされている可能性が高い。

まず、ST03の146は、上面に深さ14cmの方形の孔が穿たれている。他の地輪の置き方からすると、天地が逆になっているので、移し換えられている可能性がある。ただ、下の石敷きの状況からそこにもともとあったとも考えられる。その左横に置かれているのが、地輪143(SG30)である。深さ14cmの孔を下にして据えられ、その上に石が数個置かれていた。この2基は同列に並んでおり、配置換えされている可能性が大きい。また、この2つの地輪は、やや大きさが異なる。

調査においては、146と143の両地輪の上にまたがるようにして出土したのが、水輪100(SG37)である。



第9図 I-①区ST01-1・ST01-2実測図 S=1/20



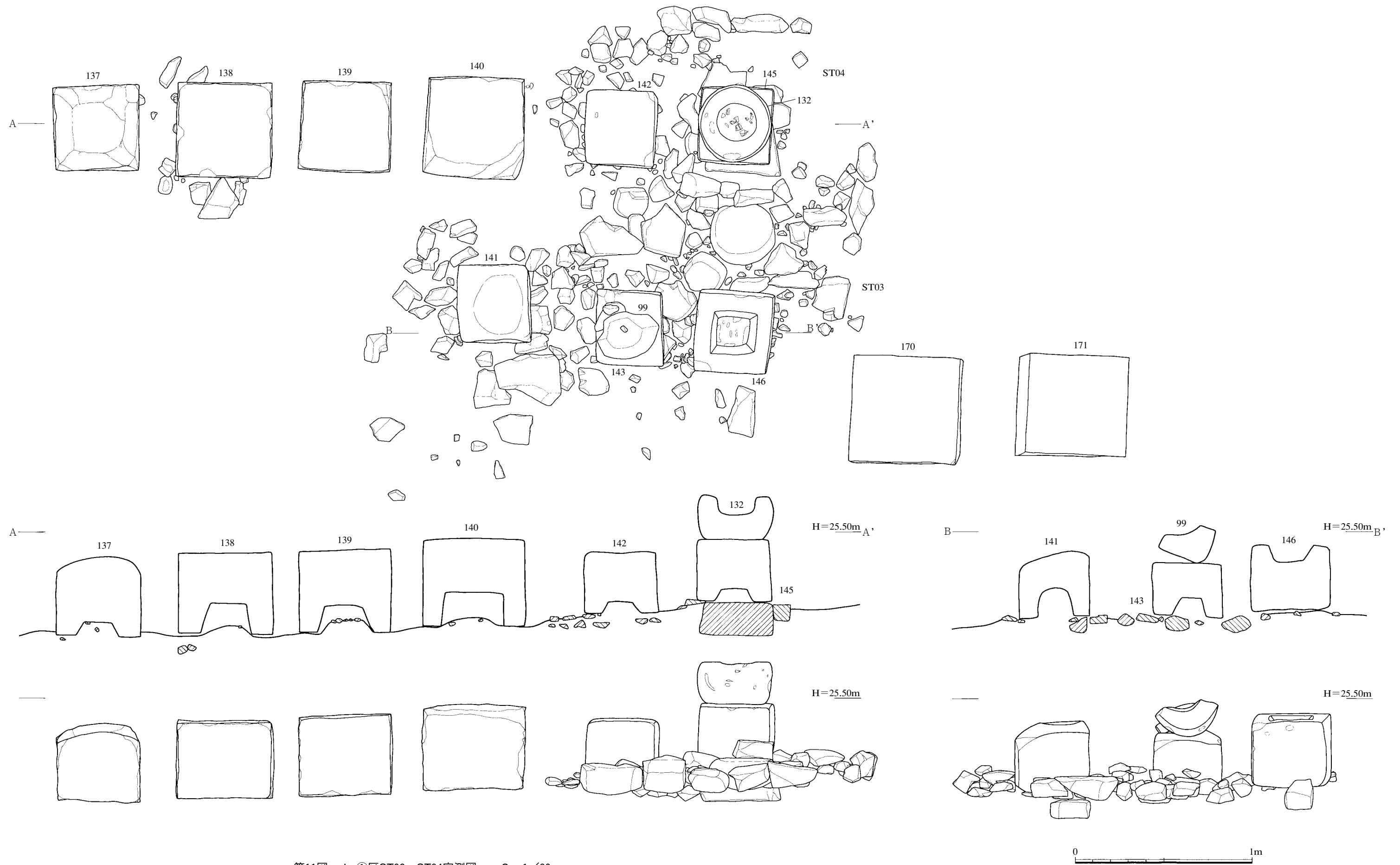
第10図 I-①区ST02実測図 S=1/20

この上面に円形の穴が掘られ、その中に火葬骨が小骨片となり入っていた。小片のため、特定は難しいが、頭骨と思われるものもあった。この水輪には梵字が4面に書かれているようであるが、文字は不明瞭である。ただ、通常「バ」「バー」「バン」「バク」の4文字である。143・146ともに梵字がないので、本来の組み合わせ位置に置かれたものではない。

さらに上記の2つの地輪の左側に、2基の地輪の並びとはやや違う位置に、143から40cmほど離れて地輪141(SG25)が置かれている。底には深さ8cmほどの孔が開けられている。上部は四方の縁部分に打ち欠いた跡がある。

ST04の地輪145(SG36)と水輪132(SG197)の重なりは、本来の組合せで残ったものであろう。水輪の上面には、径20cmほど、深さ20cmほどの埋納孔が穿たれ、そこに火葬骨が入れられていた。骨片は数量が多く、大きいものも含まれていたため、骨種としては、頭骨、胸骨、四肢骨などが推定できた。また、地輪145を動かすと、底に深さ90cmの方形の孔が穿たれており、その中にはいるように骨片がおかれていた。かなり小片で、部位などは同定できなかった。火葬した後、そこに五輪塔をそのまま据えたと考えられる。

さらに、ここの墓群に連なるように配置された地輪群が列状に並ぶ部分がある。ST03の地輪142の左側に4基の地輪137～140が整列して並んでいる。これらの地輪は、大型品の部類に入るものである。いずれの地輪にも底部に孔が穿たれていた。そこで、地輪の下に火葬骨の有無を確認するために詳細に調査を行ったが、確認できなかった。ただ、それぞれの下を調査している際に、根石と考えられる小礫が配置されていた。これらは間が40cm前後尾幅しかなく、ST03、ST04の地輪に比べやや大きいことから、古い石塔を移し替え、再配置したものであろう。



第11图 I-①区ST03·ST04实测图 S=1/20

さらにST04の南東側に、やはり一回り大きい地輪170(SG67)・171(SG68)が2基並んで置かれている。下部遺構としては、石組み・石敷きなどの施設はない。この2基には、それぞれ梵字が彫り込まれている。地輪170には、報身とされる1面には、「ア」字が、その左右の面にも同じ文字が彫られている。そして、最初の面の後ろに「アーク」字が彫られている。薬研掘りでかなりしっかりと彫り込まれている。この文字配列は通常「アーク」字は北側に配置される場所であるが、ここでは、南西向きに置かれている。この梵字によって示されるものは、「大日如来三身真言」と「金剛界五仏」である。一方、地輪171にも同じく「ア」字が3面と「アーク」字が1面彫られており、同じ文字でしかも並んでいる状況からこの2基は近い時期に作られた可能性がある。この地輪も方位が変わっている。ともに同時期に配置しなおされたと考えられる。

さらに、この171の地輪との組合せが考えられるのが空風輪26(SG41)である。報身の空輪に「ケン」字、風輪に「ウン」字が彫られ、大日如来三身真言を表し、応身の空輪に「ノウ」字、風輪に「サ」字が彫られて同じく大日如来三身真言を表す。法身の空輪に「バン」字で金剛界大日を、風輪に「ウン」字が彫られて金剛四仏を地輪と同じく表す。他にも大型の空風輪23(SG21)・24(SG24)があり、その他の大型の地輪との組合せが考えられる。

この170・171の地輪は再配置後に現在の位置にあるが、規模的な大きさや特殊な梵字の存在などの点を考慮すると、I-1期とした石組遺構の上にあったと考えた方が妥当である。調査者はST08にあったのではないかと推定している。

【ST05】(第12図)

この遺構は、I-1①区の五輪塔群の中央部奥の崖面下におかれている。現況でみると、長軸方向で2.1m、確認された短軸方向で、1.2mを測る石組みの中に2基の地輪が配置されている。配置されている石組みに使用されている石材は、大きさ20cm前後の角礫で、やや大きめのものであった。

2基の地輪はやや小型のものである。地輪149(SG59)は底面の1辺が40cm、地輪151(SG89)は底面の1辺が35cmを測る。この地輪の下部に掘り込みなどの遺構は検出できなかった。

これらの五輪塔が原位置のままかどうかは不明である。

【ST06】(第13図上)

長さ20cm前後の長方形の石材を用いて、長さ1.2m四方の正方形に囲いを組んでいる。上部に五輪塔があった可能性があるが、確認できていない。

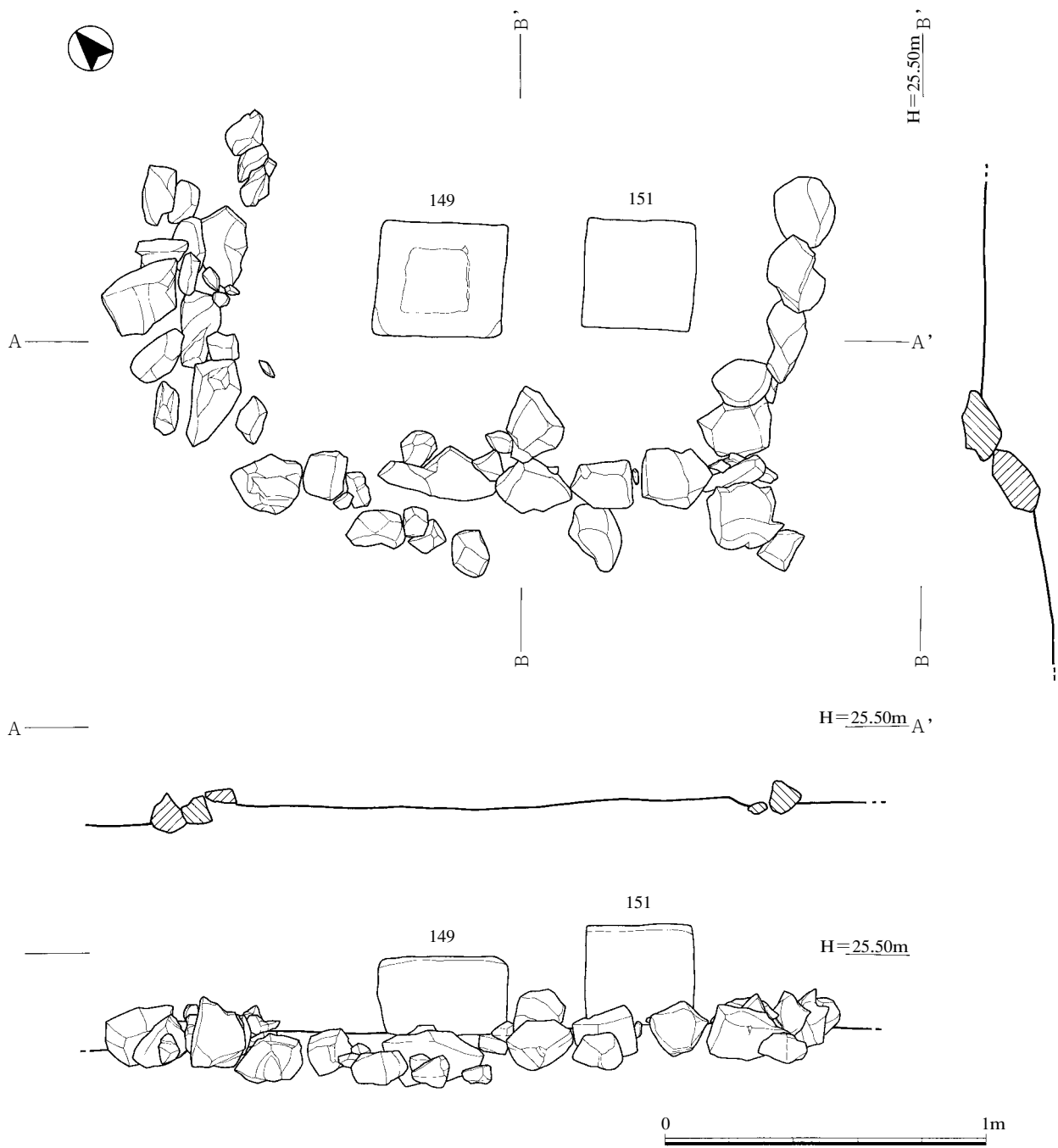
石囲い内部には5～20cmほどの礫を敷き詰めている。その石敷きを除去すると、上面で一辺が1.1m四方、底面で一辺が70cm四方ほどの掘り込みを検出した。敷石の下面からの深さが、18～25cmほどを測る。

この掘り込みの埋土は1層のみで、多量の木炭と炭化物が全体的に混じる暗褐色土であった。土師器片も所々に混じる。また、人の拳大の石が混じる。石組みや敷石で火を受けた痕跡はなく、焼土も一切ない。人骨なども検出していない。ただ、形態的には火葬墓の可能性が強い。土坑を掘って中に火葬骨を埋めたものと考えられる。

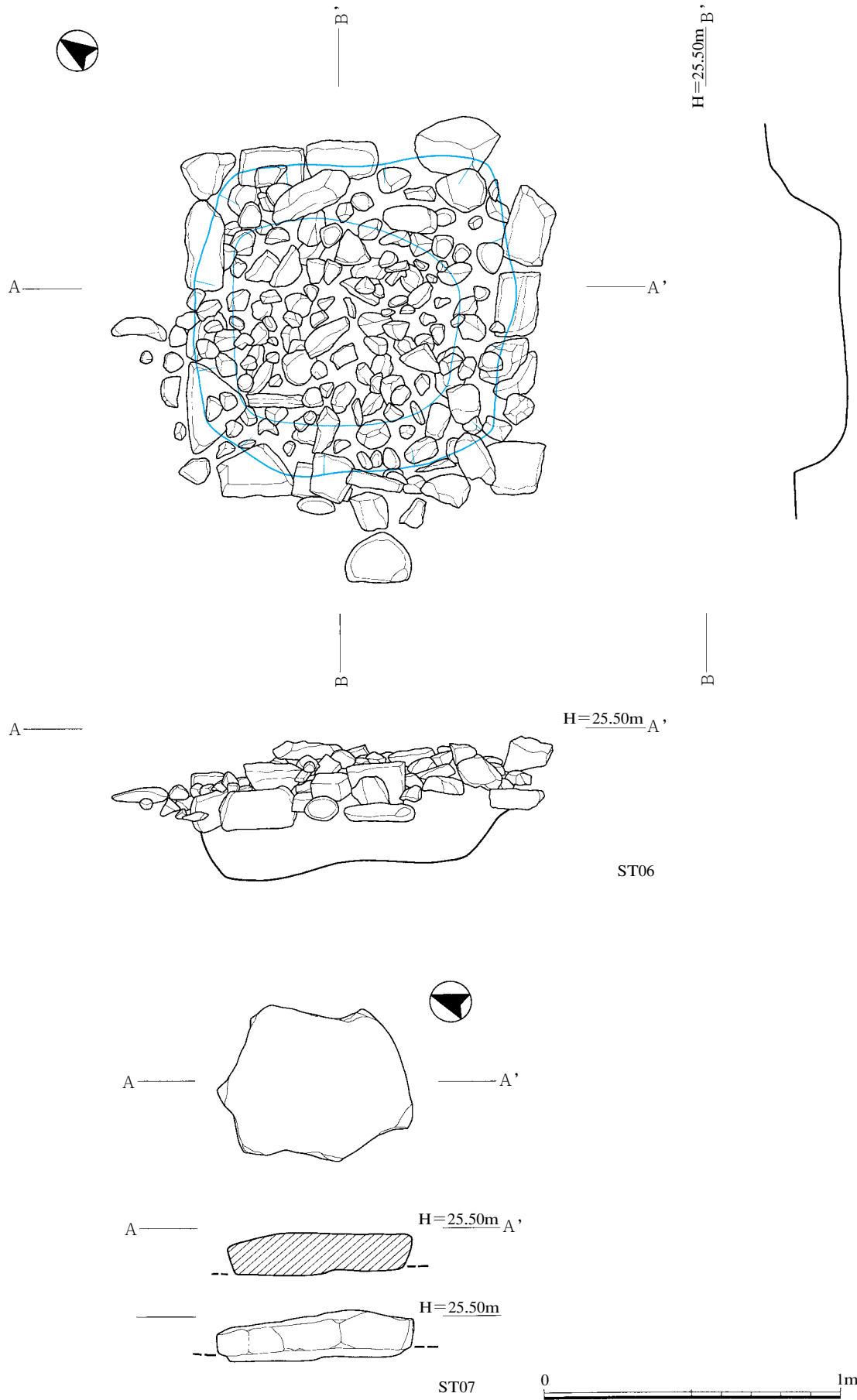
【ST07】(第13図下)

この遺構は、出土層の状況からI-1期のものと考えられる。板状の石のみを置いたもので、板碑状に立っていた可能性がある。または石一枚で墓所としての目印だけのものかもしれない。一応墓としたが、地下遺構は確認できなかった。この板状石の大きさは、65cm×50cmほどを測る。特に加工らしい加工はなかった。この上に敷石として石塔が配置されていた可能性もある。

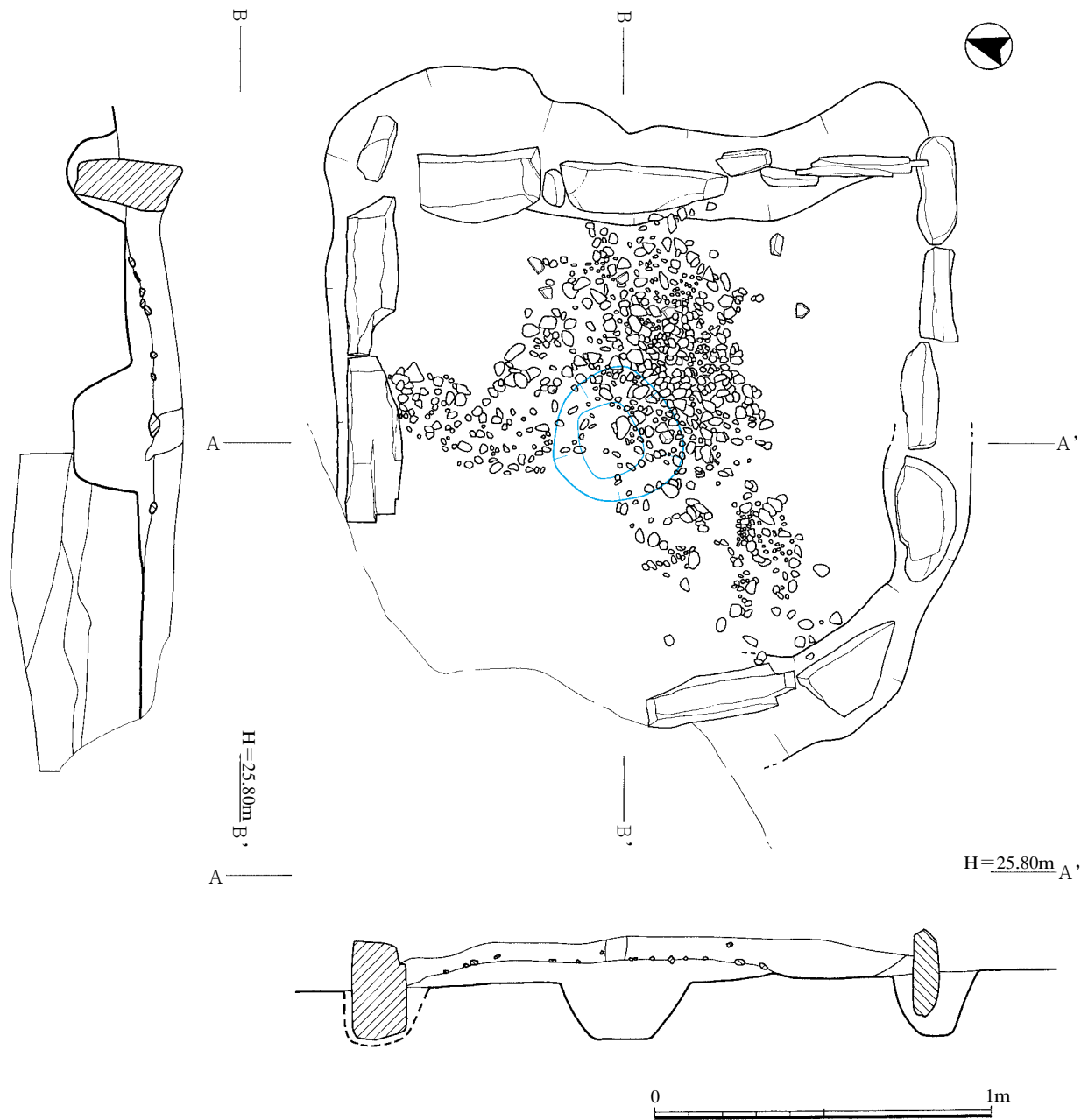
この遺構の西側に紀年銘のある地輪2(SG193)がある。



第12図 I-①区ST05実測図 S=1/20



第13図 I-①区ST06・ST07実測図 S=1/20



第14図 I-①区ST08実測図 S=1/20

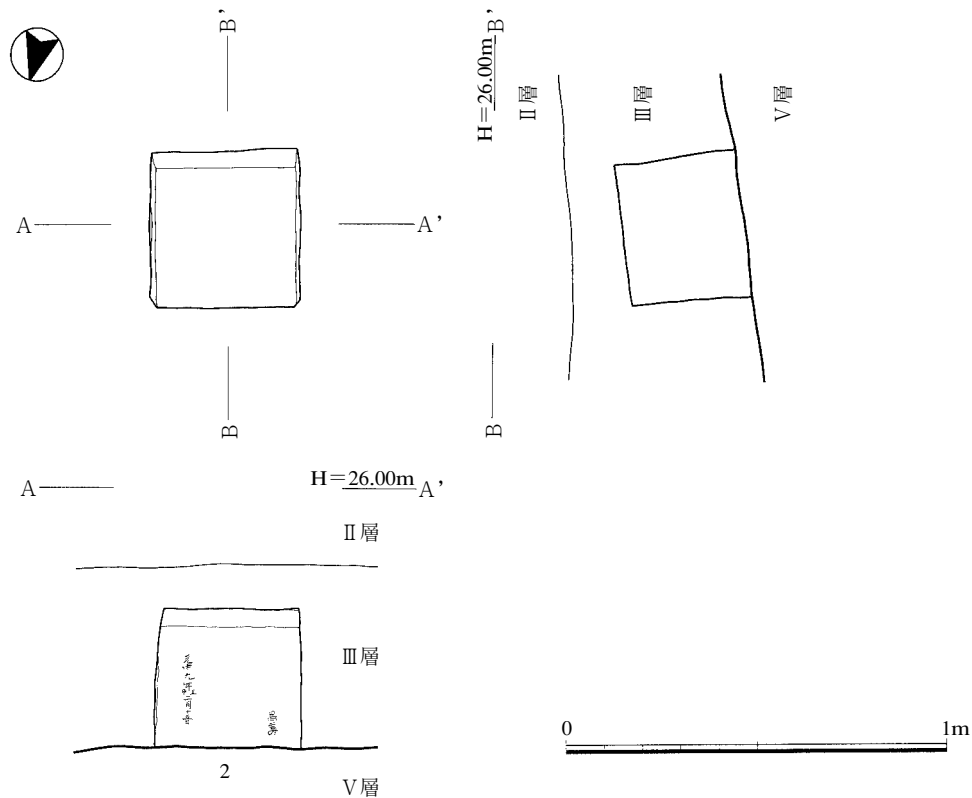
【ST08】(第14図)

この遺構は、Ⅲ層下位からの出土である。形状的には板状の石を並べて方形に配置している。板石は幅20cm、深さ30cmほどの溝状の掘り込みに配置されている。その一角が自然流路により攪乱を受け、なくなっているものの、一辺1.5m四方の方形の区画を設定していることが分かる。内部には多量の小礫を配置している。上部構造としては、石塔があったと考えられるが、再配置によるものかすでに失われていた。

この区画内の小礫を除去すると、その中心部付近に上面径で40cm、深さ30cm、下面径20cm～30cmの楕円形の掘り込みがあった。埋土は灰褐色の粘質土で、炭化物を多く混入している。

なお、配石に使用された石材は輝石が混入する安山岩系のものでこの近郊ではみられないものである。どこからかの持ち込み品である。

遺物は鉄釘が4～5本出土している。



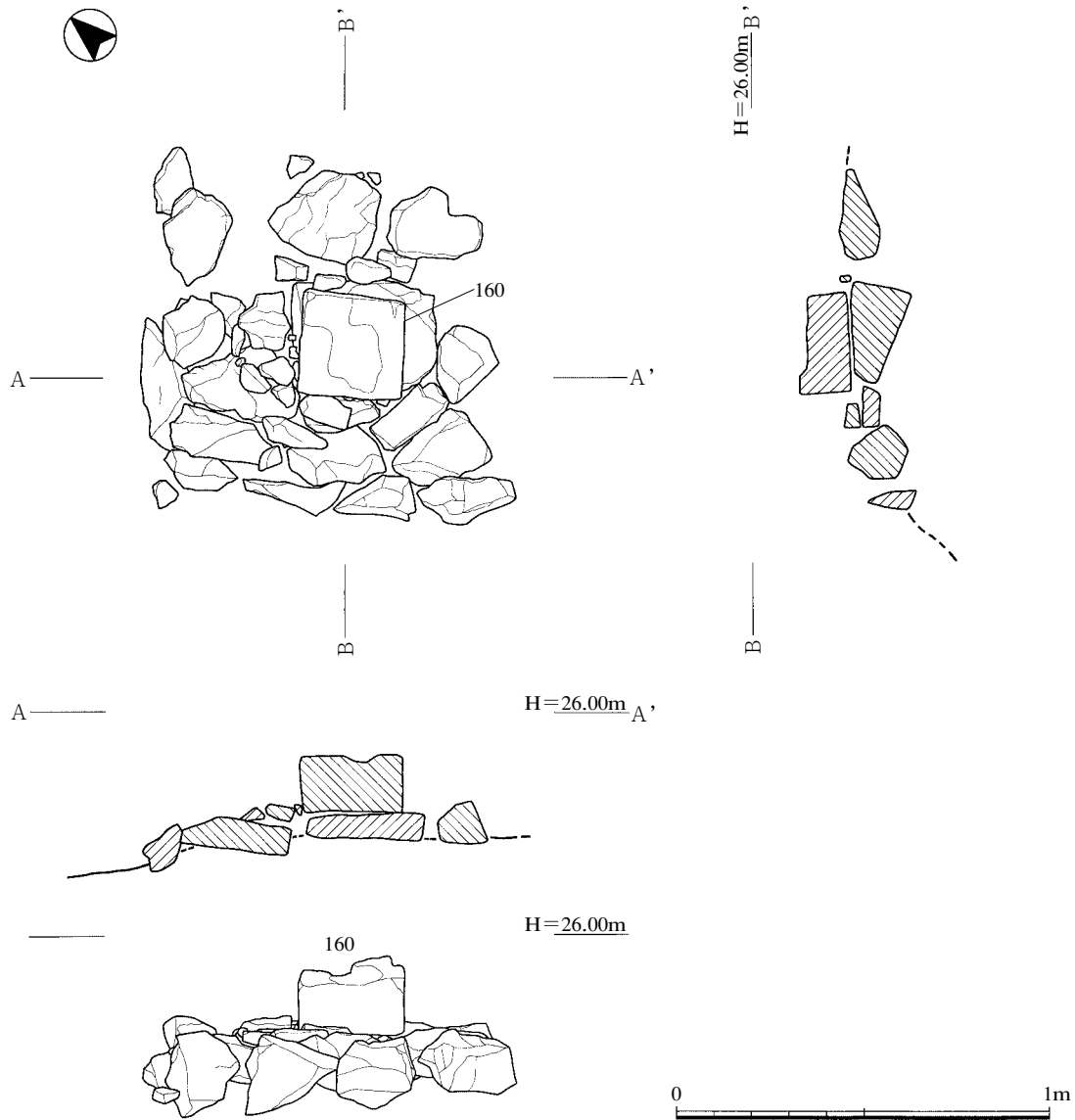
第15図 I-①区紀年銘地輪実測図 S=1/20

【紀年銘地輪】(第15図)

この地輪2 (SG193)は、先のST07の西側で、ST08の北東方向に置かれていたものである。出土層位はⅢ層中で、Ⅴ層の上面に据えられた状態で出土した。この付近には五輪塔がかなり寄せ集められたような状態の中に埋もれるたな状態であった。ただ、この地輪は石組や配石、敷石などを伴っておらず、銘文を持つ石塔の扱いにはおかしい。本来はこの石塔を置いた墓所があったものと考えられる。ただ、この遺物自体はこの墓所の形成時期とさほど離れていない時期に建てられていたのであろう。その後石塔の再配置が行われた際に移動されたものと考えられる。

法量は、底辺の1辺が40cm四方、高さが32cmを測り、やや上部が小さくなっている。地輪の中では中型の部類に入る。

銘文は正面の左側端に縦位置に「元中九年壬申二月十五日」、右下に「昌寿」と記されている。元中九年は、南朝年号で、西暦の1392年にあたり、南北朝合一がなされた年である。この前年は、宮路鳥越合戦、八町嶽城攻撃、八代の御陣総攻撃と戦いの激しかった年である。その翌年に造営されたのなら、これらの戦に関連した人物の墓であったのかもしれない。また、南朝年号を使っていることからこの墓の主が南朝方についていた人物の可能性が高い。



第16図 I-①区ST10実測図 S=1/20

【ST10】(第16図)

この遺構は、出土した標高から、Ⅱ期の遺構と考えられている。

一辺の長さ80cmほどのところにやや大きめの石を四方に配置している。その中には扁平の石を敷き並べている。敷石の中心付近に40cm×40cm×32cmを測る地輪160(SG125)を配置している。この地輪の上部はやや破損している。地輪が原位置を保っているかやや疑問ではあるが、敷石との関係からほぼそのまま判断した。地輪の中央部がやや窪んでいる。埋納孔とするには浅いので、水輪を乗せるための孔であろう。

これらの敷石などを除去した後に、掘り込み等の施設を確認するため精査したが、検出できなかった。

【ST13】(第17図・上)

この遺構は、出土層位からⅡ期の遺構である。この西側にST15、さらにST16が並ぶ。

遺構は、小礫が一辺1.1m四方に方形に配されているものである。石組み自体は失われているが、西側に残る礫の集中から周囲に配石もしくは石組みがあった可能性は大いにある。この礫群の北西側に中央部からずり落ちたような状態で地輪163(SG136)が出土している。40cm×35cm×25cmを測り、上部が下部よりもやや小さくなっており、台形様である。この地輪がこの遺構に据えられていたものであろう。地輪としてはやや小ぶりのものもので、高さも低いものである。

敷石を撤去した後に精査したが、地下遺構は確認できなかった。

【ST14】(第17図・下左)

この遺構は、大きさ20~30cmほどの礫を集めたものである。幅50cmほどの範囲に配置されている。墓としてよいかは疑問が残るが、一応調査者に従い、墓としておく。礫の除去後に精査したが、地下の遺構等は検出できなかった。

【ST15】(第17図・下右)

この遺構もST16と似たもので、大きさ30cmほどの礫を中心に小礫を配したもので、径60cmほどの範囲に礫を配している。下に地下遺構は確認できなかった。

【ST16】(第18図・上)

この遺構は、Ⅱ期のものである。礫を楕円状に集めたものである。やや盛り上がった場所の上部にこれらの礫は置かれている。範囲は長軸1m、短軸50cmほどに広がる。礫は小型のものが多い。

礫の除去後、精査を行ったが、下部に掘り込み等は確認できなかった。

【ST19】(第18図・下)

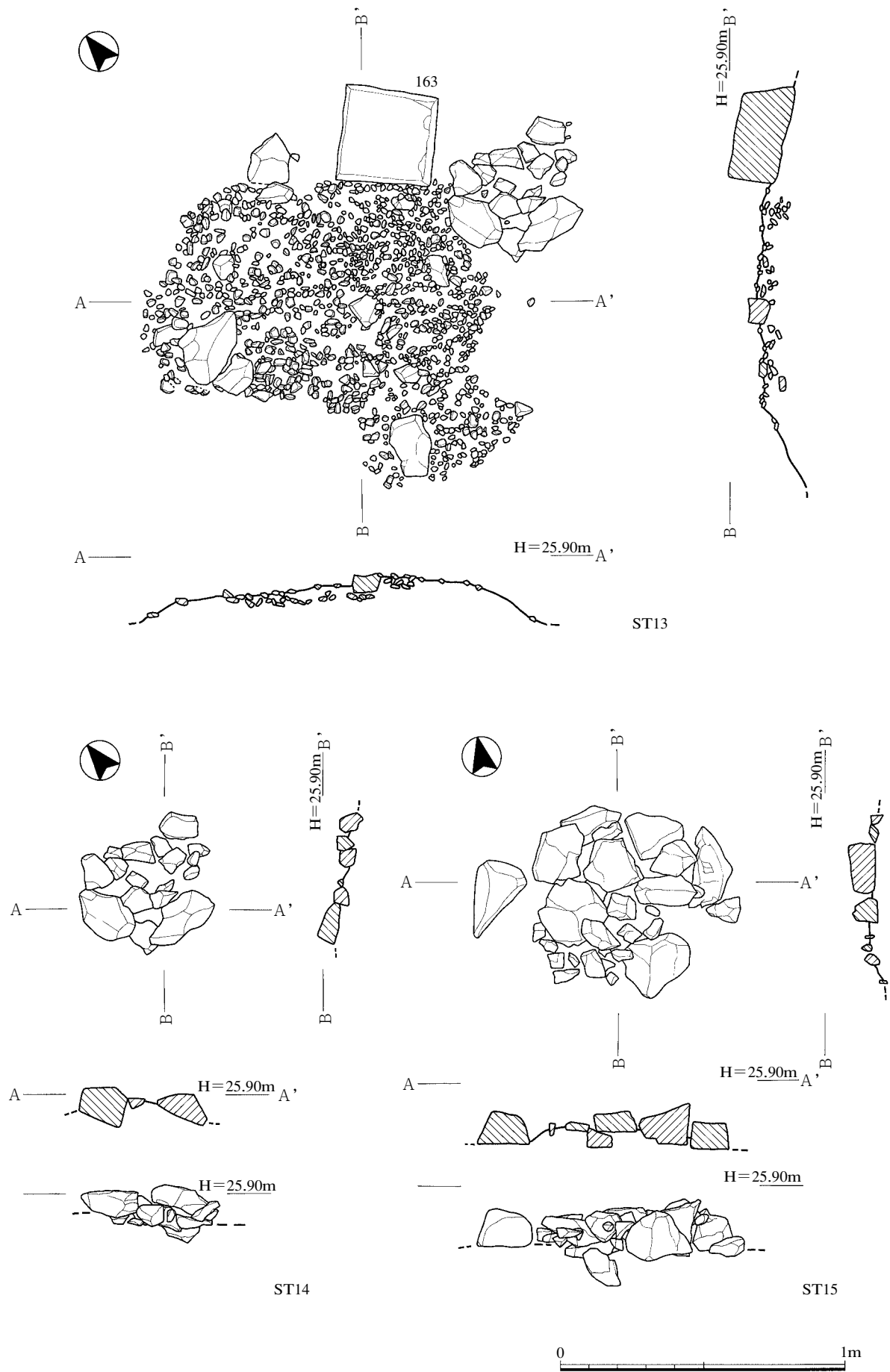
この遺構はⅡ期の遺構である。遺構としては、長さ50cmほどの石を中心にそれよりやや小さい礫が4点ほど置かれている。区画石の一部と考えられている。ただ、墓とする根拠は薄い、他の遺構との組合せが考えられる。配石墓の残欠である可能性もある。

この遺構の西側の若干高い層位状に当初、逆修板碑ではないかとみていた板石が出土している。これに碑文などはなかったので、最終的には板碑ではないと結論づけている。ただ、このような場所に一つだけ他にみない石が置かれているは不自然なので、何らかの目的で持ってきていた可能性がある。

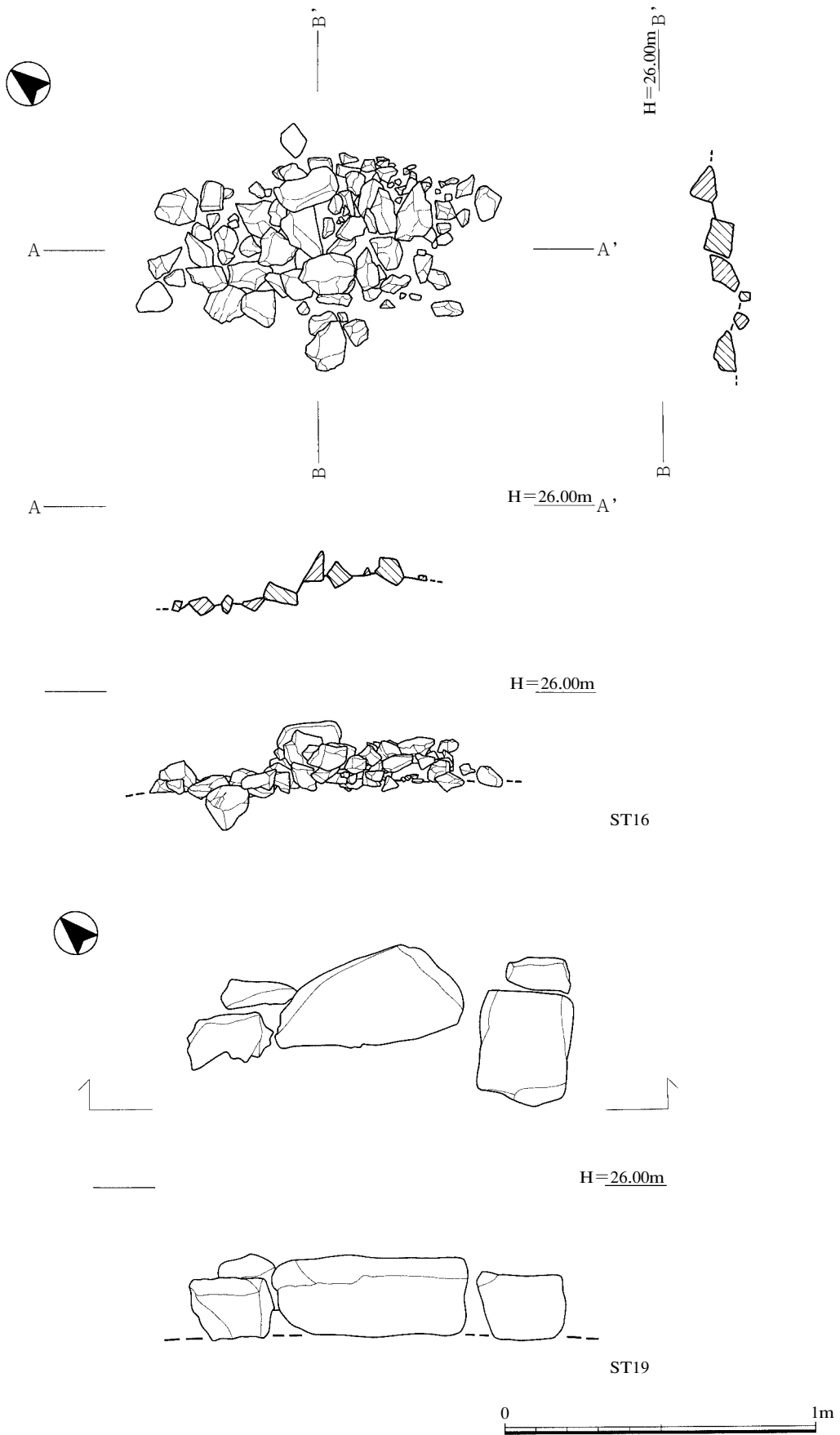
【ST09】(第19図・上)

この遺構もⅡ期のものである。大型の扁平な石を数個寄せており、これらの石を配して基礎とした上に石塔が置かれていた可能性がある。すぐそばの一角に地輪55(SG145)が置かれる。40cm×40cm×高さ25cmを測る。上部に方形の小孔が穿たれている。埋納孔であろう。

この配石遺構と地輪が一体のものであるかは不明であるが、五輪塔の形態は、Ⅱ期のものである。地下遺構は確認していない。



第17図 I-①区ST13・ST14・ST15実測図 S=1/20



第18図 I-①区ST16・ST19実測図 S=1/20

【ST11】(第19図・下)

ST11としたのは、小礫の集中したものである。墓坑は確認していない。その北東側に地輪2基が置かれている。西側の1基地輪161(SG106)は、30cm×30cm×20cmを測る。もう1基地輪159(SG124)は、25cm×25cm×15cmを測るものである。こちらは先のもよりやや小型である。小礫の集中域と、2つの地輪との関係は不明である。出土レベルをよくみると、礫群がやや低く、159が、ちょうどその上に接するようである。

【ST12】(第20図上)

Ⅱ期の遺構で、板状の石を置いたもので、一部に敷石らしき小礫を下に挟んでみ水平になるように配置したもののようである。このことから上に墓石を置いていた可能性がある。地下遺構は確認できなかった。

同じくⅡ期の遺構として、地輪164(SG148)と地輪162(SG132)との2基並べたものがある。この2基とST13が関係するかどうかは不明である。

【五輪塔群】(第20図下)

ST19の北側の崖面下には横にほぼ一列に並ぶ5基地輪とその前に置かれた1基地輪がある。並びはやや不整列にはなっているが、意図的に配置している。並んだ地輪は西から155(SG104)・154(SG103)・153(SG102)・157(SG109)・158(SG110)である。158の上には水輪133(SG213)がのっている。やや破損した状態であるが、地輪と水輪は一応組み合わせるものとする。さらに、その前面の一基地輪156(SG107)が置かれている。これらの地輪はほぼ同様の形態で、平面観が30cm四方で、高さが20cmほどと低く小型の部類に入る。そして、これらの地輪を配置した面が墓地としてのこの遺構では最終的な段階になるようである。この上面で出土する石塔類はほとんど移動した状態で出土していることがそれを示している。

【SX02】(第21図・上)

I-①区の西側に位置する。SX03の北側で検出した。不明遺構としたが、墓の可能性はある。60cm～70cmの範囲で石が集中した遺構である。やや大型の礫を中心にその周りに石を配置している。石を除去した後、精査したが、その下では掘り込み等の遺構を確認できなかった。

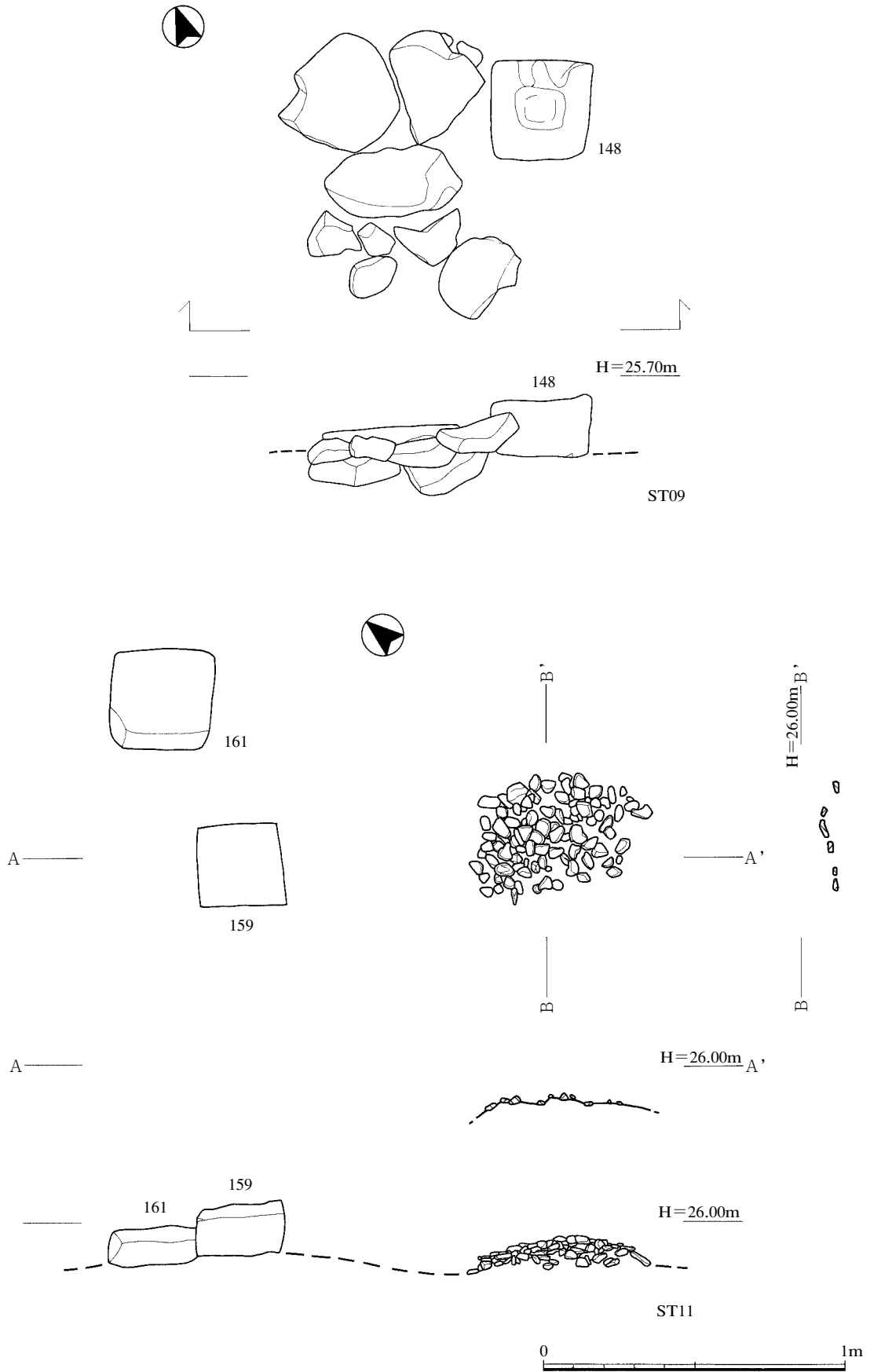
【SX03】(第21図・下)

I-①区の西側に位置する。この遺構も、SX02と類似する。遺構としては、中心部に40cmほどの礫を配し、その周りに小礫を配置している。墓の可能性はあるが、地下遺構は確認しなかった。

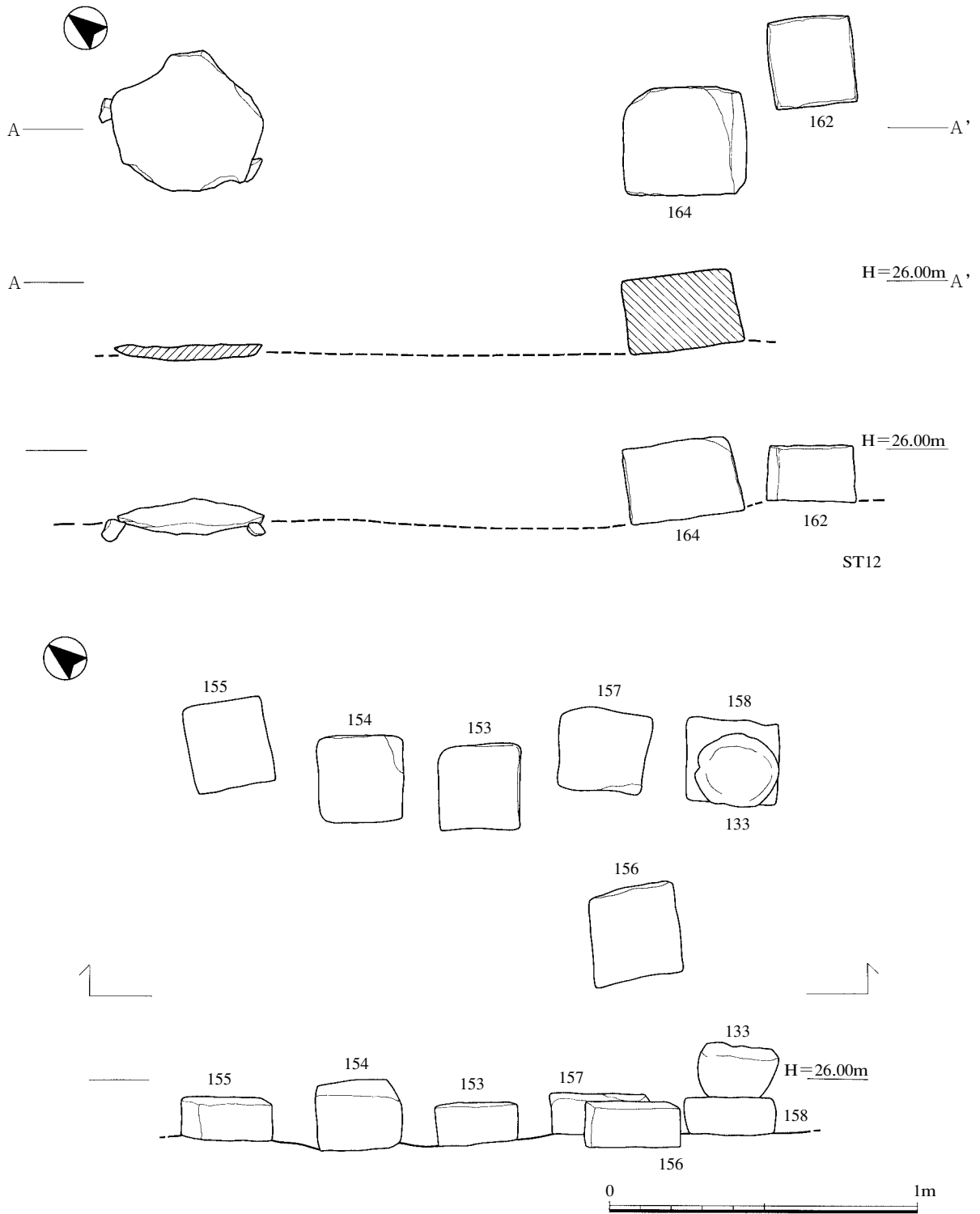
【SR01】(第22図)(一字一石経塚・礫石経塚)

I-①区の墓群の集中する一帯から西側に離れた位置で検出した遺構である。いわゆる一字一石経塚とか、礫石経塚とか呼ばれる。必ずしも一石に一文字とは限らないので、礫石経塚を名称とした方がよいかもしれない。

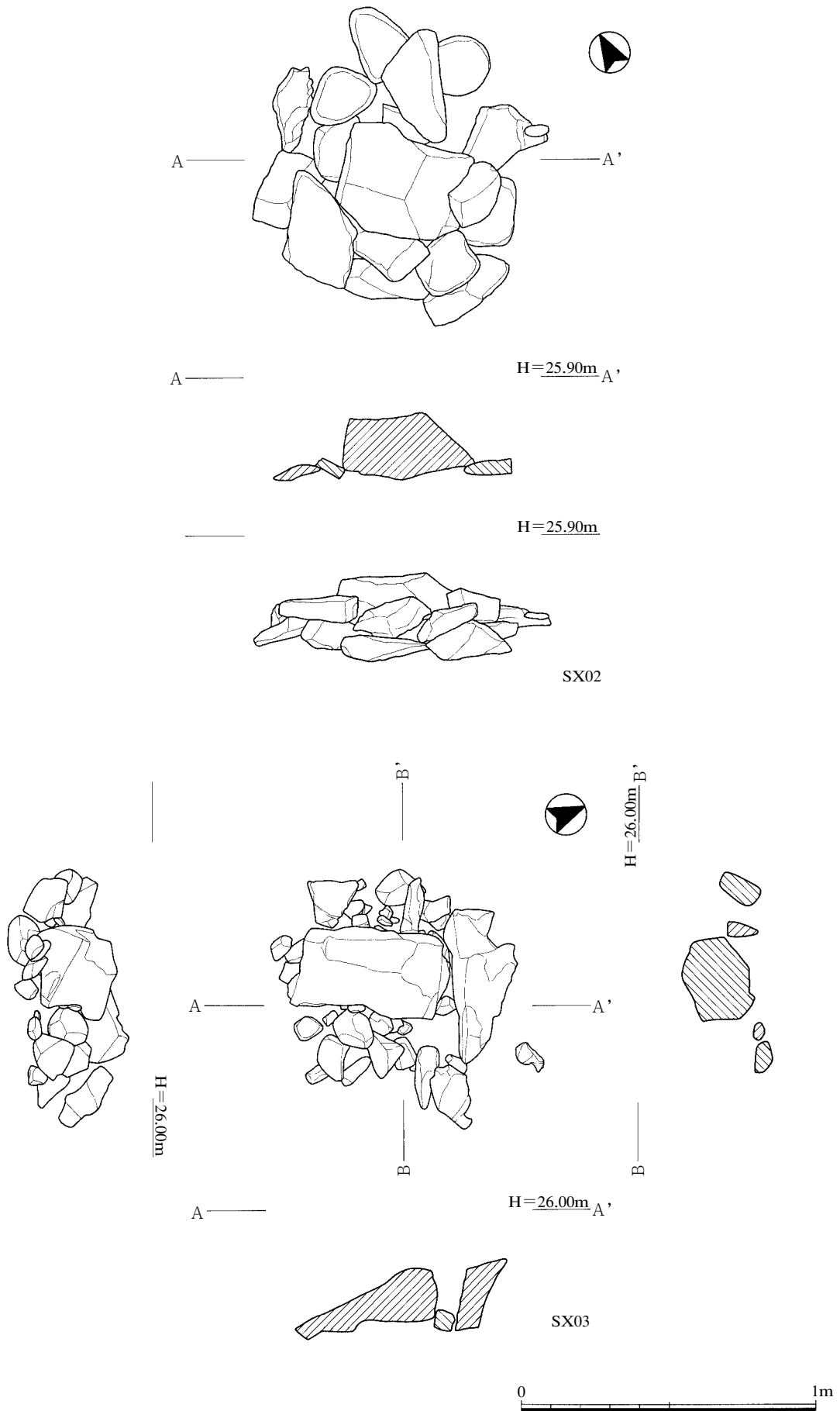
調査時には、当初礫の集中を礫石経という認識はなく、単なる集石遺構と考えていたが、他の調査員から礫石経塚の可能性を指摘され、注意深く調査を進めていたところ、「阿」の字が書かれた石に気づいた。さらに詳細な観察の結果、他にも文字の書かれたものがあることを確認した。そこで改めて「一字一石経塚(礫石経塚)」であることを再確認した。



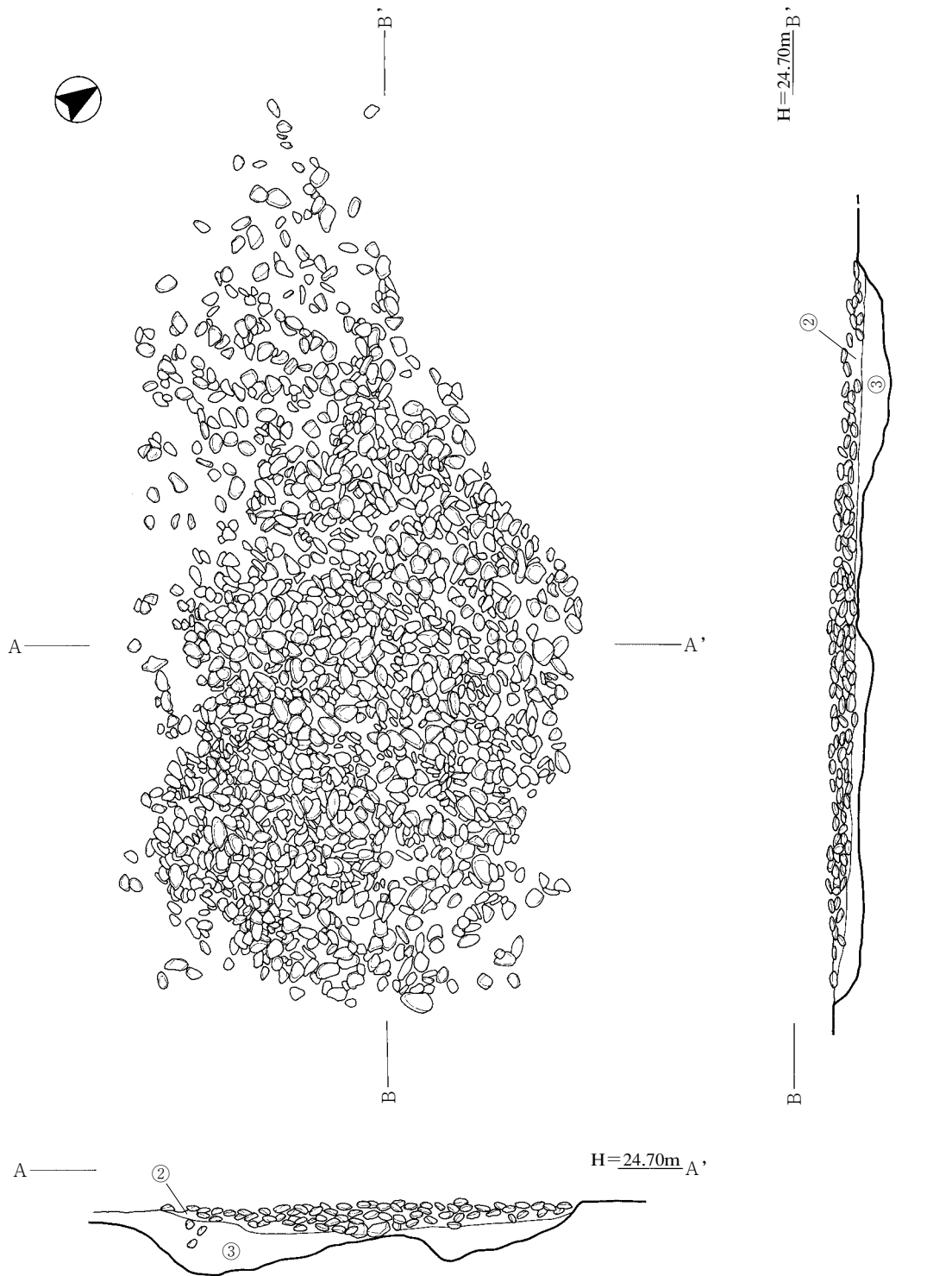
第19図 I-①区ST09・ST11実測図 S=1/20



第20図 I-①区ST12五輪塔群実測図 S=1/20

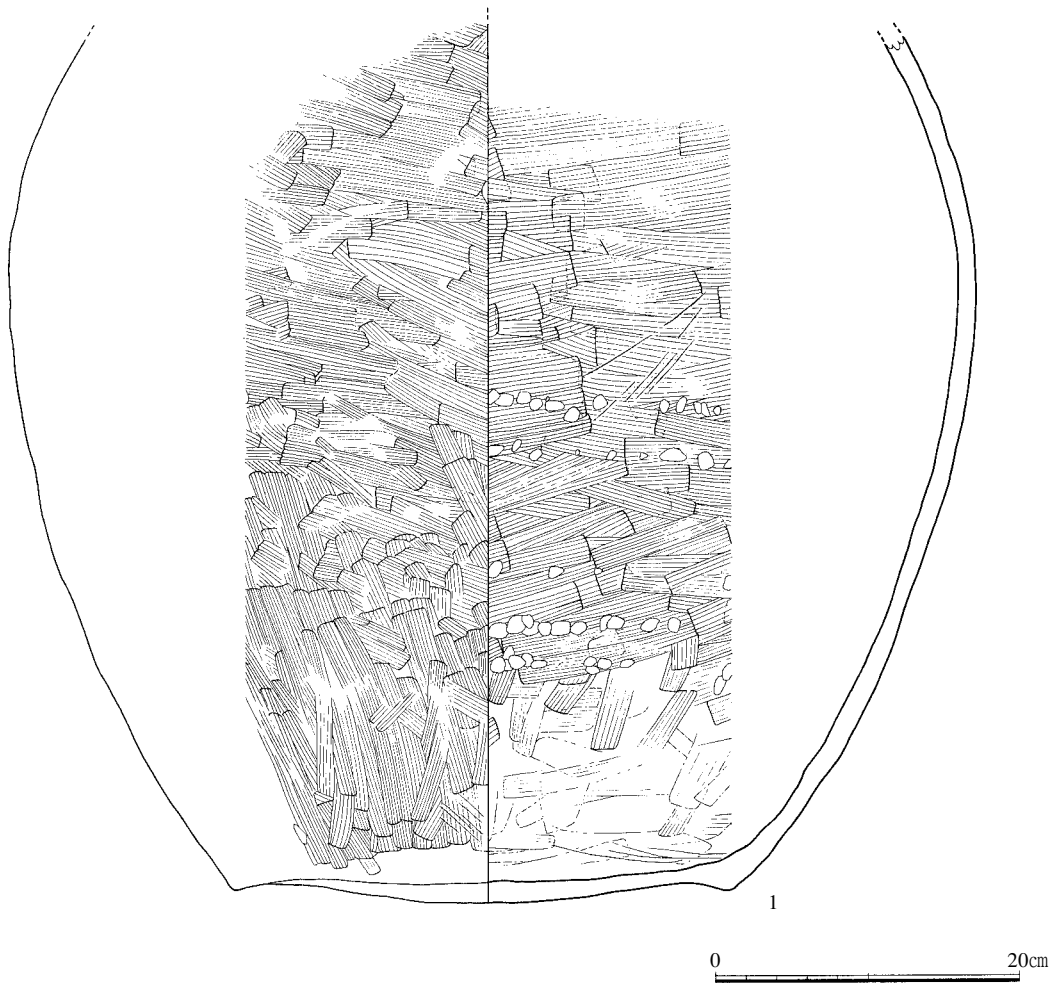
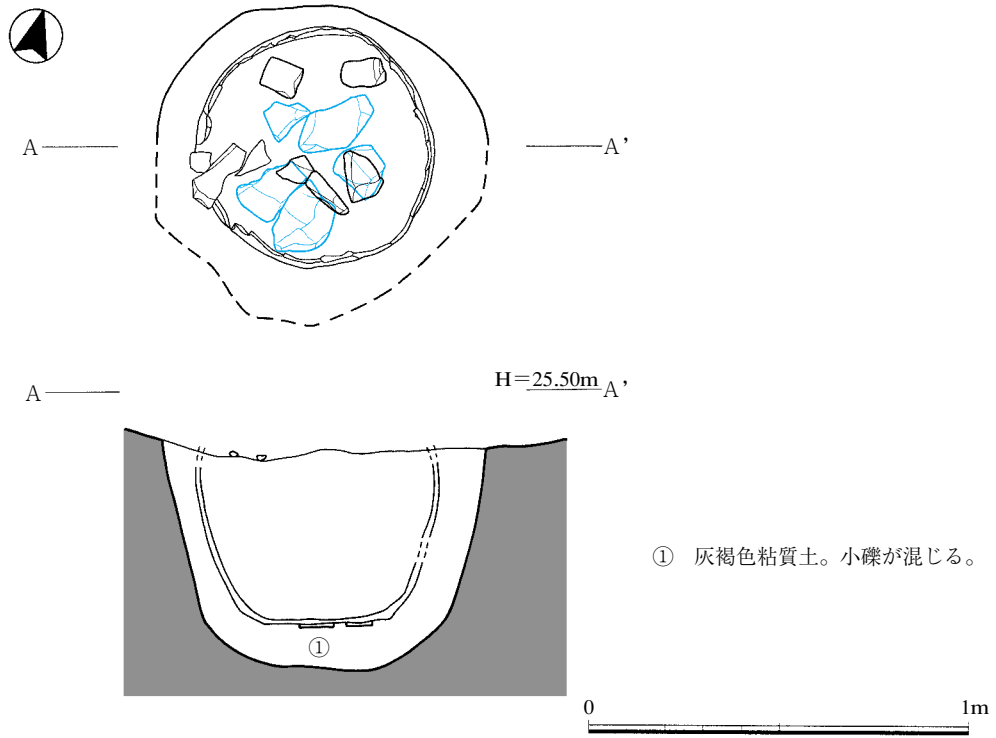


第21図 I-①区SX02・SX03実測図 S=1/20



- ② 黄灰色粘質土。さらさらして、あまりしまらない。
- ③ 暗褐色粘質土。黄褐色粘質土ブロック粒を含む。土師器片も混じる。

第22図 I-①区SR01実測図 S=1/20



第23図 I-①区SK01実測図 S=1/20・1/5

埋土の状況は以下のとおりである。①層は灰褐色礫層で、礫石が主で余り締まっていない。②層は黄褐色礫層で、やはり礫が主であり締まっていない。③層は、暗褐色粘質土層で、黄褐色粘質土粒や土師器片を含む。②層と③層は浅い掘り込みの埋土である。

その後詳細調査で確認した結果、及び整理作業の過程で文字を確認したのは12点である。ただ、その他の石にも文字、もしくは文字らしきものがある。ただ、墨痕が非常にかすれていたり、墨か汚れがよく分からなかったりして、その総数はよくつかめない。

遺構としては、地下に掘り込みらしきものを確認したが、はっきりとこの遺構に伴うものとはいえない。長軸方向で北西—南東に長く延びる。長さは長軸3m、短軸で1.3mほどである。

石は大きさが4cm前後で厚み2cm前後のものが多い。形はさほどまで統一性はない。出土したものをほぼ持ち帰り文字の有無を確認した。その後、一点ごとに法量を計測した。総数量は5,100個ほどであった。

【SK01】(第23図)

I-①区の石塔群が集中する部分から離れて単独で検出した遺構である。表土剥ぎ後、確認した。Ⅱ期の遺構と考える。

大型の甕を中心に埋設したもので、口縁付近は存在しない。甕自体は、常滑焼と考えられる。出土層位から考えると、Ⅱ期になりそうである。

甕の内部には土が詰まっていたが、人骨などは確認できなかったが、礫がいくつか入っていた。

甕の下には、石片が5個ほど敷かれている。これは甕のすわりをよくするための根石として利用しているようである。したがって、長期に使用していた可能性がある。使用方法ははっきりしないが、水甕としての利用ではないだろうか。ただ、墓所の一角と考えれば、墓であってもかまわない。

甕を埋めた掘り方は、径86cmほどである。確認面からの深さは、60cmほどを測る。

甕は、外器面には、器面調整として下部近くまで横方向の丁寧なハケ目が残る。下位には縦方向のハケ目がやはり丁寧に施される。内器面には、外器面よりも幅広の3cmほどのハケ目が下部近くまで横方向で施される。下部地区も横方向のハケ目はナデ消され、縦方向のハケ目も残る。底部は平底であるが、焼きによるひずみが大きく水平とはなっていない。ナデ調整が施されているが、丁寧に仕上げられている。

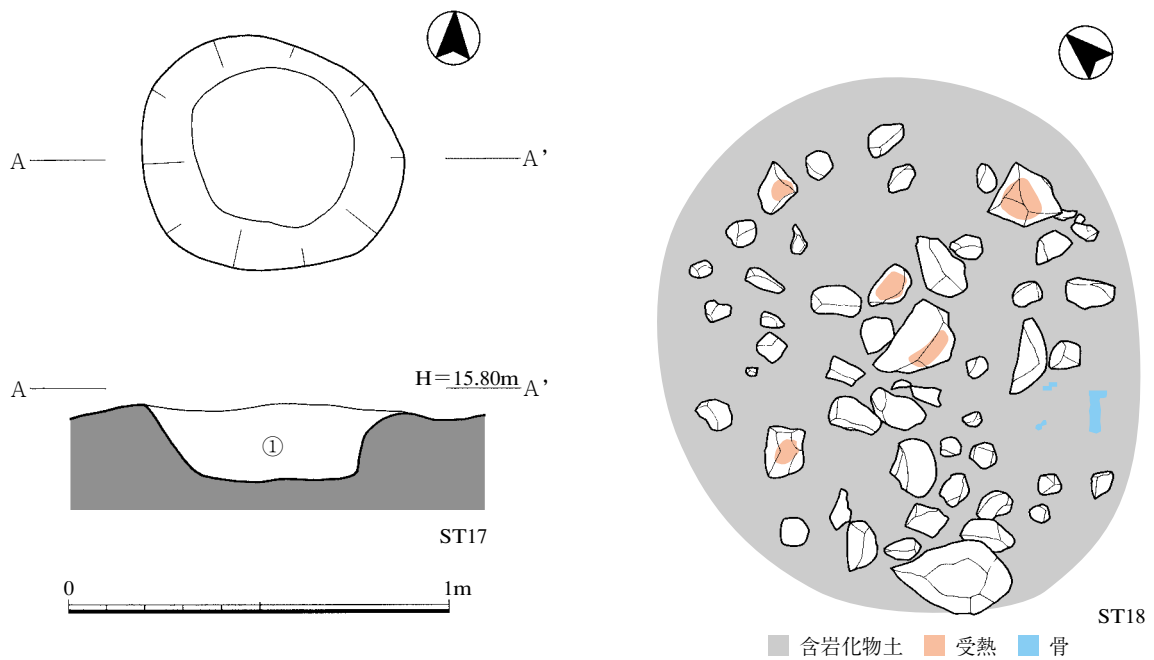
【ST17】(第24図・左)

I-②区から検出した遺構である。上部施設を確認しなかった。土坑から確認した。径50cmほどのやや不正形ながら円形のものである。埋土は1層のみで、黒褐色を呈する粘質土である。この中には大量の炭化物が混じり、小指の爪ほどの火葬骨片が上層に入る。また、2cm～5cmほど礫も混じっていた。遺構の深さは確認面から25cmを測る。

副葬品などがなく、周辺の礫石に焼けた跡があること、骨片が上層に主に含まれることから、ここで火葬が行われ、その後埋葬されたのではないかと調査者は推定している。ただ、調査区内にこの墓のような墓所がI-①区にもあり、上部構造を失っただけの墓所と考えとよいと考える。このため墓の中に含めた。

【ST18】(第24図・右)

I-②区から検出した遺構である。埋土中に焼土と骨片が入っていたため、墓と一応考えた。焼土は径1.4mほどの範囲に広がるが、その付近はわずかに掘り込みが認められるものの明確に掘りこんだものではない。表面の炭化物を多量に含む層は薄く堆積している。また、焼けた礫片も多く含まれている。火葬骨片はその炭化物層の中に入り、明らかに四肢骨の一部と判別できるものもあった。この遺構は火葬を行った跡の可能



- ST17 ① 黒褐色粘土質。大量の炭が混じる。火葬骨片が出土。2～5cmの礫が混じる。
 ST18 炭化物を多量に含む土が薄く堆積する。火葬骨片、火を受けた石がある。

第24図 I-②区ST17・ST18実測図 S=1/20

性も考えられる。調査者もそのように判断している。ただ、I-①区の中に地輪の下部に火葬骨が含まれている例もあるので、この上に地輪を乗せていけば墓所としても成り立つとして、ここでは墓の範疇に入れた。墓としては、火葬骨の量がもう少し多くてもよいと思われる。これについては、I-①区の水輪の中には火葬骨を納める穴を設けているものがあり、ここで火葬した後、五輪塔に納めたため、骨が余り残っていないのかもしれない。特に掘りこみがほとんどないことを考えると、火葬場とした方がよいかもしれない。

【SK02】(第25図上左)

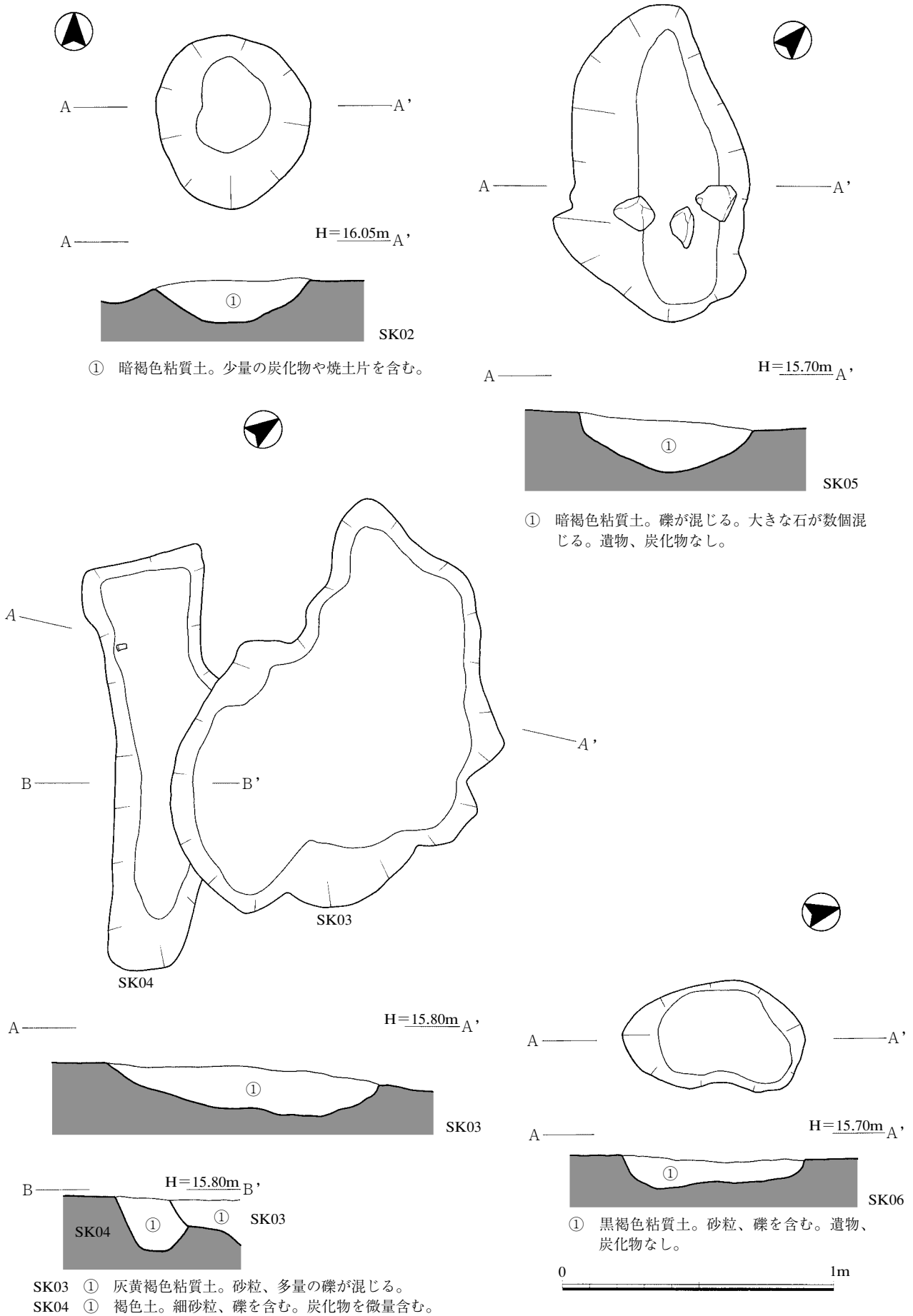
I-②区から検出した遺構である。平面形は楕円形を呈し、長径50cm、短径30cm、確認面からの深さ20cmを測る土坑である。埋土からは特に人骨などは確認しなかったので土坑としておく。埋土は1層で、暗褐色の粘質土で、少量の炭化物や焼土を含む。

遺構の底部付近から、須恵器の壺の口縁部が1点出土している。古代のものであろう。

【SK03・SK04】(第25図下左)

この2つの遺構はI-②区から検出した遺構である。SK03は、SK04と切りあい関係にある。

SK03の平面形は不整形で長く伸びる土坑である。長軸は1.3m、短軸は50cm、確認面からの深さは最深部で25cmを測る。断面形は逆蒲鉾型を呈する。埋土は1層で、灰黄褐色を呈する、砂粒混じりの粘質土である。この中には多量の礫が混じる。このような埋土の状況は、水流が落ち込みに流れ込んで渦を巻いた結果、重い礫が沈み、上に砂粒が残ったことを示しているようである。そうであれば、この遺構としたSK03は人為的な「遺構」ではなく、自然災害などで水流がこの付近で渦巻いた結果、できあがったものかもしれない。ただ、礫の大きさは実測図に書き込まれていないので、想像の域をでない。調査者はこれを遺構と認識しているので、ここではそれに従う。



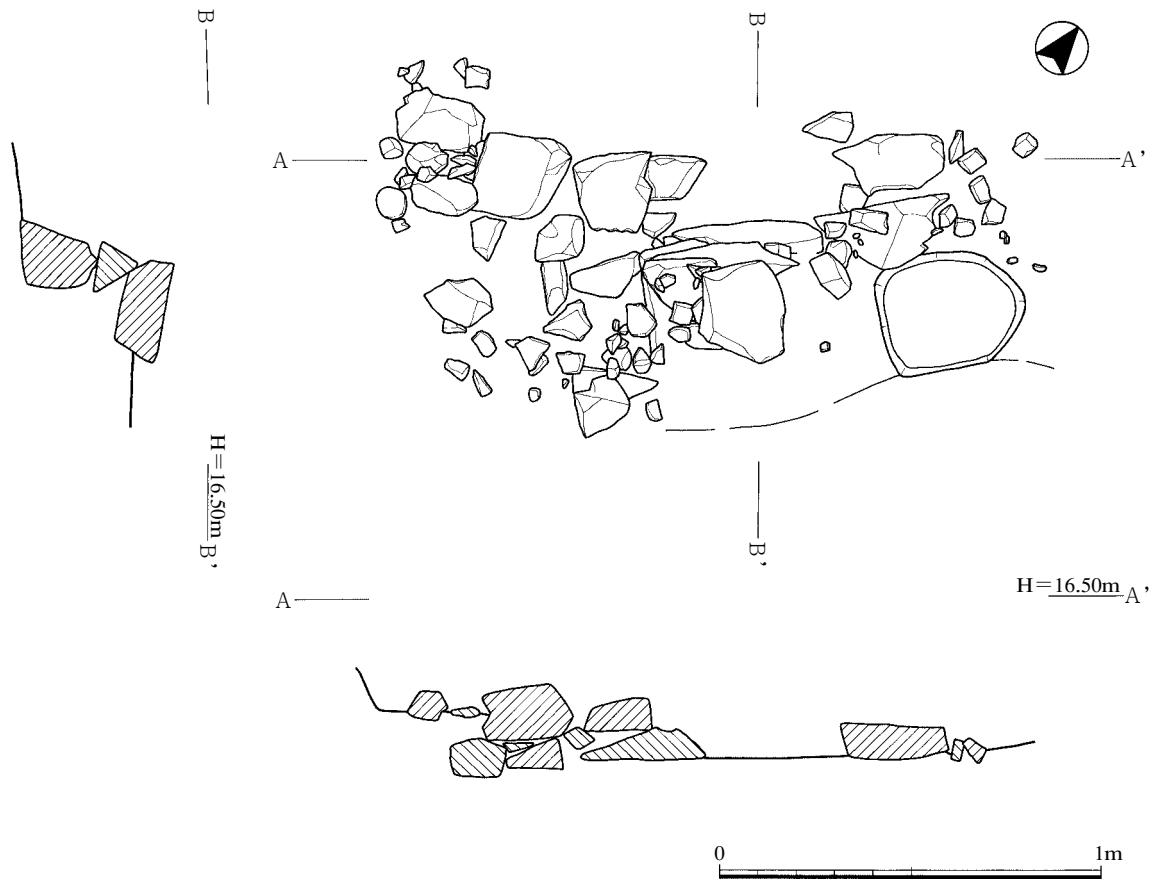
① 暗褐色粘質土。少量の炭化物や焼土片を含む。

① 暗褐色粘質土。礫が混じる。大きな石が数個混じる。遺物、炭化物なし。

SK03 ① 灰黄褐色粘質土。砂粒、多量の礫が混じる。
 SK04 ① 褐色土。細砂粒、礫を含む。炭化物を微量含む。

① 黒褐色粘質土。砂粒、礫を含む。遺物、炭化物なし。

第25図 I-②区SK02～SK06実測図 S=1/20



第26図 I-②区SW01実測図 S=1/20

SK03によって切られた遺構がSK04である。この遺構本来の形状は明確ではないが、現況で確認できるのは細長い溝状を呈するものであるが、確認した長さが1.5mほどしかなく、幅は30~40cmほどを測り、深さは確認面から30cmを測る。細長い土坑になる。埋土は、細砂粒を含む褐色土である。炭化物も微量に含んでいる。出土遺物は不明である。

【SK05】（第25図上右）

I-②区から検出した遺構である。かなり不正形な土坑である。一番長い部分で1.5m、横幅の広いところで80cmほどである。深さは確認面から25cmほどを測る。断面形はレンズ状になっている。この遺構の埋土中位から、獣骨(馬の歯)が出土している。埋土は暗褐色の粘質土で、礫混じりで大きな石も入る。

【SK06】（第25図下右）

I-②区から検出した遺構である。やや不正形ながら楕円形に近い土坑である。長軸で60cm、短軸で35cm、確認面からの深さ15cmほどを測る。この遺構の性格は不明である。埋土は、黒褐色を呈する粘質土で、砂粒と多くの礫を含む。遺物や炭化物は含まない。

【SW01】(第26図)

I-②から検出したもので、明確に石を配しているとはいえない部分もあるが、一応石積遺構としている。面をとって並べているような痕跡がある。断面で見るとその部分は少なくとも2段～3段の石積みがなされている。ただ、上部はほとんど破壊されているようなので、場合によっては、石組遺構の一部で、墓であった可能性はある。石積みの後方と考えられる部分には控え積みはないので、果たしてどの程度の規模があるのか不明である。一部には浅い土坑を確認しているが、その性格は不明である。

【SX04】(沼状遺構)(第8図)

I期にはあったと考えたもので、SX(不明遺構)とした。本来地形的に低い場所で、そこが流入する水が溜まりやすいものとなったのであろう。もしくは、湧水点であった可能性もある。これが明確に人工物とは考えられないが、人の活動に利用された可能性が強く遺構の一つと判断した。

出土する遺物が古代のものが多い点を考慮すると、五輪塔等を主体とする墓所になる前の古代に水を集中させて利用する何らかの遺構であったと考えられ、当時の水場となっていたのではなかろうか。

埋土をみると、植物が炭化したものが入り、層はa、b層の2層に分けられる。b層は湿地状の範囲である。調査時に十分な見通しのないまま掘り下げたため、輪郭が明確でない部分もある。墓所の造成時には沼沢化し、湿地性の植物が生えていた状況と考えられる。自然の流路は、b層に対して流れ込むように入っている。

このすぐ前にSX02・SX03が存在し、ここが墓地の境界をなすものであった可能性が強い。

【SX01】(第8図)

この遺構は、I-2期のもので五輪塔170の西側に列状に礫が並ぶものである。遺構は、石組み墓の残骸の可能性もある。地輪170との並びは異なる。ただ、ST05、ST06とほぼ平行に並ぶので、これらとの遺構関係は確認できていない。明確に石組墓の残欠とはいえないが、可能性としてよいかもしれない。

第4節 遺物

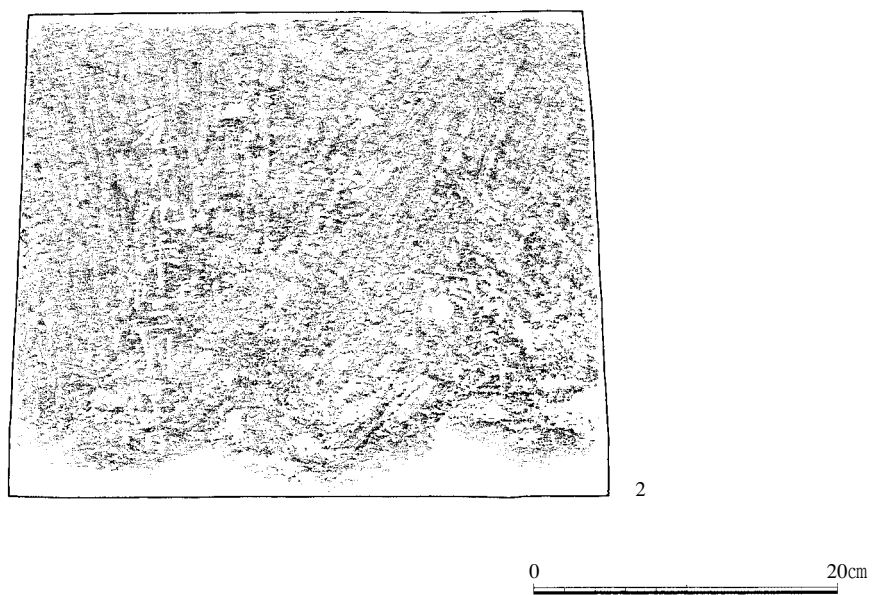
(1) 石塔類(第28図～第36図)

石塔については、まとめて詳述するのでここでは簡単に触れる。

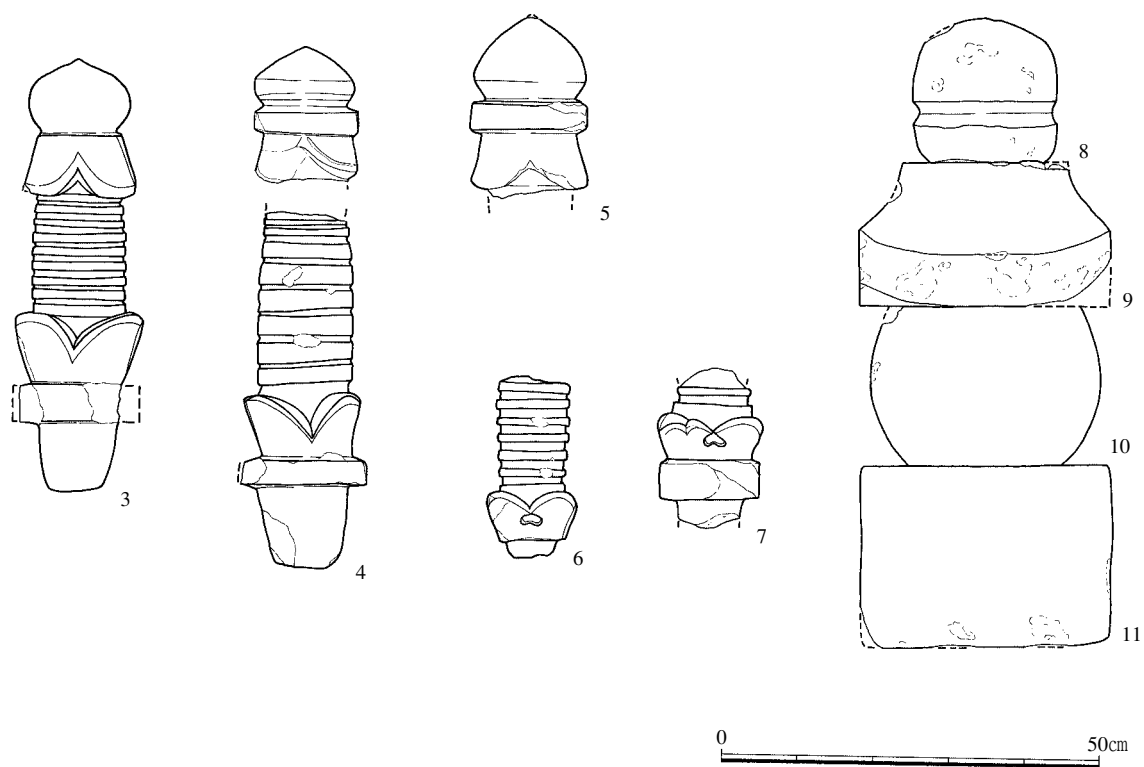
ここにまとめている石塔類は、I-①区から出土したものがほとんどである。出土数は先に記したが、180個余りで、ほとんど原型をとどめないものもあり、全体ではさらに多い可能性がある。ほとんどの石材は凝灰岩で、産地はこの遺跡の近郊とは考えられるが、産地同定までは行っていないので不明である。

また、石組遺構や基礎石などに使用されている石材は、崖面の岩盤である前期白亜紀(日奈久・八代・戸川層)層を形成する泥岩中に一部砂岩が塊として入り、それが崖面の削りだしや自然崩落によってもたらせるものを使用しているようである。

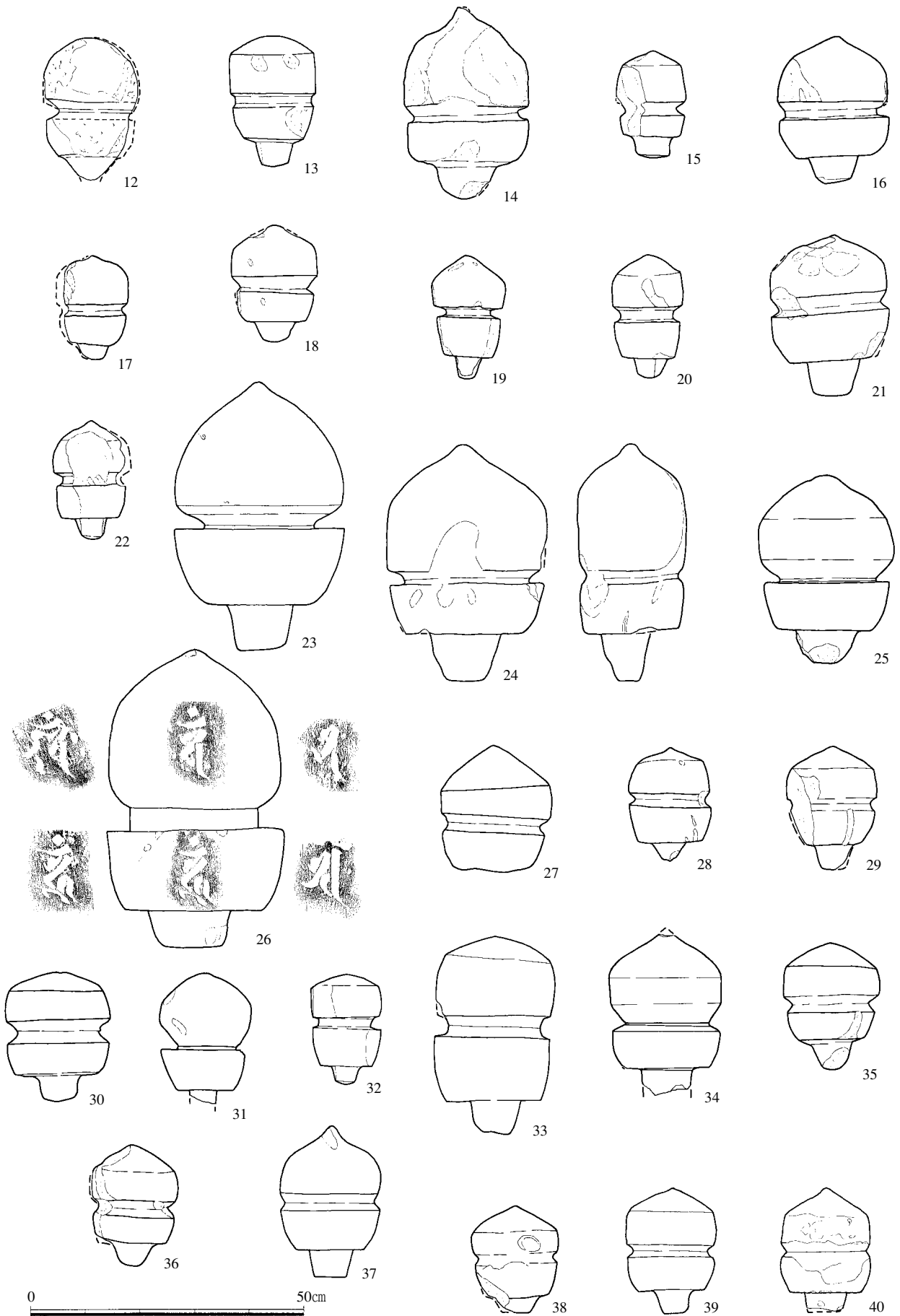
紀年銘のあった地輪2(SG193)は、第27図にある。方位に沿って出土した。銘は西側の面に彫られていた。底面に比して上面がやや狭くなり、台形状になっている。器面調整は非常に丁寧で、拓本でノミ痕も確認できる。先に遺構で述べたように「元中九年壬申二月十五日」の紀年銘は面の左端に彫りこまれていた。また、右下側に「昌壽」の文字が彫られていた。これは人名と考えられ、この石塔を造営した人物名か、この人物のためにこの塔が作られたかのどちらかであろう。この地輪自体は原位置を保っていないものの、出土状況から時期的にはI期のものとされるので、この墓地群の上限に近いものと考えてよいであろう。



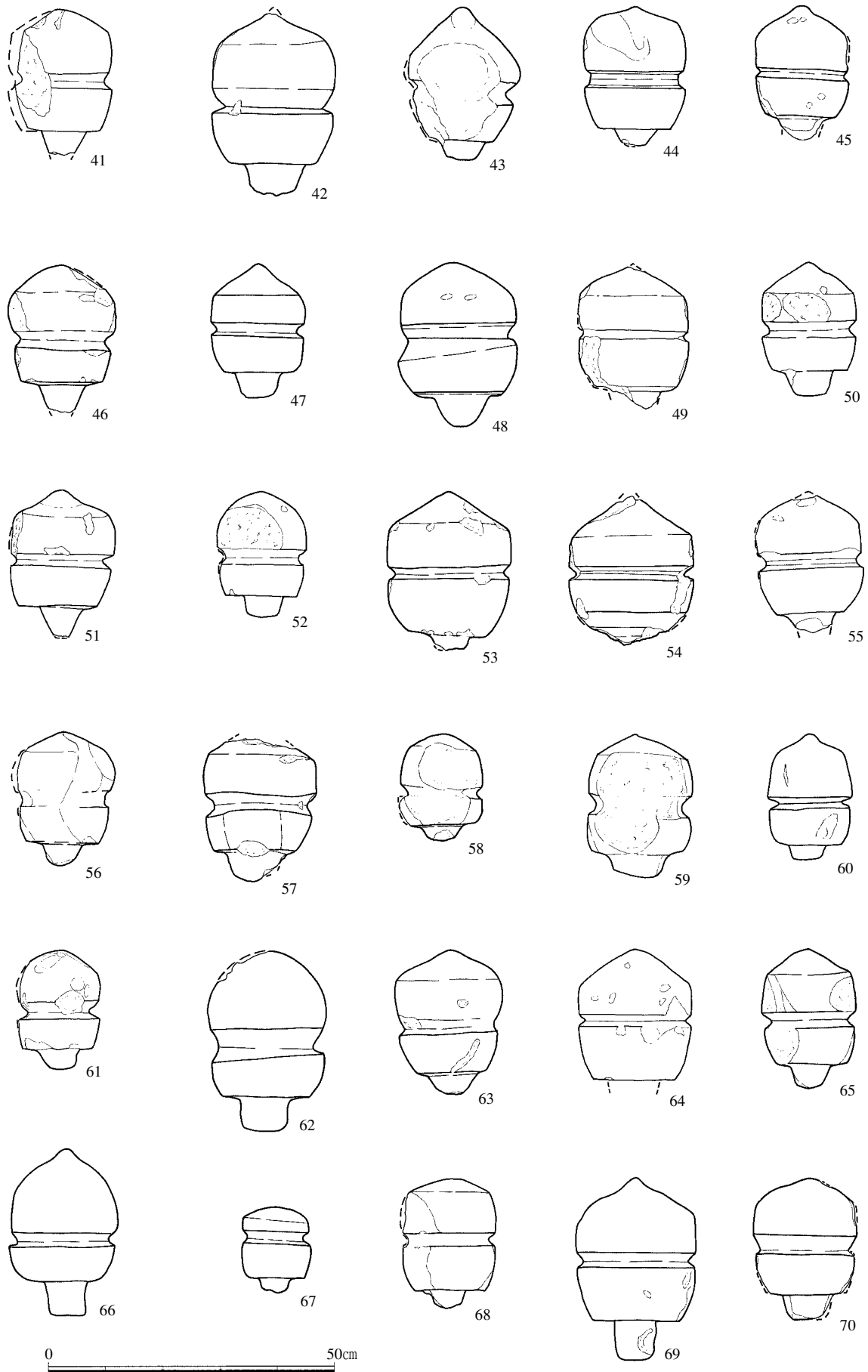
第27図 I区紀年銘地輪実測図 S=1/5



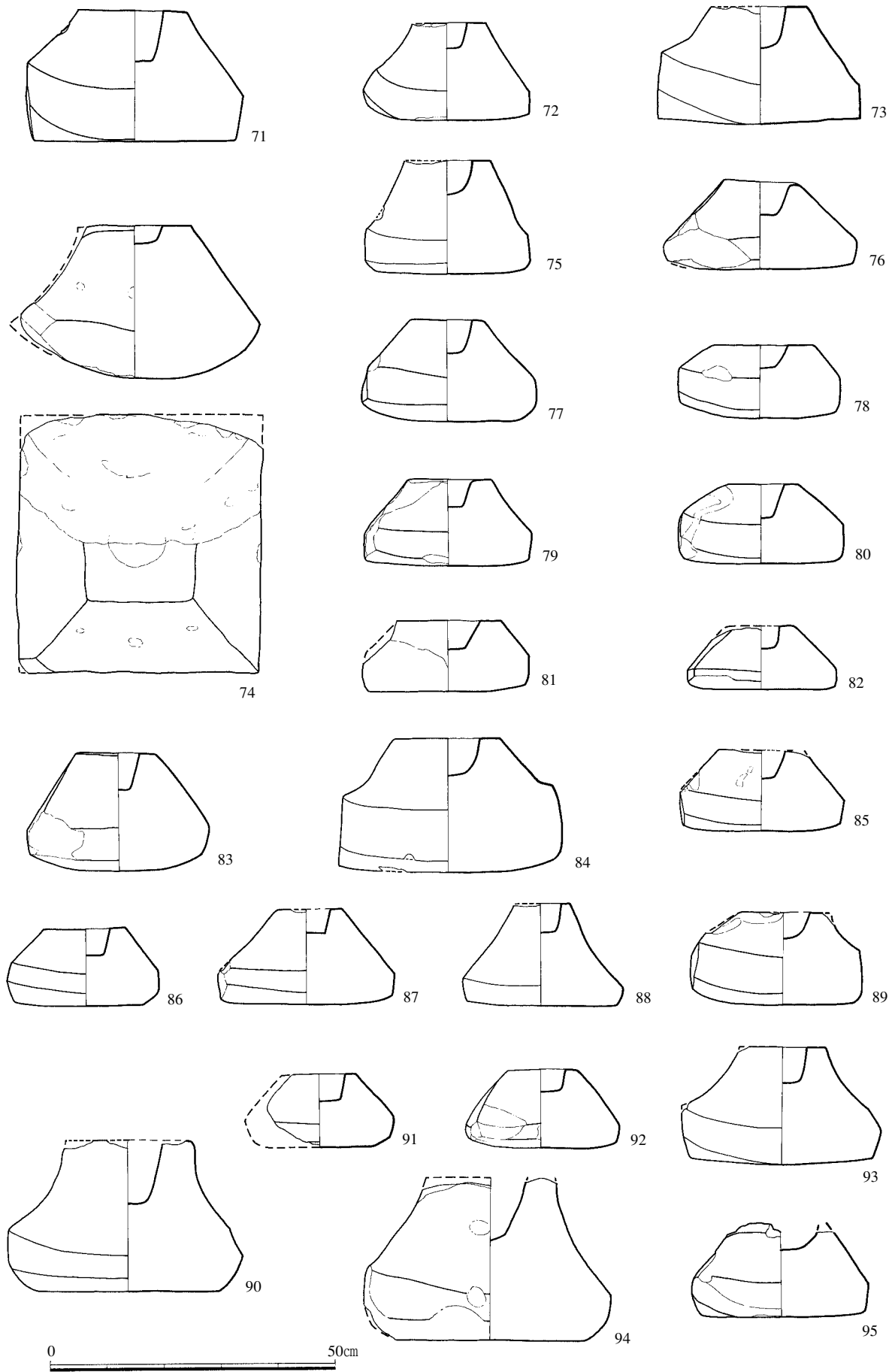
第28図 I区相輪・五輪塔実測図 S=1/10



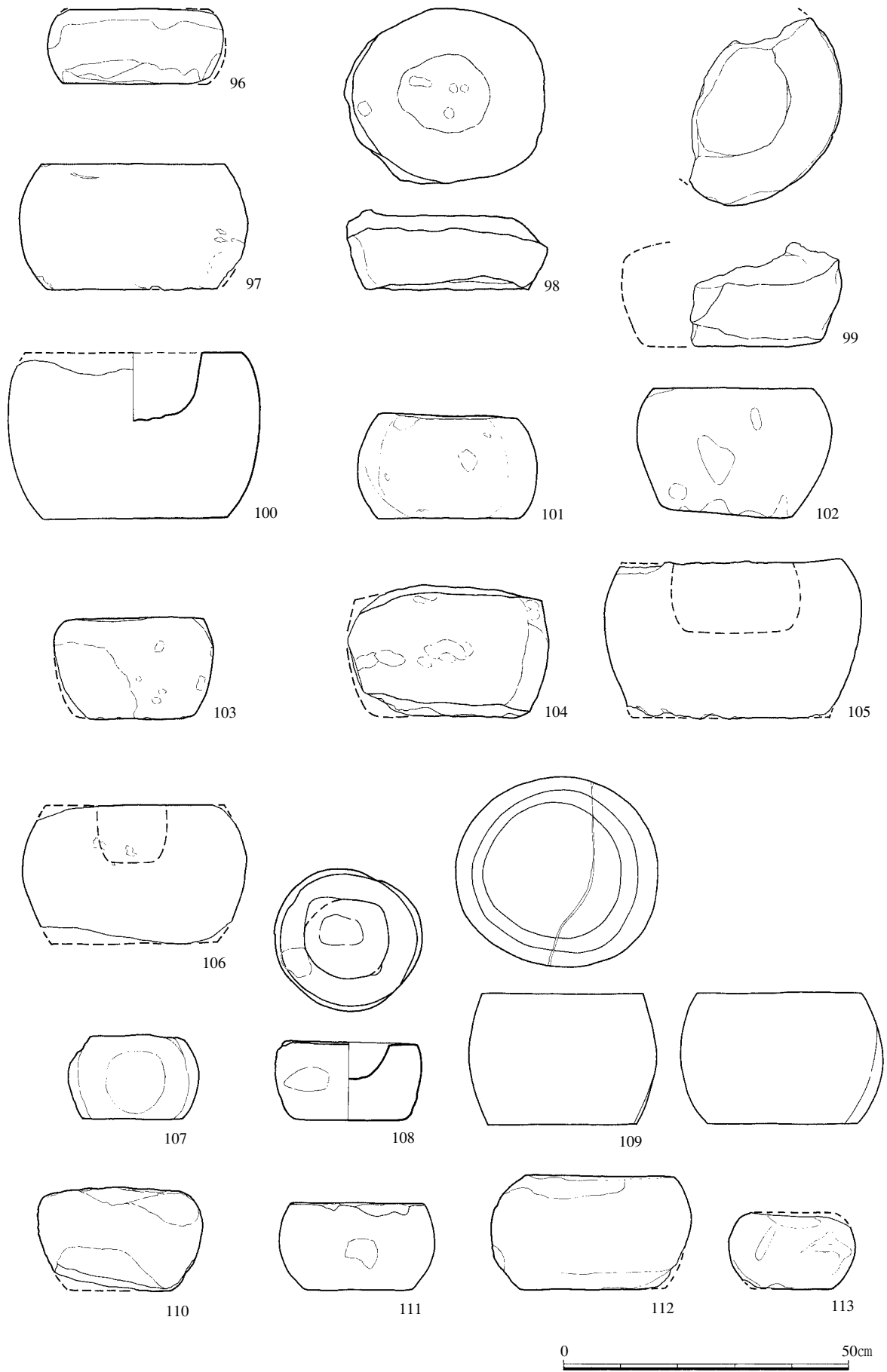
第29図 I区空風輪実測図(1) S=1/10



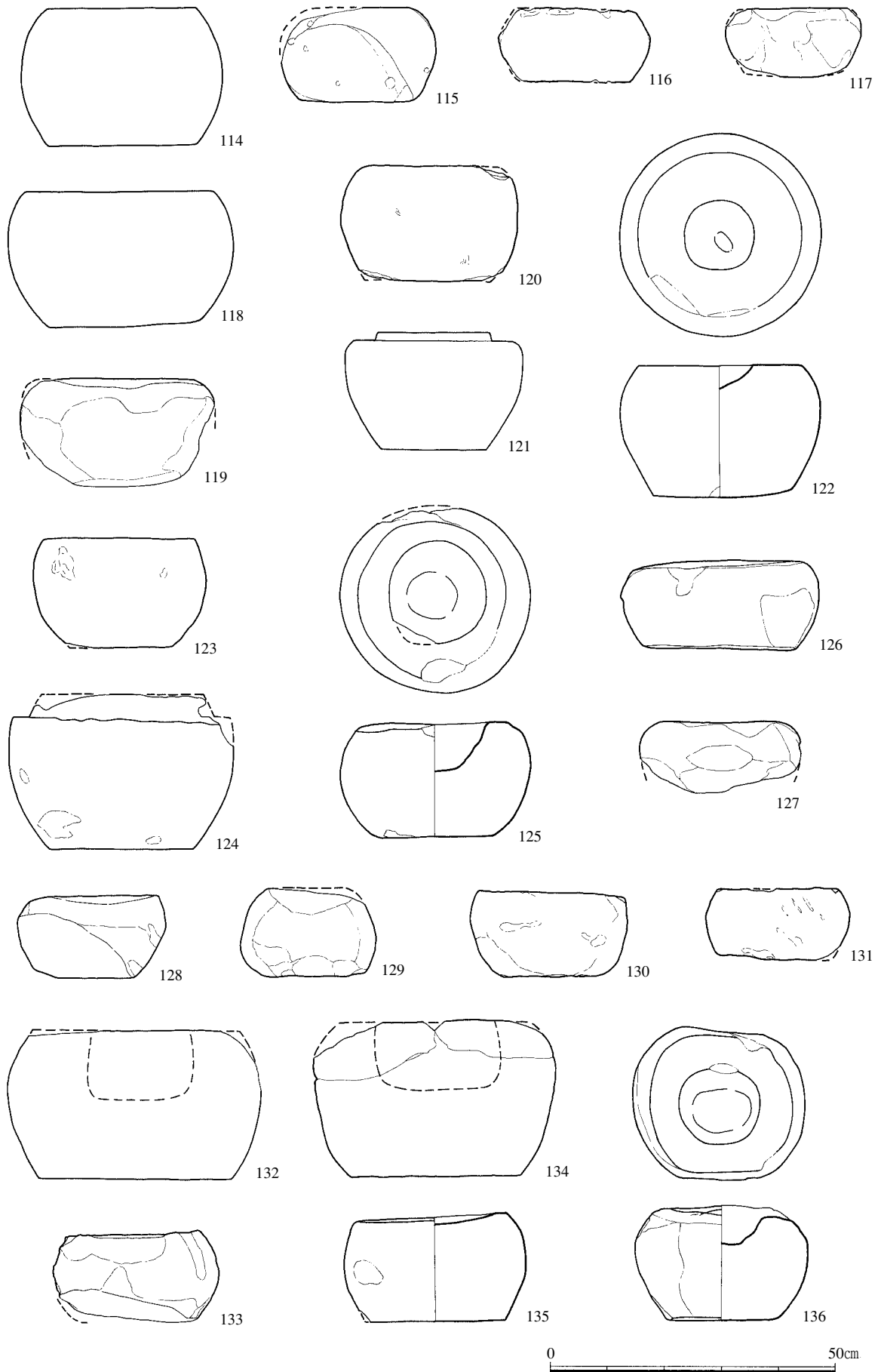
第30図 I区空風輪実測図(2) S=1/10



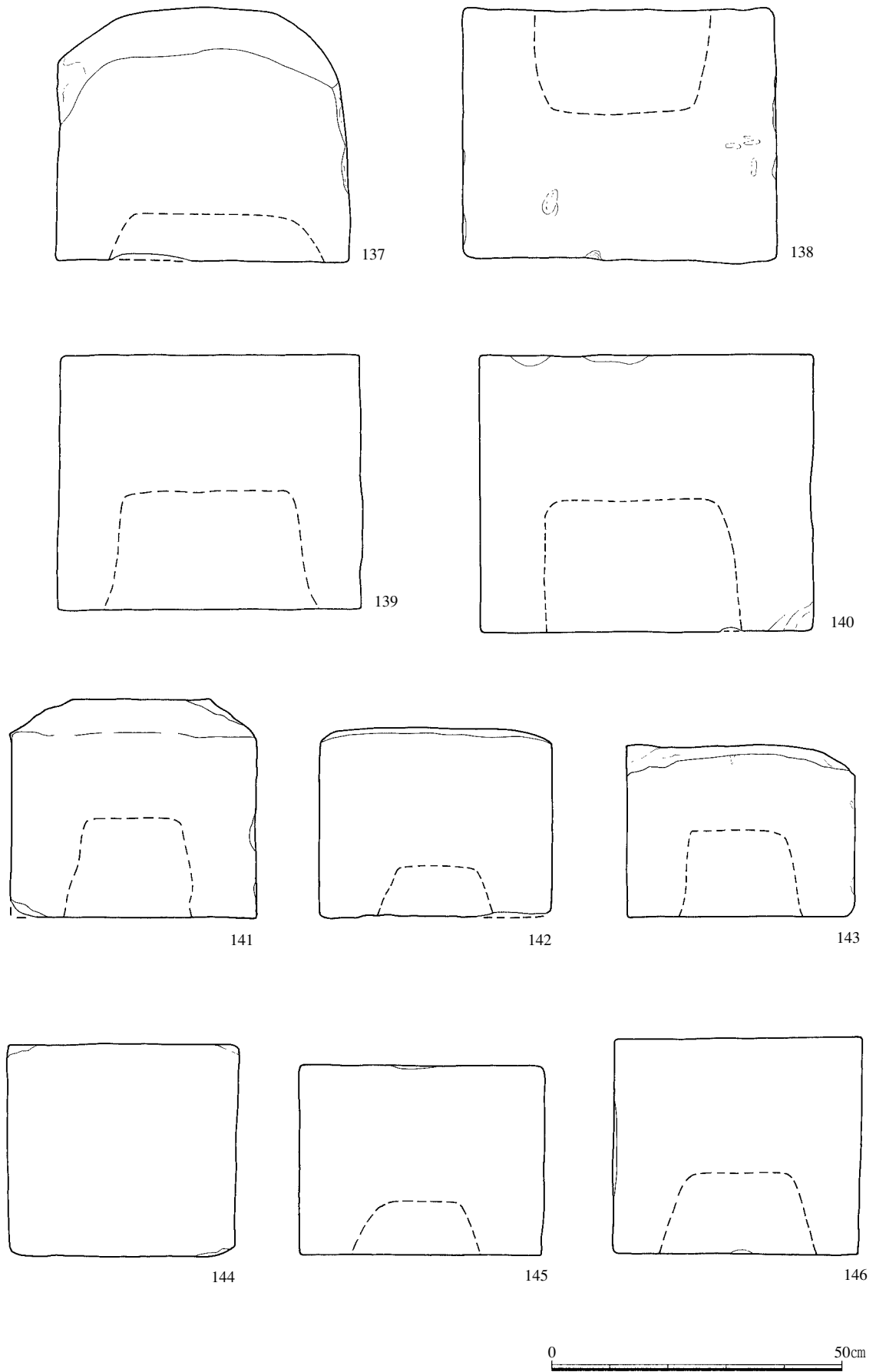
第31図 I区火輪実測図 S=1/10



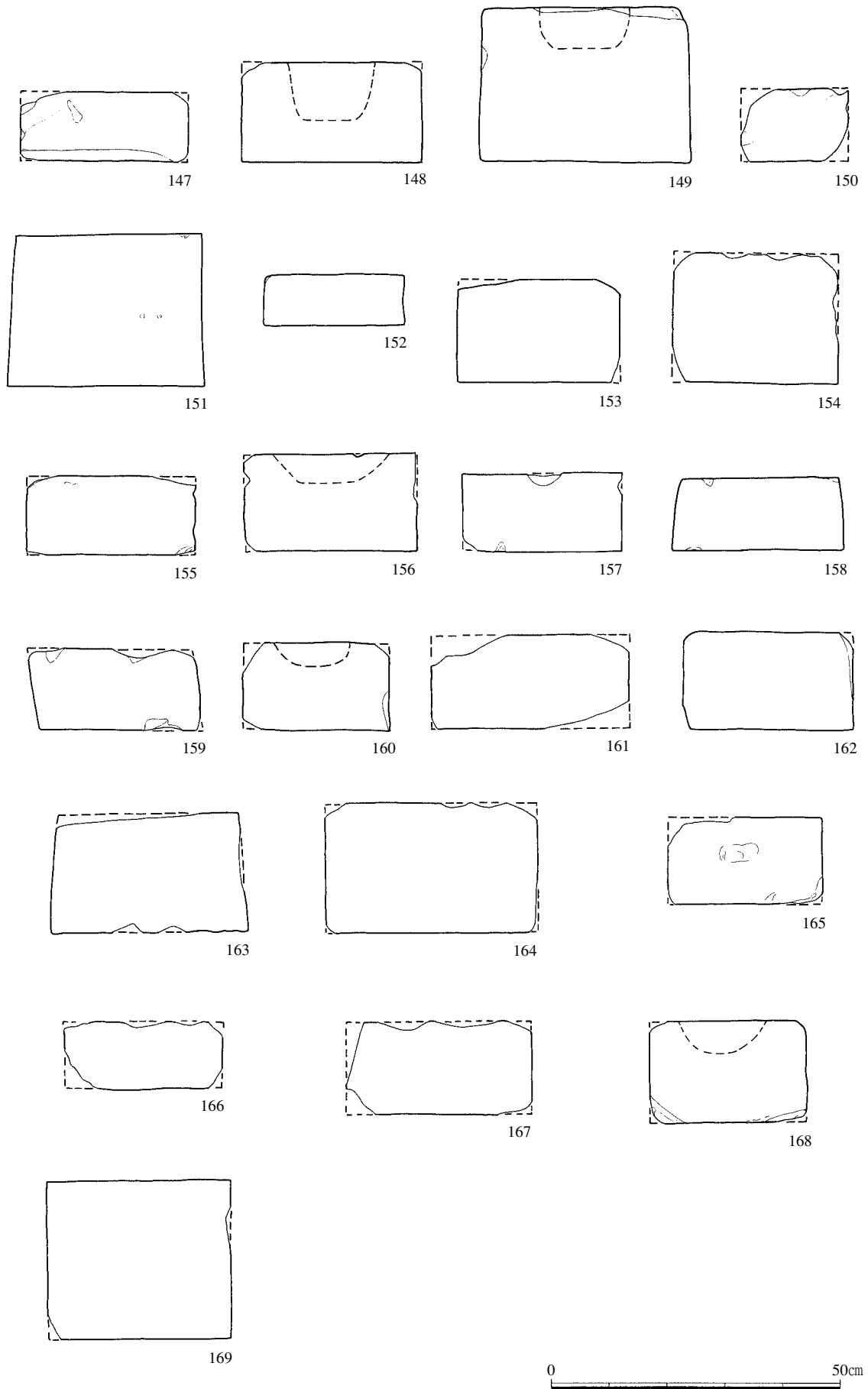
第32図 I区水輪実測図(1) S=1/10



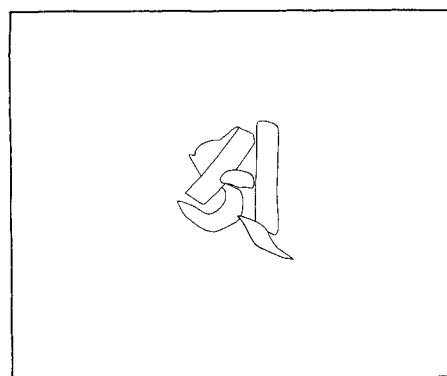
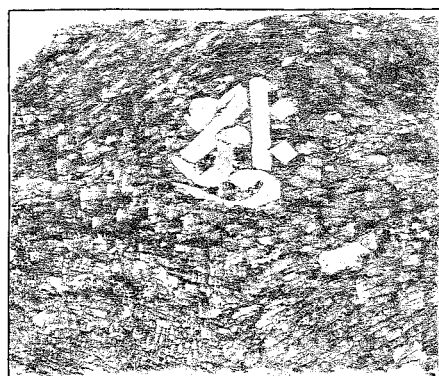
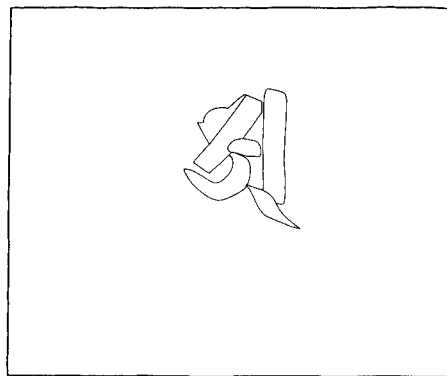
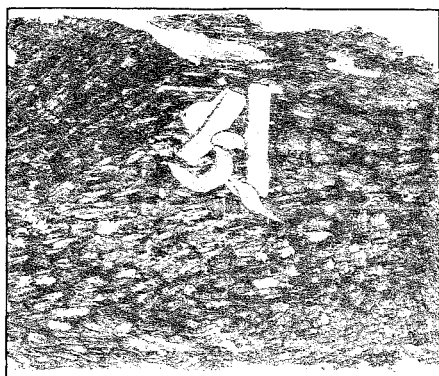
第33図 I区水輪実測図(2) S=1/10



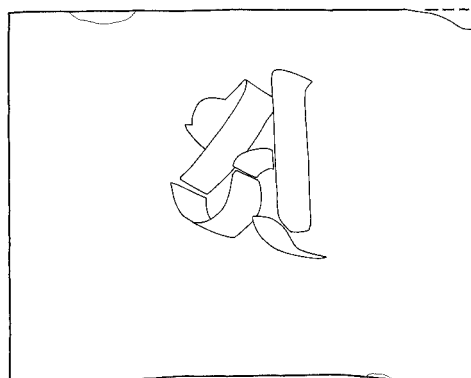
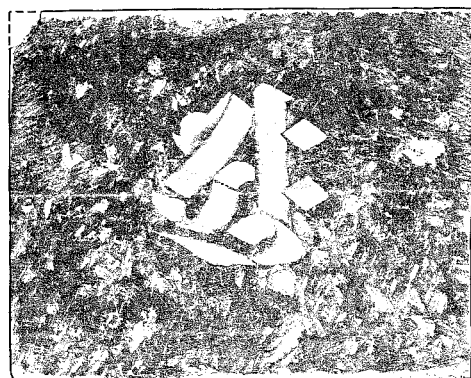
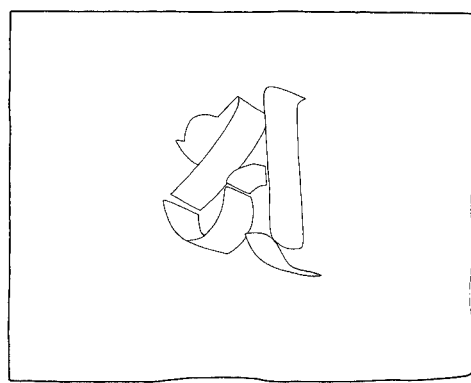
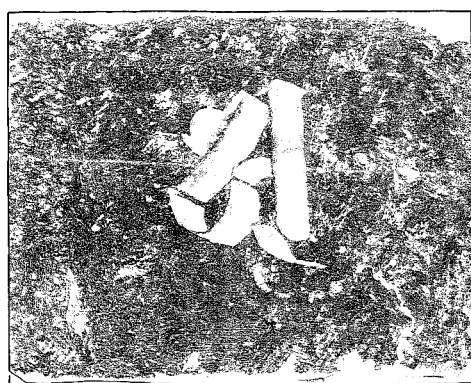
第34図 I区地輪実測図(1) S=1/10



第35図 I区地輪実測図(2) S=1/10



170



171



第36図 I区地輪実測図(3) S=1/10

第28図には相輪を5点図化している。出土石造物の中に、宝篋印塔類と確認できるものがなく、水輪としたものの中に、宝塔の塔身があるので、宝塔等の相輪ではないかと考えられる。形式は大きくは2種類に分けられる。小型品と大型品とである。これは同時に請花にハート形を思わせる小さな装飾のあるものとなのものである。前者が6・7で、後者が3～5である。さらに6・7は露盤の有無で異なる。また、3・4は九輪の幅が異なる。

空風輪8、火輪9、水輪10、地輪11は、調査時には倒壊していたものの、側にまとまった状態で出土したので、積み直して復元にしたものである。全体的にはちょうどよく並び、当時もこの形で立っていたと考えられる。この五輪塔の出土位置は、墓地群の中心的な部分から離れた位置にある。出土層もⅢ層よりも上位になるため、Ⅱ期の造営とした。建てた高さは84cmを測る。石塔としては中型のものである。石塔の組合せとしてはよいが、石材がやや異なるようである。ある時期に建て直したものである可能性もある。

第29図・第30図は空風輪のほとんどをまとめたものである。26は大型のもので、造りが丁寧で、空輪と風輪が明確に分かれている。その3面にそれぞれ梵字が彫られている。1面に「ケン」「ウン」、2面に「ナウ」「シャ」、もう一面に「バン」「ウーン」が彫られる。彫り方はしっかりした、いわゆる「薬研彫り」である。これらが日如来真言、大日如來真言、大日法身真言に金剛界五仏を併せて表すもので、この空風輪と地輪171(SG41)が組み合わさるものと考えられる。

第31図は、火輪をまとめたものである。空風輪に比べ確認した量は少ない。大きさや形式が異なっている。空風輪や地輪に梵字を彫ったものがあるが、この中に梵字を彫ったものはなかった。火輪の軒部の反りが時期を示すものと言われる。反りのあるもの、直になるものなどがある。また、先の述べたように相輪が宝塔のものとする、当然この中に宝塔の笠部分もあると考えられるが、明確に違いがわからないのですべて火輪としている。

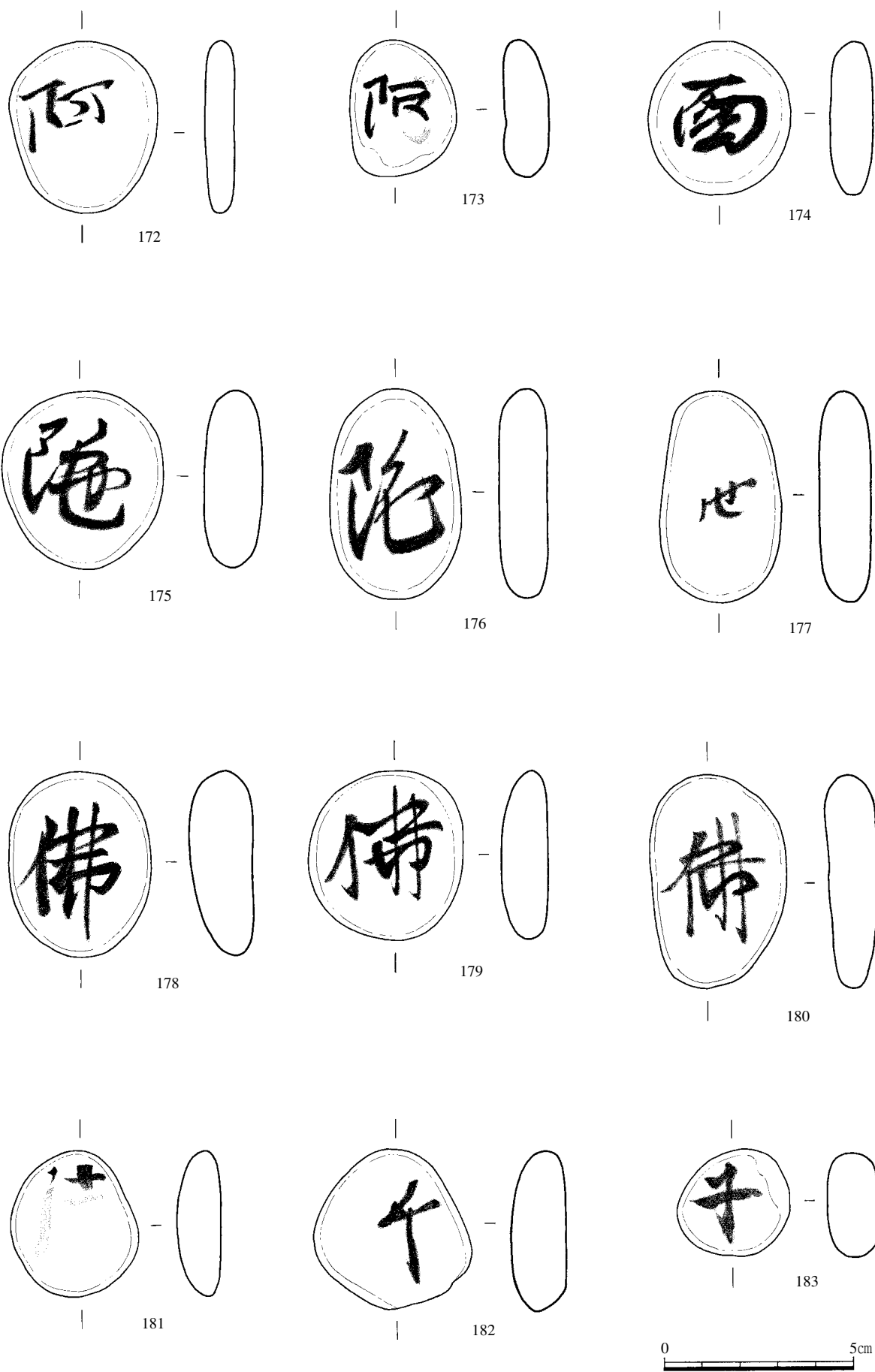
第32図・第33図は水輪をまとめたものである。大きさ・形態はさまざまなものである。特にⅢ層下で確認したものが、古い形態を示し、上部に埋納孔が開けられているものがある。孔の中には火葬人骨が入っていた。100・132がそれである。このうち100には、梵字が4面に彫られている。ただ、文字がはっきりしない。132は地輪145の上に乗った状態で出土した。また、133も地輪158に乗った状態で出土している。このほかに埋納孔が原位置出であれば、人骨が残っていた可能性が大きい。

第34図・第35図・第36図は、地輪をまとめたものである。大型のものは下部に穴を大きく開けているものが多い。逆に上部に小さな穴を開けたものもある。170・171には梵字が掘られていた。薬研彫りによるものである。4面に彫られている。171には3面が同じ「ア」の梵字が、4面のみ「アーク」が彫られていた。これは先に示した空風輪26と組み合わさるものである。170は、171よりも若干文字の大きさが小さいが、書かれている梵字は同じであった。大日如来真言と金剛界五仏であろう。ただ、この2つは先にも記したとおり再配置されたもので原位置を保っていない。このほか、この2つの地輪より一回り大きいものが、137～140である。これらはともに埋納孔を持っており、下から人骨が出土している。Ⅲ層上面にも多くの地輪が座っていたが、Ⅲ層下位のものに比べずいぶん小型化している。中には埋納孔を上部に持つものもある。

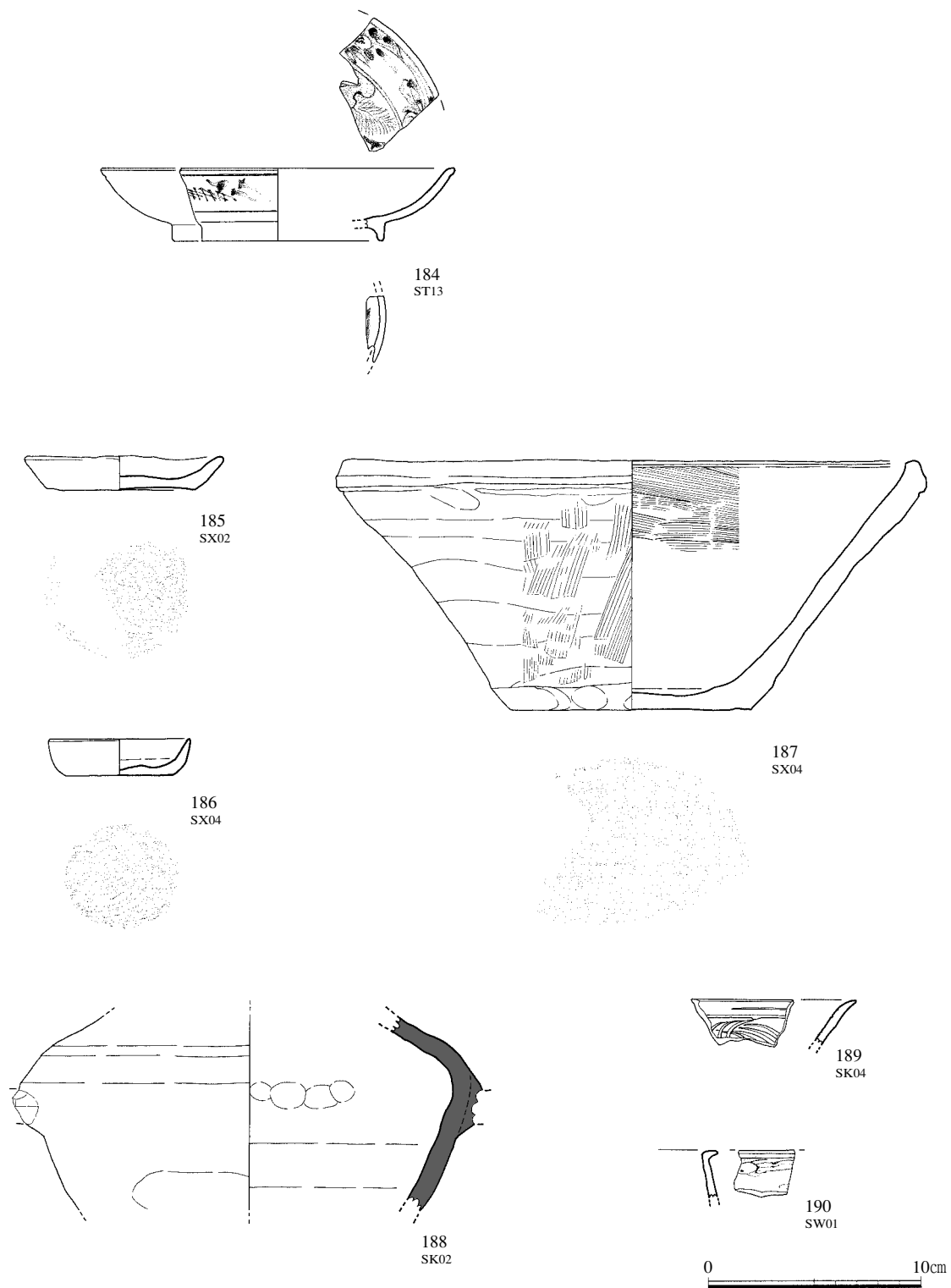
(2) SR01(一字一石経塚・礫石経塚)の経石(第37図)

この遺構から検出した石は、5000個ほどである。このうち文字を確認できたのは、12点である。墨痕らしいものが薄く見えるものが他にもあったが、赤外線カメラなどによる確認を行っていないので、それらはここで取り上げていない。目視できるものを選んで、12点のみをここでは図化した。

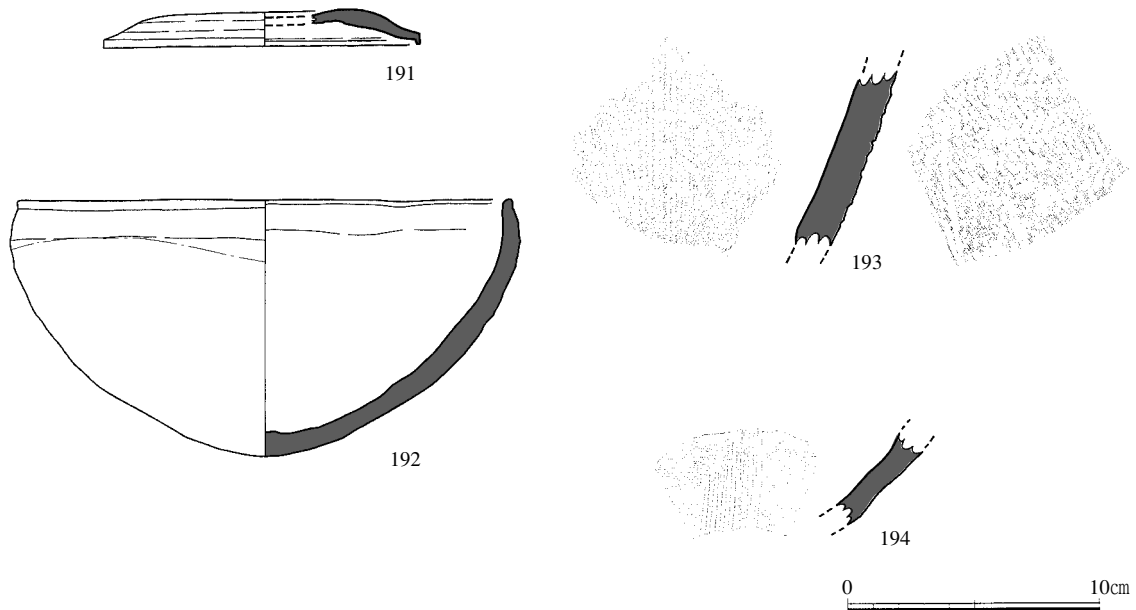
石の大きさ、形態は、あまり統一性がないが、縦長は4.6cm、幅が3.7cm、厚みが1.4cmを平均的な大きさとしている。文字の書体はかなり似通っており、一時期に書かれた可能性がある。筆圧はかなり強く、達筆で



第37圖 I区一字一石実測図 S=2/3



第38図 I区遺構出土遺物実測図 S=1/3



第39図 I区包含層出土遺物実測図(1) S=1/3

書かれている。使用された石は通常の川原石のようで、角の取れた平たい石が中心である。このような石は近辺の河原で採集できるものである。

書かれた文字には「阿」「西」「陀」「佛」などがある。文字の判読のできないものもあった。

これらの文字だけから埋納された経典が何であったかを推定するのは、不可能である。ただ、「阿弥陀仏」の文字が類推できるので、浄土経典の一つと考えられる。

(3) 遺構の出土遺物(第38図)

184は、ST13の付近で出土したもので、磁器の染付皿の破片である。復元口径が16.2cm、復元器高が3.4cmを測る。遺構に伴うかどうかは不明である。肥前系のものであろう。

185はSX02から出土した。復元口径9.1cm、高さ1.6cmを復元し、外底面には糸切り痕が残る。

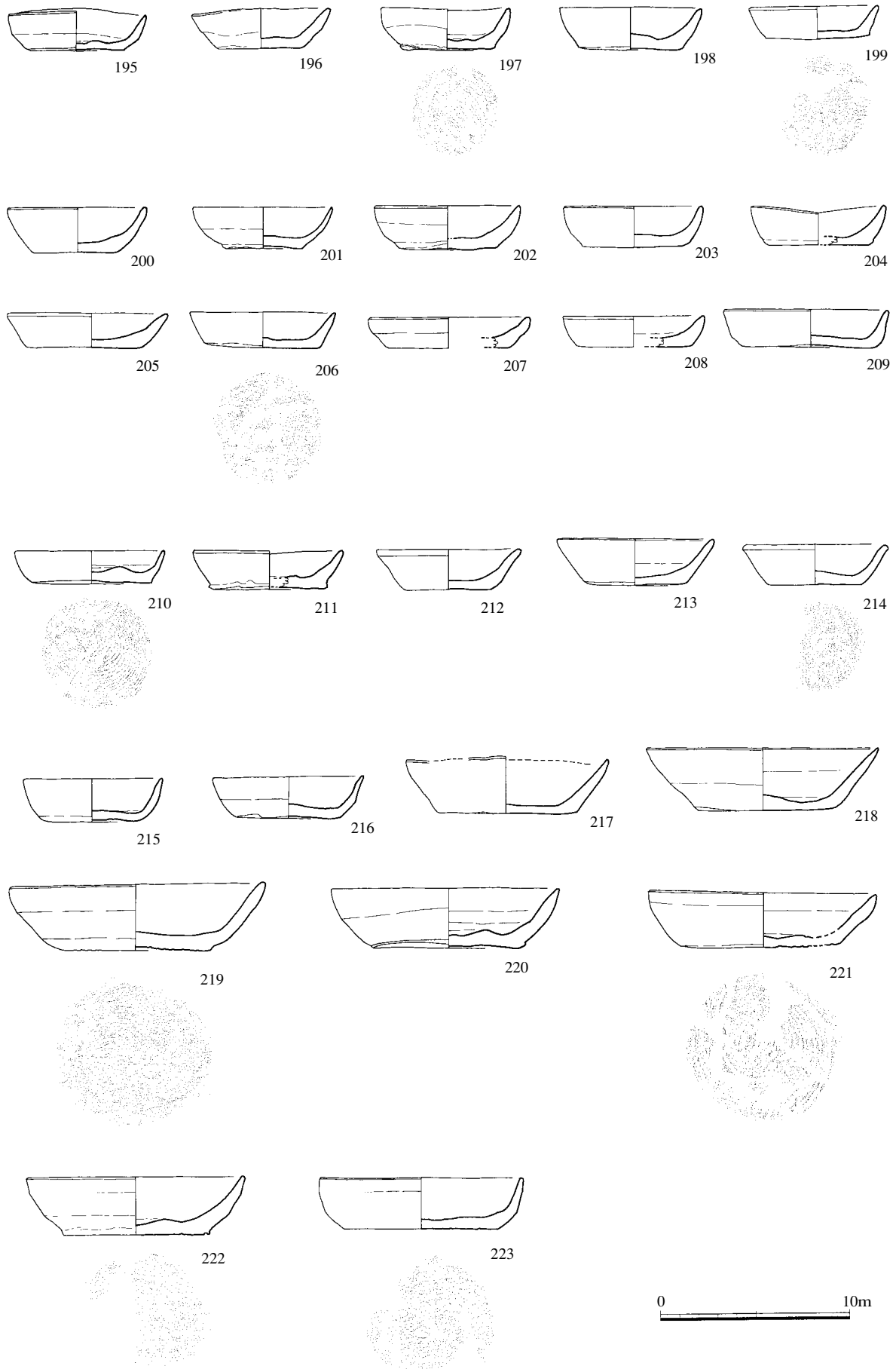
186はSX04から出土したもので、復元口径6.4cm、高さ1.7cmを測る。外底面には糸きり痕が残る。

187は、SX04から出土したもので、須恵質土器の捏鉢である。復元口径が26.2cm、高さ11.6cmを測る。外器面には巻き上げ痕が残る、縦方向のハケ目がわずかに残る。内器面には、横方向のハケ目が入る。口唇部はヨコナデが施される。外底面には、板目圧痕が残る。

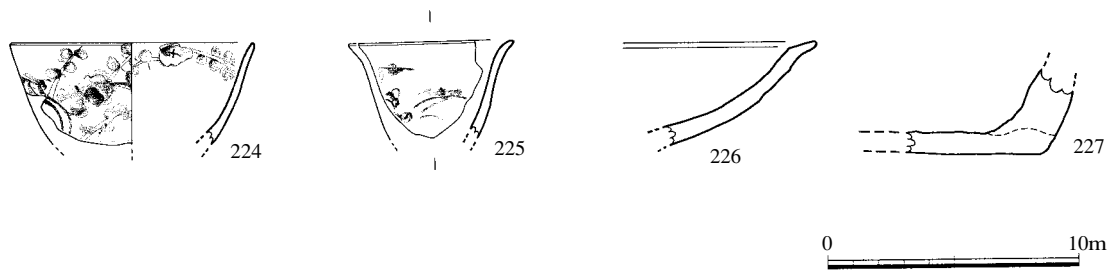
188は、古代の須恵器で、器種は壺である。肩部には把手があったようであるが、欠損している。内器面の屈曲部には指押さえの跡が残る。外器面下部には横方向のヘラケズリが残る。

189は、SK04から出土したもので、同安窯系青磁碗の破片である。小片のため全体像は不明であるが、内器面に櫛描き文による花文の一部がみられる。190はSW01から出土したもので紛れ込みの可能性もある。磁器片で器種は不明である。

この他、第40図の包含層出土遺物実測図の中に入れてある199・200・205・209の4点の土師質土器は、ST04・ST03(地輪145・146)付近で出土している。大部分は灯明皿として利用されている。この土器が、ST03・ST04の形成時期に近い時期の所産であることが十分考えられる。ここでやや詳細にみておく。



第40図 I区包含層出土遺物実測図(2) S=1/3



第41図 I区包含層出土遺物実測図(3) S=1/3

199は、復元口径6.6cm、底径5.4cm、器高1.8cmで、胎土に輝石・細砂粒を含む。200は、復元口径が6.7cm、底径が4.4cm、器高2.3cmを測る。胎土に輝石・赤色酸化粒・細砂粒を含む。焼成はやや不良である。205は、復元口径が8.3cm、底径が5.4cm、器高が1.8cmを測る。胎土に輝石・金雲母・細砂粒を含む。焼成はやや不良で、口縁部に煤が付着している。209は、ほぼ完形で、復元口径が8.5cm、底径が7.0cm、器高が2.0cmを測る。胎土に輝石・細砂粒を含む。焼成は良好である。これらを見ると、法量にばらつきがあり、一定の状況にはならない。形態的な特徴としては、口径/底径比が1.2をはかるものが多い。200だけが1.5であり、器高も高いので、杯にした方がよいかもしれない。

これらの時期の確定が、ST03・ST04の時期決定に対し重要であるが、在地生産が主と考えられる土師質土器だけでは、他地域との比較が難しく、今現在できていない。ただ、Ⅲ層に出土している須恵質土器の播鉢と紀年銘の石塔などから勘案して14世紀末～15世紀はじめほどの時期を想定しておく。

(4) 包含層の出土遺物(第39～41図)

第39図では、191・192は古代の須恵器である。191は蓋で、復元口径が12.4cm、器高1.4cmを測る。縁がやや立つ。192は、鉄鉢形鉢で、復元口径19.3cm、器高10.1cmを測る。口唇部はツマミ上げて外面には弱い凹線が巡る。胎土は粗く、全体的に赤味がかかる。荒尾産の可能性もある。

193は、須恵質土器の甕片である。外器面には、タタキ痕が残る。内器面にはハケ目が縦方向に入る。

194は須恵質土器の播鉢片である。内器面には、7条を単位とする播目が認められる。

第40図は、ほとんどが墓群の付近で出土したものである。大きさと形態、焼成から、小皿、杯に分けられる。小皿には煤の付着が見られるので灯明皿としての利用が大きい。出土層位もI期を示すⅢ層からの出土が多い。墓群の時期を特定できる遺物である。

第41図の224は、磁器碗である。外器面には呉須の染付けで梅文が描かれる。225は、磁器の小杯である。外器面には染付けによる絵が描かれる。226は、肥前系の陶器の鉢である。内器面には蛇の目釉剥ぎがあり、釉は灰色を呈する。227は陶器の甕の底部と思われる。平底である。

第5章 調査Ⅱ区の調査成果

第1節 調査区の概要

第2次調査地点は、古麓城跡の城域の一角に繋がる九州新幹線の妙見トンネル出口付近を中心とした部分である。ここは先に報告した「古麓城下遺跡」に繋がる部分でもある。ちょうど古麓城跡の新城跡の裾に当たり、急峻に切り立った地形と谷部の地形が交わる部分であるため、遺構のあり方を探りながら行うこととなった。さらに用地買収の遅れと工事工程との関係から調査期間が十分確保できない状況にあったため、調査地点を設定するにあたり、トレンチ調査を行いながら地点の絞り込みを図っていかざるをえなかった。その結果、最終的に調査箇所は10箇所となった。

調査方法でも述べたように、整理作業時に調査時の区設定を変更し、以下に示すⅡa区からⅡj区までに修正し直し、注記も修正している。遺構番号も同時に、旧調査区ごとに設定されていた遺構番号をⅡ区全体で一連番号として修正し直した。

第2節 調査Ⅱa区

(1) 調査区の概要

Ⅱa区は南北が $X = -56308$ 、 $Y = -33807$ から $X = -56331$ 、 $Y = -33807$ まで、東西が $X = -56330$ 、 $Y = -33809$ から $X = -56317$ 、 $Y = -33793$ までの範囲である。調査区の北側は攪乱があったため調査からはずした。

この調査区では土坑やピットを多く確認し、調査区の北側では溝状遺構を確認した。

(2) 土層

西側の土層部分について、注記を略述する。

I層は表土。II層は客土で、黄褐色を呈するものを主とし細かくは数枚の層が確認でき、近世以降の整地層と認識している層もある。この層の色合いが、確認面で検出したいくつかのピットの埋土に似る。III層は暗褐色を呈する。この層の土も確認面で検出したいくつかのピットの埋土に似る。この下層の上面が確認面で、ピット群を検出した。この層には8～9世紀の遺物を含む。IV層は淡暗褐色を呈する。暗褐色土と黄褐色土が混じり合い、硬く締まる。マンガン粒が多くみられる。V層は黄褐色を呈するロームを主とする層である。分層は可能である。ブロック状の暗褐色土が混じる層と粘性の純粋なローム層である。

(3) 遺構

【ST01】(第44図上)

この遺構は墓壇ととらえている。形状はやや隅丸の長方形で、長軸1.65m、短軸0.8m、確認面からの深さ15cmを測る。埋土は2層に分層できた。底面の一方が緩やかに高くなっている。

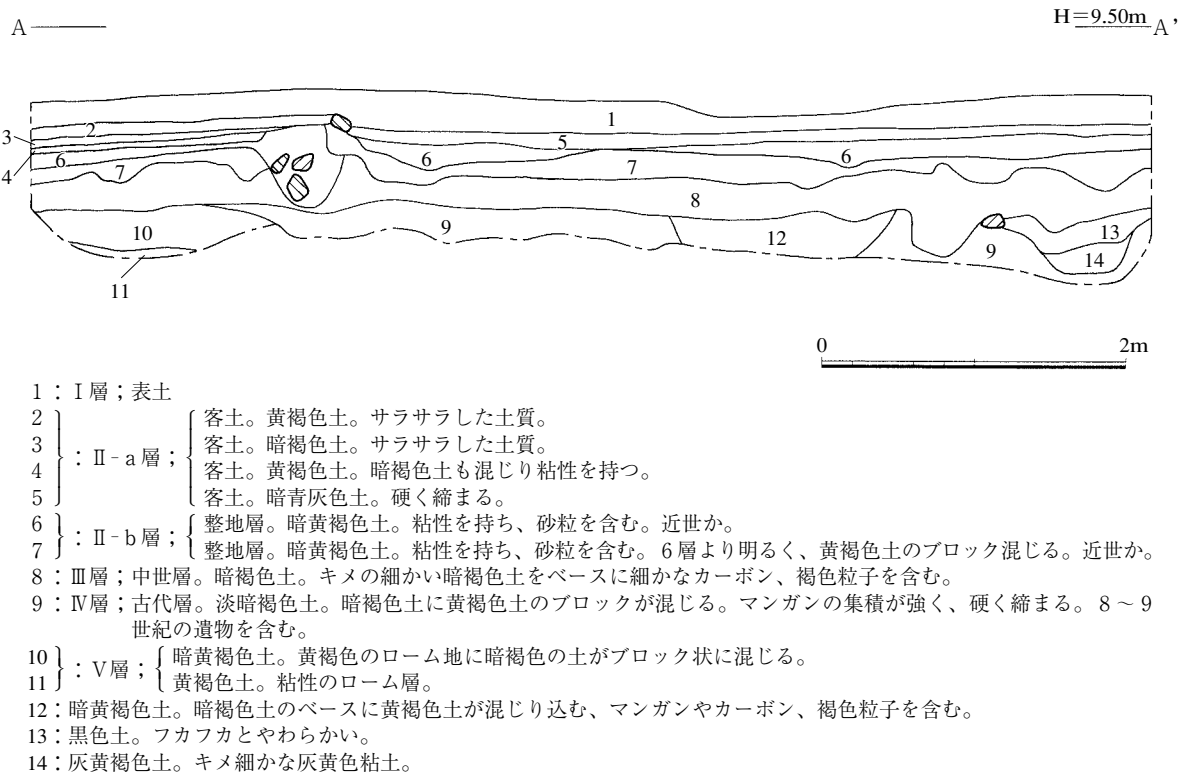
出土遺物はなく、時期の特定は難しい。形状から調査者は、中世の土壇墓もしくは木棺墓と推定している。

【ST02】(第44図下)

この遺構も墓壇ととらえている。位置的にはST01の南西、2.5mほど離れた場所にあり、ほぼST01と平行している。形状は、全体の3分の1ほどが長方形の土坑とピットによって切られているため、本来の形状は不明であるが、やや隅丸の長方形と考えられる。長軸は推定1.5m、短軸は推定0.65m、確認面から深さ15cmを測る。出土遺物がなく時期の推定は明確ではないが、調査者は遺構の形状などから、中世の土壇墓も



第42図 IIa区遺構配置図 S=1/100



第43図 IIa区土層断面図 S=1/50

しくは木棺墓と想定している。土壌底面には径10cmほどの小穴があるが、この遺構との関係は不明である。切り合い関係を示す土層の記述はないが、注記によりこの遺構が古いものと判断した。

また、この遺構を切っている土坑を確認しているが、この土坑がST02の時期よりも新しいことは分かるが、出土遺物が不明確なため、明確な時期は不明である。

【SK01】(第45図左)

この遺構は調査区の南側で検出した土坑である。ST02の北西2mほどの位置にある。

調査時には一つの遺構としてあるが、実測図をみると、2つの遺構が切り合ったものとも考えられる。遺物が出土したものを主たる遺構とし、ここでは調査者の判断により土坑とする。

主たる土坑は長径60cm、短径40cm、確認面からの深さは浅く、20cmほどを測る。この遺構を切るピット状の遺構は径40cm前後を測る不整円を呈する。偏った位置に柱痕らしきものが認められる。

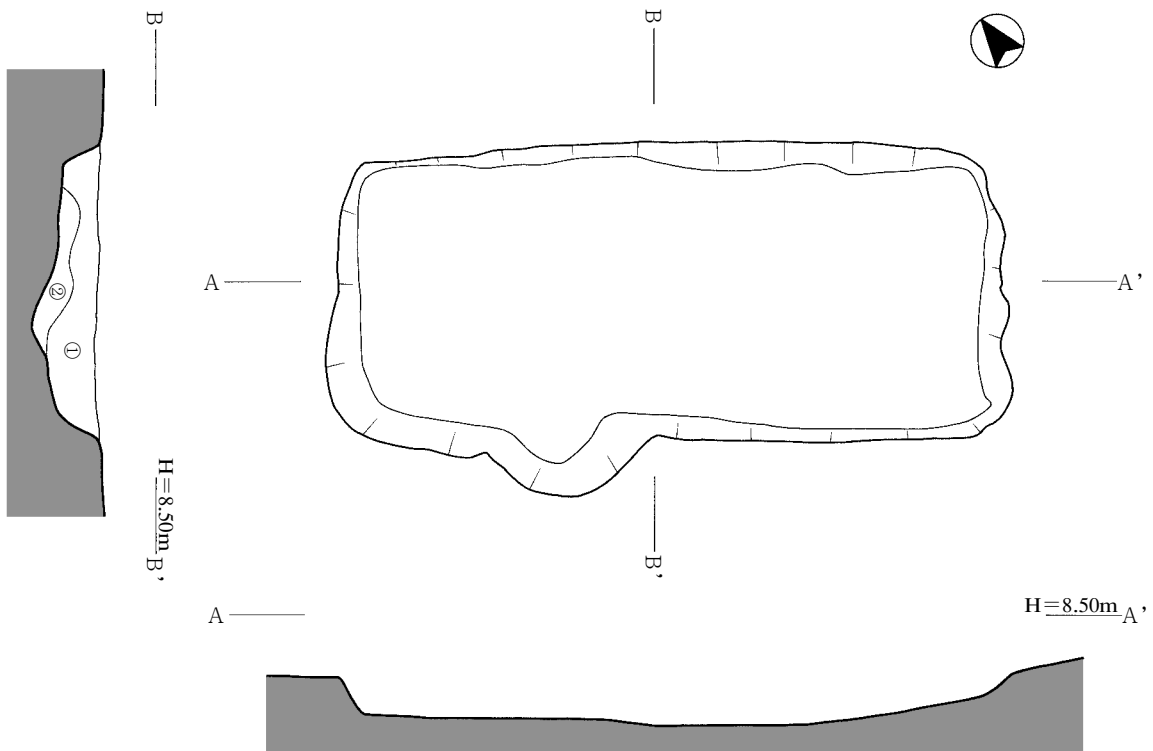
【SK03】(第45図右)

この遺構は調査区のやや北側で検出した。北側にやや突き出しをもつ楕円形の土坑である。長軸方向は1.5m、短軸方向に0.9mを測る。確認面からの深さは15cmほどを測る。途中で段状になる。3層に分層できる。

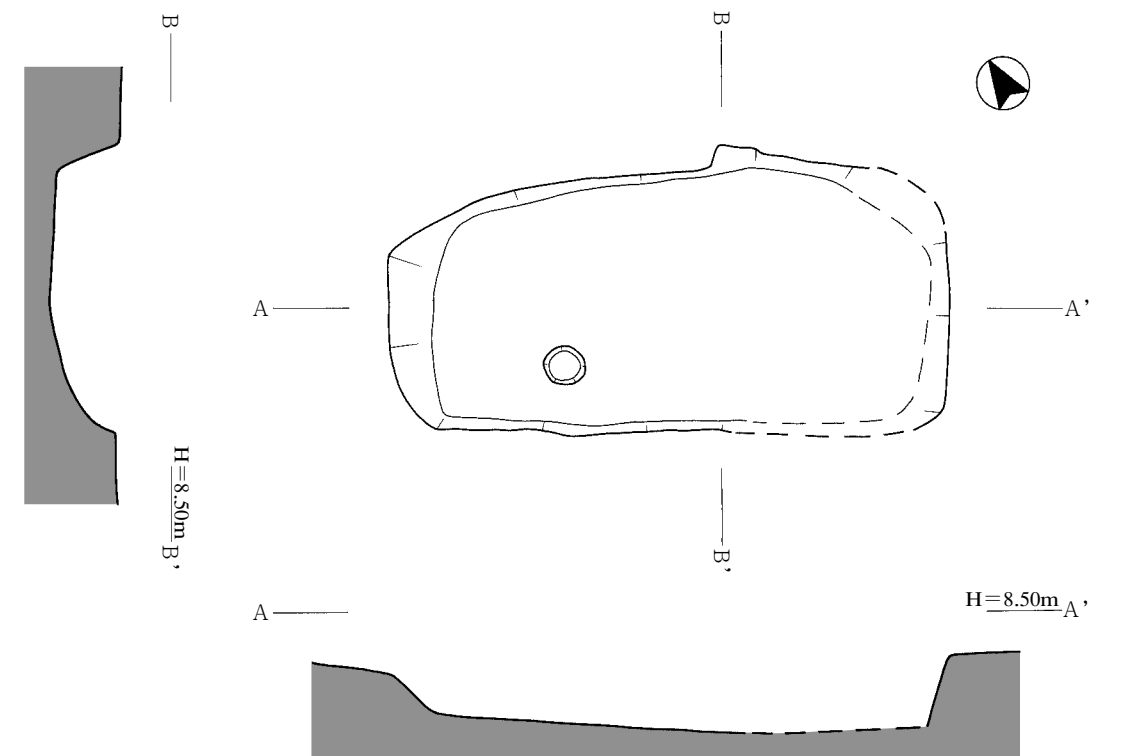
【SD01】(第42図)

この遺構は調査区北側で検出した溝跡である。この溝にかかる北側部分には後世の攪乱があったため、この遺構の半分が失われている。このため溝幅は確認できていない。さらに、溝跡は調査区外にも伸びており、全体形状は掴めない。調査区内では、北東から南西へ8mほど伸び、南東から北西方向へ直角に曲がっている。調査区内では、約5m確認した。

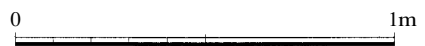
この遺構が直角に屈曲する部分には、多量の礫が屈曲の内側から外側に向かってやや細長く流れ落ちるよう出土している。礫はこの部分にのみSD01の底面近くまで溜まるようになって検出できた。礫の大きさは径10cm～20cmほどの角張ったものが主である。土層断面の注記が不明確なため正確ではないが、この遺構



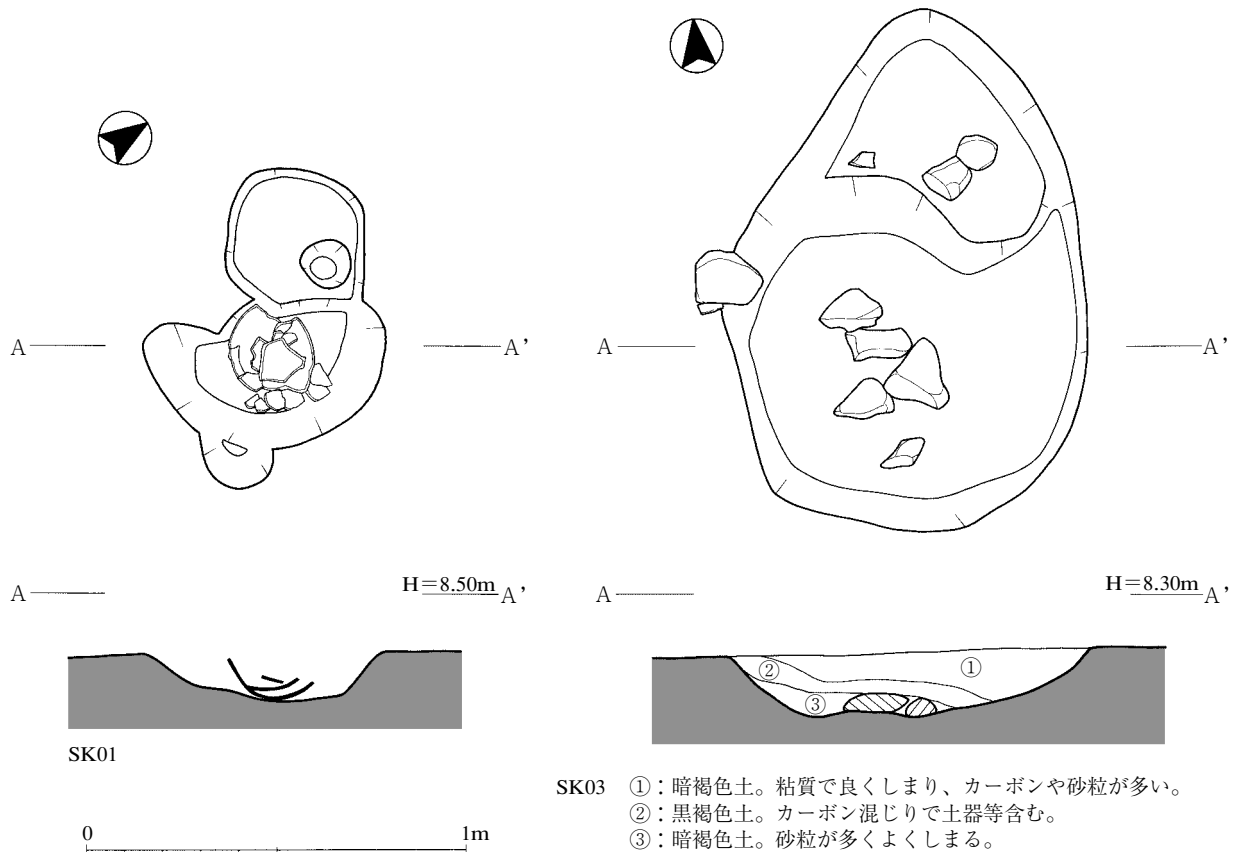
- ST01 ①：暗褐色土。粘質でよく締まり、カーボンや砂粒が多い。茶褐色の粒子も所々見られる。
 ②：暗褐色土。粘質でよく締まり、砂粒が所々見られる。



ST02



第44図 II a区ST01・ST02実測図 S=1/20



第45図 IIa区SK01・SK03実測図 S=1/20

の最下層付近まで入るものと考えられる。ただ、この礫群の集中部を詳細に調査したところ、礫群の下位に沿って落ち込む細長い土坑も確認しており、この土坑に礫が集中している可能性が大きい。

この遺構の時期としては、出土遺物は古代のものが多く、231・232のような中世の遺物も出土していることから、一応中世以降のものとした。

【SD02】(第42図)

この遺構は調査区の北側で確認したもので、SD01の南西側3mほど離れた位置にあり、南東～北西方向に伸びる。部分的にSD01と平行するよう見えるので、それと関係する可能性がある。

この調査区内では、長さ4mほどを確認している。幅は狭く、40cm～50cm程度で、確認面からの深さは10cm程度である。

【SE01】(第42図)

この遺構はSD01の検出途中で確認した遺構で、SD01の埋没後に掘られた井戸もしくは類似の遺構と調査者は考えている。直径が1.36mほどで、確認面からの深さ55cmほどを測る。底面近くには3点ほどの礫を確認した。井戸状の形態であるが、現在での湧水は確認していない。出土遺物は確認できなかった。

【その他の遺構】(第42図)

その他の遺構としては多くのピット群を確認している。その検出傾向から、調査者は遺構としての組み合わせを考えたが、最終的に掘立柱建物跡の柱跡としてその組み合わせを確定させることができなかった。ただ、見え方だけを考えれば、調査区北側のSD01との関係がありそうな配置がみてとれるので、このピット群もこの溝状遺構の時期と多少関係するものと想定できる。

(4) 出土遺物

【SK01の出土遺物】(第46図)

出土遺物は主たる遺構内の古墳時代土師器の甕片がある。228がそれで、底部から胴部下半部まで残るものである。胴部上半部と口縁部が欠けているため、全体の形状は不明である。器壁は底部付近が1cmほどを測り、胴部では2～3mmの厚さしかない。内器面には縦方向のケズリが入り、胴部の厚さをかなり薄くしている。出土位置は、SK01の中心部に当たり、この遺構内に据えられていた、もしくは埋められていたと考えられ、この遺構が何かを示すものかもしれない。

【SK03の出土遺物】(第46図)

出土遺物としてはわずかな土器片と礫片がいくつかある。土器は古代のものである。

229は須恵器の高台付坏片である。高台が2mm程度と低く、断面方形を呈する。底部をヘラケズリし水平面を作り出した後、高台を貼り付けている。高台の復元底径は、8.0cmを測る。230は古代の大甕の一部である。本来の器表面に他の土器片の裏面が釉着している。その上にも剥離した跡が認められる。このような釉着した状態の須恵器は、窯での焼成の際に生じたものと推定できる。現在の窯詰めにおいても、大型の焼き物を固定するために焼き物片などを下に敷く場合があり、それと同様の目的で敷いた土器片が釉着したのか、他の大甕との間に入れて、釉着を防ぐものであろう。実測図では、後者の場合を想定して描いているが、実測図を逆向きにすれば、球形の大甕底部の安定を図るために敷いたものとすることもできる。

【SD01の出土遺物】(第46図)

この遺構の時期は、出土遺物が古代のものが多いが、231・232のような中世の遺物が出土しているので、一応中世以降のものと考えられる。

231は土師器の坏片である。外底面にはっきりした糸切り痕跡を残す。器壁はやや厚手である。復元底径は7.5cmを測る。232は瓦質土器で、口縁部付近に鏝が巡り、その鏝上の一角に耳が付く。口縁部はその鏝付近からやや内傾したまま終わる。胴部は鏝部分から直線的に一旦すぼまる。ただ、破片のため全体形状は掴めない。

【SD02の出土遺物】(第46図)

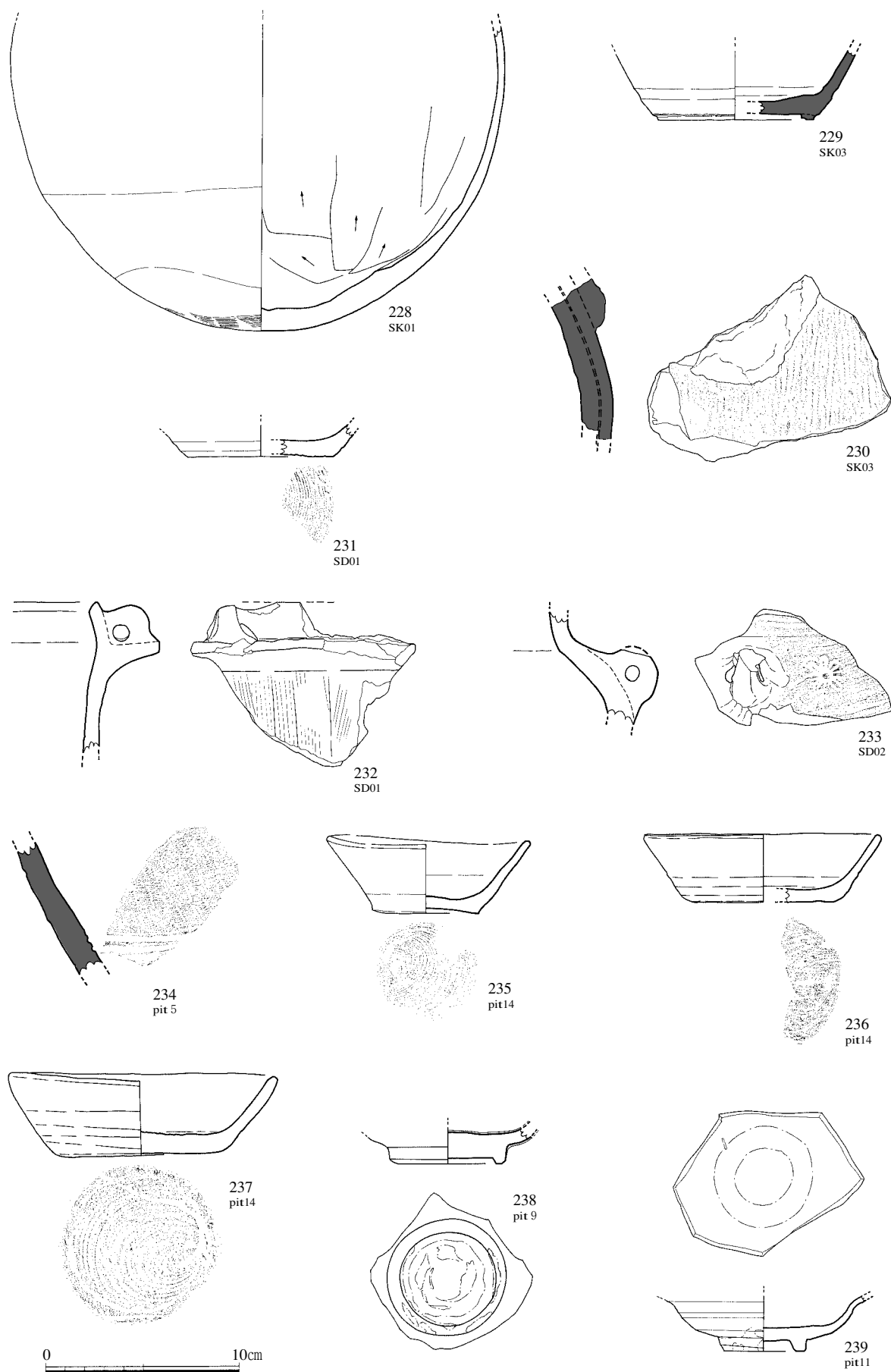
出土遺物としては233があり、この遺物も中世のものとする瓦質土器片で、茶釜の一部と考えている。外器面には耳が貼り付けられ、径0.5cmの穴があいている。器表面は黒色を呈し、丁寧なミガキ調整が施され、その上に印花文が押されている。

【その他の遺構の出土遺物】(第46図)

その他にピットからの出土遺物の主なものを次に取り上げる。

234はpit 5から出土した須恵器で、器台の脚部とみている。器壁が1.5cmと厚く、一部に透かしの部分と思われる切り込みが入る。器表面には、細かい櫛描波状文が丁寧に描かれ、その下に沈線が2本引かれる。これと類似したものがⅡb区からも出土している。古墳時代の遺物と考える。

235～237はpit 14から出土したものである。235は土師器の坏である。口径が10.3cm、器高が3.8cm、底径が5.5cmを測る。外底面に糸切り痕が残る。焼成は良好で、土師器としては堅緻である。ともに回転台調整である。236は土師器の坏である。復元口径が12.1cm、器高が3.6cm、復元底径が7.2cmを測る。外底面に糸切り痕が残る。焼成は良好である。235に比して口径、底径が大きい。237は土師器の坏である。口径が13.6cm、器高が4.4cm、底径が8.0cmを測る。外底面には糸切り痕が残る。焼成はかなり良好である。形態的には236に近いが、それより大型である。



第46図 IIa区遺構出土遺物実測図 S=1/3

238はpit9から出土した、龍泉窯系の青磁碗の底部である。釉は淡い青緑色を呈するが、釉のかかりが悪く、器表面に細かい気泡の痕跡が残り、白っぽい感じになる。胎土の色調は灰白色を呈し、細砂粒をわずかに含む。高台は削り出しによるもので、畳付け部分が外側斜めに削り取られる。高台内面は釉が削り取られる。

239はpit11から出土した肥前系陶器の折縁皿である。釉は内器面と外器面の上面までかかり、外底面まではかかっていない。灰釉と考えられるが、微妙に褐色がみられる。見込は蛇の目釉剥ぎがなされる。高台は削り出しによるものであるが、削り出し方が粗い。底径は4.2cmと狭い。

【包含層の出土遺物】(第47図)

包含層中の出土遺物は主に目立つものについてのみ図化した。

240～243は古代の土師器である。240・241は碗で、体部から底部までのものである。240は底径が5.4cmを測り、241は底径が6.6cmを測る。底径に比して口径がひろいような印象を受ける。いずれの外底面も回転台によるヘラケズリが施され、体部の下1.0cmほどまでそのヘラケズリが及んでいる。胎土と焼成がやや異なるものの同一の須恵器の技法によるものであろう。

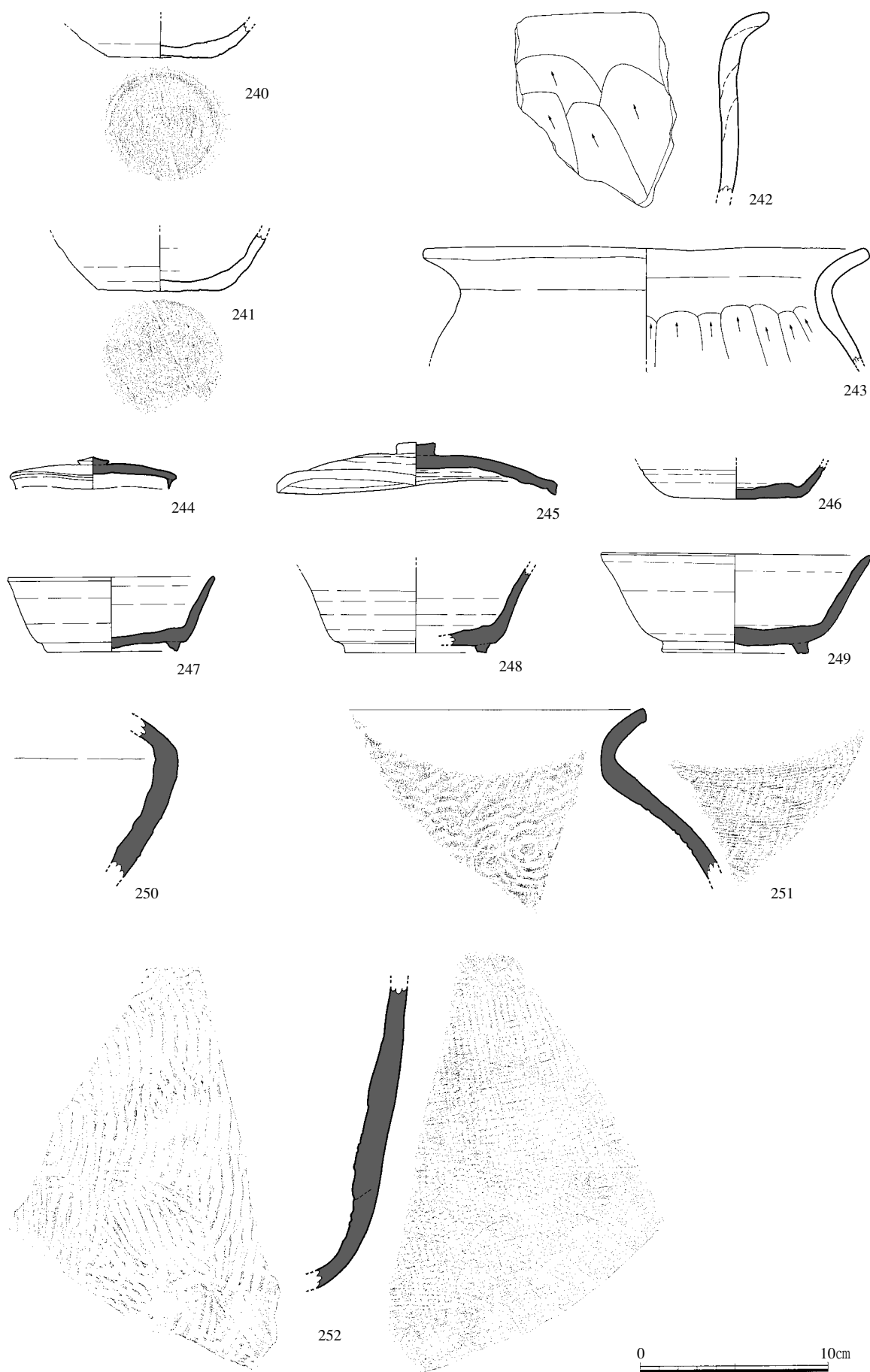
242・243は甕である。242はほぼ直におりる胴部から不明瞭な頸部の上に弱く外反するものである。内器面には、縦方向のヘラケズリが施されている。外器面は調整が摩耗のため不明瞭である。243は胴部が張り、頸部は締まる。口縁は強く外反し、端部はやや角張る。内器面には頸部よりやや下の位置まで下から上に向けて縦方向のヘラケズリが施される。この2点はやや時期差があり、243がやや古いものとする。

244～252は古代の須恵器である。244・245は蓋である。244はツマミがかなり退化し、ボタン状になっている。それに比して返りはまだしっかりとある。径も8.2cmと小さく、全体的にも小さい印象を受ける。このため、この時期の遺物でない可能性はあるが、焼成や技法的にはやはり古代の須恵器と判断した。形態上椀の蓋とは考えられず、壺などの蓋であろう。245はかなり焼成時に変形している。ツマミは宝珠ではなく、中央部がややへこむような形になっている。口唇部はすでにかかり部も退化しかけているが、しっかりと稜は認められる。復元口径は15.0cmと広く、大型椀の蓋であろう。

246～249は坏もしくは椀である。246は坏の体部から底部である。外底部は回転ヘラおこしした後にナデ調整される。内器面には粘土巻き上げ痕が残り、体部と底部の区切りが明確である。247は高台付坏である。外底部は回転ヘラおこしではずした後ナデ調整し、高台を貼り付けている。高台の調整は、断面三角様ながら、頂部付近に弱く沈線を入れるように作り上げている。全体的作りは精緻である。248も高台付坏である。ただ、製作技法・形態は、247とは異なる。外底面のナデ調整のあと高台を貼り付けるが、断面が台形状を呈する。また、器壁もやや厚く、色調もやや白っぽい。249は高台付椀とする。外底部はヘラおこしの後にナデ、高台を貼り付ける。高台は断面が外開きの長方形様を見せる。胎土には細砂粒が多く含まれる。底部と体部の区切りが外面では不明瞭であるが、内器面では明瞭である。

250は短頸壺もしくは長頸壺の肩部から胴部にかけての破片である。肩部から下胴部は、回転ヘラケズリが施される。全体的に白っぽい色調を呈する。

251・252は甕の破片である。251は小型甕の口縁部である。焼成は悪く、赤焼けの須恵器としておく。外器面の格子タタキの後に横方向のハケ目が施されている。口唇部はやや肥厚する。内器面は同心円文当て具痕である。252は大型の甕片もしくは平瓶の可能性もあると考える。外器面には擬格子タタキ痕が残る。内器面は同心円文当て具痕と平行当て具痕の部分がある。



第47図 IIa区包含層出土遺物実測図 S=1/3

第3節 調査Ⅱb区

(1) 区の概要(第48図・49図)

調査Ⅱb区は調査Ⅱa区の南側に設定した。調査区の位置は、南北が $X=-56327$ 、 $Y=-33798$ から $X=-56358$ 、 $Y=-33809$ まで、東西が $X=-56358$ 、 $Y=-33809$ から $X=-56338$ 、 $Y=-33795$ までの範囲である。

この調査区では、土層の状況に応じ、確認面が2面あるものとして調査を行った。

(2) 土層

I層は表土。II層は客土で、黄褐色を呈している。いくつかのピットの埋土に似る。III層は、暗褐色を呈する。いくつかのピットの埋土に似る。この最下層でピットが確認できる。8～9世紀の遺物を含む。IV層は、淡暗褐色を呈する。暗褐色土と黄褐色土が混じり合い、硬く締まる。マンガン粒が多くみられる。V層は、黄褐色を呈する。

(3) 遺構

【SW01】(石垣遺構)(第51図)

この遺構は調査区の北側で検出した石垣遺構である。調査時には、この遺構の南側部分でこれに直交する石垣が築造されていた。

この遺構は、基底部分が一定しないものの乱積みによるものである。方向は北東～南西に作られており、地形の状況に合わせている。

確認した長さは10mほどで、高さは1mほどである。後ろ側には控え積みはあまりなかった。裏込め石に混じって遺物がかかり確認できた。時期的にはごく最近まで利用され、この石積に対して直角方向に配された石積もあるので、その時期より古いと云わざるをえない。裏込めに混じる遺物から少なくとも、近世まで遡る可能性はある。

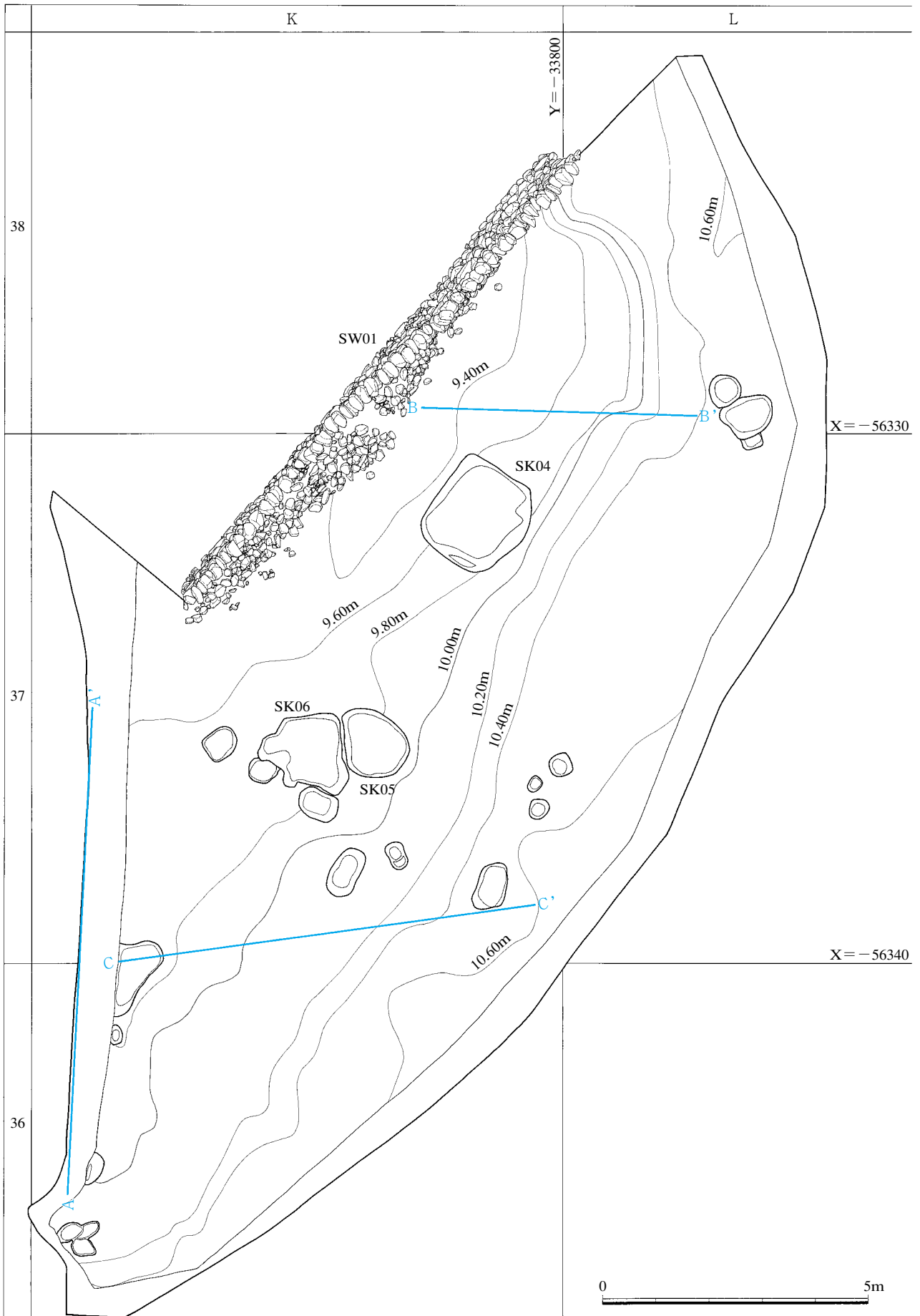
【SW02】(第51図)

この遺構はSW01の南西方向で検出した積み石遺構である。基礎部分付近が主に残っている。確認したのは、SW01の基礎部分よりも一段低い面である。そのため、近世でも一時期古く遡るものであろう。

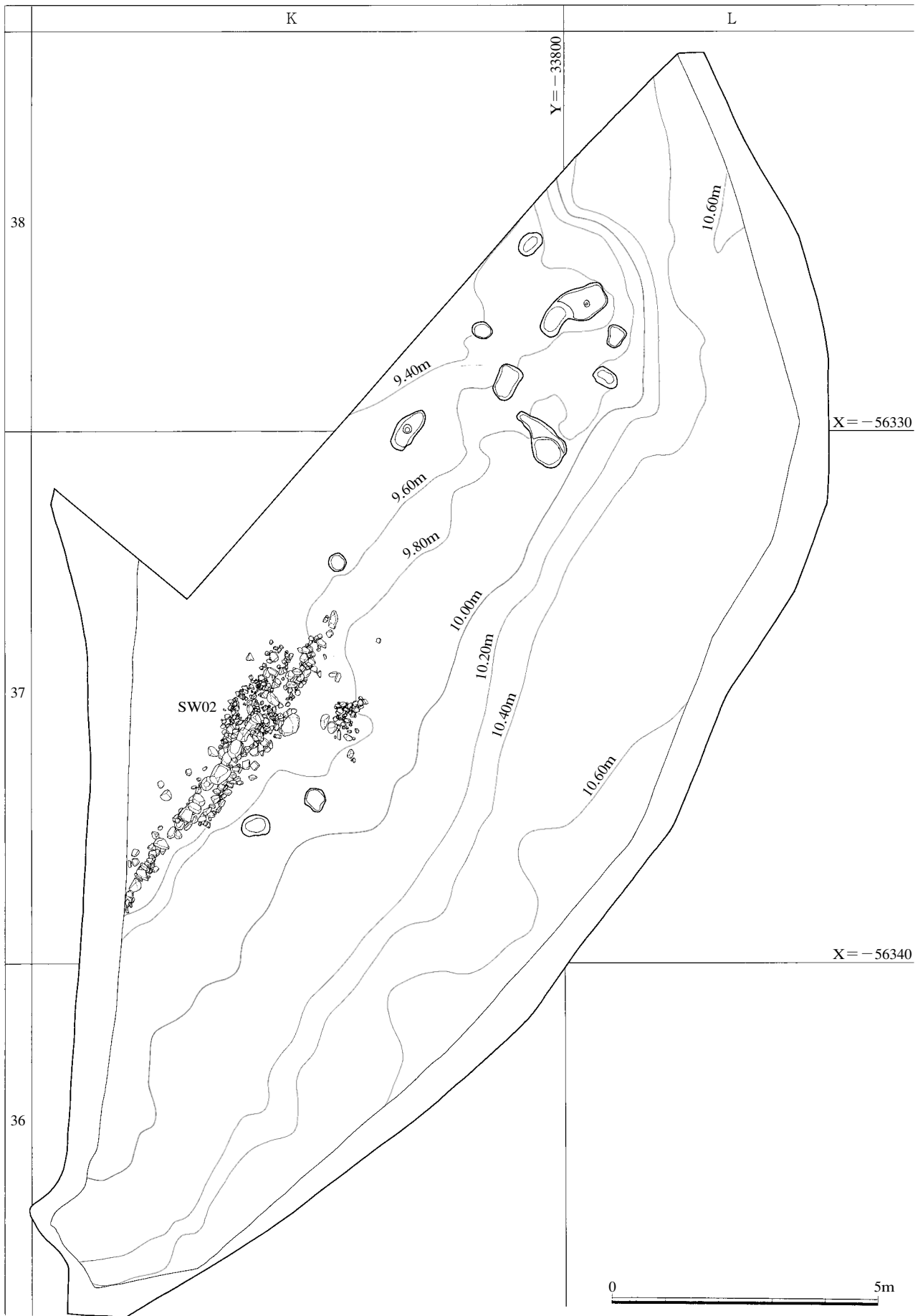
SW01に比べ、残存状況が悪く、積み方も雑である。ただこれは、破壊による可能性も大きい。また、部分的な出土であるため、全体像もつかめない。

地形に沿って構築されているので、傾斜地での土地区画を示すものかもしれない。

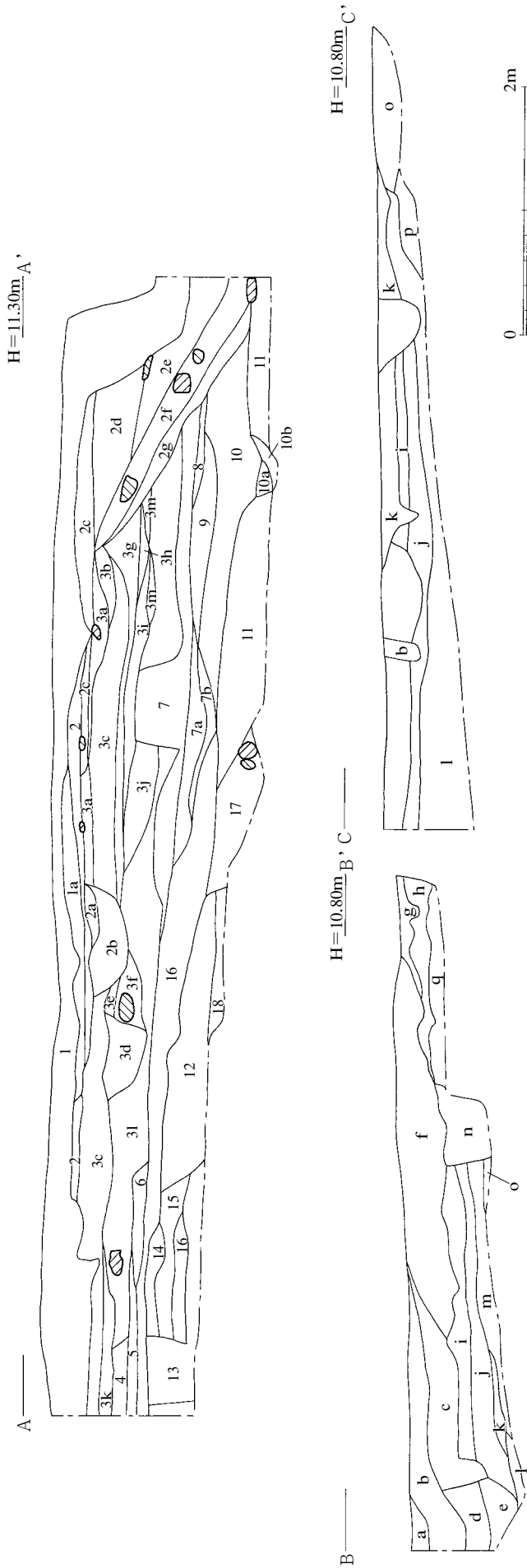
形態的には、乱雑に配置された小礫の上に、長めの石を列状に配置し、石組を形成している。石組は一段のみで、4mほどを確認できる。



第48図 Ⅱb区上面遺構配置図 S=1/100

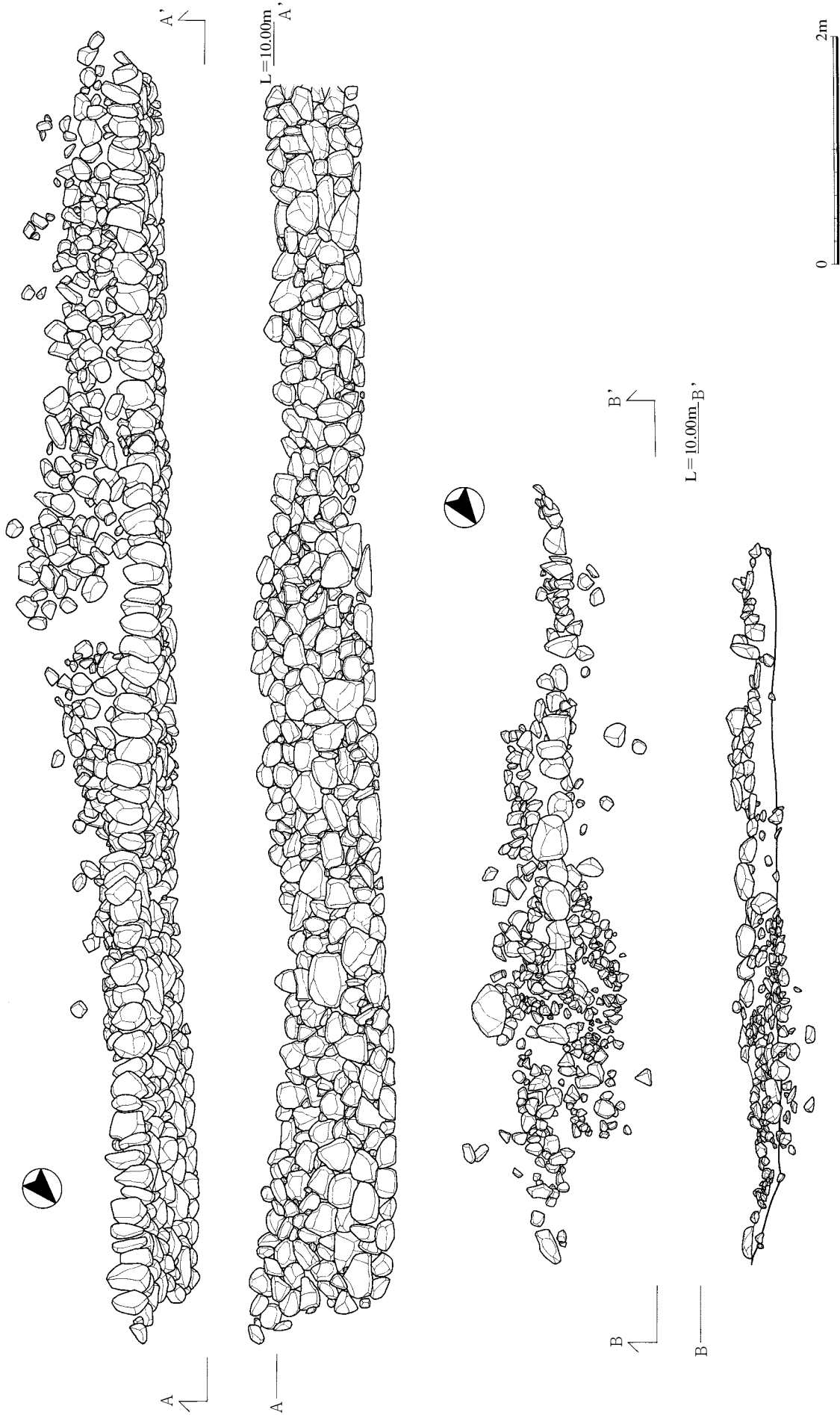


第49図 II b区下面遺構配置図 S=1/100

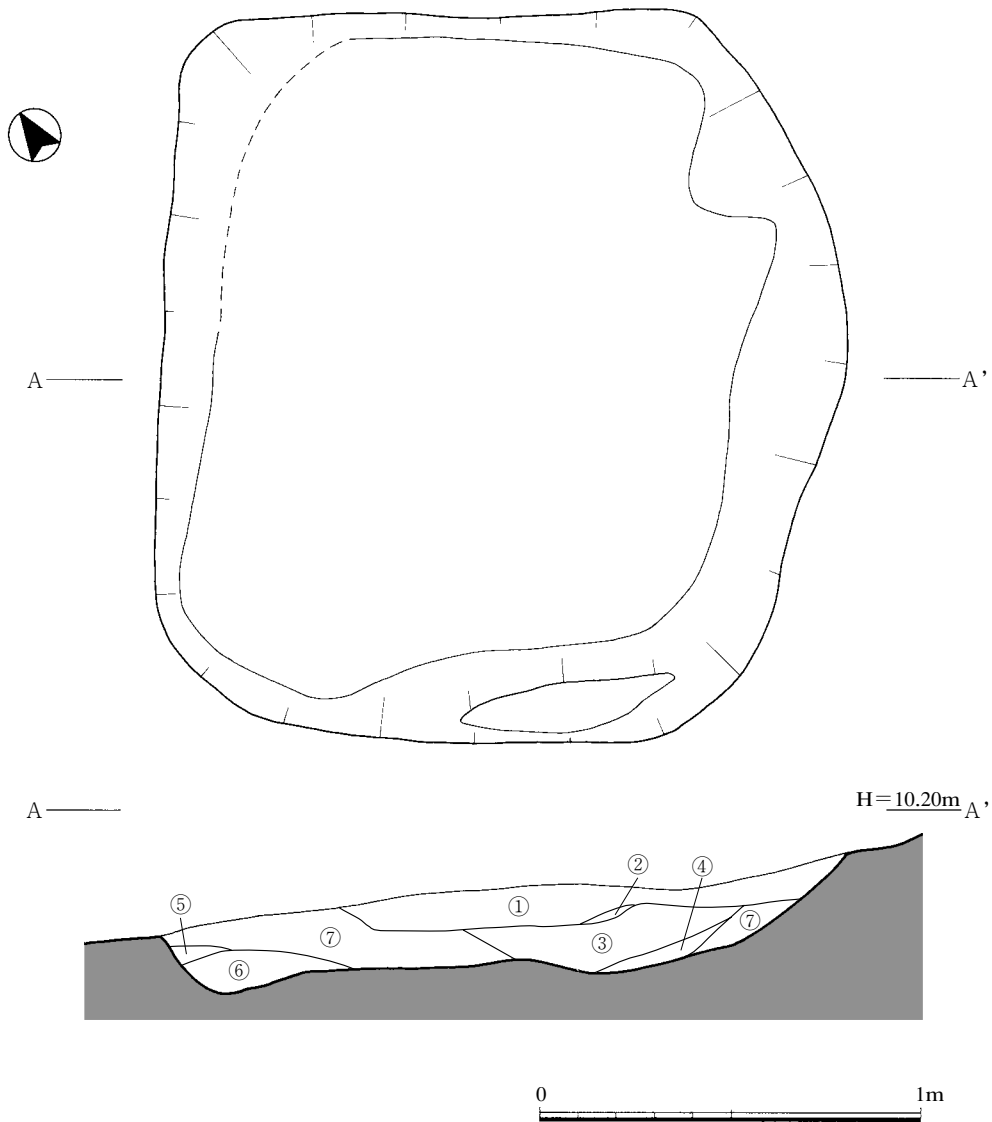


- 1 表土。
- 1a 黄褐色粘質土。やや締まる。炭化物を僅かに含み、黄褐色土塊がまばらに混じる。
- 2 黒褐色粘質土。締まっている。粘質弱。
- 2a 濃褐色粘質土。炭化物、2~3cm大の土塊がまばらに混じる。
- 2b 濃褐色粘質土。強く締まる。礫、土塊が混じる。
- 2c 濃褐色粘質土。強く締まる。礫、土塊が混じる。
- 2d 濃褐色粘質土。締まっている。礫、土塊が混じる。
- 2e 黄褐色粘質土。締まっている。土塊混じる。サラサラ土。
- 2f 暗褐色粘質土。締まっている。小塊混じる。
- 2g 暗褐色粘質土。やや締まる。粘性中。小さい土塊、炭化物がまばらに混じる。
- 3 暗褐色粘質土。下に礫がある。
- 3a 暗褐色粘質土。3c層より明色。
- 3b 黄褐色粘質土。やや締まる。粘性中。小礫、土塊が混じる。
- 3c 黄褐色粘質土。3e層と軟べし。粘性強。
- 3d 黄褐色粘質土。3f層と軟べし。粘性強。
- 3e 黄褐色粘質土。3f層と軟べし。粘性は非常に強い。
- 3f 暗褐色粘質土。3c層より濃色。
- 3g 赤褐色土。礫土粒あり。
- 3h 暗褐色粘質土。3c層に近い色、質。
- 3i 黄褐色粘質土。全体的に礫土混じる。
- 3k 淡黄褐色粘質土。小礫、小土塊が全体を占めザラザラしている。
- 3m 暗褐色粘質土。やや締まる。粘性中。10~20cmの礫を部分的に含む。
- 3n 黄褐色粘質土。強く締まる。10cm大の土塊が混じる。
- 4 明黄褐色粘質土。やや締まる。小礫、小土塊が混じる。
- 5 黄褐色粘質土。強く締まる。粘性強。小礫、小土塊が全体的に混じる。
- 6 黒褐色粘質土。やや締まる。粘性中。小礫をまばらに含む。小土塊が全体的に混じる。
- 7 淡褐色粘質土。強く締まる。粘性強。土塊、炭化物が全体的に混じり、礫をまばらに混じる。
- 7a 淡褐色粘質土。強く締まる。粘性強。土塊、炭化物が全体的に混じり、礫をまばらに含む。
- 7b 淡褐色粘質土。強く締まる。粘性強。土塊、炭化物が全体的に混じり、礫をまばらに含む。
- 8 暗黄褐色粘質土。強く締まる。粘性強。微粒土塊、炭化物が混じる。
- 9 暗黄褐色粘質土。強く締まる。粘性強。土塊、微粒炭化物が混じる。
- 10 黒褐色粘質土。強く締まる。粘性強。微粒の土塊、炭化物が全体に混じる。
- 10a 黒褐色粘質土。10層よりも濃色。砂粒混じる。
- 10b 黒褐色粘質土。10層よりも濃色。
- 11 暗褐色粘質土。強く締まる。粘性強。微粒の炭化物、土塊が全体的に混じる。
- 12 暗褐色粘質土。強く締まる。粘性中。礫をまばらに含む。土塊、炭化物が全体的に混じる。
- 13 暗褐色粘質土。強く締まる。粘性強。小さい土塊、小礫が混じる。
- 14 黄褐色粘質土。強く締まる。粘性中。小さい土塊、小礫が混じる。
- 15 暗黄褐色粘質土。強く締まる。粘性強。微粒の土塊、炭化物が混じる。
- 16 暗黄褐色粘質土。強く締まる。粘性強。微かに少量の炭化物が混じる。
- 17 暗黄褐色粘質土。強く締まる。粘性強。微粒の炭化物、土塊が全体的に混じる。
- 18 暗褐色粘質土。炭化物、土塊を含む。下に焼土、炭化物のうすい広がりが見られる。
- a 褐色土。岩盤礫である。オレンジ色の5cm前後の固まりをブロック状に含み、コブシ大の礫も少量含む。現代石垣の裏込め。
- b 暗褐色土。近・現代の陶磁器片、コブシ大の礫を僅かに含む。
- c 濃褐色土。a・b層よりも、コブシ大の礫を多く含む(f層側に集中)。また、1cmほどの炭化物を下位に含む。
- d 濃褐色土。c層に比べ明く、礫も少ない。石垣の裏込めか。
- e 暗褐色土。礫層、コブシ大~50cm程の礫を少量含む。石垣の裏込め。
- f 濃褐色土。礫層、コブシ大~50cm程の礫を含む(瓦片を含む)。整地の為のものか。
- g 橙褐色土。岩盤礫と土が混じる。カーボンを含む。
- h 暗褐色土。岩盤礫が土壌化した層。
- i 暗褐色土。c層に類似するが1cm大の礫や同岩盤礫を少量含む、炭化物も含む。
- j 褐色土。i層に比べ淡い色。1cm以下の岩盤礫、礫、炭化物を少量含む。
- k 岩盤礫の割合が少ない。
- l 淡褐色土。j層に比べ色調が淡い。
- m 明褐色土。岩盤。地山。
- n 暗褐色土。p層に比べ汚れている。
- o 明褐色土。大きなブロック状に黄褐色土が混じる。
- p 明褐色土。粘性があり褐色粘質土をブロック状に含む。
- q 岩盤。地山。

第50図 IIb区土層断面図 S=1/50



第51図 IIb区SW01・SW02実測図 S=1/50



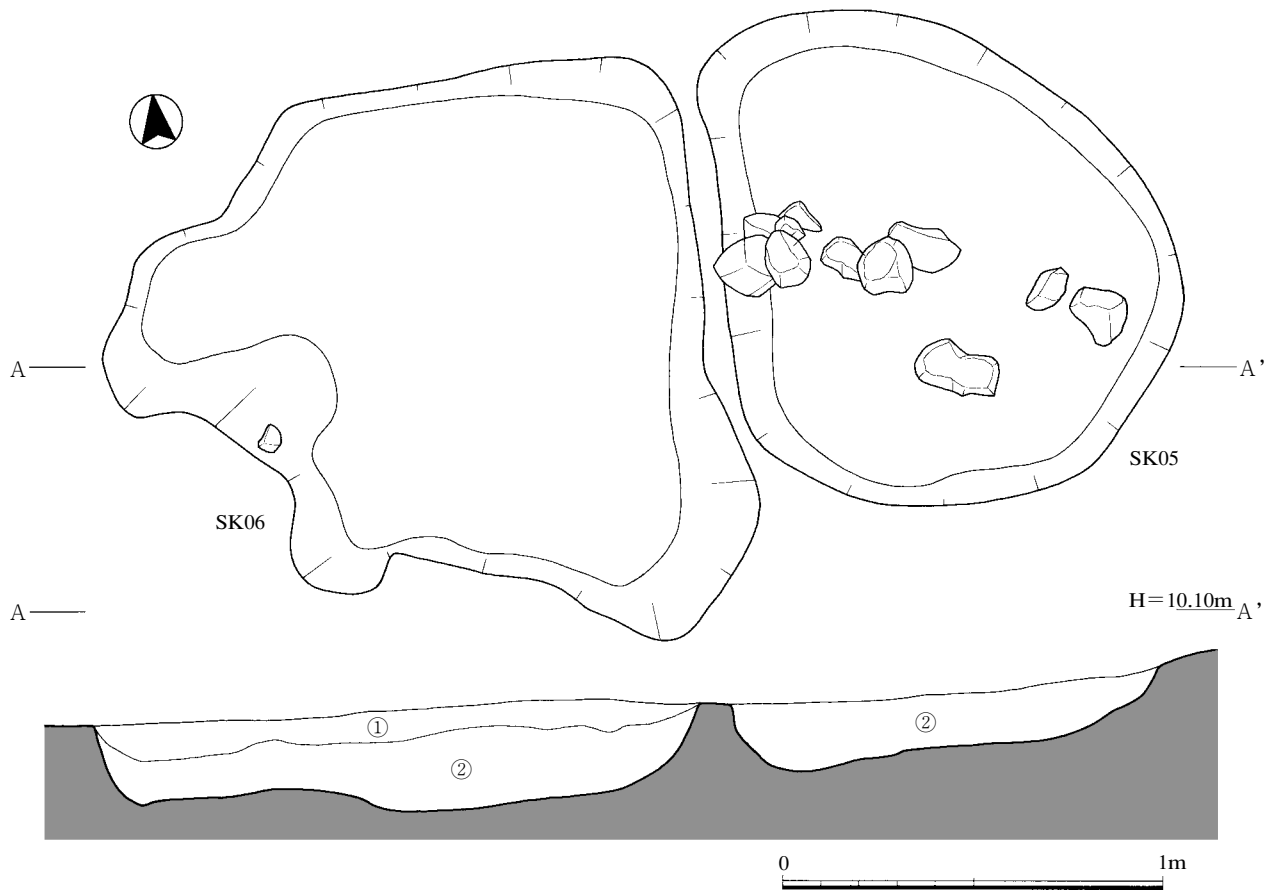
- ① 灰黄色土。強く締まる。粘性中。ブロック状の黄色土を含む。細かい炭化物が混じる。
- ② 灰黄褐色土。締まりがある。粘性弱。やや砂質。ブロック状の黄色土を含む。
- ③ 暗灰黄色土。締まりがある。粘性中。ブロック状の黄色土を含む。細かい炭化物が混じる。
- ④ 黄灰色土。締まりがある。粘性強。ブロック状の明赤褐色土を含む。細かい炭化物混じる。
- ⑤ 黄灰色土。強く締まる。粘性中。
- ⑥ 暗灰黄色土。締まりがある。粘性強。マンガンが集積する。
- ⑦ 暗灰黄色土。強く締まる。粘性中。1 cm前後の礫を多く含む。ブロック状の黄色土を含む。

第52図 Ⅱb区SK04実測図 S=1/20

【SK04】(第52図)

この遺構は調査区を中心よりやや北側で検出した土坑である。

長軸が2.5m、短軸が1.8m、確認面から深さ20～30cmを測る。形状は隅丸の長方形である。ただ、遺構の土層断面を確認すると少なくとも2遺構の切り合いであったように見える。しかし、調査担当者の判断でここでは1遺構とする。



- ① 黒褐色粘質土。やや締まり。ブロック状の黄褐色を含む。細かい炭化物が混じる。
- ② 黄褐色粘質土。締まりがある。細かい炭化物が混じる。

第53図 II b区SK05・SK06実測図 S=1/20

【SK05】(第53図右)

この遺構は調査区のほぼ中心部分で検出した土坑で、SK06と並ぶ。形状は不整形で、長辺が1.95m、短辺が1.80m、確認面からの深さ15~20cmを測る。埋土は大きく2層に分かれる。

①層は、黒褐色を呈する粘質土である。微量の黄褐色土をブロック状に含む。②層は、黄褐色を呈する粘質土である。締まりがあり、微少な炭化物が混じる。

【SK06】(第53図左)

SK05と並んで検出された遺構で、当初は一体のものと考えたが、精査の結果、別のものであることが分かった。形状は不正形な卵形を形成する。長軸で1.45m、短軸で1.2m、確認面からの深さ15cmを測る。埋土は一層である。埋土中に礫がいくらか入るが、遺構に関係するものかどうかは不明である。

【SK07】(第48図)

この遺構は、調査区の西側の位置し、一部が調査区内に含まれているものである。全体像がつかめないが、かなり不整形な遺構で、縁全体及び壁面は焼きしめたように硬くなっている。埋土中にも炭化物や焼土が多くみられる。これらのことから、この遺構内で直接火が使用され、それも一時的に強い火力が使用されたか、長期に渡る使用が考えられる。ただ、遺物が確認できていないため、所属時期は不明である。

(4) 出土遺物

【SW01の出土遺物】(第54図～第68図)

SW01は石積遺構で、その裏込めの石片や土に混じって出土したものである。近世の陶磁器や瓦片、瓦質土器など、様々な遺物である。

253から328までは、陶磁器である。時期的には肥前系陶磁器編年の第Ⅳ期～第Ⅴ期を中心とする。18世紀から19世紀半ば頃までである。

253～279は、碗類である。253は、器壁が薄く、高台径が4.2cmを測る。高台内銘として、「大明年製」の4文字がある。体部の文様は欠損のため不明確であるが、花文のようである。254は、器壁が厚く、底部では1cm近くある。体部には、梅文様が描かれる。

255～257は、外器面体部に網目文を施したものである。255は、外器面に斜格子網目文が描かれる。器壁は全体的に厚い。256は、文様の定着が悪く薄くなっている。外器面体部に2重網目文が描かれ、内器面の全体を使って花文が描かれる。見込中心に花文を描き、その周囲に二重圏線を巡らし、3重の花弁様の線書き模様を施す。高台内銘があるが、良く読めない。257は、256と文様構成は同じであるが、退化している。外器面体部の2重網目文は網目ではなく、連続2重三角文のようにみえる。内器面も花卉の簡略化が進んでいる。高台内銘は、崩れた方形枠渦福である。

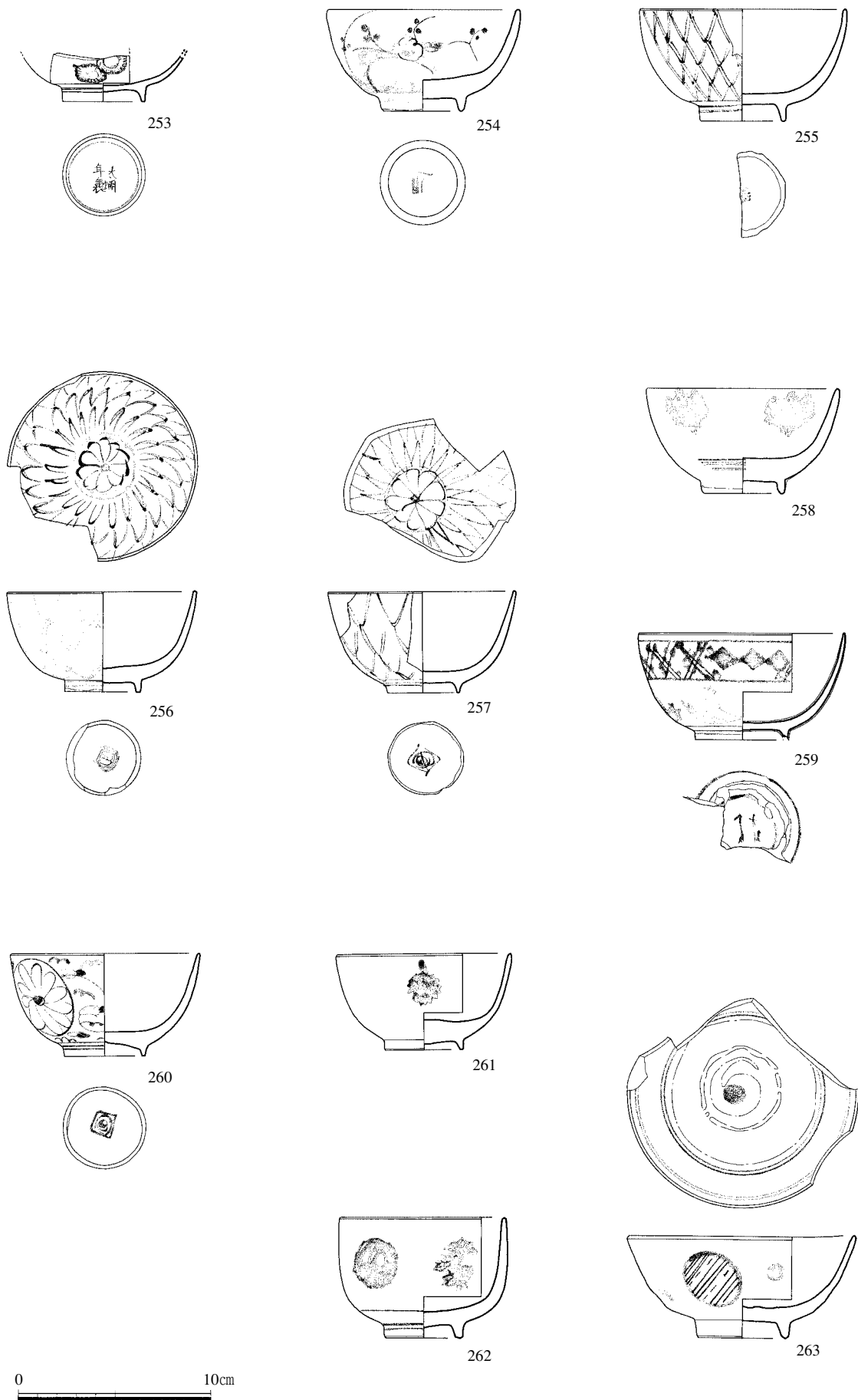
258は、体部外器面には、型紙刷りによる桐花文のようである。全体的に器壁は厚く、底部は非常に厚くなっている。高台の畳付部分は無釉で、わずかに砂がみられる。259は陶胎染付で、器表面に貫入がはいる。外器面体部上位には2本の圏線の間には襷文と3連の菱形文が描かれ、その下位には大根文が描かれる。器壁は全体的に薄く、体部下位がやや張る。高台は欠損しているが、もともとあまり高くないようである。高台内には2行4文字銘が書かれ、形がかなり崩れているものの「大明年製」のようである。260は、外器面体部に全体的に絵が描かれている。円に菊文とその周囲に変形の唐草文が描かれる。高台は削り出しによるもので、高さは低い。高台内には銘款として四角に「渦福」らしきものが描かれる。261は外器面体部に菊花文らしき文様が入る。高台径は小さく、3.4cmほどを測る。高台畳付け部が無釉で砂が付着する。262は、外器面体部に鶴文、内器面に松文が描かれる。文様は滲む。263は、口径の広いもので、外器面体部に丸に斜線文、点文が描かれる。高台畳付け部分は釉が薄くなり、砂がわずかに残る。内器面上位に2重の圏線、見込部分に2重の圏線、その内側は釉剥ぎされ中心部に点文が描かれる。釉剥ぎ部分に高台形の砂目がのこる。264は、外器面の染付文様の定着が悪く、薄くなっている。文様は植物文を基本とするようである。高台径は3.1cmを測り、高さも低く小さい。内器面見込部分に圏線と中心に一字銘がはいる。

265は、灰釉の丸碗で基本的に無紋であろう。ただ、これは外器面に淡緑灰色の文様らしきものが入るが、傷の可能性もある。高台は削り出しで、断面形が方形である。高台部分のみ無釉である。高台径は3.2cmを測り狭い。266も灰釉のものであるが、265に比べやや青みかかっている。高台の畳付けには砂が残る。高台径は3.5cmを測る。

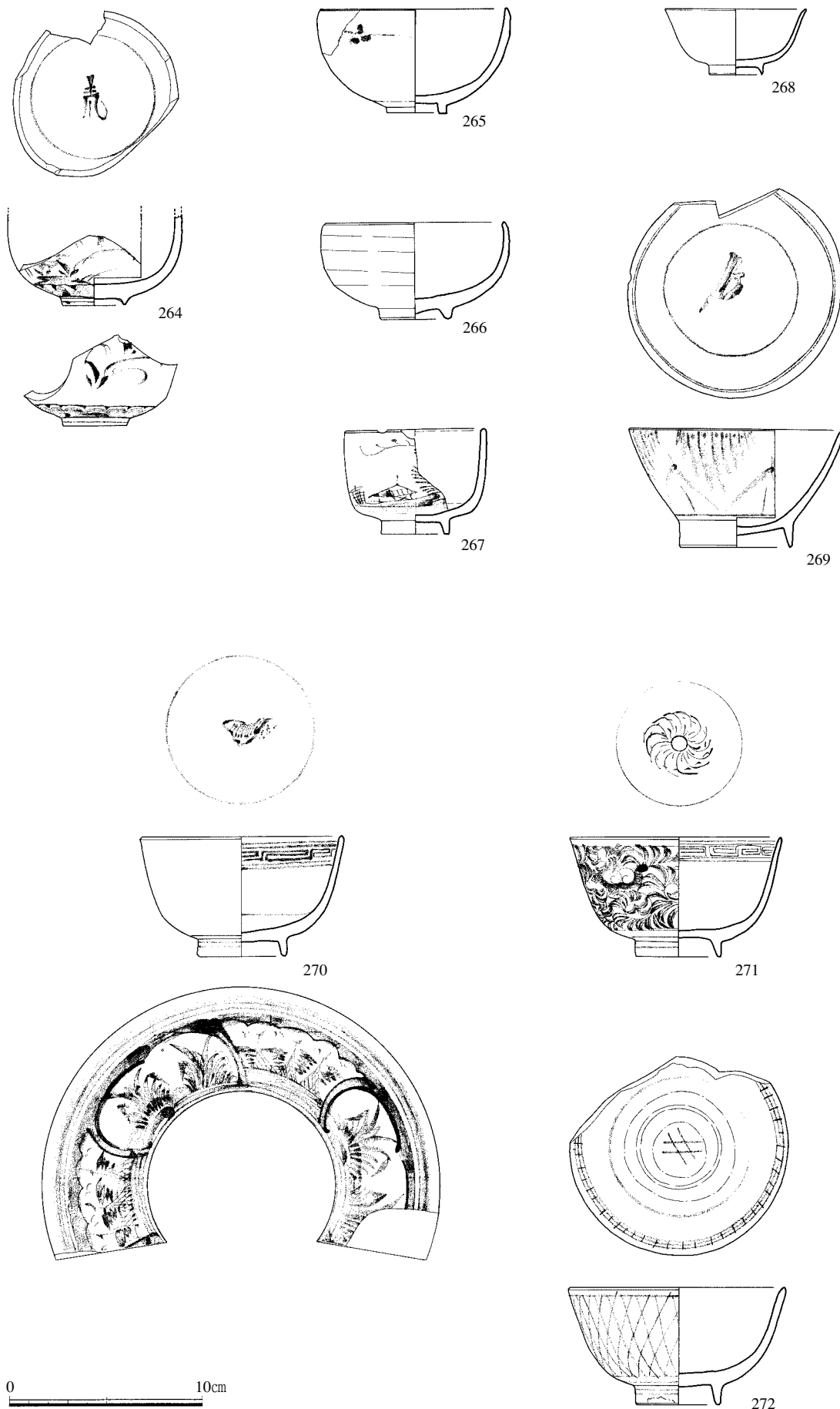
267は小型の筒形碗で、外器面体部に崩れた山水文等が描かれる。高台畳付けは無釉である。268は、無文の小型端反碗である。

269は、広東碗で、高台部から口縁までほぼ直線的に体部が伸びる。外器面体部には菖蒲文らしき文様が描かれる。内器面見込には崩れた文字銘が書かれる。

270は、口径が10.1cm、器高が6.1cm、底径が4.4cmを測る。外器面には全面に菖蒲文等を描き、内器面口縁部には変形雷文、見込には円圏とその中央部に退化した線描きによる文様が描かれる。釉薬は透明釉である。271は、外器面体部全面に草文様等を描き、内器面口縁部には変形雷文、見込には円圏とその中央部に退化した線描きによる花文が描かれる。



第54図 II b区SW01出土遺物実測図(1) S=1/3



第55図 Ⅱb区SW01出土遺物実測図(2)

S=1/3

272は、外器面体部に斜格子文、内器面口縁部に格子文、見込には円圏とその中の斜格子文がそれぞれ描かれる。内器面には蛇の目釉剥ぎが施され、そこに砂目が残る。高台の畳付け部分だけが無釉である。

273は、無紋の碗である。274は京焼風陶器の丸碗で、外器面体部に山水文が描かれる。275は、無紋の丸碗で、器壁はやや厚い。276は、無紋の端反碗である。

277も、褐緑色の釉のかかる丸碗で、体部に花文らしき文様が白土の象嵌で描かれる。高台付近は無釉である。胎土は灰黒色を呈する。

278は、やや大型の陶器碗であるが、他の肥前系ものとは器形も胎土も異なる。在地の窯による可能性がある。胎土は暗灰色を呈し、軟質である。外器面体部には山水文が描かれる。高台は削り出しによるものであるが、内部の削り込みが深く器壁が薄くなっている。279も胎土は278に似る。器形は端反碗で、器壁は薄い。内外器表面は褐緑色の釉を素地に厚めに白化粧土をハケ等で塗っている。

280～283は肥前系の京焼風陶器である。280は281のやや具象的な文様が、かなり形式化し、様式化している。文様は褐釉により、山水文の形骸化したものであろう。282もほぼ同様のものである。281は、見込に鉄釉による山水文らしき文様が描かれている。高台は削り出し成形で、露胎である。高台内には、草書体で「清水」の押印がなされている。283は器形としては皿に近く、見込には山水文が鉄釉で描かれている。高台は削り出しによるもので、高台内には「松原」の押印がある。

286～295は、陶器皿である。

286、287は褐釉がかけられ、見込には蛇の目釉剥ぎがみられる。高台付近は無釉で、削り出し高台である。削り出しが雑で高台内が浅くなっている。畳付けには胎土目の跡が残る。両者は非常によく似ている。290は、褐釉が内器面と外器面体部上位まで施される。見込に蛇の目釉剥ぎが施される。口唇部に黒色釉が巡る。口唇部は輪花文状になるので型押しも考えられる。高台は無釉で、畳付けには胎土目が残る。291は、皿というより碗に近い形態である。透明釉を高台よりやや上までかける。見込は蛇の目釉剥ぎされる。高台は削り出しによるが、高台内の削り込みが浅い。292は、口縁が緩やかに伸び、やや内傾気味のものである。ロクロ成形で、高台は露胎である。内器面見込には蛇の目釉剥ぎがなされている。銅緑釉で、緑～青色で内器面は発色しているが、外器面はほとんど透明釉のようになっている。内野山系統の窯によるものである。

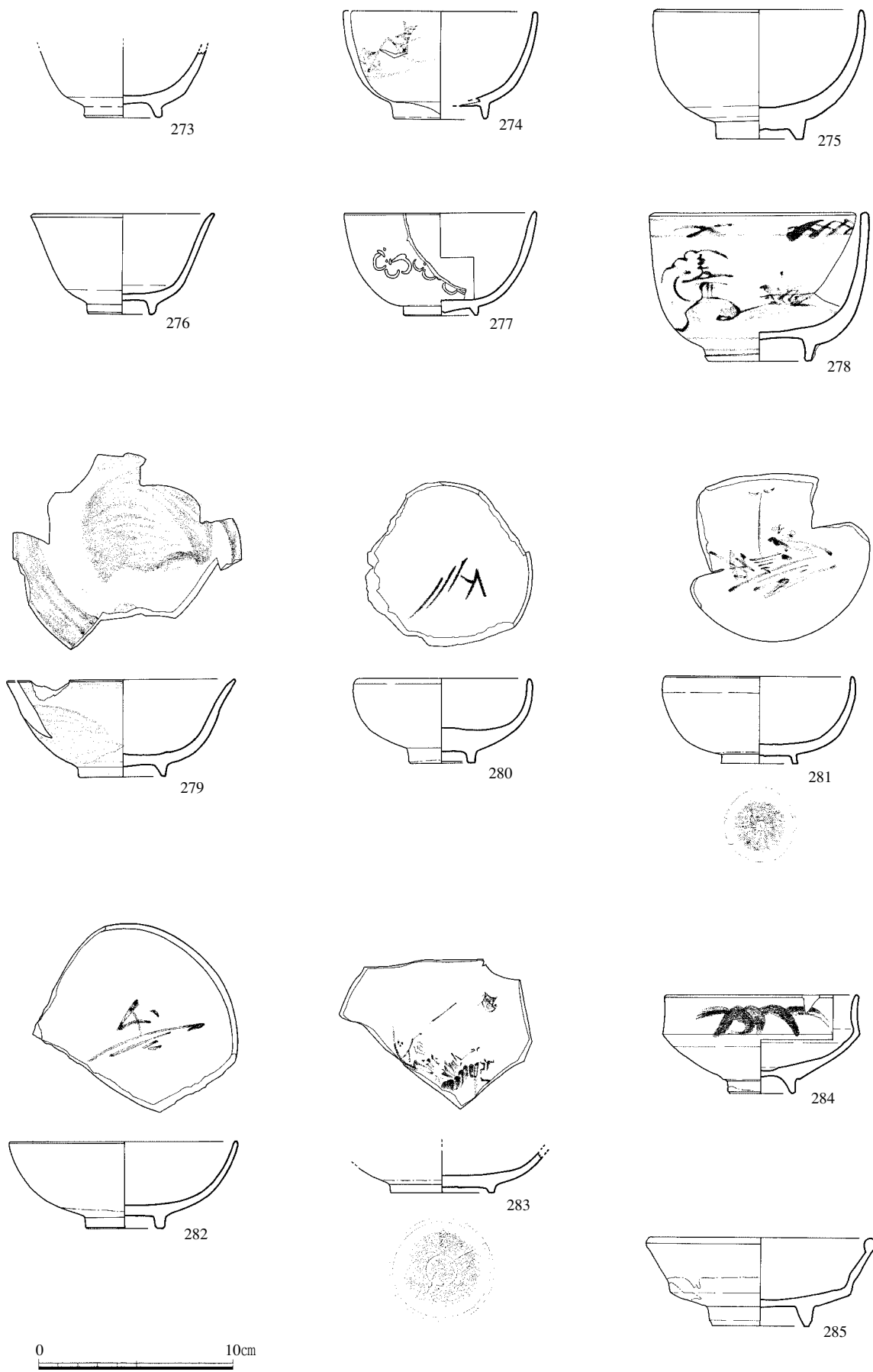
293は手塩皿で、黒灰色の胎土に濃い褐色釉がかかる。釉は淡青色に変化している部分もある。見込には桜花文や渦巻き文、圏線に白色土を埋め込む象嵌による文様がみられる。これは地元の八代焼きなどにみられる技法である。

295は、鉄釉による地に緑色釉による絵が描かれている。内器面には見込みに蛇の目釉剥ぎがなされ、重ね焼きの痕跡も残っている。高台は削り出しによるものである。高台の畳付きの部分と内部は釉がかけられておらず、貝目痕らしき跡もある。

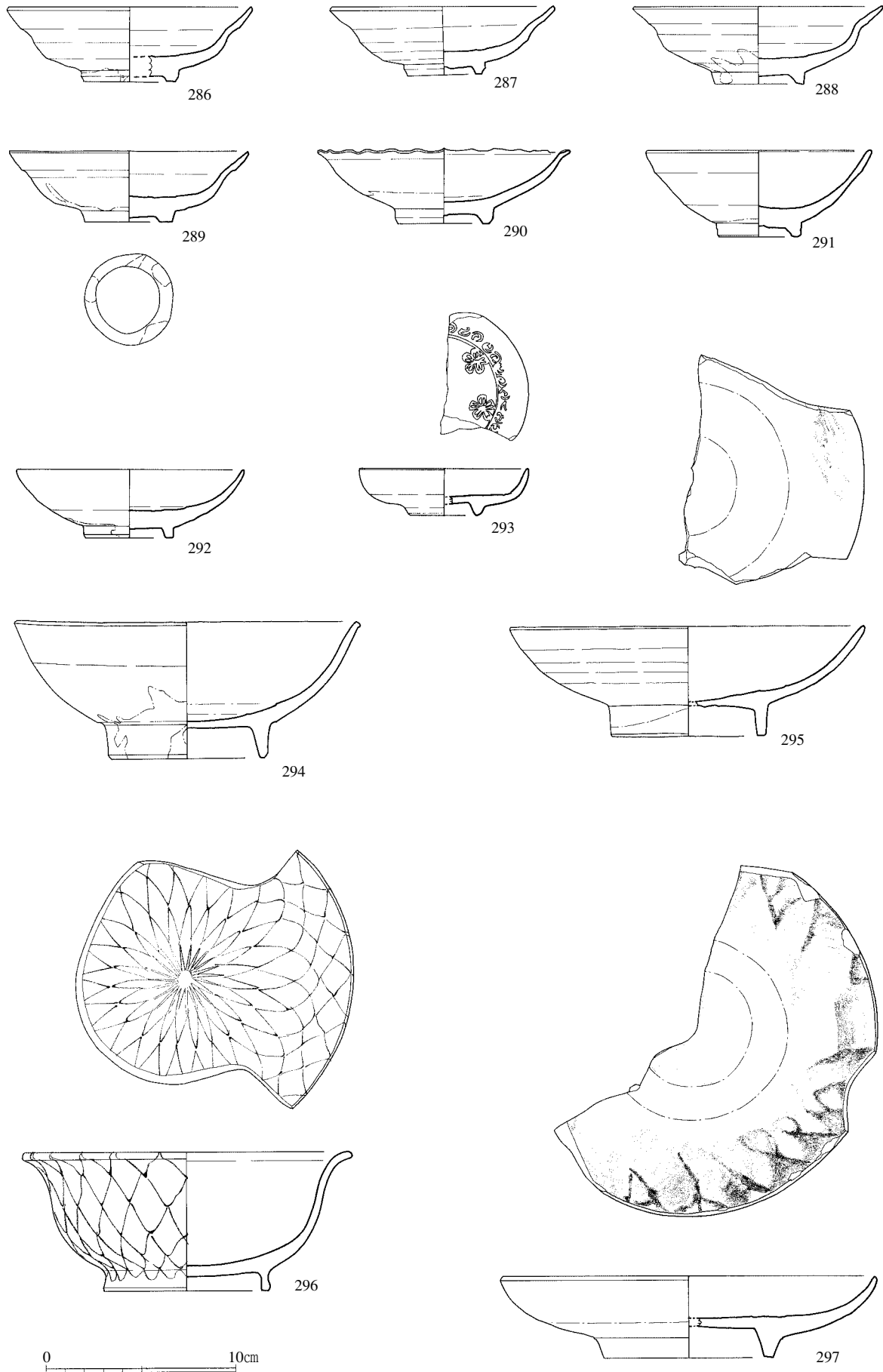
296は、磁器の鉢で、口縁部が強く外反している。内器面・外器面共に細線による網目文が描かれる。高台畳付は釉が剥がれている。白磁胎に透明釉がかけられている。19世紀代のものであろう。

297は、陶器製の中皿である。内器面と外器面の上位に薄い白色の釉がかけられている。内器面の口縁部には白化粧土をハケ塗りして文様としている。中心部にも同じくハケ塗りしている。蛇の目釉剥ぎされている。外器面の下位はほぼ無釉で、高台は削り出し高台によるものである。高台内の削り込みは深く、器壁が薄くなる。

298は、磁器の中皿である。見込みの文様構成から芙蓉手のものであろう。中心にはコンニャク印判の五弁花が描かれる。外器面体部には、唐草文が施される。高台は低い。高台内銘には「大明・・・年・・・」とある。メハリ跡が2箇所に残る。



第56図 Ⅱb区SW01出土遺物実測図(3) S=1/3



第57図 II b区SW01出土遺物実測図(4) S=1/3

299は磁器の皿である。高台からの立ち上がりは急である。口唇部には鉄釉が塗られ、内器面には雲文が体部を巡り、見込中央部にはコンニャク印判による五弁花文がある。外器面体部にはかなり崩れた唐草文が巡る。高台は低く、高台内銘として、崩れた「大明年製」と思われるものが書かれている。300は、高台の復元径が17.4cmを測る大型の皿である。見込には花文が描かれ、その周囲に2重の圏線が巡る。その外側には部分的な図柄から松竹梅を中心としたものであろう。外器面体部には唐草文が巡るようである。高台は低い。高台内にはハリの跡が残る。301は、緑釉のかかる浅鉢もしくは深い皿であらう。口縁部が折り縁となる。見込には円圏と旭日状の線書き文様が線彫りされる。高台は蛇の目で、畳付は釉剥ぎされている。

302は、復元口径が28.0cm、復元底径が18.0cmを測る大皿である。外体部には簡略化した唐草文がはいる。見込には朝顔文らしき文様がはいる。高台は削り出しであるが、それほど高くない。高台の畳付け部分のみ無釉である。高台内には円圏内に文字らしきものの一部がみえる。

303は、八輪花中皿で、口唇部が薄くなって外反している。見込みには牡丹らしき文様がある。その周囲に松折文などが配されている。外器面体部には唐草文が巡る。高台は削り出しの浅いものである。高台内部の中心に「渦福」が描かれている。メハリの跡が2箇所見られる。

304は、磁器皿である。見込は外側から簡略した唐草文、2重の圏線が描かれ、その内部には蛇の目釉剥ぎが巡る。中心部にはコンニャク印判の五弁花文らしい文様の一部がみえる。外底面は釉が全面にかかっているが、高台畳付けは釉剥ぎされている。

305は、磁器製手塩皿である。灰色釉がかかり無紋である。見込みは蛇の目釉剥ぎされている。その釉剥ぎ部分に墨書で「二六」の文字が書かれている。これはこの皿の番号の可能性があり、製品番号か、ある家での保管番号であらう。

306も同じく磁器製手塩皿である。内器面には2重線による格子文様が描かれる。幅広い蛇の目釉剥ぎもなされ、重ね焼きの痕跡もみられる。高台の畳付は釉剥ぎされている。

307は型打ち連弁口縁の磁器皿である。見込の文様は体部側の退化し波線化した文様の間に墨弾きによる文様が描かれる。中心部に重ね巻物の絵が描かれる。外器面体部には唐草文が巡る。

308は、口縁部が強く反る磁器皿である。見込には、口縁部に四方禪文、底部に山水文らしき文様が描かれる。外器面体部には圏線が2本巡る。309は、白磁の皿である。高台は削り出しによるもので、無釉である。内器面見込は蛇の目釉剥ぎされる。胎土は白色であるが、無釉の部分は淡橙色を呈する。

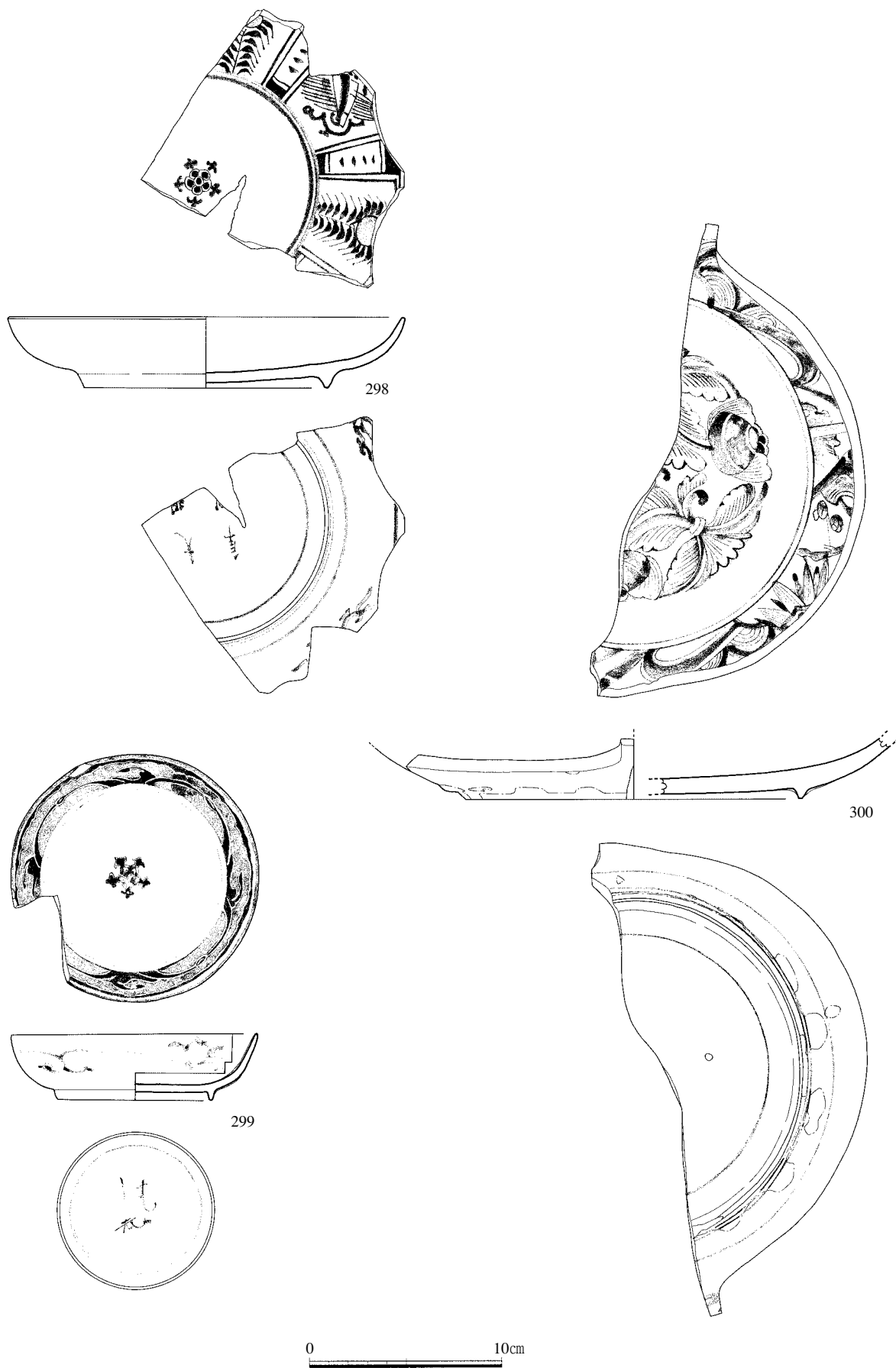
310は蓋付き碗の蓋である。天井部に高台様の摘みを持つ。天井部外器面はくまなく崩れた植物文と思われる線書きの模様が描かれている。内器面の見込の中心部には四方禪文が描かれ、口縁部付近に植物文が描かれている。

312は、白磁の手塩皿である。型押し技法によるもので、内器面の中心に円がありそこから放射状に24本の線が延びる。これらが稜を形成している。口唇部は釉が剥ぎ取られ、錆び釉が施されている。外器面は先の型押しの跡と底部近くに横の稜が走る。高台は削り出しによるもので断面三角状を呈する。内器面に砂が見られ、高台の畳付け部にも弱く砂らしきものが見られる。このことは重ね焼きの状況を示しているようである。

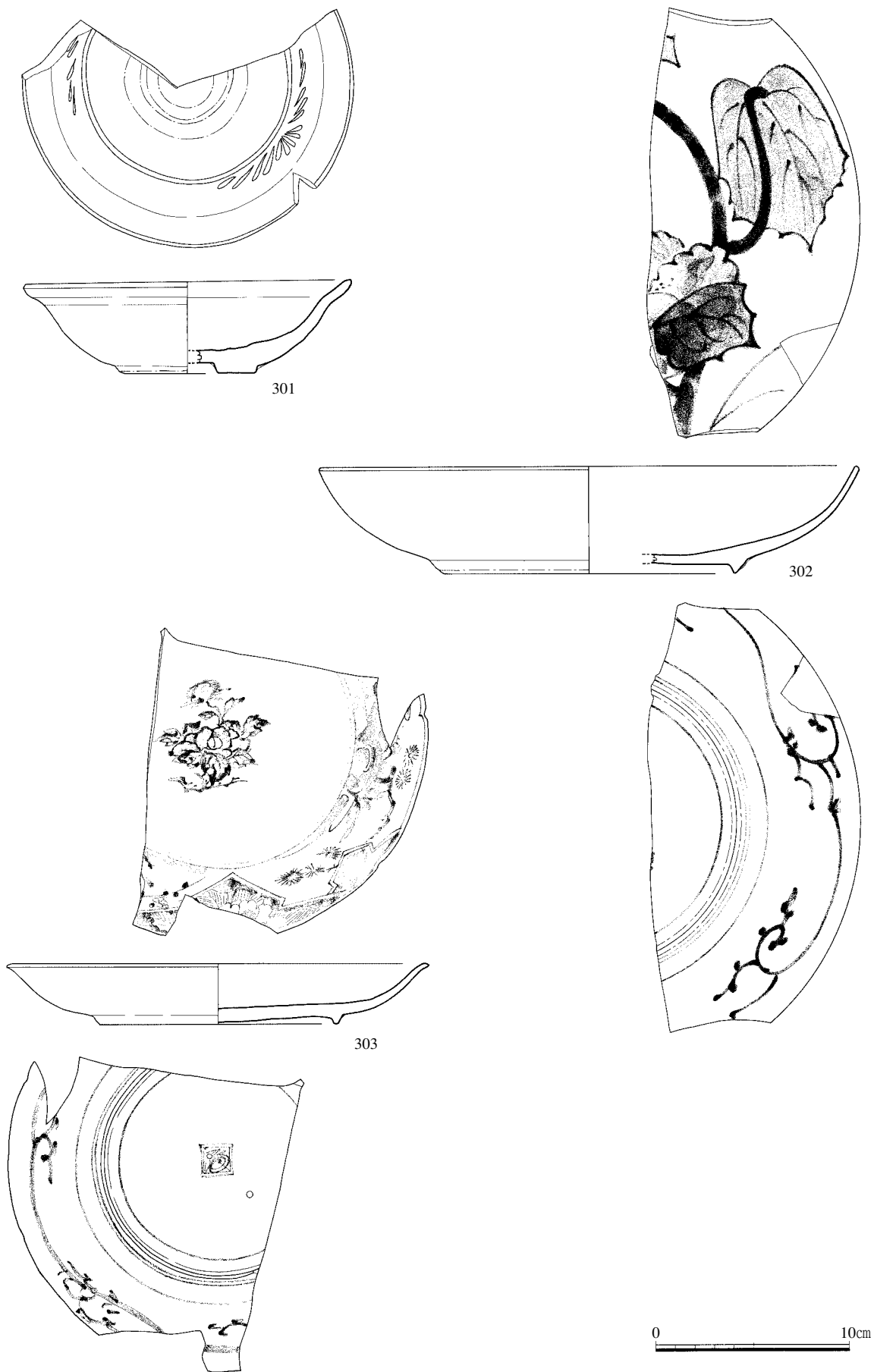
313は、白磁の小皿である。口縁部は強く外反している。器壁は薄く、胎土はよく精製されている。見込みには記号化した「喜」の文字が描かれている。型押しかどうかは不明である。

314は、蓋である。丸いツマミが頂部に付く。返しは直に付く。

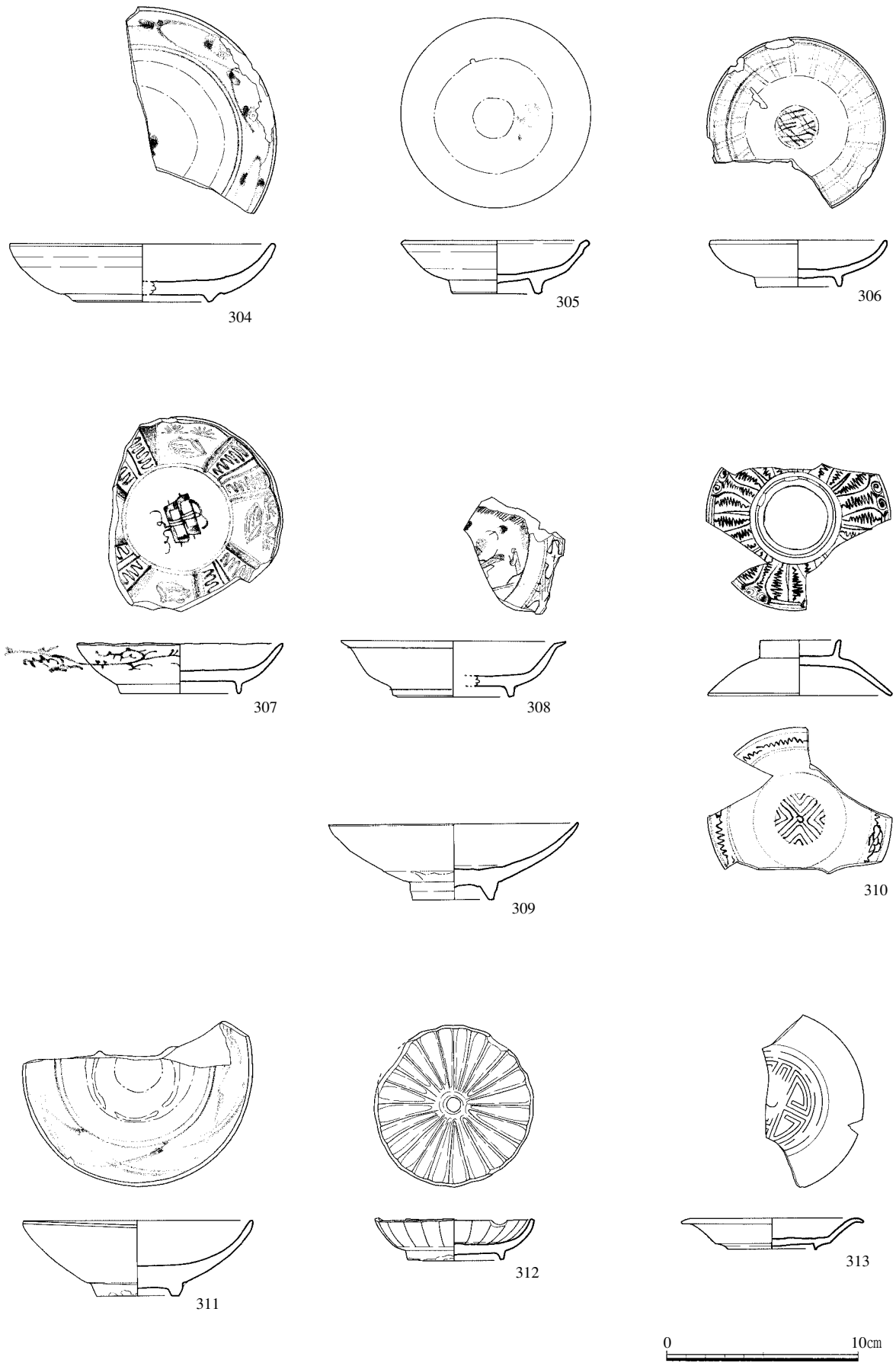
315・316は、小杯である。315は、色絵の小杯である。淡い緑色の地の釉に白地の雲文を出すため、線描の彫りこみを行い、その上に花卉やつるなど植物を描きこんである。器形の特徴としては、高台の下端部を削り、畳付けがほとんどなくなっている。文様は型紙により描かれる。316は、白磁の小杯である。破片の



第58図 II b区SW01出土遺物実測図(5) S=1/3



第59図 Ⅱb区SW01出土遺物実測図(6) S=1/3



第60図 II b区SW01出土遺物実測図(7) S=1/3

ため底部部分は不明であるが、体部から口縁部はやや外反が強くなっている。

317・318・321は、仏飯具である。317は、坏部に半菊花文が描かれる。19世紀前後のものである。318は、口縁部に斜格子文が施される。その下位に円圈が入り、高台との境にも入る。高台内の挟り込みは浅い。釉は削られている。杯部は、口縁部が上方へ垂直に伸びる。321は、無紋のもので脚部が短い。底部付近は無釉で、表面色は褐色を呈する。外底面には糸切り痕がみられる。18世紀代のものであろう。

319・320・323は、小型の花瓶である。319は白磁のもので、外底部から穴を空けているが、貫通してはいない。焼成の際の割れ対策であろうか。外器面に「今新作」の印が押される。320は仏花瓶の底部である。わずかに山水文らしきものの下部がみられる。323も小型の仏花瓶の底部である。外器面に植物文が描かれる。

322は、水滴で小型の箱形である。白磁のもので、上面に植物文様が陽刻されている。型押しによるもので、合わせ目が一部にみられる。器表面の文様ははっきりしないが、植物の枝葉であろう。内外器面底部には目の細かい布痕が残る。全面釉が施される。注口は上面角に空けられている。

324は、小型の磁器の火入れである。外器面体部上位と口唇部まで群青色の釉がかかっている。他の面は無釉である。高台は削り出しで、角落としをしている。

325は、青磁の鉢もしくは香炉の可能性はある。高台と呼べるまでではないが、蛇の目様に高まった部分には砂目が残る。外器面は淡青緑色の釉が底部を除いて十分かかっている。内器面は上位にわずかに釉がかかっているのを観察できる。このことから鉢よりも香炉などの可能性がある。内器面底部には砂目で砂質粘土を塗っている。これは窯焼きの際に重ね焼きをやった跡であろう。

326は、灰釉のかかった徳利みたいなものである。底部や胴部下部は無釉である。内器面も無釉である。

327は、小型香炉である。高台は削り出しによるもので、畳付けが細くなっている。肩部が丸くなり、口縁部は欠損する。

328は、白磁の徳利である。胴部上位に最大径がある。畳付け部分だけが無釉である。高台は削り出しによるものである。

329～345は、陶器である。いずれも肥前系のものが多い。

329・330は蓋である。土瓶の蓋であろう。329はツマミが宝珠形を呈している。特に文様はない。返しはほぼ直である。330のツマミは、擬宝珠的な形で、表面には黒褐色の草文様が描かれる。返しはやや内側に傾く。

331・332は、土瓶である。算盤形の胴部を持つもので、屈曲部より上位には褐釉がかかる。

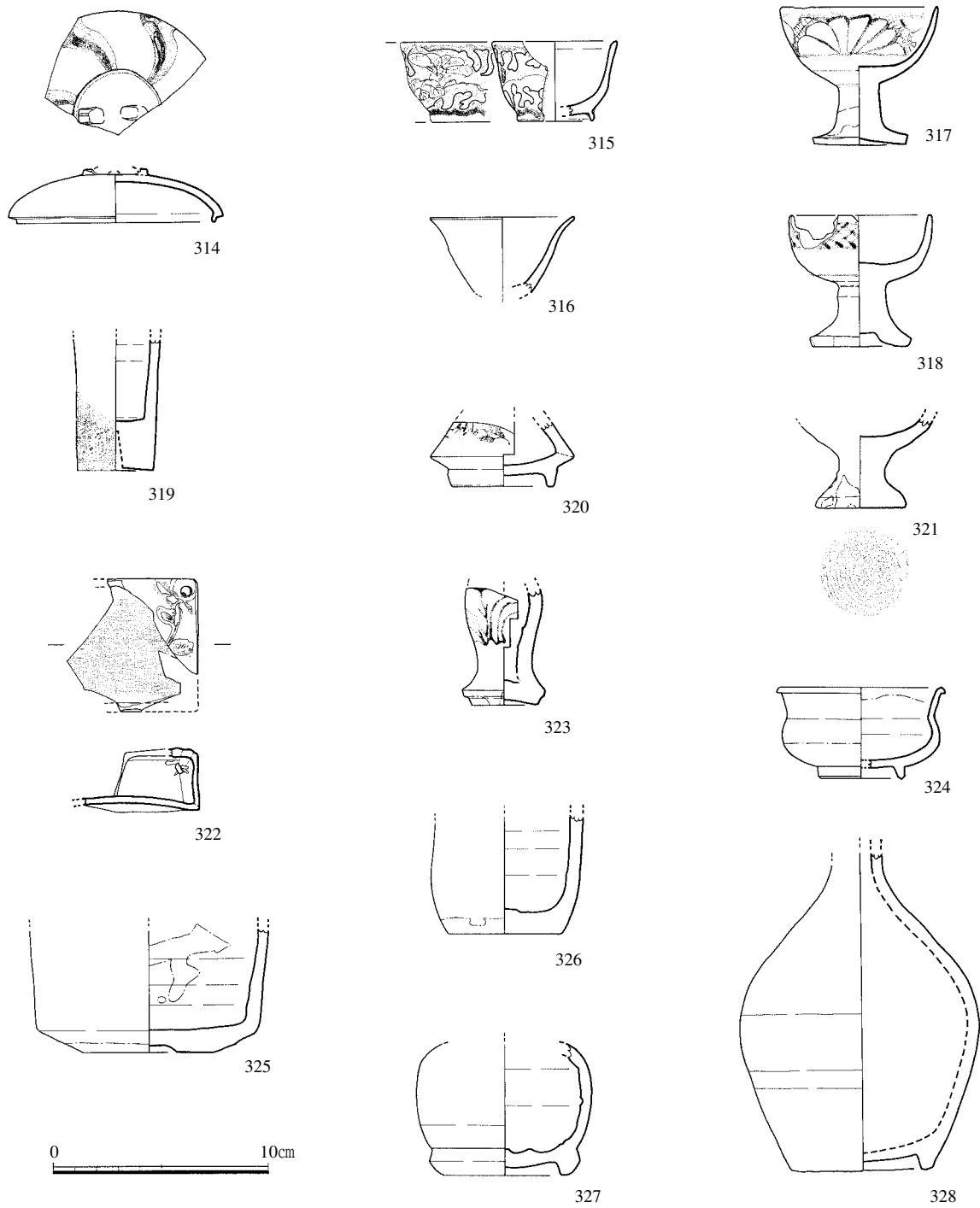
333は、小型の花瓶である。胴部形態は不明確である。頸部から長く伸びるなかで徐々に広がり、端部でより強く反り返る。

334は、焼締めの陶器で、壺である。特に釉はかけていないが、器表面には自然釉の弱い光沢がある。高台は削り出しによる。

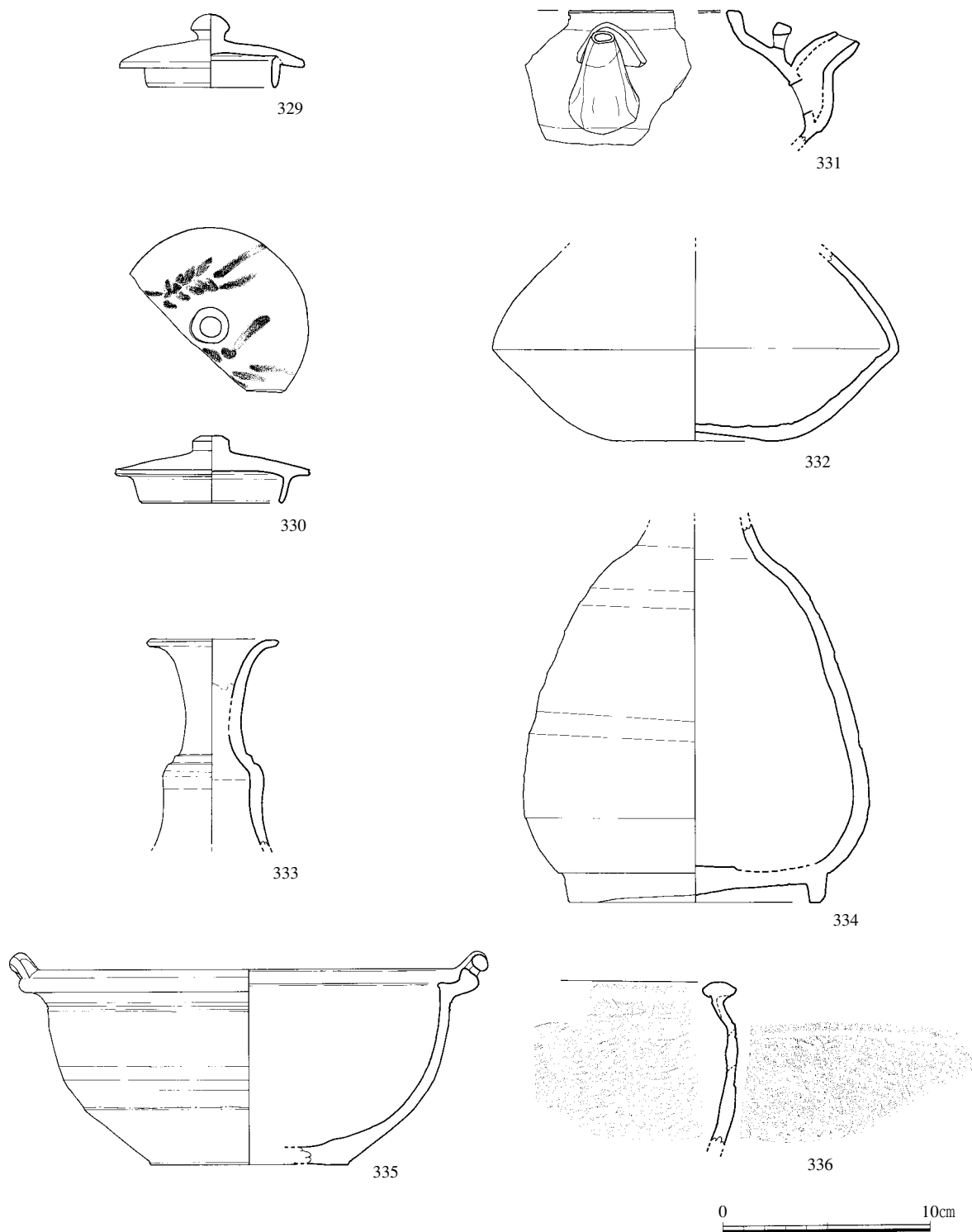
335は、柄付きの陶器鍋である。底部は平底である。把手は、両側に2箇所あるものであろう。胴部には2箇所の沈線があり、頸部に1本、胴部下部に1本はいる。

336は、陶器の鉢である。口縁部は厚くなっている。内器面にはタタキの当て具痕として同心円文状の痕跡が残る。外器面には格子タタキ痕とハケ目状の調整痕が残る。

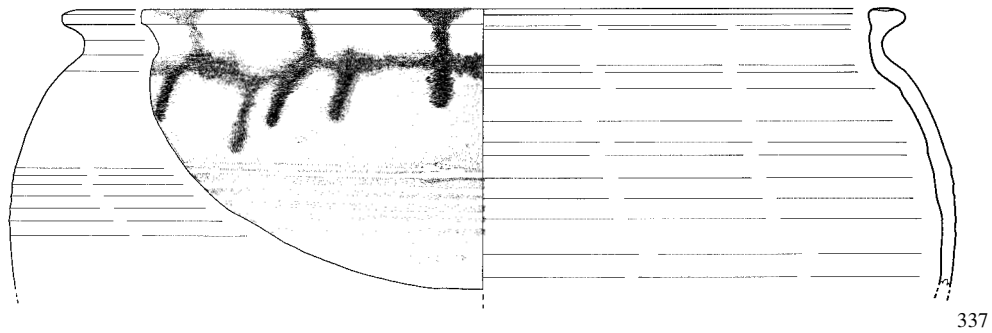
337～340は、甕である。唐津系統のものである。337は、外器面に掛け流しの文様がはいる。復元口縁は3.0cmを測る。口唇部は断面三角形を呈する。胴部外面には5本ほどの沈線が入る。338は、外器面には掛け流しの文様がはいる。口縁部は、二重に肥厚している。幅広の口縁を呈する。頸部は口縁部から8cmほど下にある。そこからやや膨ら、底部へ向けてしぼむ。頸部のやや下に獣面の浮き彫り文様が付いている。339



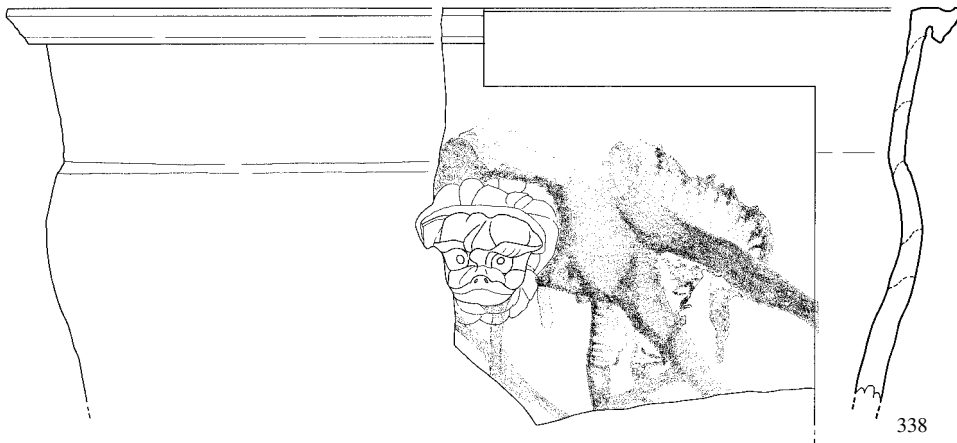
第61図 II b区SW01出土遺物実測図(8) S=1/3



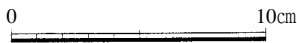
第62図 Ⅱb区SW01出土遺物実測図(9) S=1/3



337



338



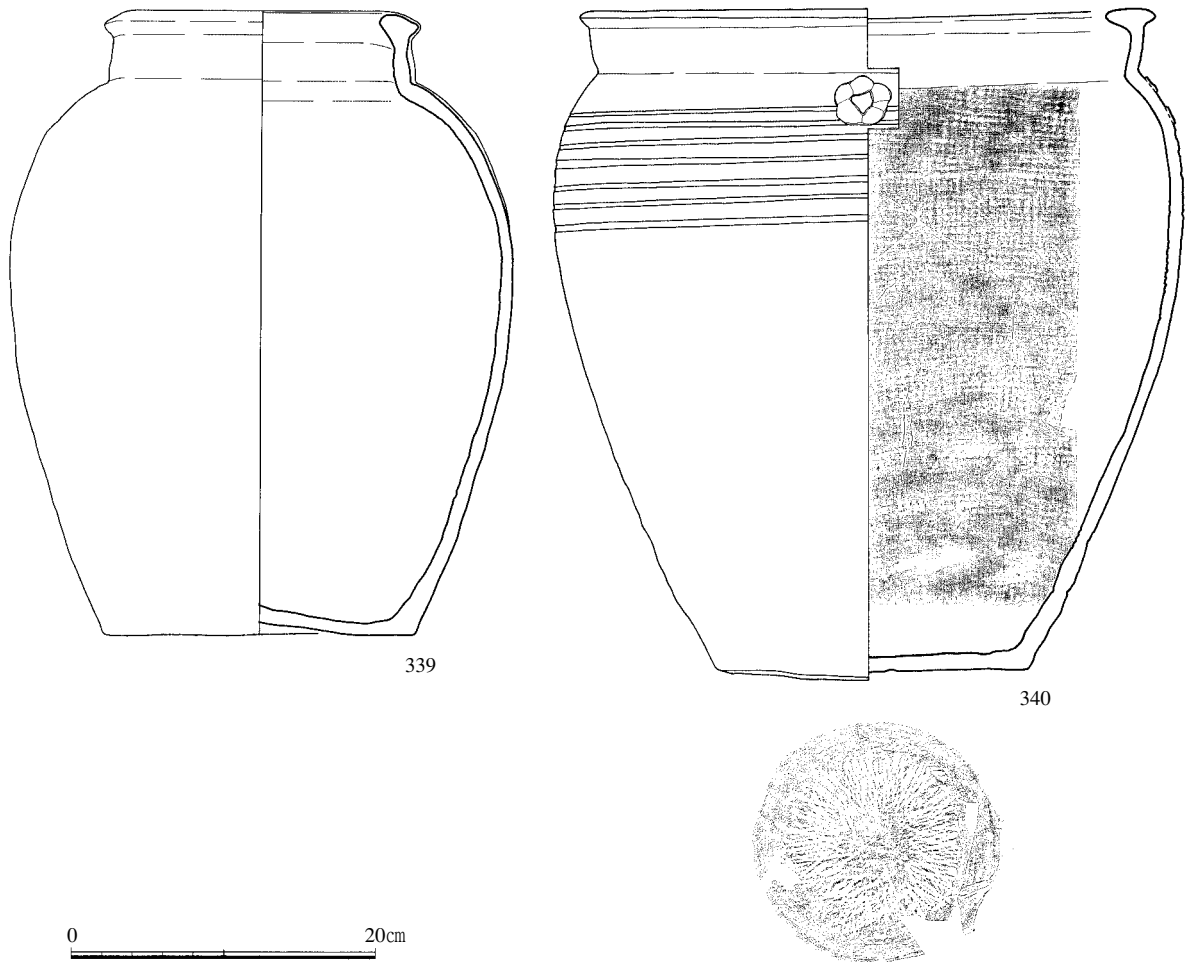
第63図 IIb区SW01出土遺物実測図(10) S=1/3

は、壺のように頸部からすぼまり、口縁部径が胴部径よりも小さい。口唇部断面は角の丸い三角形を呈する。胴部最大径は胴部のやや上位にある。底部はやや上げ底となっている。内器面には格子目当て具痕が、外器面には格子目タタキ痕が残る。また、器表面には自然釉が全体的にかかる。340は口径の広いもので、頸部下位に花びら状の貼付文様が入る。その下には7本の沈線が巡る。内器面には格子目タタキの当て具痕跡が残る。外底面には波状に沈線が入る。

341は、鉢もしくは播鉢である。

342は、肥前系の播鉢である。口縁部内面がやや肥厚している。口縁端部は丸くなり、直線的に終わる。内器面には、播目が9条を単位とする間隔の広い櫛描によって施される。櫛描きの端部はそのままである。全体的に器壁が薄く、ロクロによる調整が施される。施釉は口縁部付近にのみ施される。

343は、肥前系の播鉢である。全面に鉄釉が厚く施され、黒褐色を呈している。口縁部は肥厚し外反する。高台は貼り付けによるもので、削り調整がなされる。播目は12条ほどを単位とする櫛描きが密に施される。体部付近が施文された後に底部付近の施文がなされている。口縁部上部はナデ揃えられている。器表面はナデによりしあげられている。高台畳付きには砂が付着し、内器面底部にも砂が円形状に付着していることから、窯詰めの際に砂敷き窯詰法によって焼かれたことを示している。時期的には1750年～1800年ころである。



第64図 Ⅱb区SW01出土遺物実測図(11) S=1/5

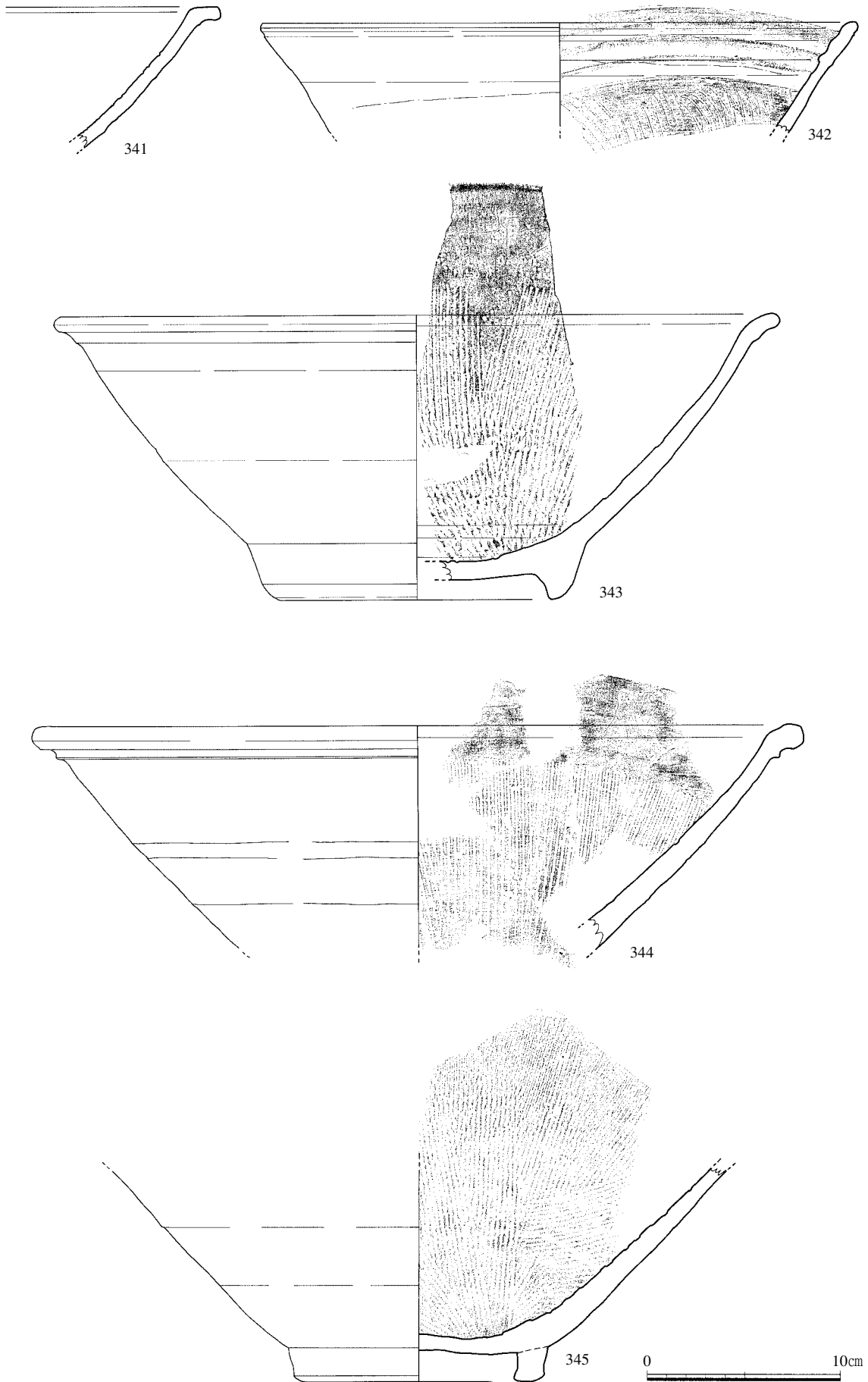
344は、ロクロ成形によるもので全体に無釉である。口縁部は外反し、口縁下位に貼り付けにより低い断面三角形の突帯を巡らす。拵目は17条を単位とする櫛描きが密に入れられ、拵目の上端はナデ消しによって揃えられている。

346～350は、瓦質土器の把手付小型鍋(把手付小型焙烙)である。346は把手がないが、器形的な特徴からこの中に入れた。底面は薄く平たい円形の板状を呈し、型押しで成形されたものであろう。当て布らしき圧痕が残る。これに体部を接合し、ロクロ成形している。底部外面以外はナデ調整が施される。これにさらに把手をつける。348は、その把手の外れた跡が残る。外底面には布痕がかなり残る。体部下端には何らかの工具による稜線が巡る。

350は、把手付小型鍋の把手部分である。長さは8cmほどである。把手は伸ばした粘土紐を小型鍋に張り付けるときにナデ調整を行っている。

これらの把手付小型鍋はいずれも底面に煤が付着していることから、火を使う調理に使用されていた可能性が大きい。

351は、瓦質土器の鉢である。板状にした底面の上に粘土紐を巻き上げて、ロクロ整形して仕上げたもの



第65図 II b区SW01出土遺物実測図(12) S=1/3

である。内底面には成形の際の指もしくは拳押さへの跡が残る。外底面にはロクロから剥がしやすくするための布痕が残る。

352・353は、瓦質土器の火鉢である。352は口縁部付近のみの破片である。やや内傾している。口縁端部付近で肥厚している。口唇部がもっとも肥厚し、その下位に花文がスタンプで押されている。その下位に細い突帯が3本巡る。器面調整は摩耗しはつきりしないが、内器面にハケ痕が薄く残る。

354は、瓦質土器の片口の挿鉢である。タタキ成形の後、ロクロによる器面調整が施されている。焼成は良好で、堅地である。片口部は狭く、幅3cm、突き出しが1.8cmほどである。内器面には挿目が入る。8条を単位とする櫛描きである。

355は、瓦質土器の火鉢の脚であろう。上位に獣面が作られ下端部には獣脚らしく作られている。接合痕が上位にみられ、火鉢本体に貼り付けられていたのであろう。

356は、焜炉である。上部口には3箇所突起が設けられ、容器を上に乗せるためのものである。また、火焚き口は部分的に確認できる。また、空気穴は数カ所空いていたものと思われる。胎土は良く精製されており、淡褐色を呈する。内器面に煤が付着している。

357～359は瓦質土器の火鉢である。357は、口縁が垂直に横に開く鏝部分を持つもので火鉢の一種である。口縁部は胴部とほぼ直角に屈曲し、口唇部は肥厚している。胴部と口縁部の内器面では接合部を削り取っている。全体的にいてねいなナデ調整もしくはミガキ調整がなされている。表面が燻され、淡黒色になっている。358は、口縁部が角張り、やや内傾する。横方向のナデ調整が施される。口縁下部に一穴空けられている。内器面は縦方向のヘラ削りが施されているようである。焼成はあまり良くなく、土師器様になっている。359は、口縁自体はやや内湾する。口縁端部はやや肥厚し、カマボコ状の突帯が上端部に巡り、その2.5cmほど下位に断面三角形ほどの小さい突帯が貼り付けられて巡っている。この2つの突帯の間には花卉文のスタンプが押されている。器面調整は摩耗して不明確であるが、ヨコナデされているようである。

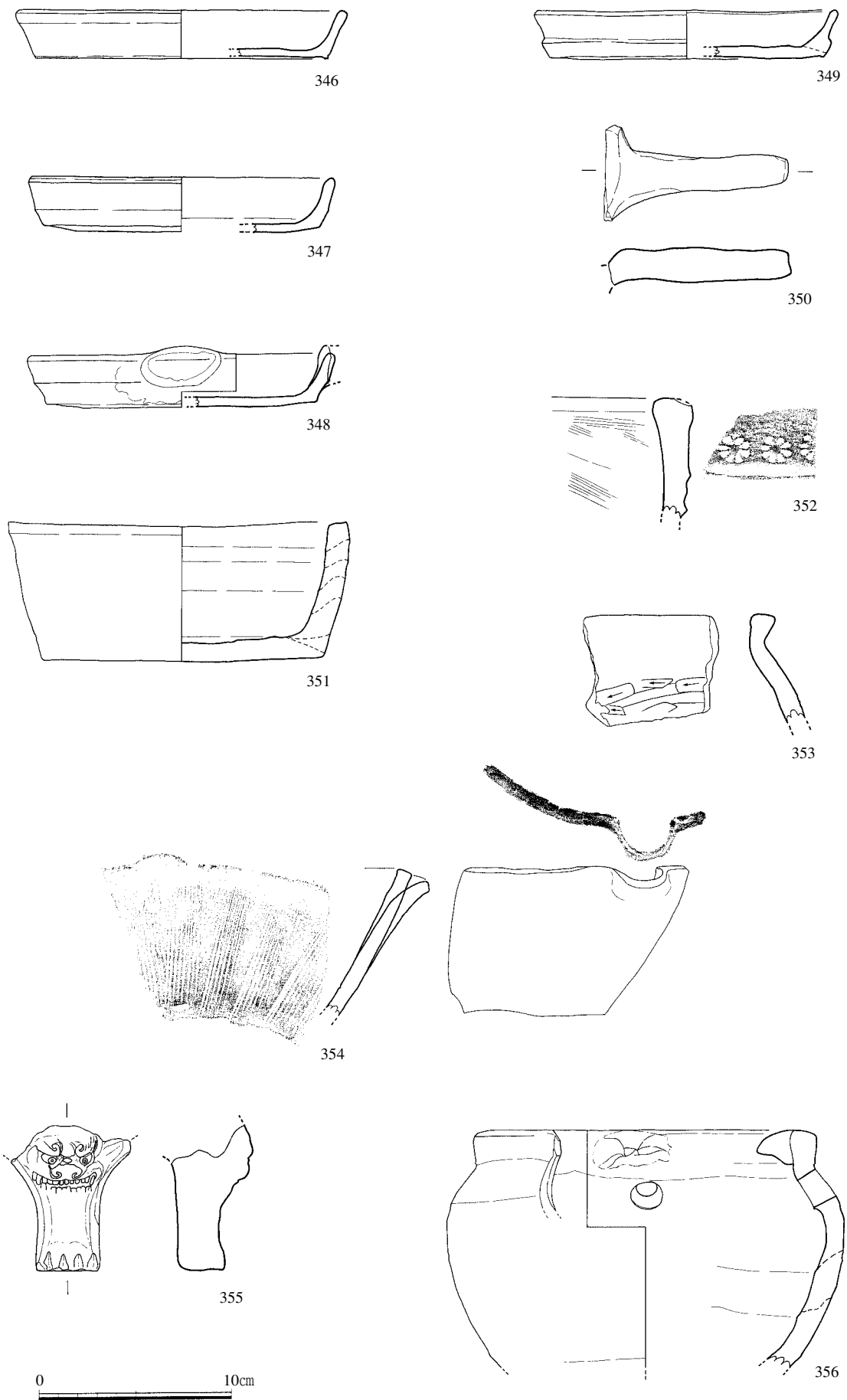
360は、瓦質土器の挿鉢片で体部下位から底部の一部まで確認できる。瓦質ではあるが、赤褐色を呈する。内器面には6本の櫛描きが間隔を空けて引かれている。端部は残り部分から推定すると、そのままであるようである。外器面にはタタキ痕が残り、タタキ成形であったようである。体部下端には横方向の回転ヘラ削りが施されている。無釉である。

361は、木の葉猿類似の土製品である。かなり欠損部が多く、全体の形状は不明確であるが、他の事例から馬形のものであろう。頭部は欠損している。頭頂部と耳の痕跡が窺える。四肢はともに欠損している。背に鞍もしくは猿像の接合部が残る。尻尾部分は比較的残り、一度持ち上げて垂らしているように見える。土製品としては比較的新しいものである。

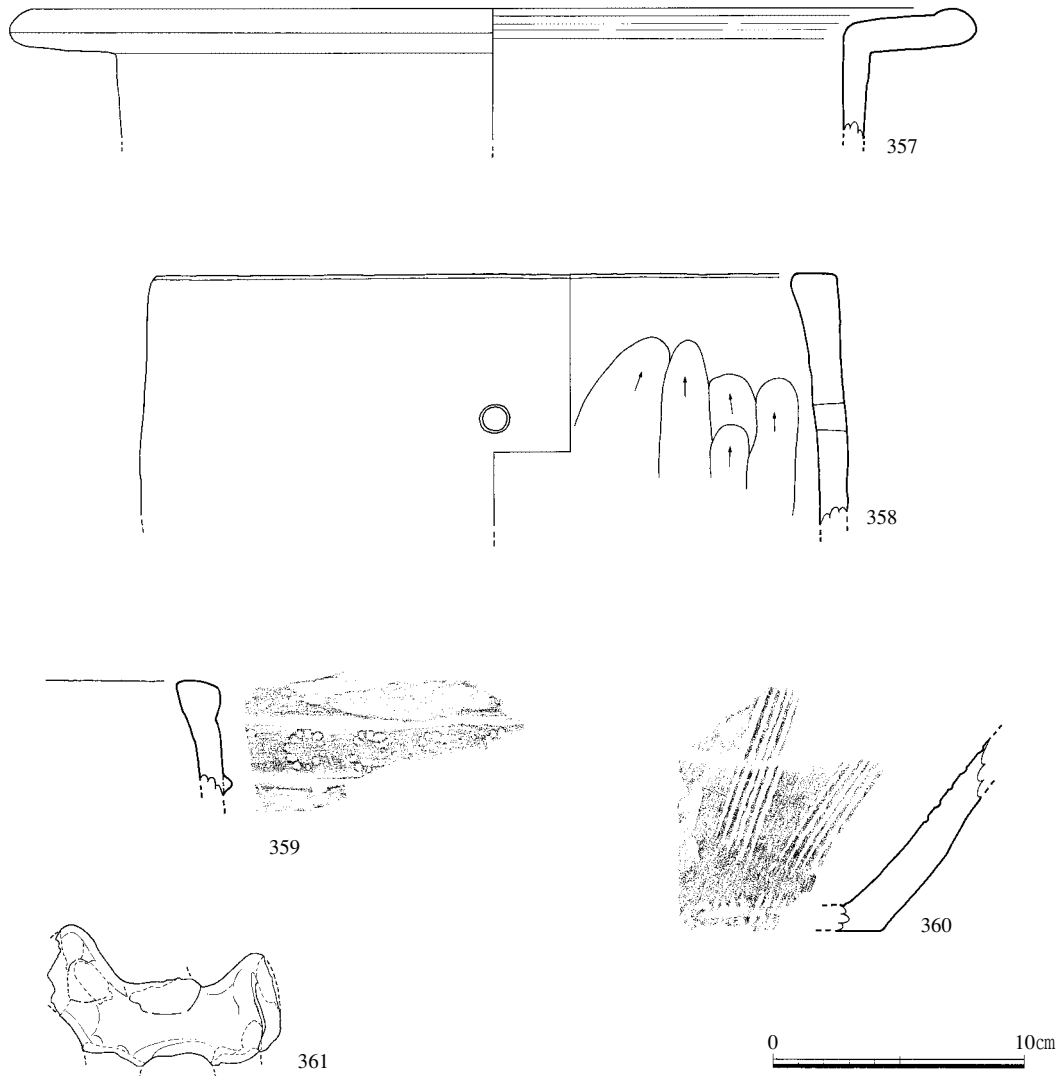
362～368は瓦片である。

362は、軒丸瓦の瓦当の一部である。外縁の中に九曜文と思われる中心の円文と周囲の2つの珠文が見える。九曜文とすれば、細川家の家紋が有名であるが、遺跡近くの妙見宮でも神紋として九曜文を使用している。ここでは、近くの妙見宮か神宮寺の瓦であろうと判断した。妙見宮の九曜文は星を示し、妙見信仰との関係から神紋としているようである。

363～365は、丸瓦の一部である。363は、凹面の玉縁連結部分に内叩き痕が残る。叩きの前に布痕跡ある。凸面側は丁寧なナデ調整がなされている。364は、凹面に粗い布痕が残り、玉縁の大部分まで覆っている。凸面にはわずかに叩きの痕跡があるが、丁寧なナデ調整でほとんど分からない。上の2点がやや厚手で、やや軟質で、胎土に素がはいるのに対し、365は胎土に砂粒を含み、須恵器のような焼き上がりになっている。凹面には細かい布目痕が残り、横方向の指し縫いの紐痕が入る。凸面では縦方向に丁寧なナデとミガキ調整がなされている。厚みは、先の2点より薄い。



第66図 Ⅱb区SW01出土遺物実測図(13) S=1/3



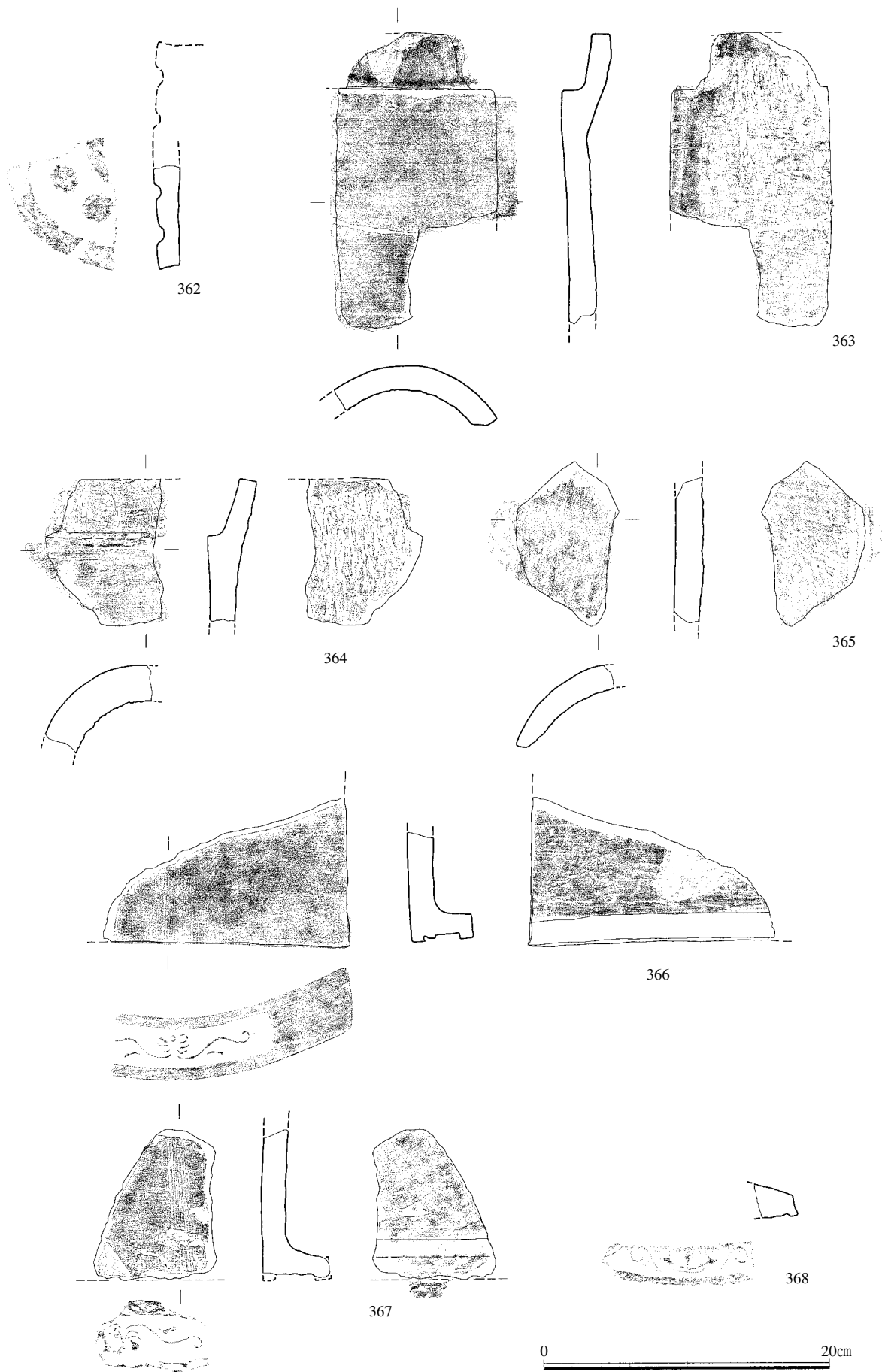
第67図 Ⅱb区SW01出土遺物実測図(14) S=1/3

366～368は、軒平瓦片である。

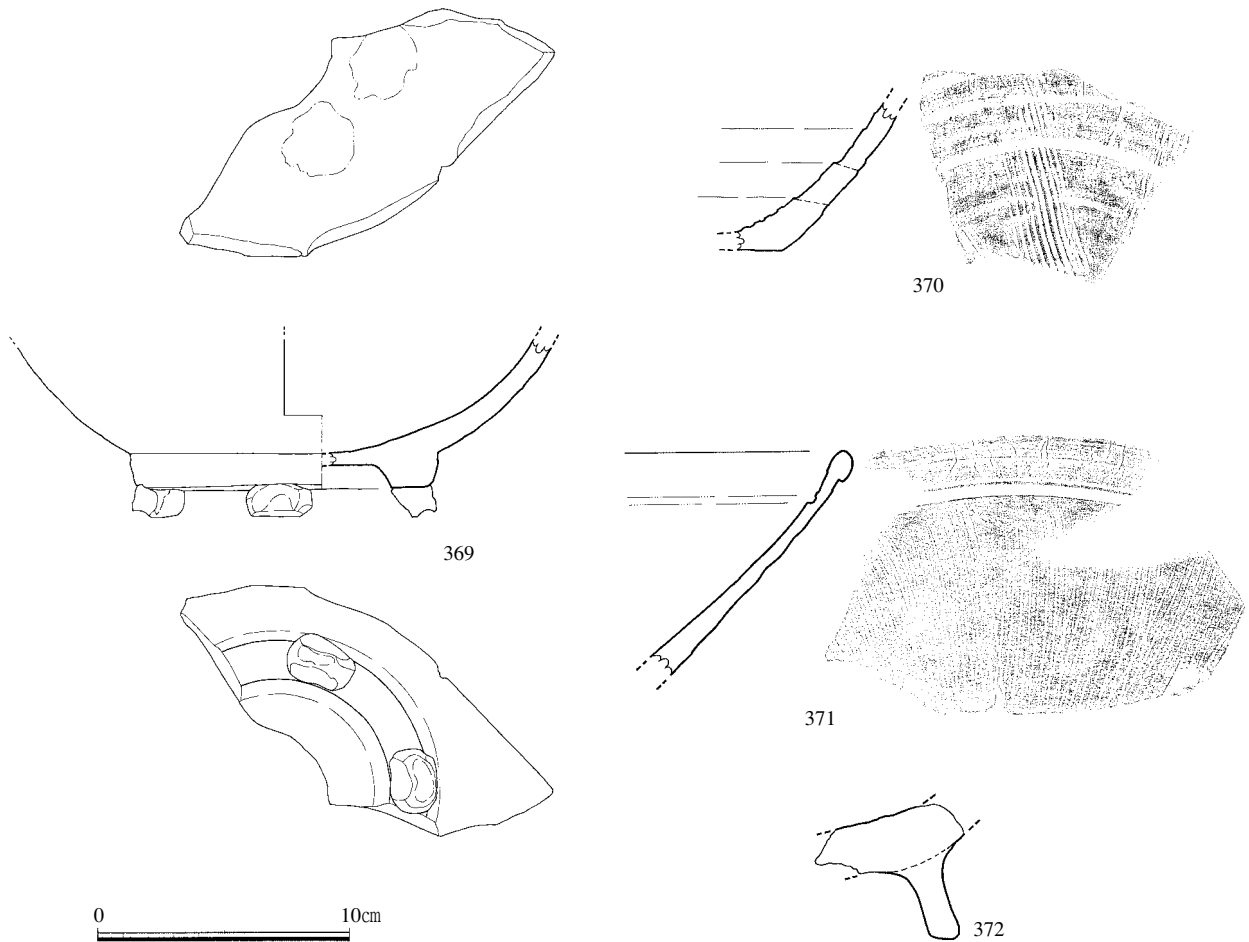
366は、瓦当部分の半分ほどが残る。右外縁幅が6cmほどと広い。文様はかなり簡略化され、半截花菱唐草文はしっかりしているが単純化している。焼成は良好で、硬く締まっている。顎は薄く、顎凸面でわずかに1.7cmほどである。顎裏面に接合に際しての粘土の貼り付け痕跡が見える。顎部分は顎に沿って横方向のナデ調整、凸面と凹面は長軸方向にナデ調整がなされている。367は、366と文様はよく似る。焼成はやや悪いようで磨耗している部分がある。凸顎面には横方向のナデ調整が丁寧になされ、凸面も横方向のナデ調整がなされている。凹面は長軸方向のナデ調整である。胎土中に細かい素があいている。368は、顎の下半分の破片で、完全に文様状況はつかめないが、半截花菱唐草文がより大きく残っているようである。顎裏面には接合のためのナデ調整が見られる。顎と平瓦を接合する部分には、接着を強くするため櫛状工具による引掻き痕が入れられている。

【SW02の出土遺物】

この遺構からは特に顕著な遺物は出土していない。



第68図 II b区SW01出土遺物実測図(15) S=1/4



第69図 Ⅱb区包含層出土遺物実測図 S=1/3

【包含層中の出土遺物】(第69図)

369は、陶器の鉢である。底部は高台が削り出され、畳付きに胎土目粘土が付着している。これは重ね焼きに際して間においた粘土塊がそのまま焼き付いたまま残っている状態である。内器面には逆に胎土目の痕跡が残る。このことから窯内での焼成の状況が分かる。このような半端な品物でも流通したことを示す資料である。

370～371は擂鉢である。370は須恵質土器の擂鉢で、粘土巻き上げ痕が断面観察で分かる。残存部位は底部近くで、内器面には12条ほどを単位とする櫛描きによる擂目が施される。焼きはやや不良である。371は口縁部片で内器面には浅い沈線が一条巡り、その下に10条ほどの細い櫛描きによる擂目が描かれる。器壁は薄い。口唇部は肥厚し、外器面の口唇部下が厚みはもっとも薄い。かなりしっかりとした作りであるが、釉が施されないことから、近世の初期のものと考えられる。

372は鉢状の器に高い高台を付けた瓦質土器である。部分的なもので形態は不明である。

第4節 調査Ⅱc区

(1) 調査区の概要(第70図)

調査Ⅱc区は調査Ⅱb区の南側に位置する。調査区の位置は、南北が $X = -56345$ 、 $Y = -33801$ から $X = -56368$ 、 $Y = -33812$ まで、東西が $X = -56367$ 、 $Y = -33816$ から $X = -56352$ 、 $Y = -33793$ までの範囲である。

(2) 土層

表土から大きく3層ほどは、ほぼ水平に層が堆積している。いずれの層も硬く締まっていることから、ある時期の整地層である可能性が高い。この土層断面を取った場所は、井戸跡SE02の近くであり、この井戸とこの層の形成はある程度関係すると考えられる。この調査区自体が個人の宅地の跡であることから、少なくとも個人の宅地造成に関係する整地層であろう。ただ、井戸の形は近世まで遡ってもよいであろう。したがって、ここでの土層の形成時期はせいぜい遡って近世付近までを想定しておく。

(3) 遺構

【SE02】(第72図)

この遺構は 調査区のやや北側で検出した石組の井戸跡である。井戸の平面形はほとんど円形を呈する。内法は $1.7\text{m} \times 1.6\text{m}$ である。底まで確認していないので、底部の形状および状況は不明である。自然石の丸石や割石を利用してくみ上げており、井戸側面は石を小口積みし、もしくは平積みしているものが多い。井戸側の周囲には多くの石積みを控えとして配置している。石材は大部分安山岩などが使用されているが、中には凝灰岩も使用している。凝灰岩は五輪塔の残欠も含まれており、明らかに空風輪もあった。

掘り方は井戸自体の3倍くらいの径がある。完全に底面まで掘りきっていないので、掘り方自体もどの広さまで広がるのか不明である。このためでもあるが井戸自体の形成時期を確認するまでには至っていない。

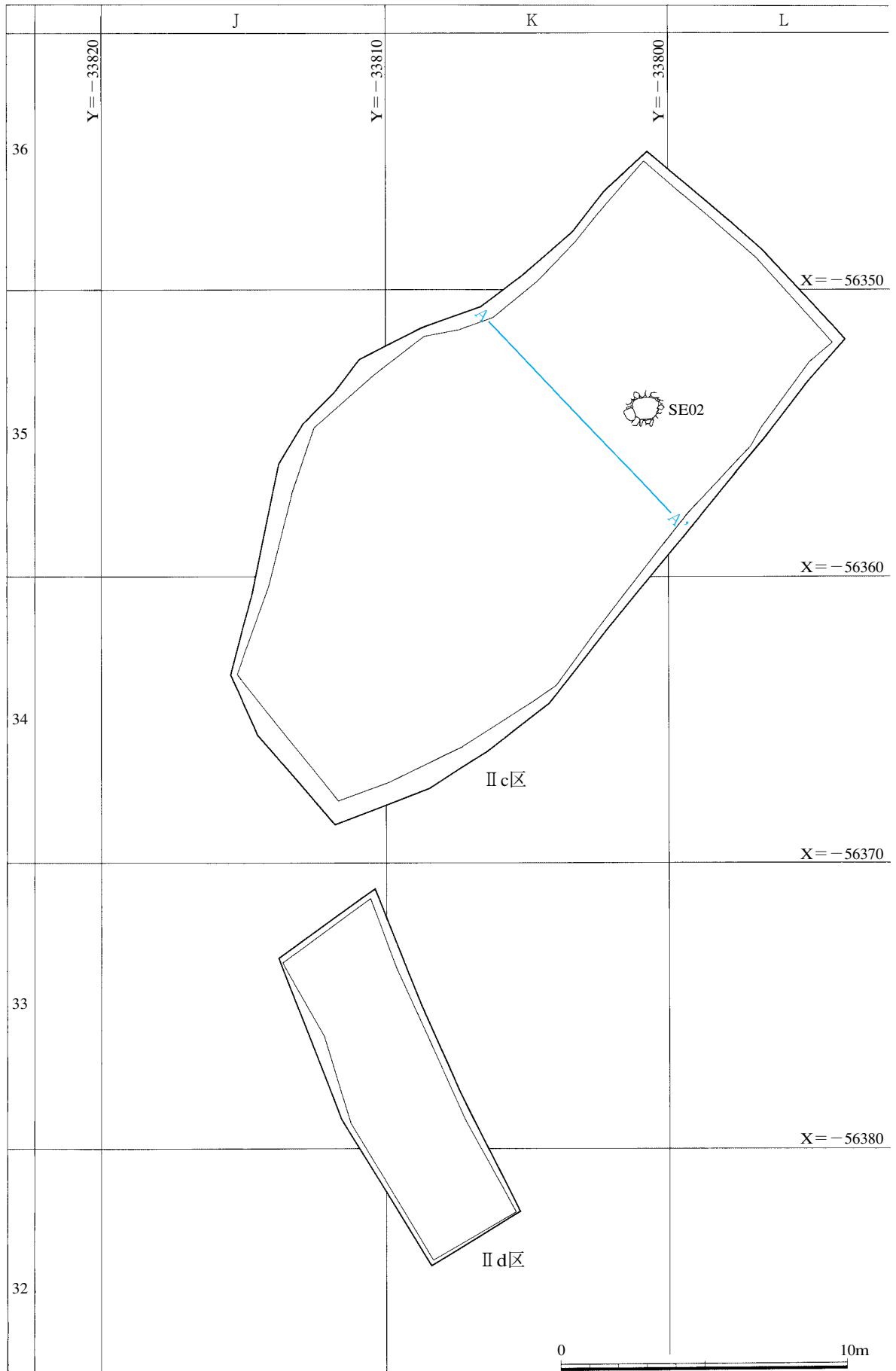
この井戸は、ここに人が住んでいる最近まで使用されていたもので、中心部にはコンクリート製の土管を置き、その上面に揚水ポンプ等を設置して水の汲み上げを行っていたようである。これは近代以降の作業である。

【集石遺構】

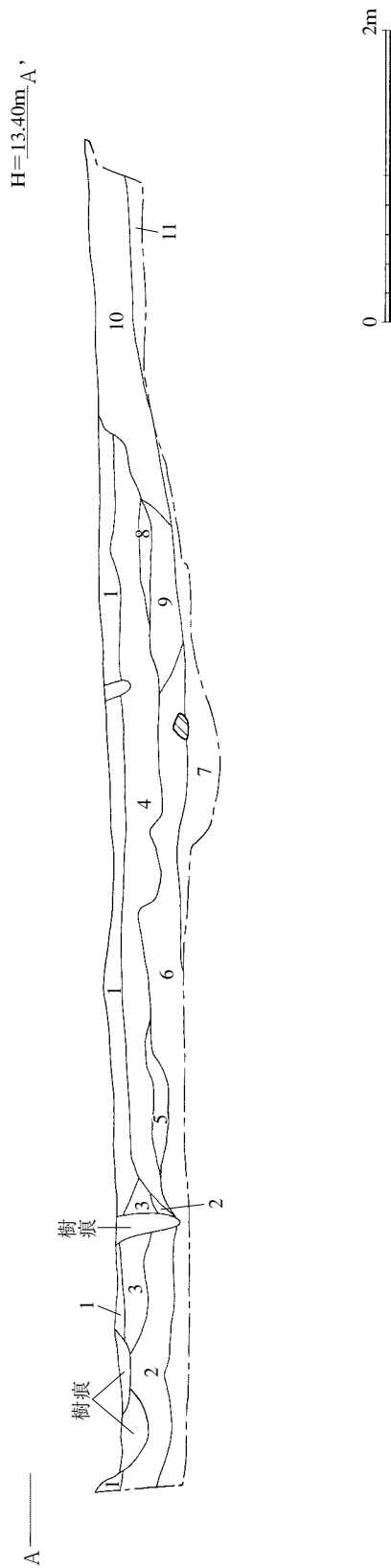
この遺構は、調査時には遺構としてとらえられ、実測を行っていたものである。整理作業時に大きめの礫が集まっているのみで遺構として明確でなかったため、この調査区の遺構としなかった。そのため配置図にも載せていない。遺構番号もはずしている。

「遺構」としては、長さ20～30cm、幅15cm前後の礫を径50～60cmほどの範囲に集めている。その集積場所は、やや掘り窪めたようになっており、そこに石が集められている。

調査担当者の最終的な判断では、この調査区に昔あった建物の礎石を据えた場所の根締め石ではないかというものである。確かにそのような遺構は存在するので可能性は高いが、他には確認できていない。

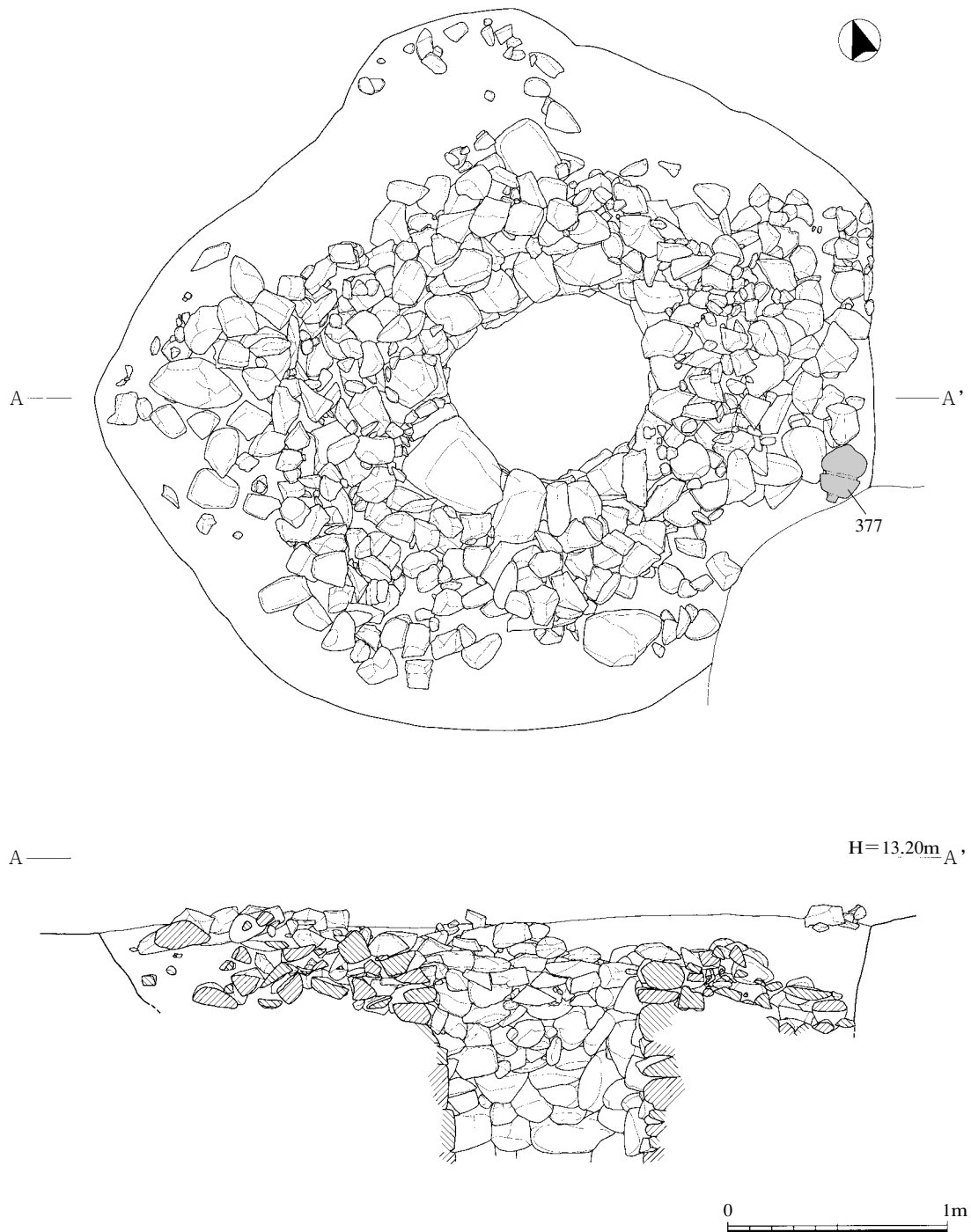


第70図 Ⅱc・Ⅱd区遺構配置図 S=1/200

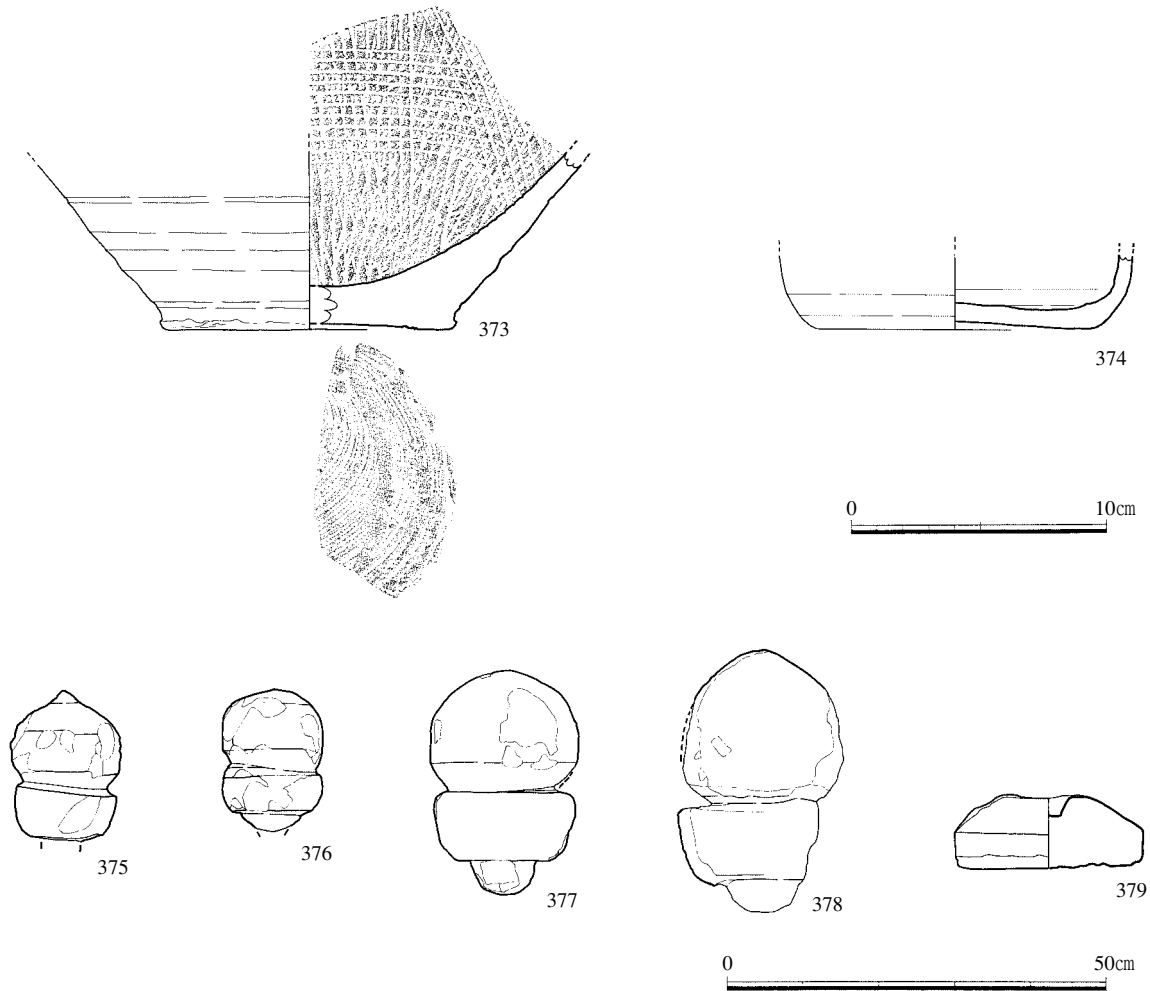


- 1 にぶい黄褐色土。強く締まる。粘性中。0.2～2 cmの礫、微細な炭化物、明黄褐色土のブロックが混じる。
- 2 灰黄褐色土。強く締まる。粘性中。0.2～5 cmの礫、微細な炭化物、明黄褐色土のブロックが混じる。
- 3 黄褐色土。強く締まる。粘性中。0.2～5 cmの礫（2層より少ない）、微細な炭化物、明黄褐色土のブロックが混じる。
- 4 褐色土。強く締まる。粘性中。0.5～5 cmの礫、微細な土師器片、明黄褐色土のブロックが混じる。
- 5 灰黄褐色土。強く締まる。粘性中。やや砂質で0.2～3 cmの礫、炭化物、土師器片、明黄褐色土のブロックが混じる。
- 6 浅黄褐色土。強く締まる。粘性中。0.1～2 cmの礫、微細な炭化物、黄色の砂粒が混じり鉄分が沈着する。
- 7 黄褐色土。締まり中。粘性強。やや砂質で0.5～10 cmの礫、土師器片、明黄褐色土のブロックを含む。
- 8 浅黄褐色土。強く締まる。粘性中。0.2～5 cmの礫、土師器片、明黄褐色土のブロックを含む。
- 9 にぶい黄褐色土。強く締まる。粘性中。0.2～2 cmの礫、明暗褐色土のブロックを含む。
- 10 にぶい黄褐色土。強く締まる。粘性中。やや砂質で0.2～8 cmの礫を含む。
- 11 黄褐色土。強く締まる。粘性中。0.5～5 cmの礫を含む。

第71図 IIc区土層断面図 S=1/50



第72図 Ⅱc区SE02実測図 S=1/30



第73図 IIc区SE02出土遺物実測図 S=1/3・1/10

(4) 出土遺物

【SE02の出土遺物】(第73図)

この遺構から出土した遺物としては、陶器や石塔の部材などがある。

373は近世の播鉢片で、無釉である。体部には粘土巻き上げ痕が残る。内器面には10条以上を単位とする櫛描きによる播目が入る。ロクロ成形によるもので、外底面は平底で、回転糸切り痕が残る。破片となった後に火を受けた痕跡がみられる。374は、褐釉のかかる鉢である。器壁は薄く、底部がやや上げ底となっている。胎土中には細砂粒をかなり含む。外底面には砂積痕が残る。近世初頭のものであろう。

375～379は五輪塔の部材である。井戸の石材の一部もしくは、井戸内に廃棄されたものである。375と376は、小型の空風輪で、375は、頭頂部が尖る宝珠形を呈する。376は、頭頂部は丸くなる。ともに指し込み部があった痕跡が残る。377・378は、先のものより2倍ほど大きい。377は頂部が丸くなり、空輪と風輪との境を明瞭に作りだしている。角張った指し込み部は残っている。378は石材が脆弱で、破損が激しいため原型が分からない。ただ、残存部分から推定すると頭頂部はやや尖り気味で空風輪の境は明瞭である。全体的に377よりも大きい。指し込み部は残るが、形状は不明確である。379は小型の火輪で、端部の反り返りはなく、水平である。上部には円形の柄穴が穿たれる。大きさからいえば、376などと組み合わせるようである。図化していないが、このほかにも石塔の残欠と思われるものがあつた。

第5節 調査Ⅱd区

(1) 調査区の概要(第70図)

調査Ⅱd区はⅡc区の南側に位置するほぼ長方形の調査区である。調査区的位置は、南北が $X=-56371$ 、 $Y=-33810.5$ から $X=-56384$ 、 $Y=-33808.5$ まで、東西が $X=-56382$ 、 $Y=-33805$ から $X=-56373$ 、 $Y=-33814$ までの範囲である。ここは、個人住宅の跡地であり、調査的に期限が迫っていたため、直接調査を行うこととなった。そのため、事前の確認調査ができないままの調査となった。

(2) 遺構と遺物

ここでは遺構を検出していない。また、遺物は多少出土したが、顕著なものなかったのであえて図化はしなかった。

第6節 調査Ⅱe区

(1) 調査区の概要(第74区)

調査Ⅱe区は勝尾山の東側斜面に設定した。新城跡の遺構の存在を想定し、この斜面及び支山の頂部付近を対象に数カ所のトレンチを入れながら調査地を絞り込んだ。調査Ⅱb区の南側に位置する。調査区の位置は、南北が $X=-56336$ 、 $Y=-33781.5$ から $X=-56361$ 、 $Y=-33779.05$ まで、東西が $X=-56364$ 、 $Y=-33772$ から $X=-56344$ 、 $Y=-33783.5$ までの範囲である。

勝尾山の中位の平場にあたるが、本来の地形は山の急斜面を人工的に切り崩し平場としたもののように思われた。このような狭い平場が城跡の一遺構として考えられるため、調査対象地とした。特にここには、伝妙慶禅尼の墓(ST03)があり、他にも関連する遺構の存在が予想された場所である。

(2) 土層(第75図)

土層観察用ベルトはST03の北側に東西方向に設定した。

この土層で見ると、傾斜地の層序を示す。ほとんどがこの地形が形成されてからの堆積である。

(3) 遺構

【ST03(妙慶禅尼墓)】(第76図・第77図)

この遺構は、地元では妙慶禅尼墓として祀られてきたものである。妙慶禅尼は、近世初頭この八代の土台を築いた加藤右馬允正方の母で、正方の父の菩提を弔うため、麦島城近くに安養寺を建立することに積極的に関わった人物である。八代城北ノ丸東の門内に隠居している。そのため、御東殿と称されていた。

死亡時期は寛永4年8月12日または8月28日といわれている。死後この地に葬られたという。

この妙慶禅尼の墓所については、『肥後国誌』には、次のようにある。

「東殿墓 圓光院南ノ山中ニアリ石碑ニ妙慶禅尼トアリ云々…寛永四年八月二十八日病死此所ニ葬ル…墓邊ニ一庵ヲ設ケ僧ヲ居ラシメテ墳墓ノ香華ヲ供セント云其後苔底ニ埋レシヲ長岡直之ノ時ヨリ卵塔ヲ設ク」

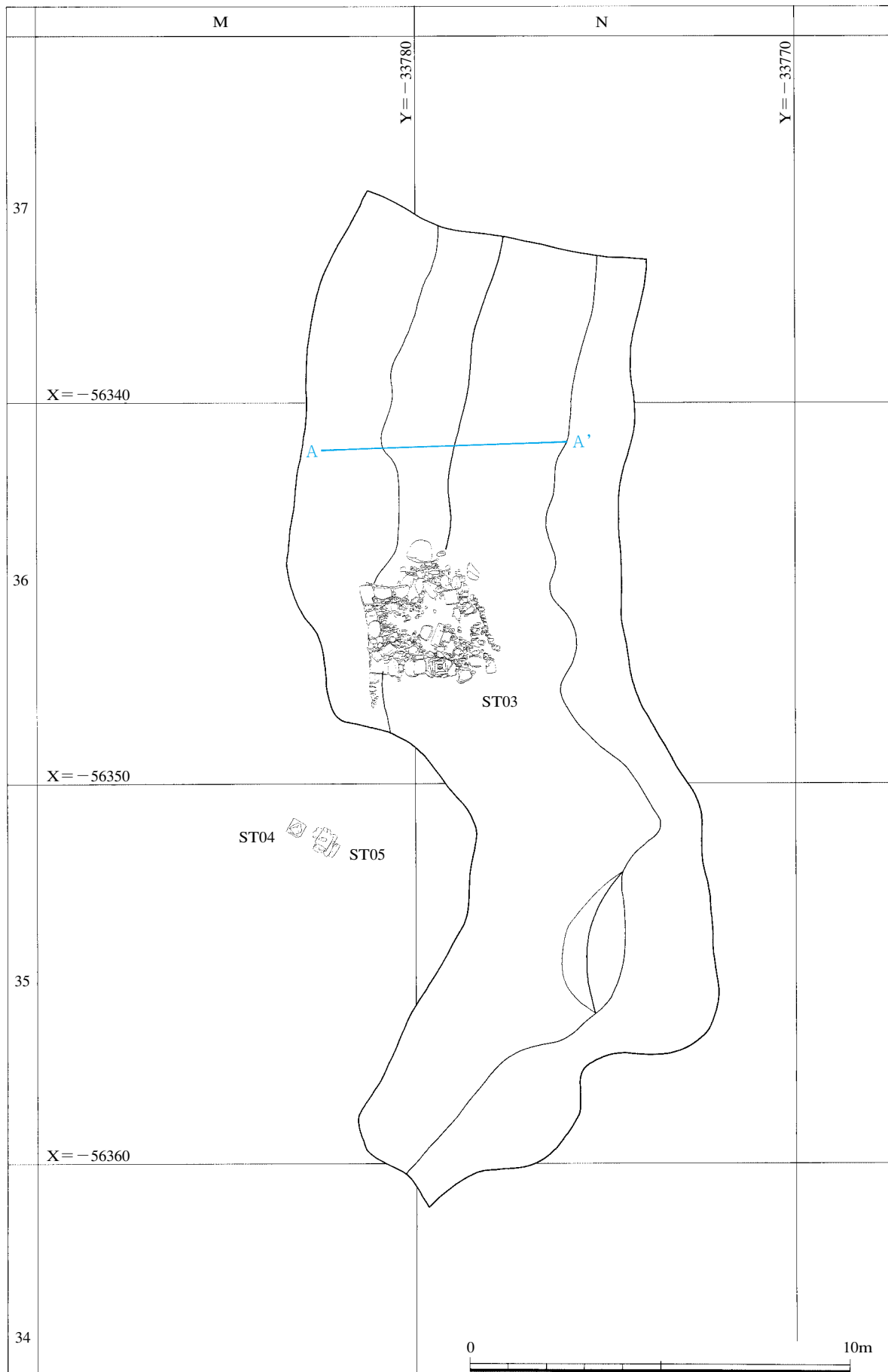
これによると、禅尼は寛永4年8月28日に病死し、圓光院南の山中に埋められている。さらにその墓の近くに庵を設けて僧侶に守らせたという。その後荒廃していたので、八代城代の長岡(松井)直之の代に卵塔を設置した。その卵塔に「妙慶禅尼」と書かれていたと読める。その石碑は現地では確認できなかった。その後再び荒廃し、大正11年熊本県史跡としたというが、詳細は不明である。

この妙慶禅尼の伝承地には、遺構としては、方形に石列を配置し基壇状に成形し、その上にやや厚手の板碑や五輪塔の部材を積み重ねたものが並んで置かれていた。このどちらかが妙慶禅尼墓とされる。

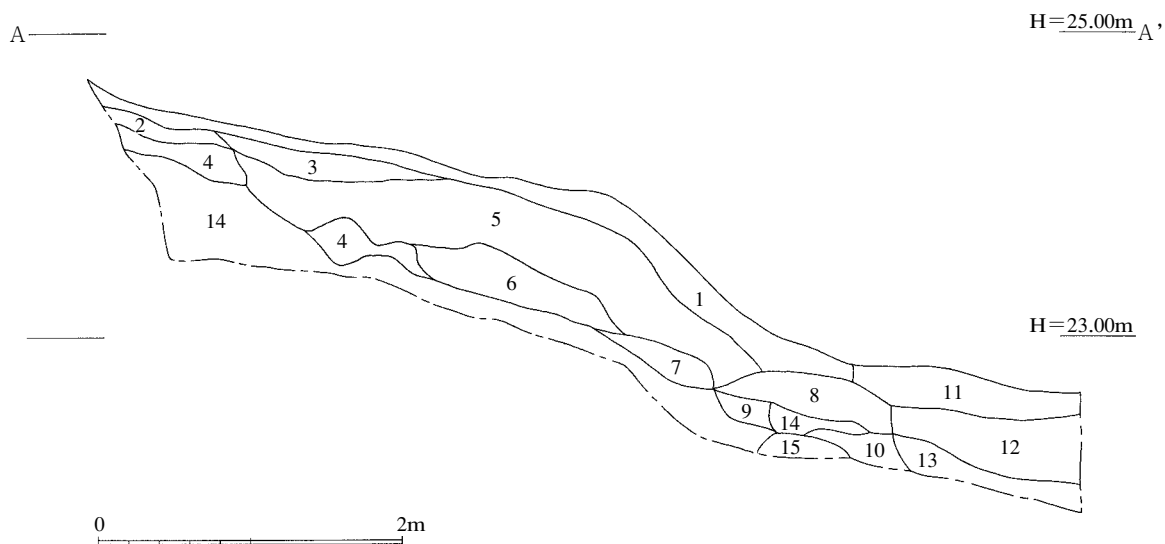
基壇は表面で観察する限り、組み上げ方は乱雑である。調査によれば、この基壇部分の作りは以下のようなものである。台石のような30cmほどの石を、地形的な傾斜のため低くなる東側を中心にコの字形に配置している。西側は破損のためというより、東側と同じレベルになったため、あえて石積みを行っていないようである。東側で高さが不足する部分は2段に積んでいる。その石の南側に五輪塔を積み上げ、その間にそれよりもやや小型の石や、小礫を配し、さらに土を間に埋め込み、基壇としている。

上部の礫石、石塔類を除去すると、下部構造として浅い掘り込みを確認できた。不明瞭な部分も多かったが、何らかの位置決めのために掘り込まれたものであろう。それ以上に顕著な地下遺構は存在しなかった。

五輪塔は寄せ集められたものらしく、上から空風輪、火輪、地輪、地輪、地輪の順で重ねて置かれている。しかも基壇の中心部ではなく、南端部にある。ただ意識としては五輪塔を正しく乗せようとしているように

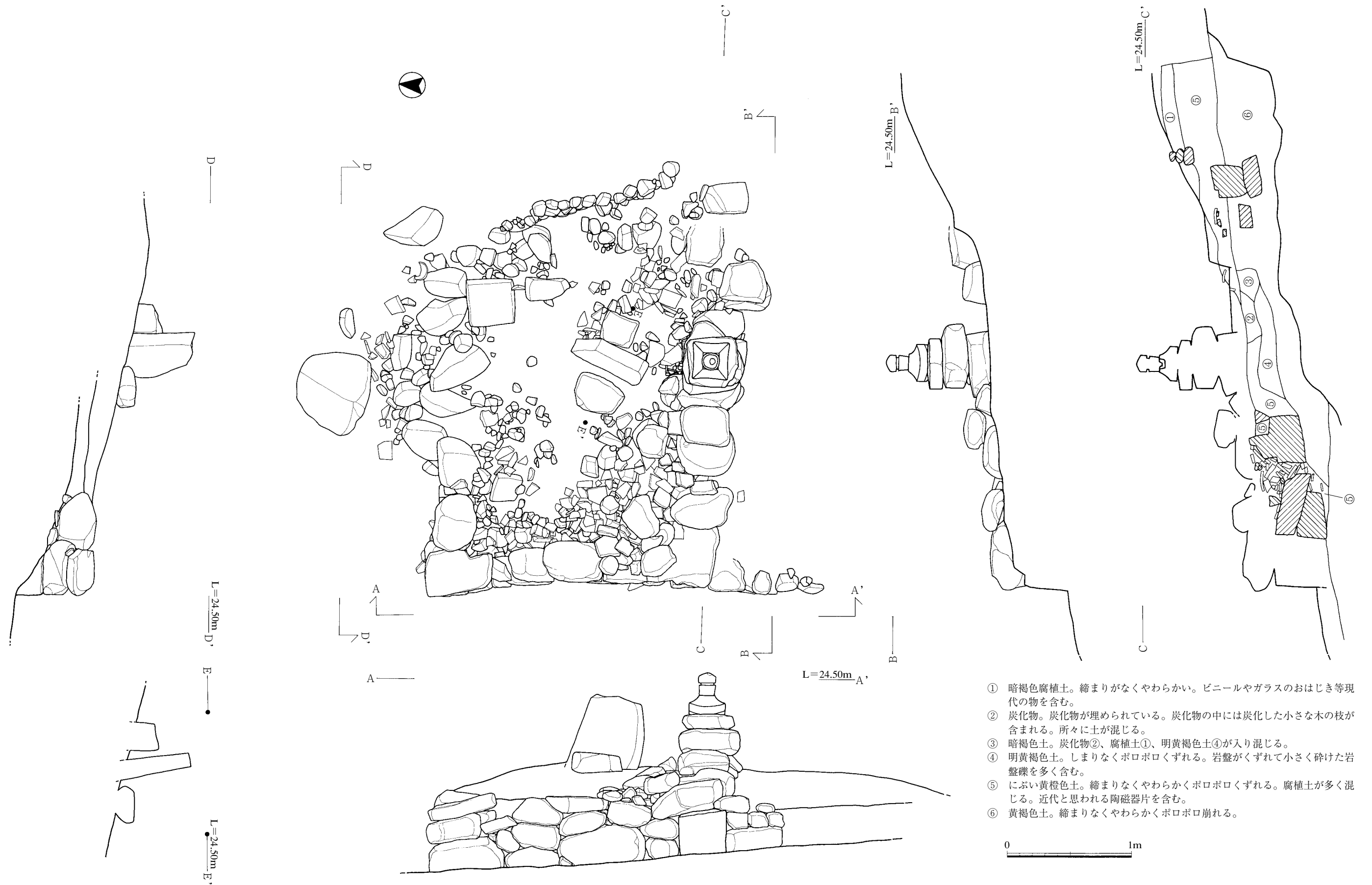


第74図 Ⅱe区遺構配置図 S=1/150



- 1 黒褐色腐植土。ビニール等の現代ゴミを含む。
- 2 にぶい黄褐色土。にぶい黄褐色の粘土に黒褐色の腐植土が混入。
- 3 褐灰色腐植土。締まりなくやわらかい。
- 4 明黄褐色土。締まりがなくやわらかい。やや粘性がある。
- 5 にぶい黄褐色土。締まりなくやわらかい。
- 6 黄褐色土。締まりがなくやわらかい。
- 7 黄褐色土。締まりがなくやわらかい。
- 8 黄褐色土。締まりなくやわらかい。
- 9 褐色土。締まりなくやわらかい。
- 10 黄褐色土。やや粘性がある。岩盤の礫を含む。
- 11 褐灰色土。締まりがなくやわらかい。
- 12 褐色土。締まりがなくやわらかい。
- 13 にぶい黄褐色土。やや粘性がある。
- 14 黄橙色土。締まりがある。やや粘性がある。樹痕や植物痕、腐植土等を一切含まない。
- 15 にぶい黄褐色土。岩盤

第75図 II e区上層断面図 S=1/50



第76図 IIe区ST03 (妙慶禅尼墓) 実測図 S=1/30



第77図 Ⅱe区ST03下部遺構実測図 S=1/30

は受け取れる。空風輪と火輪は組み合わせとしては良いようであるが、地輪との組み合わせは合っていないようである。いくつかあった五輪塔を寄せたものであろう。この他に基壇として使用されているものの中にも地輪ではないかと考えられるものがあった。これらの部材はやや古いものも混じっているようである。

この遺構の形成時期については、基壇を形成する埋土中の遺物や基壇の構築状況から、近世末～近代の時期に古い時期の石材を利用して作られたものと考えられ、そのころ復元されたのであろう。したがって、今回の調査においては、基壇を含む「伝妙慶禅尼墓」の製作時期は掴めたが、この位置に元々の妙慶禅尼墓があったことは確認できていない。さらに周囲にそれらしい遺構があったのかもつかめていない。ただ、これらの石材や石塔類は後に述べるST04・ST05のあり方と同様に、建て直しの際に周囲にあったものを再利用したのかもしれない。それには何らかの伝承があって成り立つものなので、元々この付近に本来の妙慶禅尼墓があったのであろう。

なお、この遺構のうち板碑等については、妙慶禅尼ゆかりの安養寺に移築されている。

【ST04・ST05】(第78図上・下)

ST04・ST05は、共にST03のある段の一段下の段にあったものである。ST03を調査中周囲の状況を確認中に見つけたものである。2基とも地元の人によって祀られていたようで花活けの竹筒があった。

まず、ST04である。これは、2段に石積みがなされている。上は三角錐状の自然石で、ほとんど整形のないものである。地輪は小型のものではあるが、立方体の形を保っており、縦40cm×横40cm×高さ約40cmである。特に伝承などは確認していない。

次にST05である。この遺構は、ST04に向かって右手に並んでいる。これも周囲にあったいくつかの五輪塔や礎などの石材を集めたものである。

これらの墓は、上段の妙慶禅尼墓でもみられたように、周囲にいくつかあった五輪塔群が何らかの影響で崩壊したり、散逸したりするなかで、そのうちのいくらかを墓として寄せ集めて祀ったのであろう。

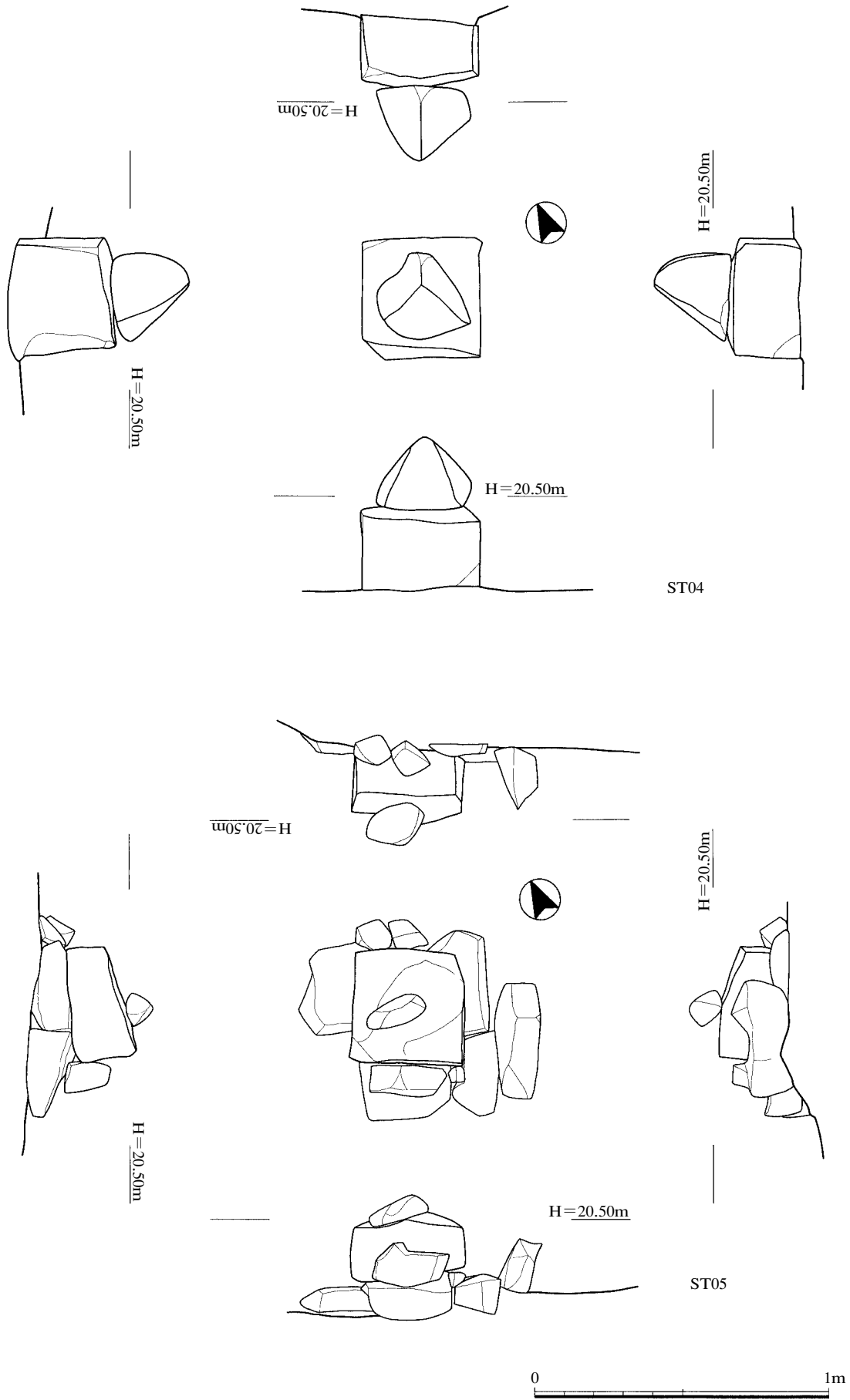
(4) 遺物

【ST03の出土遺物】(第79図～第84図)

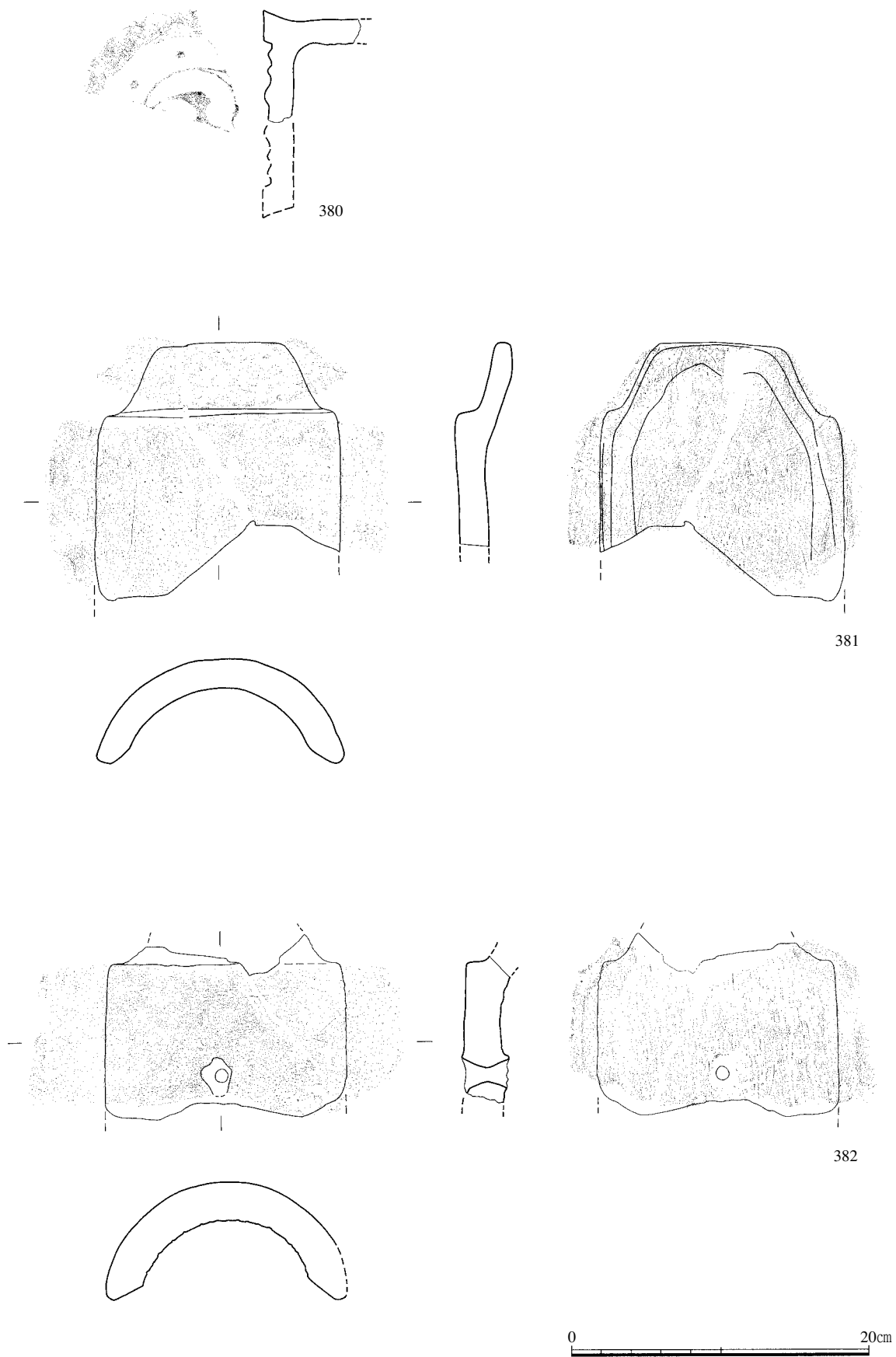
ST03は先に述べたように、付近にあった石材を後世集積したものと考えられる。その集積に際し、周囲の遺物をこの石組の隙間埋めに使ったり、埋土中に取り込んだりしたために、この基壇中で多くの遺物が出土した。以下に石組中から出土した遺物を第78図～第84図に図化している。

まず、多量に含まれていた瓦片を取り上げる。この瓦片の中には最近の瓦も含まれており、目立つもの以外は現地に廃棄してきている。そのため、瓦や遺物自体によって遺構の時代を追うことに際してはこの場合困難となる。ただ、サンプルとした瓦片は全体の出土量の半分ほどはあると考えるので、大まかな傾向はつかめる。焼きが甘く、厚手のものと、焼きがしっかり締まり、やや薄手のものとの大きく分かれる。窯の違いの可能性もあるが、時期差をとらえ、先のを古手のものとし、後者を新しいものとした。ここでは古手の瓦片を中心に図化したが、新しい瓦片もいくらか図化している。

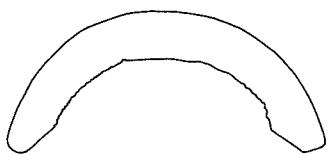
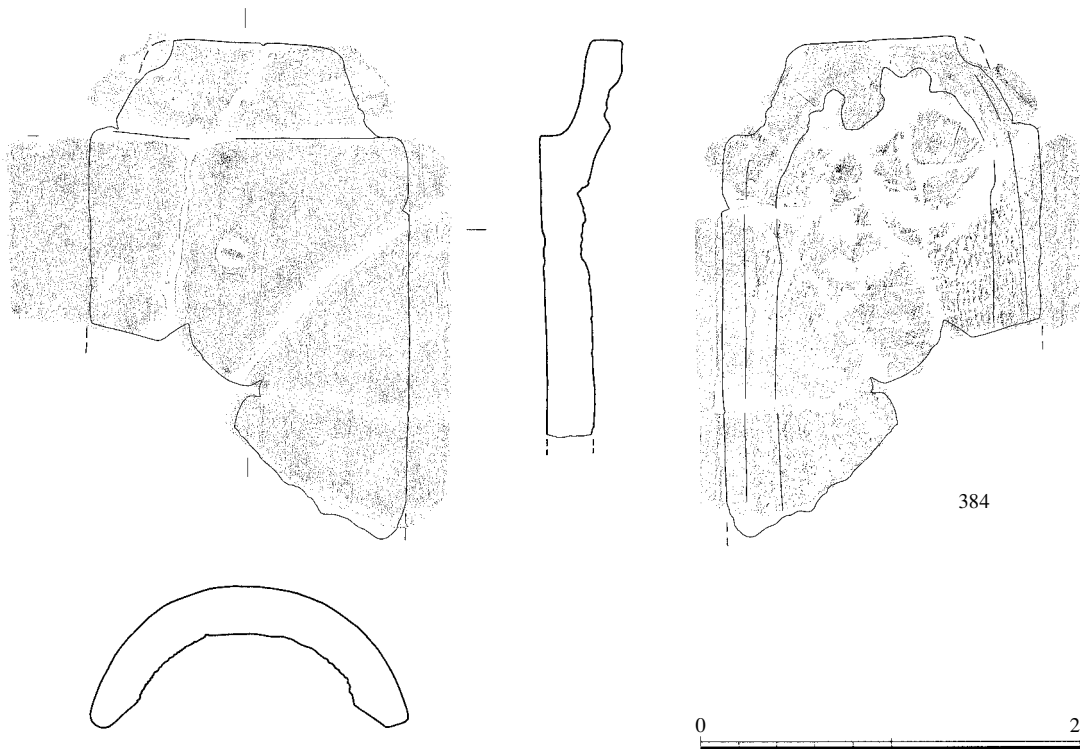
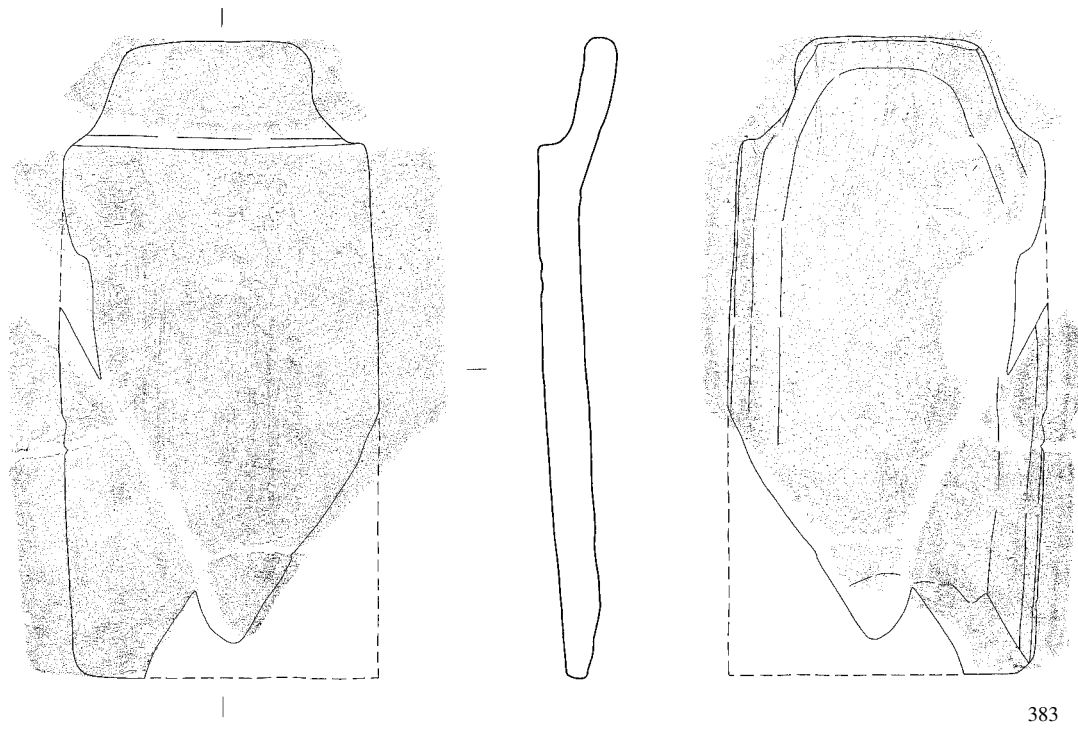
丸瓦は、380～388である。380は軒丸瓦片である。一部のみの破片のため全体像はつかめないが、残された部分から想定すると、外縁部は薄く、高さがやや高い。その中に珠文が巡り、その中心には巴文が入るようである。巴頭部は丸みをもち、くびれを有する。尾は太く短い。珠文間は3cmほどである。焼成はやや悪く、胎土中に素が入る。凸面は長軸方向のナデ調整である。凹面は瓦当に沿ったヨコナデがみられる。381～388は、丸瓦片である。382は、かなり大型のもので、厚みも2.7cmほどと厚い。胎土中には細砂粒がわずかに入り、素もある。胴部凹面側部は削りがやや幅広くはいる。凹面には細かい布目痕が残り、長軸方向にはさらに指し縫いの紐痕が5mmほどの間隔で密に入っている。胴部には凸面から凹面にかけて、焼成前にあけた直径1.5cmほどの釘穴がつけられた。玉縁から玉縁近くの凸面はヨコナデ調整が施され、凸面は摩耗しているため不明である。383～385は、ほぼ同一規格品である。中でも383と384はよく似ており、凹面に布目痕と吊り紐痕が残っているものである。383～385とも玉縁部分と凸面の玉縁近くは横方向の丁寧なナデ調整が施される。385では、玉縁近くの凸面にタタキ具の跡と思われる斜格子文が残る。大部分は長軸方向のケズリが施された後にナデ調整が、縦もしくは横方向に施されている。さらにこの3点は玉縁近くの凸面に計1.6cmほどの円に横棒を入れた刻印が押されている。この刻印は図化していない瓦片にもかなりみられたので、この瓦の窯印かもしれない。焼成はかなり硬く締まるものからやや脆弱なものまでである。胎土中には1mmほどの砂粒を含む。386は、先のものに調整や形態ともによく似るが、凹面の布目痕に吊り紐痕が認められず、横方向の破線状の指し縫いが見られるものである。器表面の調整痕は摩耗が進み、明確ではない。387・388は広端面付近が残るものである。凹面に残る布目痕の上に横方向の細い傷跡がかなり入る。これは調整痕といえるか不明である。凸面にはやはりヘラケズリされた後に丁寧な長軸方向のナデ調整が施されている



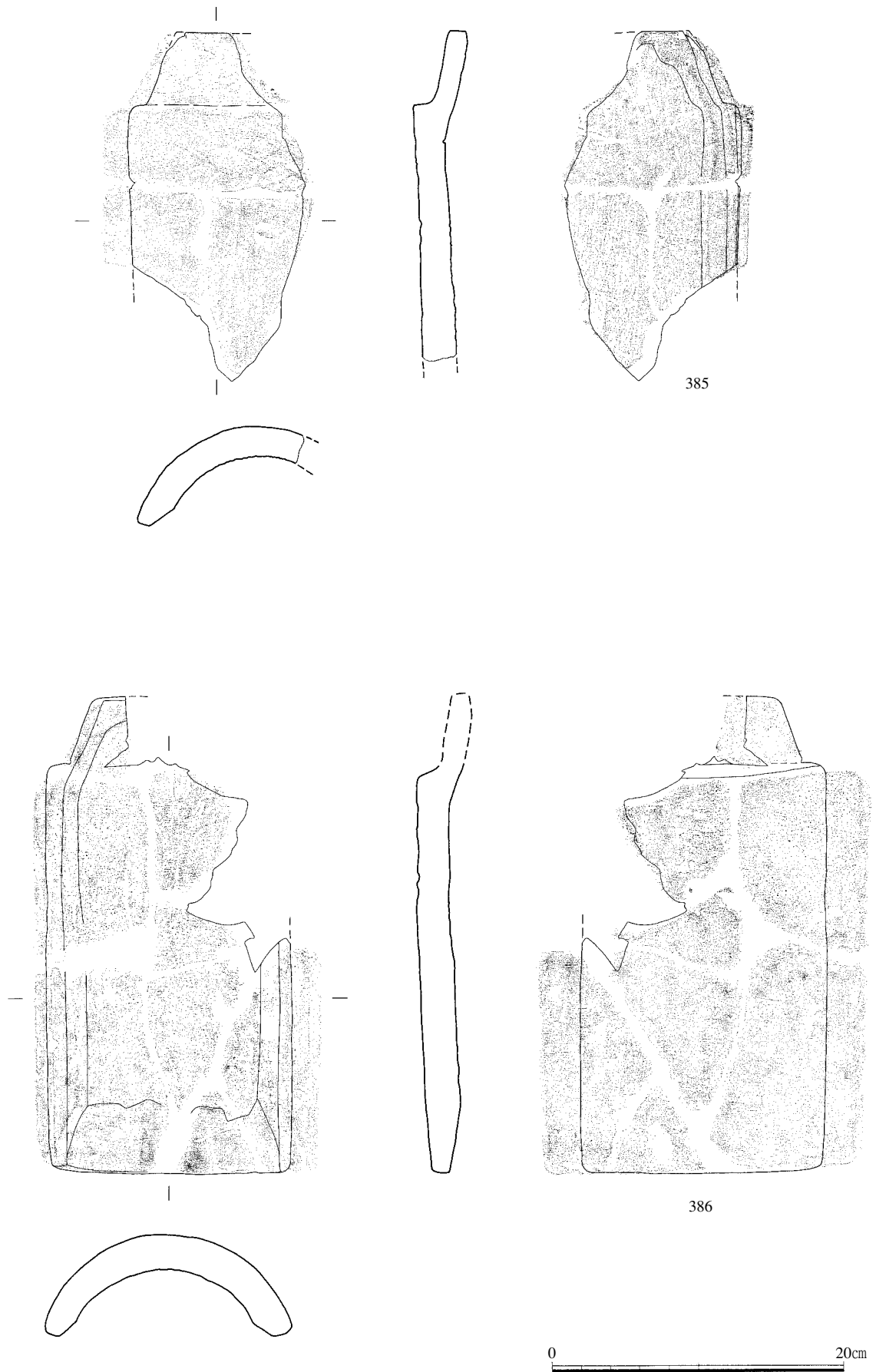
第78図 Ⅱe区ST04・ST05実測図 S=1/20



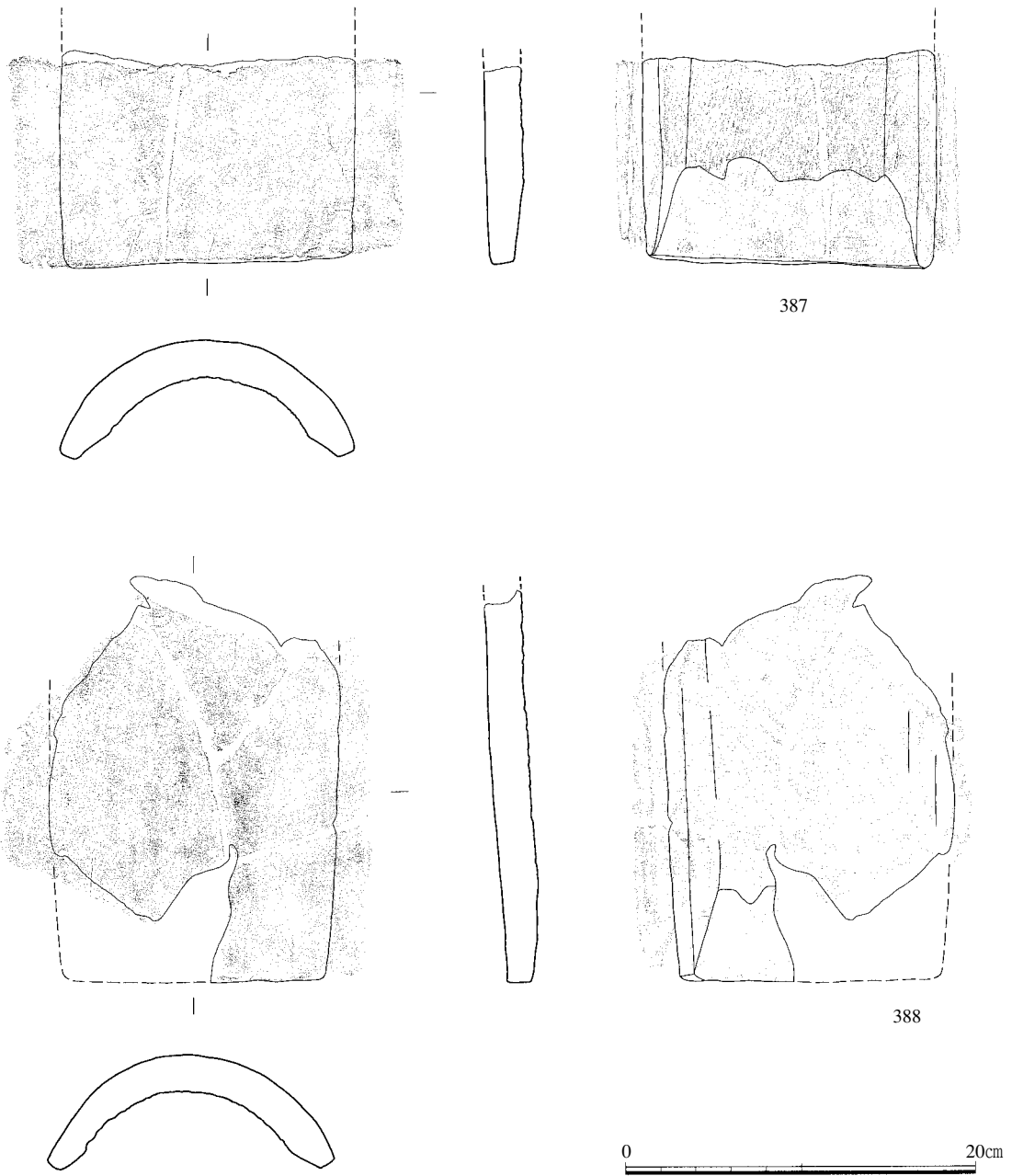
第79図 IIe区ST03出土遺物実測図(1) S=1/4



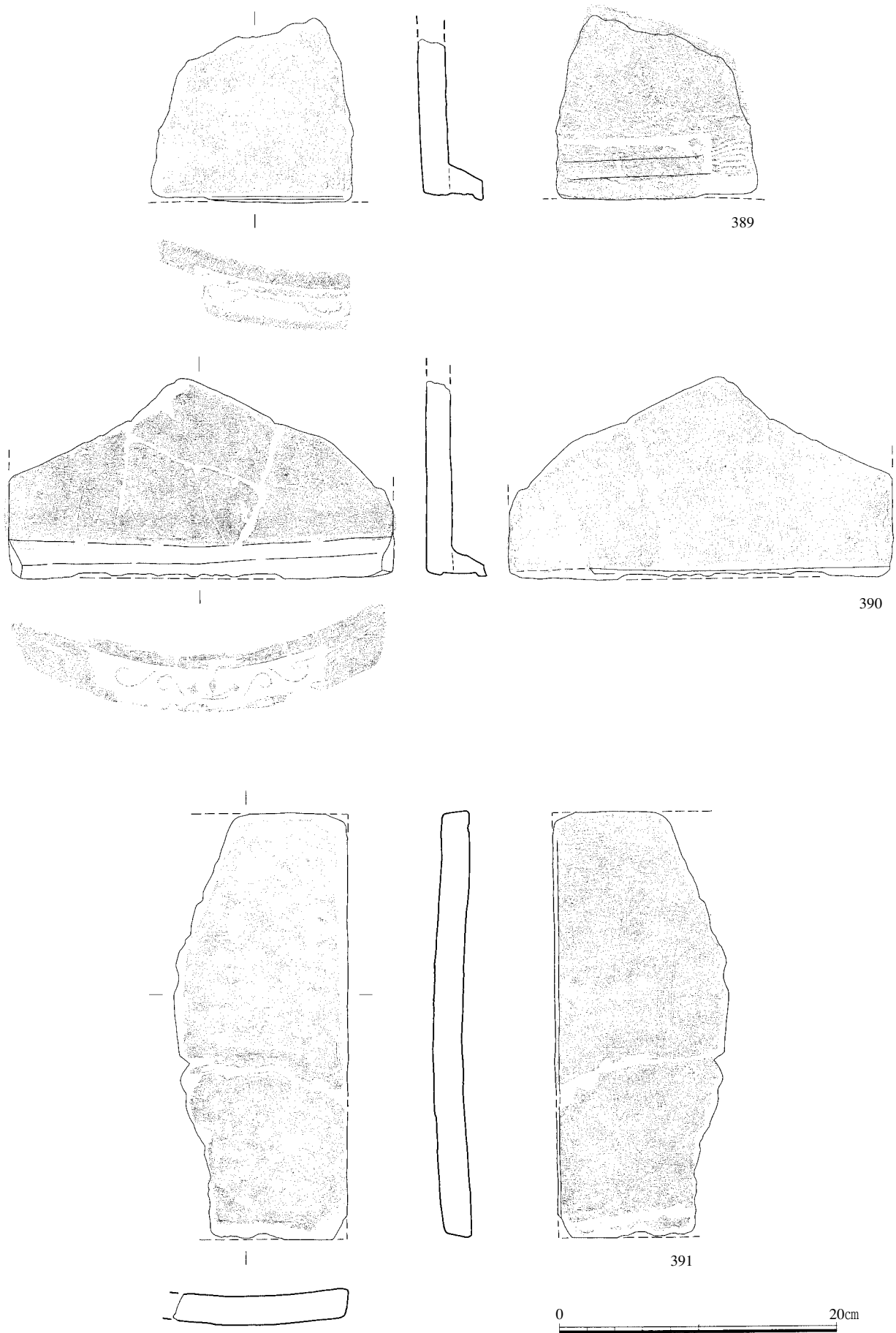
第80図 Ⅱe区ST03出土遺物実測図(2) S=1/4



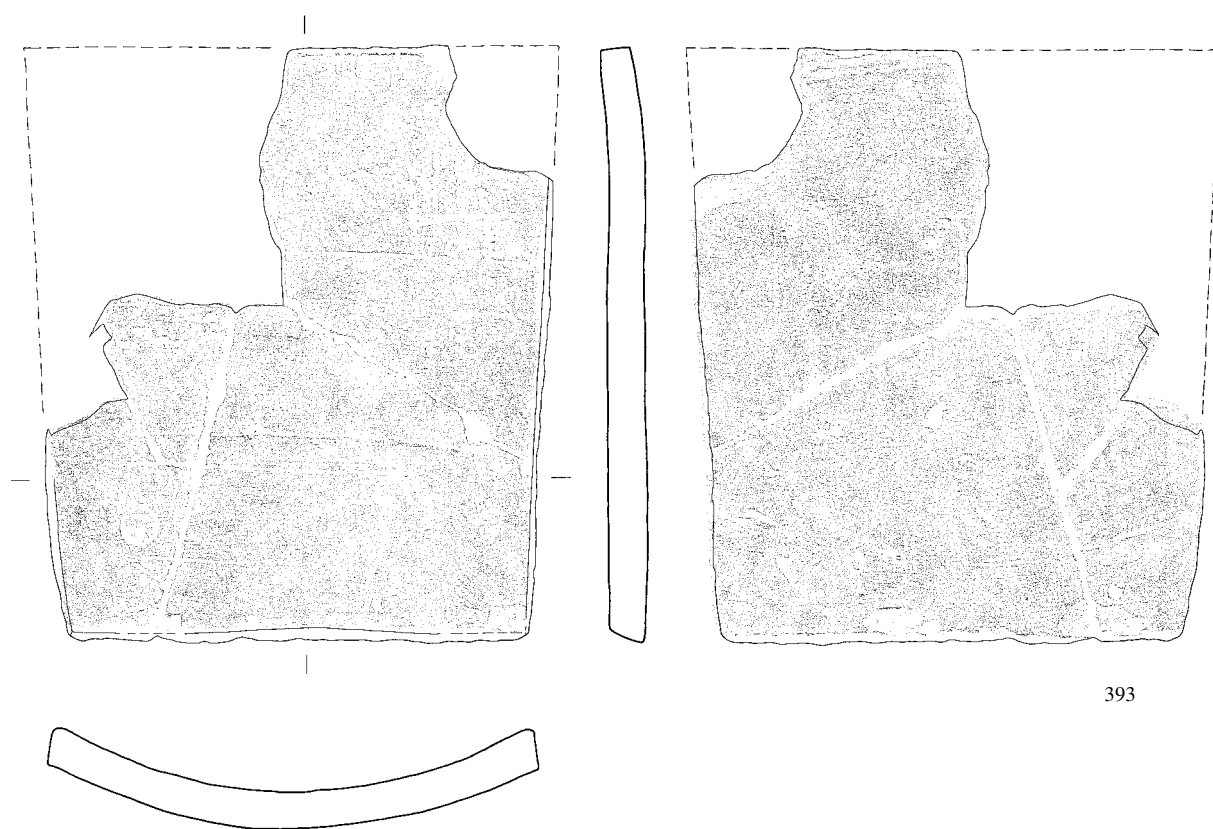
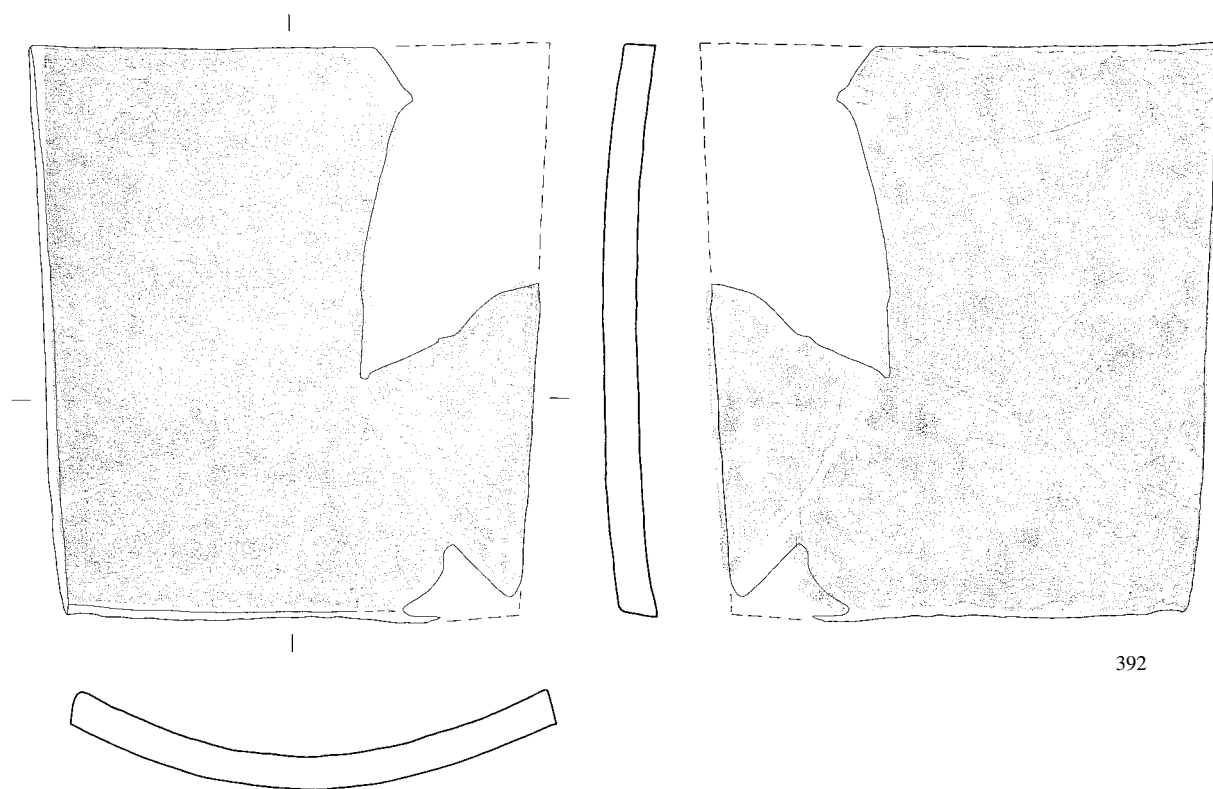
第81図 IIe区ST03出土遺物実測図(3) S=1/4



第82図 Ⅱe区ST03出土遺物実測図(4) S=1/4



第83図 Ⅱe区ST03出土遺物実測図(5) S=1/4



0 20cm

第84図 Ⅱe区ST03出土遺物実測図(6) S=1/4

ようである。

389は棧瓦の軒瓦である。丸瓦部分が欠損しているが、左側に丸瓦になる高まりが認められる。破損が大きく全体像はつかめない。残された瓦当部分には、かなりしっかりした半截花菱唐草文が残っている。顎は薄く、左外縁幅は広がっている。この形式の瓦は江戸時代中ごろには開発されているというが、瓦当が両方あるものは新しそうである。器表面がかなり黒くなっている。凸面・凹面ともナデ調整で仕上げている。瓦当部分にのみ金ウンモがかなり付着しているが、装飾を狙ったものであろうか。

390～393は、平瓦である。390は軒平瓦で、瓦当全体がほぼ揃ったものである。文様は唐草文であるが、あまりはっきりとした線ではなく、一部潰れたようになっている。外縁は広く、特に左右外縁は5～6 cmほどの広さである。顎は薄くなっており、付け根より顎凸面の方がさらに薄くなっている。これについては、一旦顎を接合した後、斜めに薄くなるようにヘラ状工具で削っている。凸面・凹面ともかなり風化が進み、調整痕は明確ではないが、瓦当近くはヨコナデである。391～393は平瓦で、391には狭端部近くの左隅付近に菱形の刻印が押されている。392・393は同じく狭端部近くの左隅付近に円形の刻印が押されている。調整は凹面には横方向のナデ、凸面は縦方向のナデが丁寧に施されている。393では凹面に横方向で板状工具を使用して削った様な跡が残り、それを薄くなでている。

第7節 調査Ⅱf区

(1) 調査区の概要(第86図)

調査Ⅱf区は調査Ⅱd区と調査Ⅱh区との中間に位置する。調査区の位置は、南北が $X=-56394$ 、 $Y=-33809$ から $X=-56417$ 、 $Y=-33808$ まで、東西が $X=-56412$ 、 $Y=-33811$ から $X=-56407$ 、 $Y=-33798$ までの範囲である。最初に南側を調査し、その後北側を調査することとなった。

調査区内には、多くのピットや土坑を検出した。それらのピットが掘立柱建物跡もしくは柵列として想定できてはいるが、限られた調査区であったため完全に組み合わせができてはいない。

(2) 土層(第85図)

模式図で示す。

I 層	I 層：表土
II 層	II 層：灰褐色土。黄褐色の凝灰岩粒子、炭化物粒子が混じる。
III 層	III 層：灰褐色土。II 層に似るが、マンガンの集積がみられる。
IV 層	IV 層：暗黄褐色土。土器や凝灰岩粒子が混じる。
V 層	V 層：黄褐色土。IV 層より明るく粘性を帯びる。凝灰岩粒子が混じる。
VI 層	VI 層：岩盤 III 層とIV 層の土が柱穴の埋土となる。

第85図 Ⅱf区土層柱状図

(3) 遺構

【SK08】(第86図)

この遺構は、調査区の北側で検出した土坑である。いくつかのピットに切られている。平面形はほぼ隅丸の長方形を呈している。底面はかなり狭くなり、方形状になる。

埋土は大きく2層に分かれ、①層は暗褐色を呈し、炭化物や礫を含み、あまり締まっていない。②層は暗黄褐色を呈し、炭化物や礫を含み、締まっていない。地山のロームを含む。

確認面では、長軸方向で2.8m、短軸方向で1.8mを測る。深さは40cmほどである。

出土遺物は多くはないが、土師器片がある。

【SK09・SK10】(第87図)

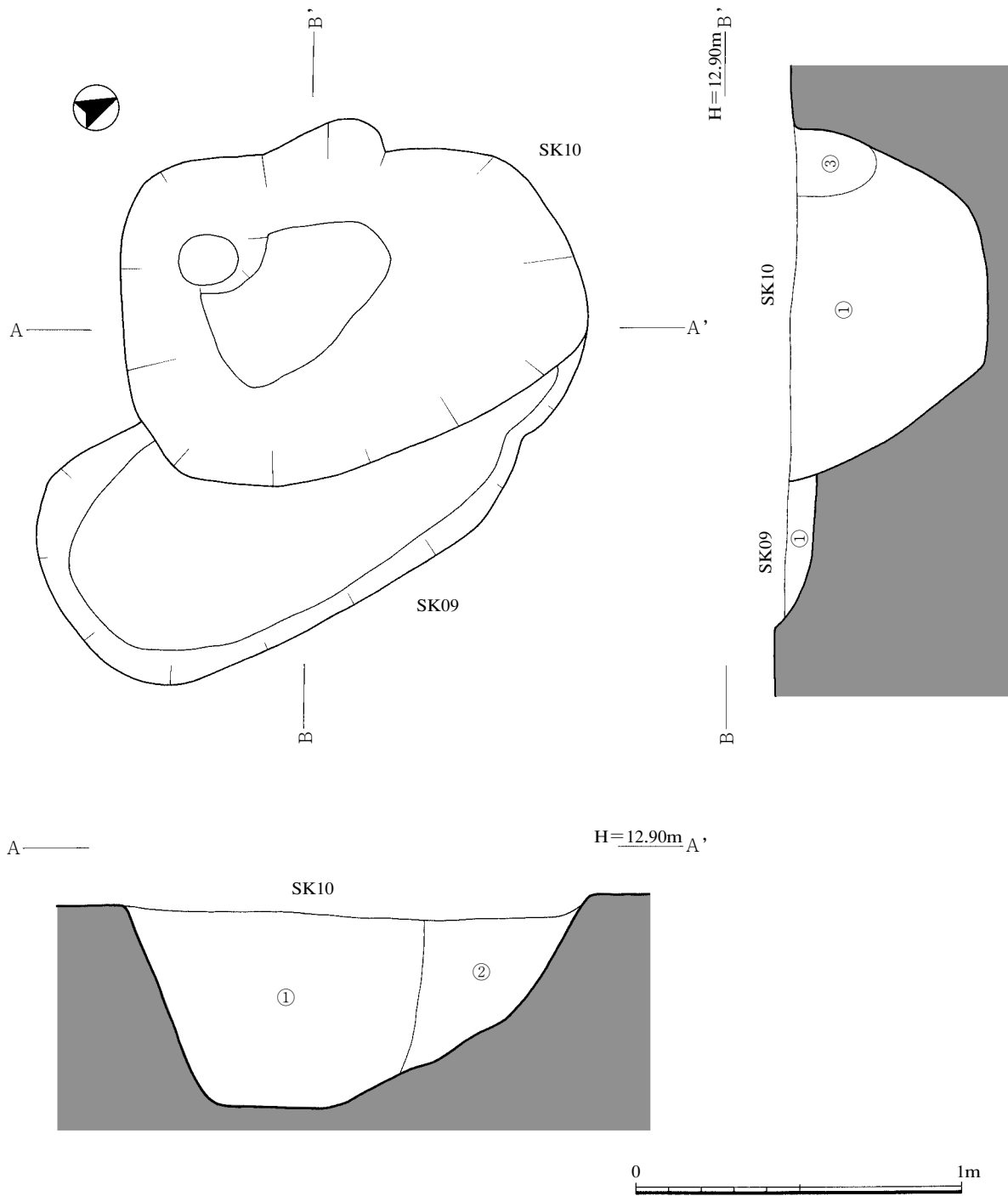
この2つの遺構は切り合ったもので、SK09をSK10が切っている。

SK09は、全体像が不明であるが、残った部分から推定すると、南北に延びる長楕円形の土坑である。推定長軸は1.5m、短軸0.8m、確認面からの深さ55cmを測る。形態的には墓壇に似る。埋土はほぼ1層でロームを多く含む暗黄褐色土である。締まりは強い。

SK09を切るSK10は、長軸がN-30°-E方向に伸び、長軸の長さが1.45m、短軸の長さが1mを測る。底部は非常に小さくなり、長軸で60cm、短軸で40cmほどである。確認面からの深さが60cmを測る。この遺構の性格は不明であるが、土坑としておく。埋土は1層で、炭化物・ロームを含む暗黄褐色土である。締まりは強い。これに一部ピット状の掘り込みがあるが、柱跡かどうかは不明である。



第86図 II f区遺構配置図 S=1/100



- SK09 ①暗褐色土。締まりがある。炭化物多く含む。遺物含む。
 SK10 ①暗褐色土。締まりがある。黄褐色土が多く混じる。炭化物も少し含む。
 ② 暗黄褐色土。締まりがある。①層より黄褐色土が多く混じる。
 ③ 暗褐色土。Pitあと。色や締まりは②層と変わらない。

第87図 Ⅱf区SK09・SK10実測図 S=1/20

この調査区では多くの柱跡を確認した。ただ、調査区の広さから掘立柱建物を想定するにはかなり無理がある。まして、整理段階での想定は誤謬のおそれ大きい。そこで、現場調査担当者が最終的に掘立柱建物跡や柵列跡と認識したものについて記述をする。以下の掘立柱建物跡や柵列も同様である。

【SA01】(第88図)

この遺構は調査区の南側で検出した柵列で、調査範囲を広げれば、建物跡のなる可能性がある。この遺構はSA05との切り合い関係にある。SA01がSA05を切っている。

SA01の柱穴径が20cm～30cmを測る。柱間としては3間までは確認している。柱間は2.0m+1.8m+2.2mを測る。柱の検出面からの深さは、40cm前後を測る。

【SA02】(第88図)

この遺構は、SA05とほぼ直交するものであるが、明確に柱筋は通っていない。柱間を2間のみ確認している。柱間は、2.0m+2.0mを測り、間隔自体は広めである。柱の掘り方の径は22cmほどで、検出面からの深さは2穴とも36cmほどを測る。ただ、1穴はほとんど掘り込まれていない。

【SA03】(第88図)

この遺構は調査区の南西隅で検出した柵列である。ほとんど痕跡に近く、検出面からの深さが20cmほどしかない。柱間は2間を確認し、1.9m+1.7mを測る。主な柱の掘り方の径が60cmほどである。中心の柱は他の土坑との関係からはっきりしない。

【SA04】(第88図)

この遺構は調査区を中心付近で確認した柵列で、SB01と関係する。柱間は、2間を確認し、1.6m+1.6mを測る。他のものよりやや間隔が狭い。柱の掘り方径は、40～50cmほどで、検出面からの深さは20～30cmほどを測る。

【SA05】(第88図)

この遺構は先に述べたようにSA01と共有する部分があり、重なるものもある。この遺構の柱穴は確認できるもので径が20cm～40cmほどもあり、その差が大きく、本来の形状を確認することはできない。図上から柱痕と考えられる部分の間を測り出すと、1.8m+2.0m+1.6mとやや不規則な間隔でこのままで柱間隔にしてよいか疑問が残る。検出面からの深さは、40cm～60cmほどを測る。

【SA06】(第86図)

この遺構は、調査区の北側付近で検出した柵列である。これも柱跡はわずかに3箇所並びを確認しただけである。これについては詳細図がないので、第86図から柱間を計算すると、1.8m+1.7mである。柱穴の大きさはこの図上でははっきりしないが、径が50cm前後を測る。深さは不明である。

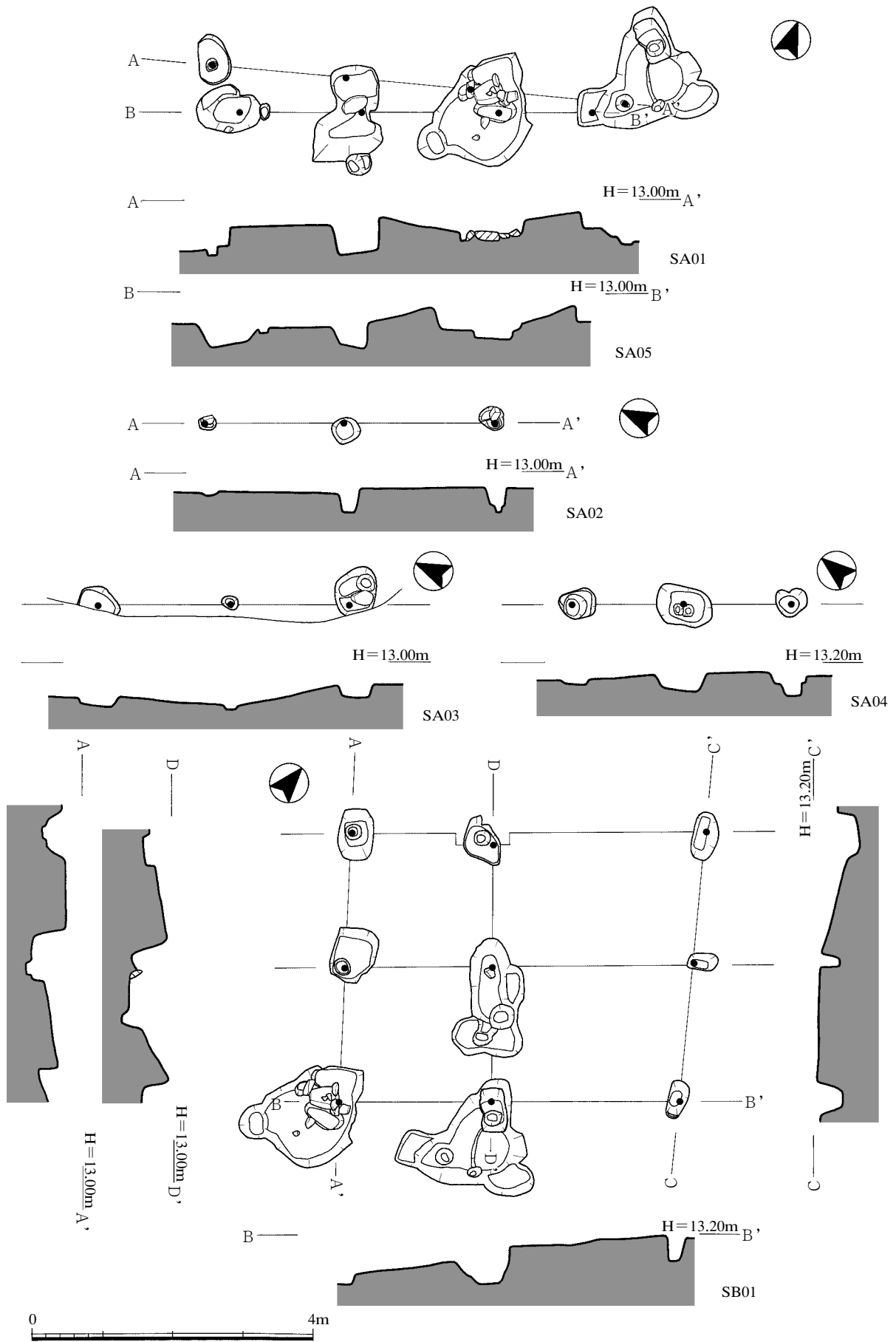
【SB01】(第88図)

この遺構は調査区のほぼ中央部で検出した柵列である。第88図の下の実測図によれば、2間×2間の倉庫状の建物跡である。柱の並びとしてはあまり間隔が良くない。図の左2列は柱の間隔と相互の並びはよいが、右側1列が柱の大きさ、並び方向が異なる。また、柱穴の状況も異なるようである。このことからこの建物跡が正しく並ぶか疑問が残る。

それぞれの柱間は、A-A'で2.0m+2.0m、D-D'で1.8m+2.0m、C-C'で2.0m+1.8m、B-B'で2.2m+2.6mである。検出面からの深さは一定しないが、標高13.0mからは、40～80cmを測る。

【SB02】(第86図)

この遺構は、調査区のほぼ中央付近で検出した柵列で、SB01と交錯する。調査者によれば、かなり大型の建物跡を想定している。ただ、柱自体の組み合わせ方がはっきりしない。方向が東北東-西南西で、南側の並び方はだいたい並ぶ。一方北側はあまり明確に柱跡を特定できていない。そのため、完全に並ぶわけで



第88図 Ⅱf区SA01~05・SB01実測図 S=1/80

はない。

詳細図がないので第86図の小縮尺図から柱間を計測すると、南側では6本ほどの並びがあり、西から2.4m+1.4m+1.3m+1.1m+1.9m+1.9mとやや不均等である。北側ではどれを採用すべきかではっきりしない。また、隅が調査区外にでるのでさらにはっきりしない。

【SB03】(第86図)

この遺構については詳細実測図がなく、第84図からみる限りでは、直交する2本の柵列のようにもみえる。図上では北西～南東に延びる柱列では北から3間を取ることができる。柱間は1.7m+2.6m+1.9mを測る。また、南西方向の柱間は、北から1.4m+2.0m+1.5mを測る。

この遺構も柱の取り方は、かなり無理がありそうである。柵列にした方がよいかもしれない。

【SB04】(第86図)

この遺構はSB03の想定方向に似た形で想定している。ただ、図上で想定される柱跡がどれか特定しがたいところがある。北側では大まかにとらえられる柱跡は、柱間が2.5mほどになり、やや大きすぎる。南北方向では、1.5m～2.0mとなり、他のものとそう違わない。これも柵列とした方が良さそうである。

【SB05】(第86図)

この遺構は調査区の北側で検出したものだが、上記同様あまり柱跡がはっきりせず、並びの良いものを取っていくなかで想定されたものである。方向的にはSB03に近いが、わずかに軸がずれる。はっきりとした柱跡を特定しがたいものが多く、このまま建物跡とするには厳しい。柵列としてもうまく繋がらない。

【SB06】(第86図)

この遺構は調査区の北側で検出したもので、SB03、SB04などと重なる。確認できる柱間を第86図から検出すると、南北方向で北から、2.2m+2.1mの2間、東西方向で2m+2mの2間を特定できる。ただ、詳細な実測図がないので、個々の柱穴の状況はつかめない。図上での並びはよいので、一応建物跡としておく。

(4) 遺物

【SK10の出土遺物】(第89図)

394は、瓦質土器の火鉢の破片である。口縁部から胴部にかけて残る。胴部から口縁部まではほぼ直になっており、口唇部は断面三角に肥厚し、3cmほど下に微隆起したような貼付突帯が巡る。その間には、梅花文が1cmほどの間隔で押印されている。

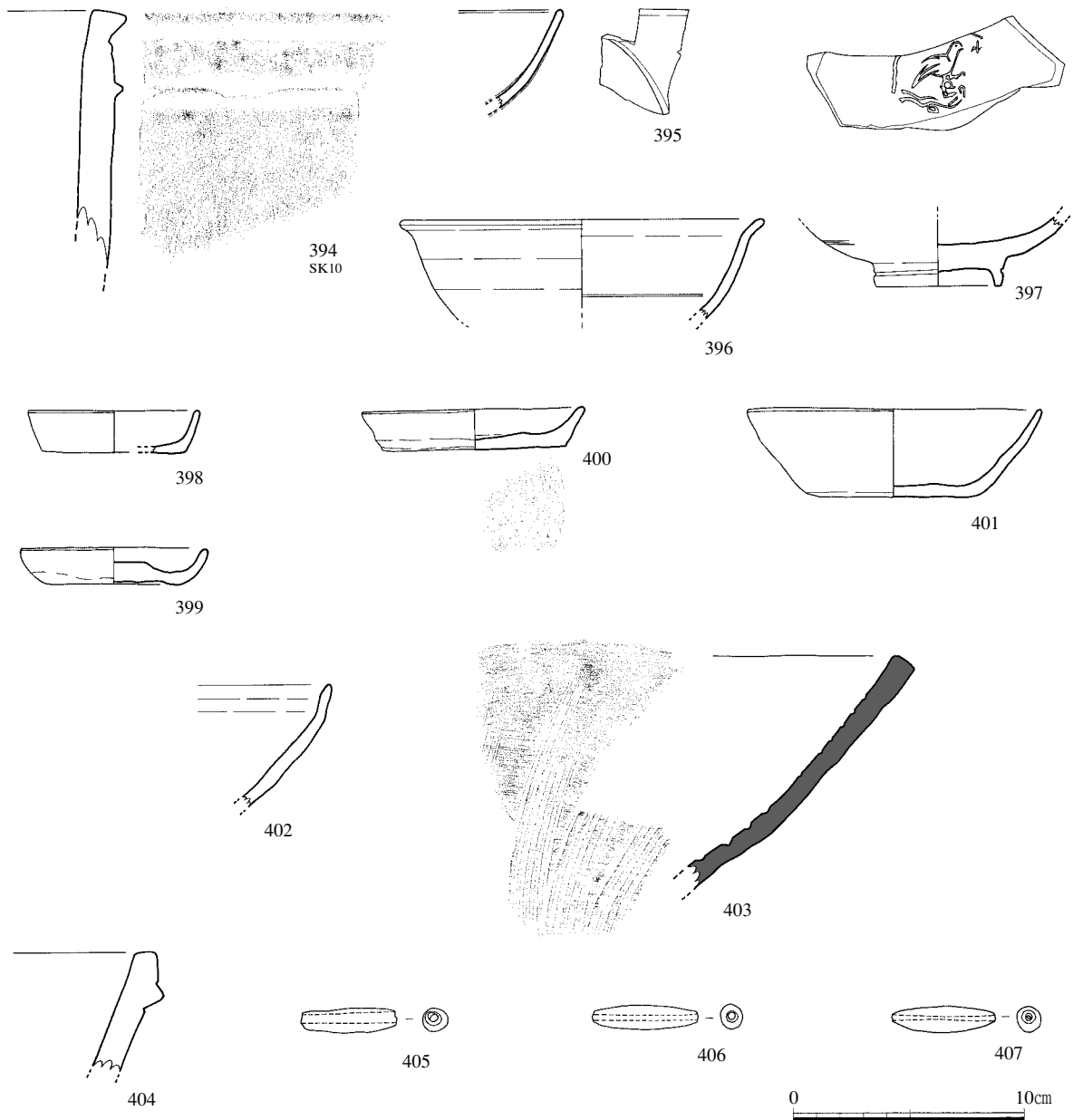
【包含層の出土遺物】(第89図)

395は、K-30グリッド④層から出土したもので、青磁碗の口縁部破片である。連弁の一部がみえる。釉は厚くかけられている。

396は、K-30グリッド④層から出土したもので、龍泉窯系の青磁碗の一部で、口縁部付近で急に外反するものである。内器面上位には細い沈線が巡る。復元口径は15.6cmを測る。

397は、同じくK-30グリッド④層から出土したもので、龍泉窯系の青磁碗の一部である。外器面にはやや弱い沈線が2条巡る。高台は削り出しにより成形され、削りの技法の一つか1条の沈線を巡らせている。内面見込には片彫りにより、鳥文が描かれる。

398～400は、土師質土器の皿である。397は底部からほぼ直に立ち上がるもので、復元口径が7.3cm、器高が1.8cmを測る。調整は摩耗のため不明である。398はロクロ成形に際し内器面中央部を高く残し周辺部を薄くするように作っている。復元口径が8.0cm、器高が1.6cmを測る。399は、復元口径が9.4cm、器高が1.7cmを測る。口径が広く、底径も広い。体部は低く、内器面での屈曲はあまり目立たない。器表面には横方向のナデで調整されている。外底面には糸切り痕跡が残る。



第89図 Ⅱf区包含層出土遺物実測図 S=1/3

401は、土師質土器の坏である。底径は狭く、口径が広いので、底部から体部は斜めに立ち上がっていく。復元口径が12.6cm、器高が3.8cmを測る。

402は、K-30グリッド④層の出土で、天目碗の破片である。口縁部は細くなり、口唇部付近でやや内傾し、端部断面が細くなり終わる。釉色は焦茶色を呈する。胎土には石英・輝石・細砂粒を僅かに含み、色調は真珠色を呈する。12～13世紀中期のものであろう。

403は、K-31グリッドからの出土である。須恵質土器の播鉢片である。内器面には6条一単位の櫛描きによる播目が下方から上方へ引かれている。器面調整は丁寧な横方向のナデである。

404は、石鍋片である。口縁部から2cmほど下位にやや大きめの錨状の突帯が巡る。器表面は丁寧な削りによる調整が施される。木戸編年というⅢ類-e-1にあたり、時期的には16世紀前半の頃の生産とされる。

405～407は、土師質土器の土錘である。長さは平均6～7cmほどを測り、内部は穿孔されている。表面は摩耗している。いずれも④層からの出土である。

第8節 調査Ⅱg区

(1) 調査区の概要(第90図)

調査Ⅱg区は調査Ⅱb区の南側に位置する。調査区の位置は、南北が $X=-56365.5$ 、 $Y=-33743$ から $X=-56405$ 、 $Y=-33747.5$ まで、東西が $X=-56367$ 、 $Y=-33741$ から $X=-56387$ 、 $Y=-33760$ までの範囲である。

この調査区は、字が新城であるが、勝尾山と呼ばれるところから古麓城跡の一角をなす勝尾城跡の可能性が高かった。そこで、限られた調査期間で有効な成果を上げるため、城跡の建物跡の存在が想定できる頂部と付属施設や登城口の存在が想定できる斜面や斜面の中腹に確認調査を実施した。その結果、今回の調査対象地内に明確な登城口を確認することはできなかった。

そこで、勝尾山のうち、遺構の予想できる山頂部及び中腹のうち平坦部を形成する箇所を調査対象区とした。

遺構としては、階段状遺構と2つほどの土坑やピットを確認しており、人為的な営みがあったことを示している。遺物はやや広い平坦部でわずかに出土している。

(2) 土層

西側の土層部分について、注記を略述する。

I層は表土。II層は客土で、灰黄褐色を呈している。粘性土で柔らかい。表土に似た黒褐色土や竹の根が混じる。いくつかのピットの埋土もこの層に似る。この層からは磨石、黒曜石剥片、中世(13世紀代)の播鉢片、須恵器片などが出土した。III層は、黄褐色の粘質土に明黄褐色土が混じる火山灰土。炭化物も混じり、良く締まる。いくつかのピットの埋土に似る。この最下層でピットが確認できる。8～9世紀の遺物を含む。IV層は、燈色の粘土でスコリア含む。V層は、岩盤である。黄褐色を呈する。

(3) 遺構

【SX01(階段状遺構)】(第91図)

平坦部から下の段へ降りるもので、抉られた状態で5段の階段と考えられる。

比高差は1.1mを測る。一段ごとは必ずしも一様ではなく、意図的にはっきりした階段を作り出したわけではなく、やや地形的に抉られたようになった部分を上り下りの道として利用しているうちに階段状の地形をつくりだしたもののようである。

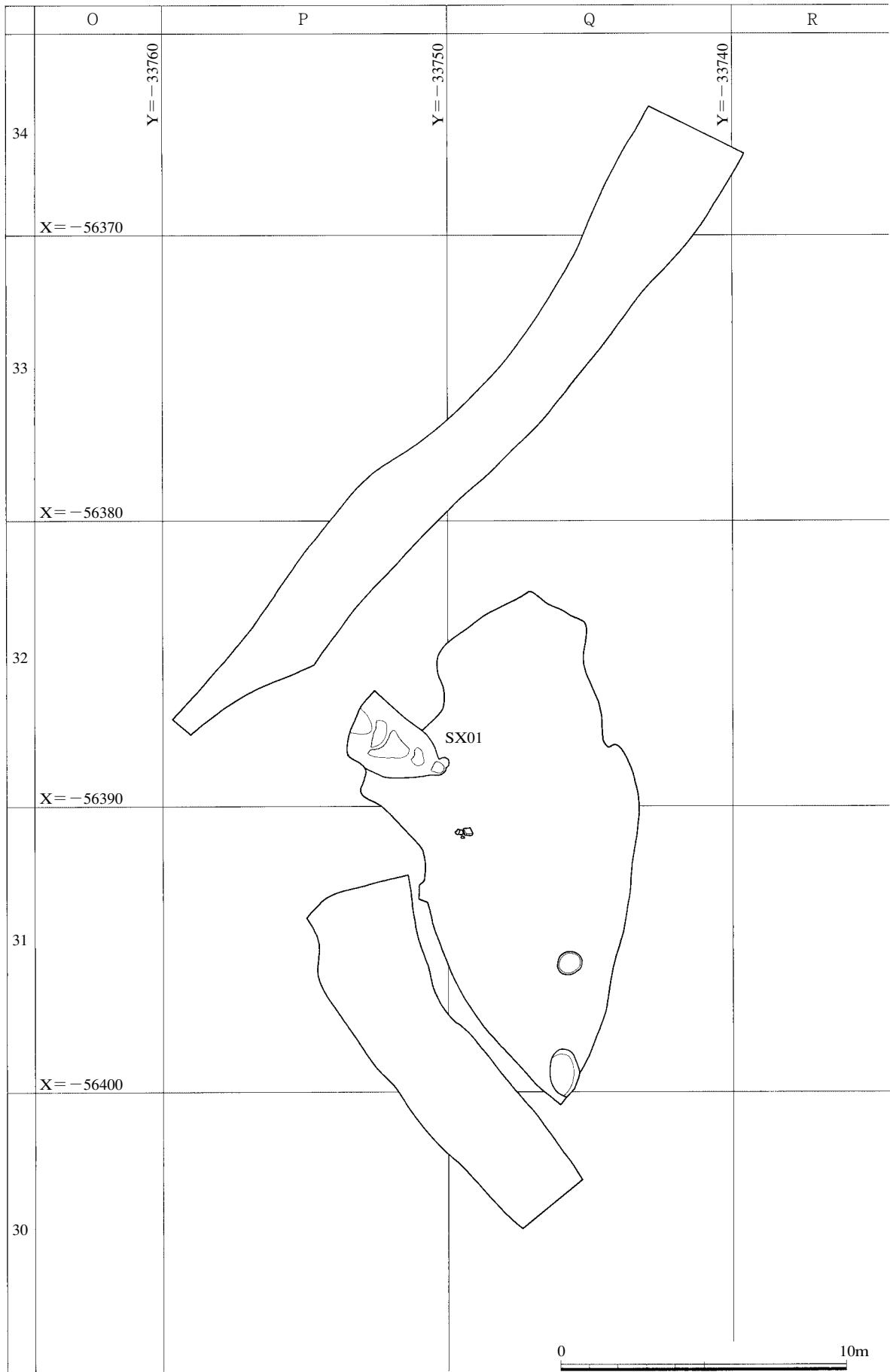
出土遺物がなく時代ははっきりしない。

(4) 遺物

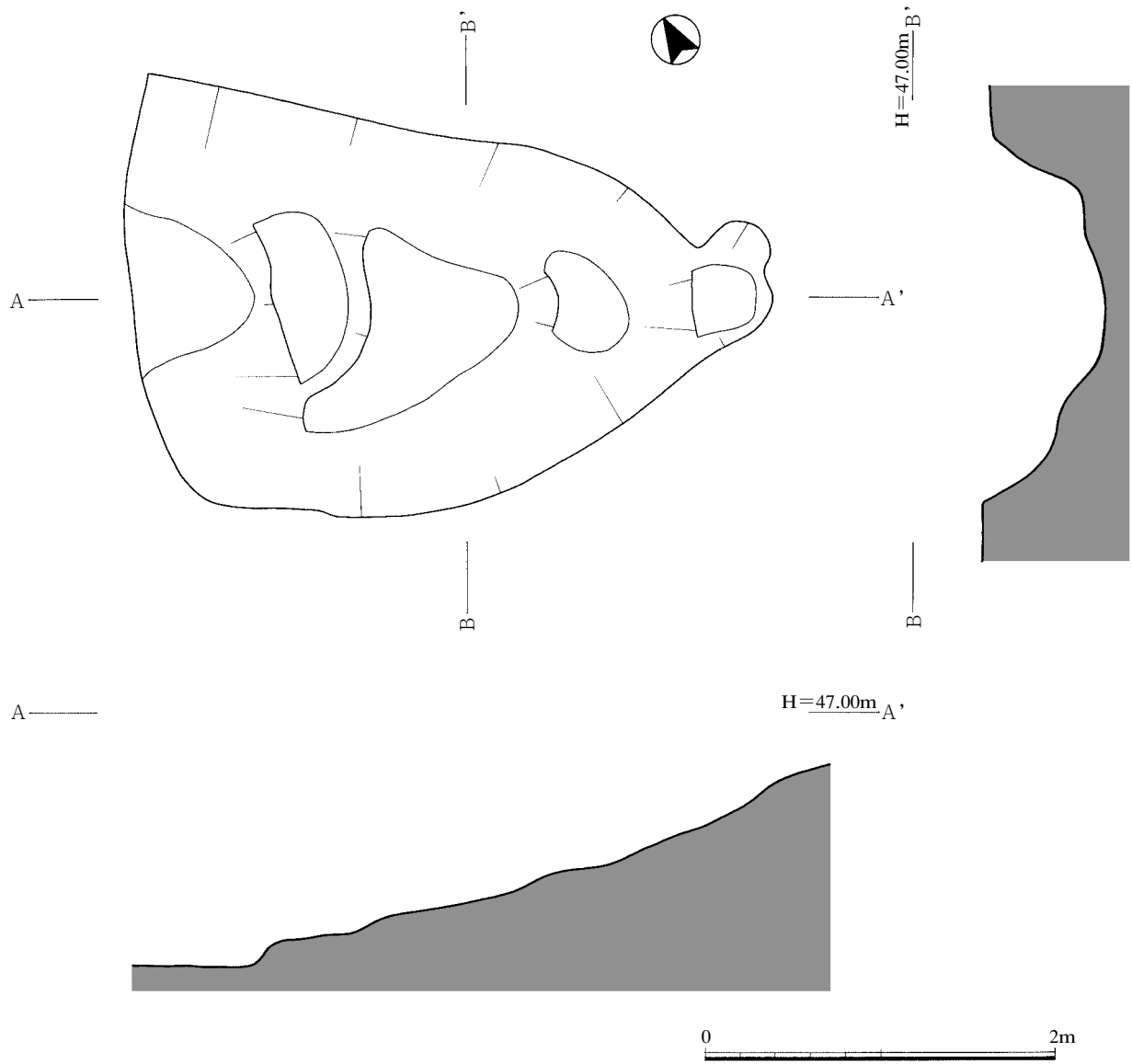
【包含層の出土遺物】(第91図)

この調査区から出土遺物は少なかった。そのわずかな中から図化したのが408である。この遺物は、頂部の平坦面の②層上位から出土した古代須恵器の鉢で、赤焼けのものである。胴部低位から底部まで残存している。外器面の底部付近は横方向のケズリで成形されている。内器面底部に指押さえ痕が残る。胎土はよく精製されているが、まれに細砂粒含む。復元底径は5.1cmを測る。

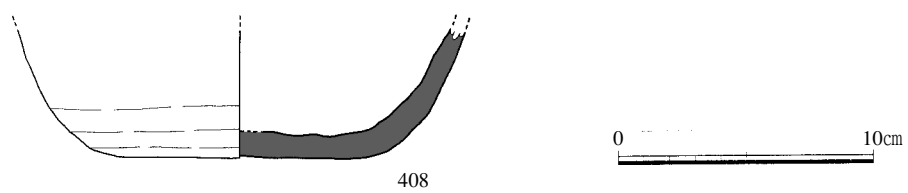
この他、縄文時代の石器や中世の播鉢片等も遺物として混入している。



第90図 IIg区遺構配置図 S=1/200



第91図 IIg区SX01実測図 S=1/40



第92図 IIg区包含層出土遺物実測図 S=1/3

第9節 調査Ⅱh区

(1) 調査区の概要(第93図)

調査Ⅱh区は調査Ⅱb区の南側に位置する。調査区の位置は、南北が $X=-56426$ 、 $Y=-33792$ から $X=-56474$ 、 $Y=-33782$ まで、東西が $X=-56469$ 、 $Y=-33778$ から $X=-56439$ 、 $Y=-33814$ までの範囲である。

この調査区は、谷間の平坦になった部分である。調査区内には、井戸跡、溝、不明遺構などが出土した。時期的には古代から中世、近世の遺構と考えられる。

(2) 土層

調査区内に設定した土層断面観察用ベルトは、任意の位置であったが、十分目的を果たしているとはいえない。ただ、一端を示すものではあろう。

この調査区の西側の土層の注記は次の通りである。

I層は表土である。II層は青灰色土で、砂利が混じり硬く締まる。III層は、灰褐色土で、シルト質で密である。鉄分が混じる。IV層は灰褐色を呈し、鉄分が混じり少し青みが濃い。V層は暗褐色を呈し、砂利が多く硬く締まる。VI層は暗黄褐色を呈し、凝灰岩粒子が混じる。VII層は暗褐色を呈し、凝灰岩が混じる。

(3) 遺構

【ST06】(第95図上)

この遺構は調査区の北側で検出した。円形桶棺と考えられる。遺構として認識できたのが墓壇の底面近くになってからであるため、確認面からの墓壇底面までの深さは40～50cmほどである。本来の掘り込みの深さは不明である。掘り込みの形状は、ほぼ円形で、径が1.3m、底面での径1.2mを測る。

桶棺は土圧のためかややひずみ、楕円形になっている。径は約70cmほどである。縦方向に板材の一部が腐食しながらも残っていた。底部はほぼ揃っていたが、上部は腐食していたため本来の大きさは不明である。すでに人骨は腐食し残っていない。また、底板は見られなかった。

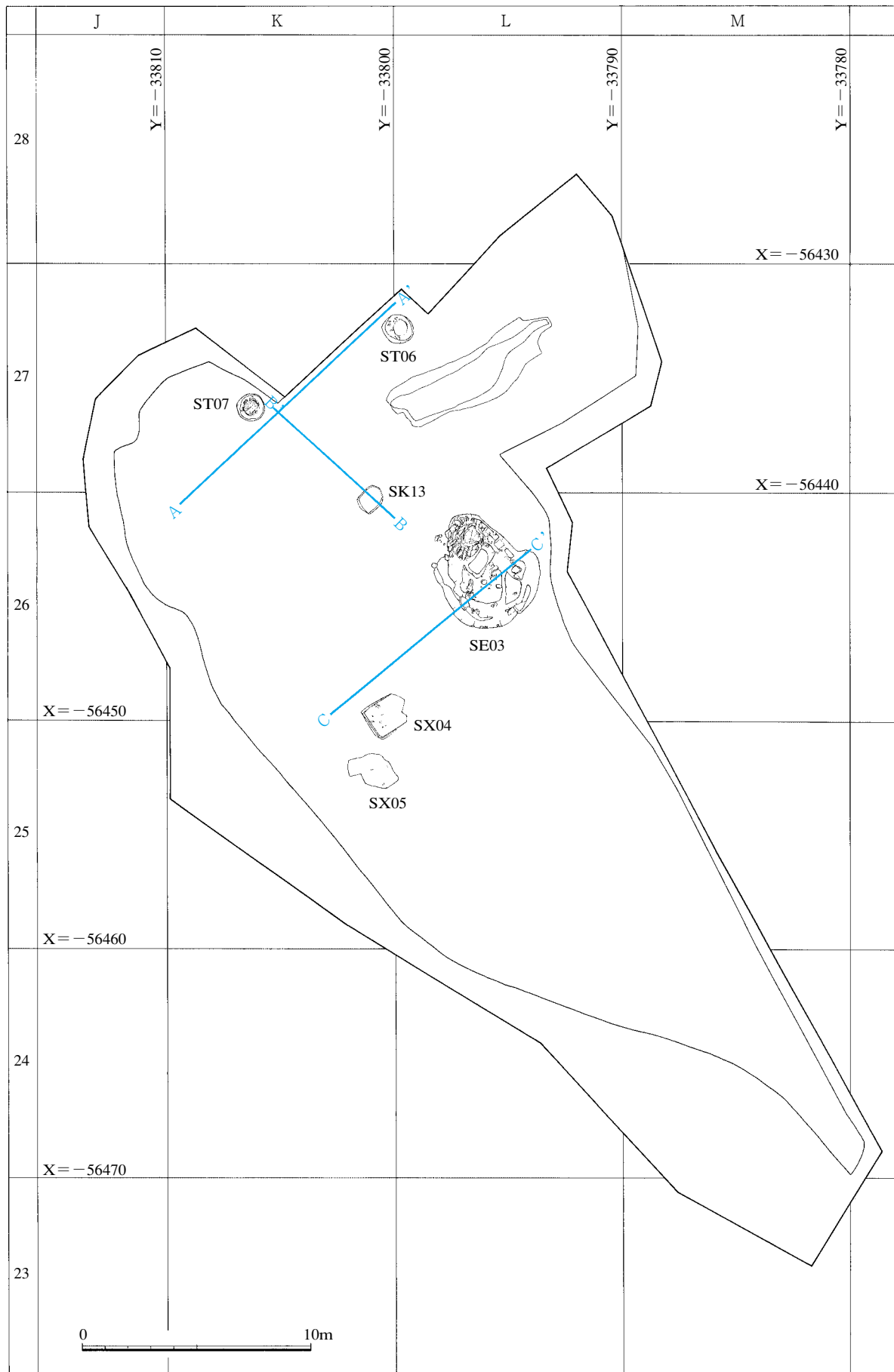
棺の外側では、副葬品と考えられる遺物が出土している。副葬品のうち景德鎮系の碗や天目台、白磁皿などが出ているところを見ると、被葬者の階層はかなり裕福な方ではあろう。喫茶を嗜み、16世紀中期頃までの人物ということになる。

【ST07】(第95図下)

この遺構は調査区の北東側で検出し、ST06の南西側にある。円形桶棺で、底板もしくは上蓋と考えられる板材が底部に残る。この遺構も認識できたのが墓壇の底面近くになってからであるため、確認面からの墓壇底面までの深さは20～30cmほどである。特に桶棺のあった部分は本来の掘り込みの深さが不明である。掘り込みの形状は、ほぼ円形で、径が1.3m、底面での径1.2mを測る。

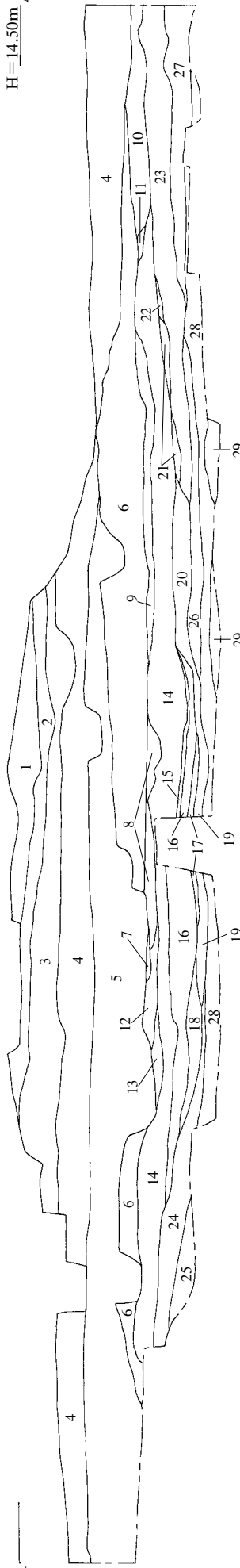
桶棺は土圧のためかややひずみ、楕円形になっている。径は約70cmほどである。縦方向に板材の一部が腐食しながらも残っていた。底部はほぼ揃っていたが、上部が腐食していたため本来の大きさは不明である。底板は見られなかった。すでに人骨そのものは、腐食し残っていなかった。副葬品が、棺の内側ではなく外側から出土している。先に副葬品を入れて棺を上にしたのであろうか。ただ、副葬品の破損を考えると、底板のない桶を被せた可能性もある。

この遺構の時期は、副葬品が少なく、鉄釉の碗の時期により決まりそうであるが、隣接するST06の時期とそう離れた時期ではないと想定して、16世紀代としておく。

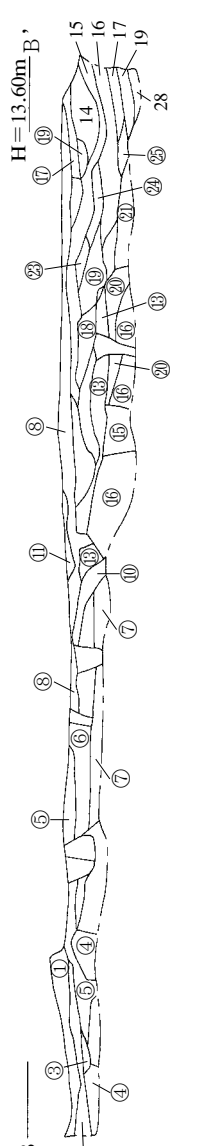


第93図 IIh区遺構配置図 S=1/250

H=14.50m A'

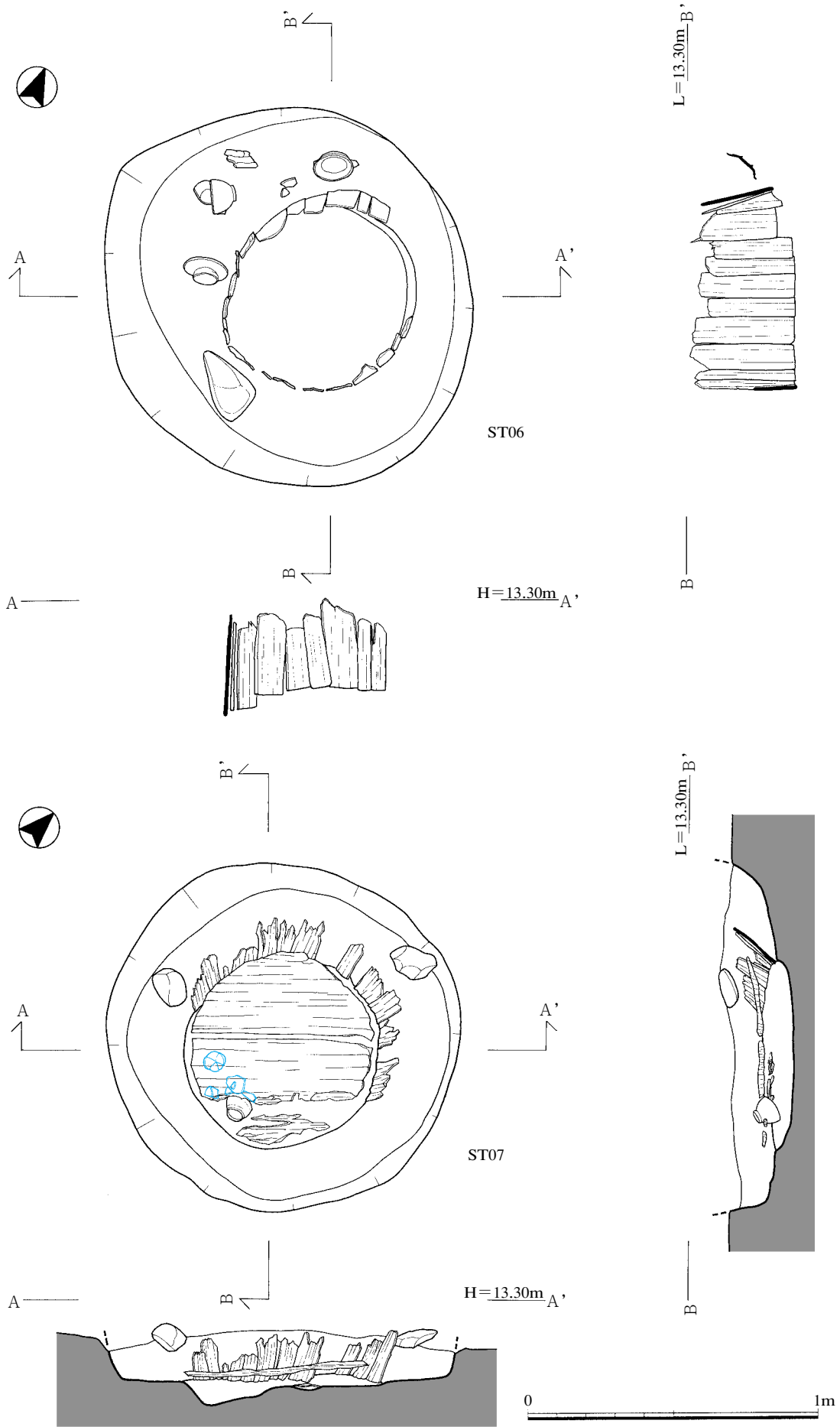


H=13.60m B'



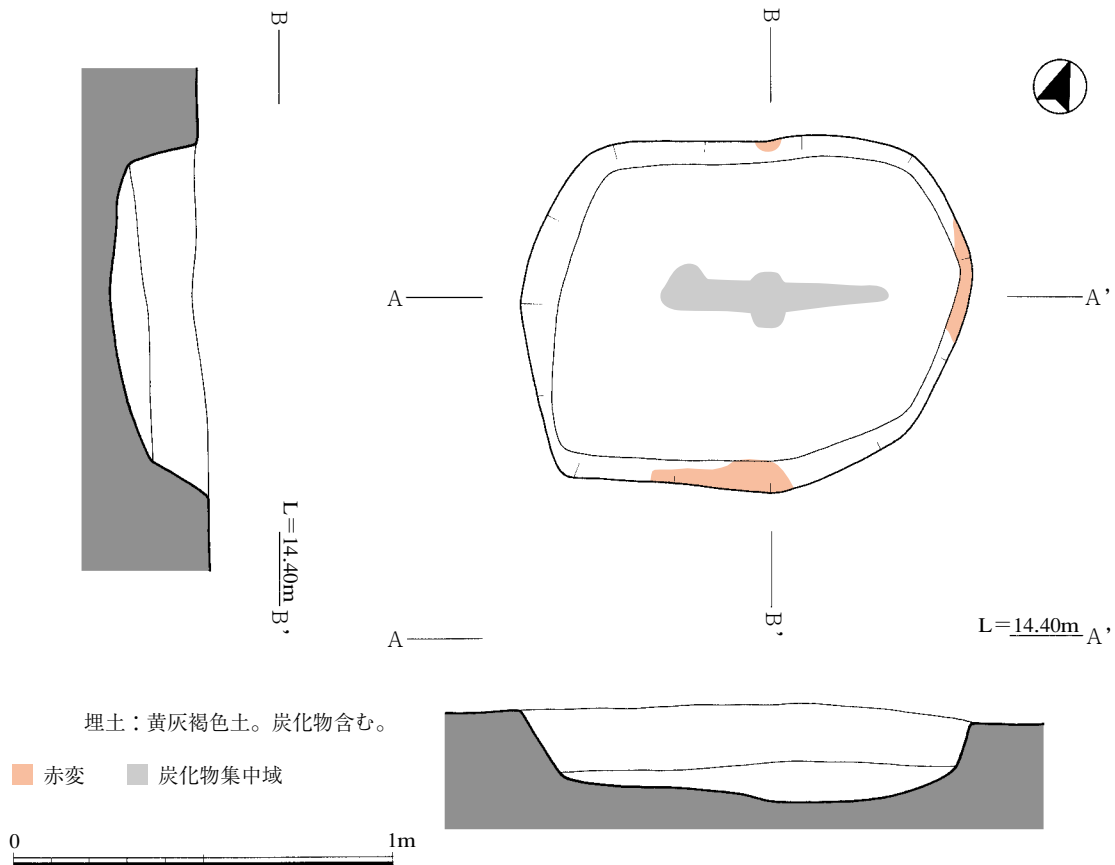
- ① 褐灰色土。縮まりがある。粘性中。やや砂質。5 cm前後と10cmの礫が混じる。鉄分が集積する。
- ② 褐灰色砂粒。縮まりがある。粘性中。上部に鉄分が集積する。
- ③ 浅黄色土。縮まりがある。粘性強。炭化物、土師器片が若干混じる。鉄分、マンガンが集積する。
- ④ 浅木色土。縮まりがある。粘性強。炭化物、土師器片が混じる。鉄分、マンガンが集積する。
- ⑤ 灰黄色土。強く縮まる。粘性強。炭化物、土師器片が混じる。鉄分が集積する。
- ⑥ 灰黄色土。縮まりがある。粘性強。炭化物、土師器片が混じる。鉄分が集積する。
- ⑦ 黄灰色土。強く縮まる。粘性強。炭化物、土師器片が混じる。鉄分が集積する。
- ⑧ 黄灰色土。強く縮まる。粘性強。炭化物、土師器片が混じる。鉄分が集積する。
- ⑨ 灰黄色土。強く縮まる。粘性強。炭化物、土師器片が混じる。鉄分が集積する。
- ⑩ 灰黄色土。強く縮まる。粘性強。炭化物、土師器片が混じる。鉄分が集積する。
- ⑪ 灰黄色土。強く縮まる。粘性強。炭化物、土師器片が混じる。鉄分が集積する。
- ⑫ 灰黄色土。強く縮まる。粘性強。炭化物、土師器片が混じる。鉄分が集積する。
- ⑬ 灰黄色土。強く縮まる。粘性強。炭化物、土師器片が混じる。鉄分が集積する。
- ⑭ 灰黄色土。強く縮まる。粘性強。炭化物、土師器片が混じる。鉄分が集積する。
- ⑮ 灰黄色土。強く縮まる。粘性強。炭化物、土師器片が混じる。鉄分が集積する。
- ⑯ 灰黄色土。強く縮まる。粘性強。炭化物、土師器片が混じる。鉄分が集積する。
- ⑰ 灰黄色土。強く縮まる。粘性強。炭化物、土師器片が混じる。鉄分が集積する。
- ⑱ 灰黄色土。強く縮まる。粘性強。炭化物、土師器片が混じる。鉄分が集積する。
- ⑲ 灰黄色土。強く縮まる。粘性強。炭化物、土師器片が混じる。鉄分が集積する。
- ⑳ 灰黄色土。強く縮まる。粘性強。炭化物、土師器片が混じる。鉄分が集積する。
- ㉑ 灰黄色土。強く縮まる。粘性強。炭化物、土師器片が混じる。鉄分が集積する。
- ㉒ 灰黄色土。強く縮まる。粘性強。炭化物、土師器片が混じる。鉄分が集積する。
- ㉓ 灰黄色土。強く縮まる。粘性強。炭化物、土師器片が混じる。鉄分が集積する。
- ㉔ 灰黄色土。強く縮まる。粘性強。炭化物、土師器片が混じる。鉄分が集積する。
- ㉕ 灰黄色土。強く縮まる。粘性強。炭化物、土師器片が混じる。鉄分が集積する。

第94図 IIh区土層断面図 S=1/50



第95図 IIh区ST06・ST07実測図

S=1/20



第96図 Ⅱh区SK13実測図 S=1/20

【SK13】(第96図)

この遺構は不整形な形の土坑で、やや楕円形のような平面観を呈する。壁面は部分的に火により赤化している。底部の中心部には炭化物が集積していた。埋土は黄灰褐色の単層である。火を焚いた跡であるのは間違いないが、具体的な利用方法の特定は困難である。やや中心付近が深い。遺物は土師器の小片が出土しているが、細か過ぎて時期の特定はできなかった。長軸方向で1.2m、短軸方向で0.9m、確認面からの深さ25.0cmを測る。遺物の出土はなかった。

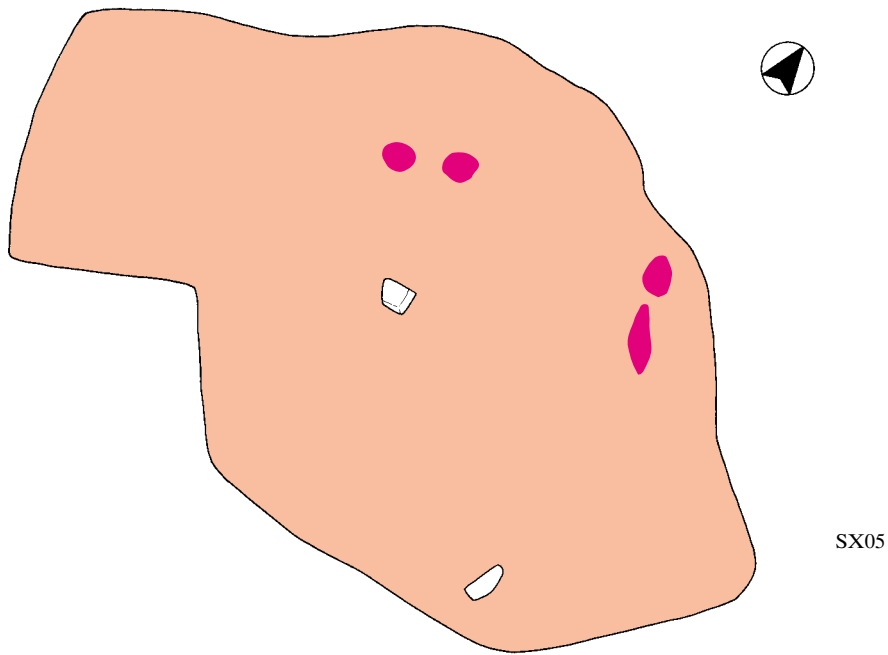
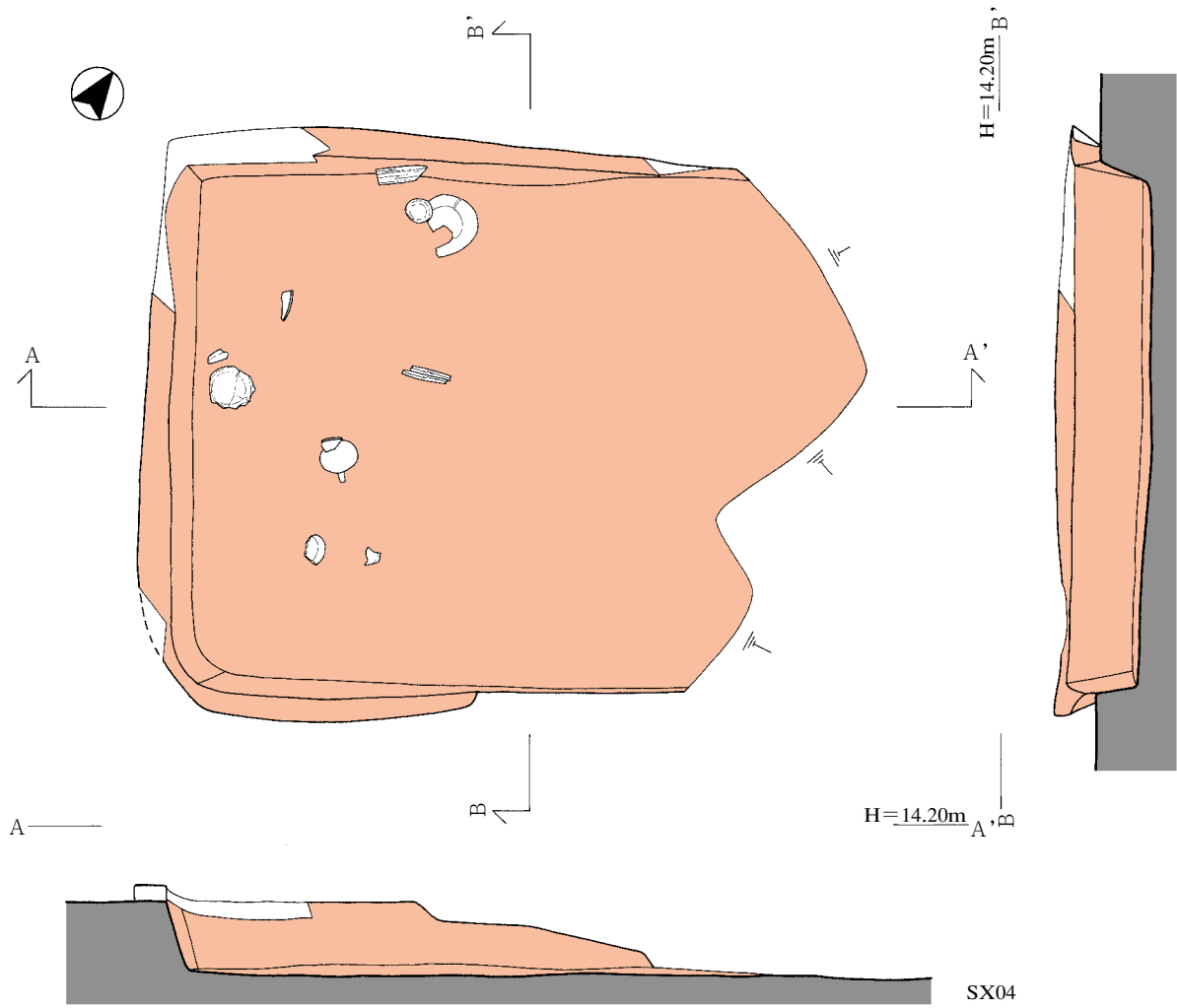
【SX04】(第97図上)

この遺構は岩盤に掘り込んで作られている。平面形は長方形を呈し、一側面は攪乱のためか欠落している。ただ、この欠けている部分も遺構の一部とした方がよいのかは明確でない。出土遺物は床直から9点ほど取り上げているが、いずれも平安時代初期のものである。遺構自体も古代のものであろう。

埋土は褐色土で、黄色土を部分的に含む。壁面は粘土で丁寧に成形され、厚く焼きしまり、赤色に変色している。床面は1cmほどの厚さで炭化物の層があったが、それを剥ぐと床一面赤変していた。床直より上の埋土中に炭化物は含まれていなかったため、この埋土自体はこの遺構が潰れた後に入ってきたものかもしれない。

遺構内や遺構外に柱跡などの上部構造に関わるようなものは検出できなかった。したがって、天井部分などは想定できない。残存状況から見ると、長軸方向下端で1.8m、短軸方向下端で1.3mほどを測る。残存している壁面の高さは25cmほどである。

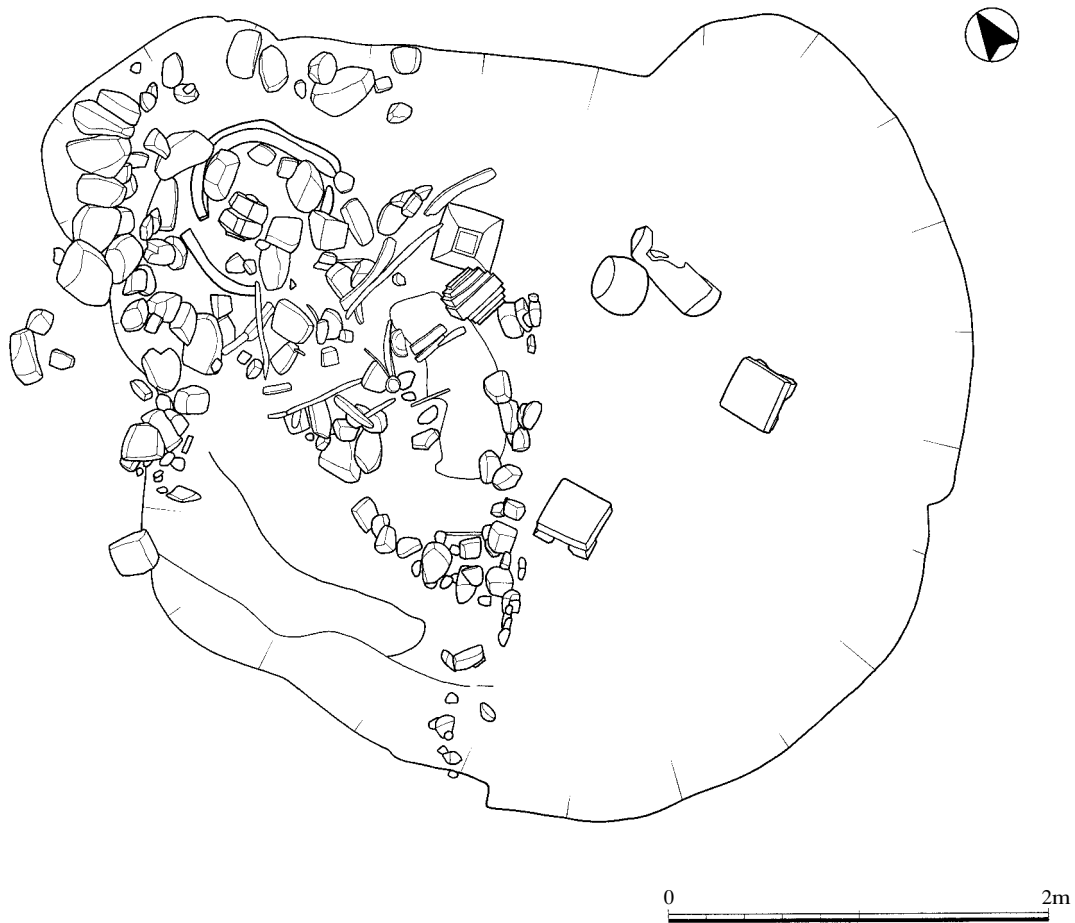
この遺構については、明確な根拠を示してではないが、他の類例から「岩風呂」ではないかという説もある。



■ 赤変

0 1m

第97図 SX04・SX05実測図 S=1/20



第98図 Ⅱh区SE03上面実測図 S=1/40

【SX05】(第97図下)

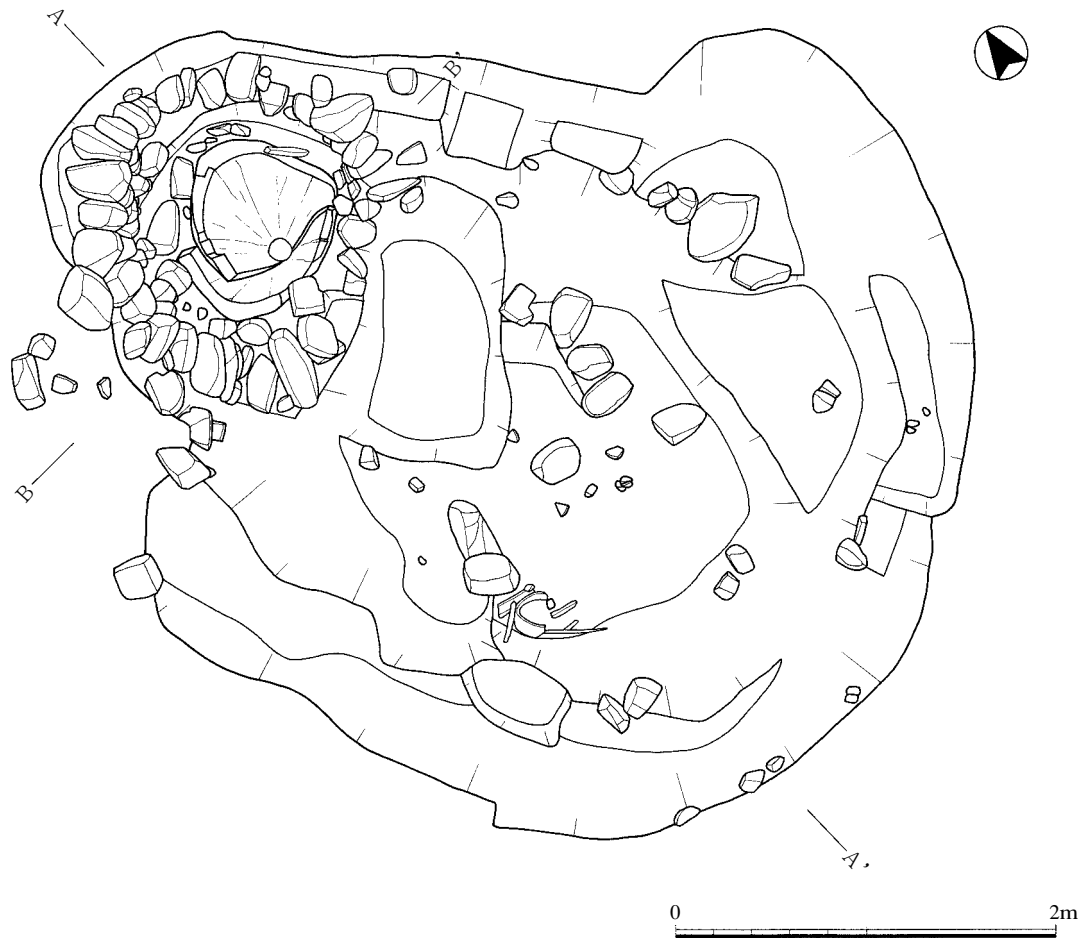
この遺構は周囲が攪乱を受けているため、本来の遺構形状はつかめない。主として灰や焼土が広がったものである。その中に石など多少の遺物が含まれている。この遺構は周囲の攪乱のため、掘り込みなどは確認できなかった。長軸方向で1.2m、短軸方向で94cm、高さ25cmを測る。中央部に焼土が带状に伸びているのが分かった。

【SE03(積石井戸跡)】(第98図～第100図)

この遺構は調査区のほぼ中心部で検出したもので、川原石を井戸枠にして積み上げた積み石井戸である。

最下層にはクスノキの削り貫き材を井戸枠として据えている。かなり腐植していたが、材として遺存していた。ただ、単純な削り貫きではなく、二つに割れたものを部材としている。

この遺構は井戸跡と考えているが、最終的な井戸跡は北側のもので、底部に2枚を合わせた削り貫き材を井戸枠として置き、楕円形の川原石を小口積み城に囲って作り上げている。上部は破壊されている。調査を進め、上部の遺物などを除去していった跡に、南側でも落ち込みを観察した。南北方向に設定した土層断面によると、最終的に増築された井戸跡の構築時の埋土よりも前に掘削されている。この落ち込みを掘り下げていくと、井戸枠を組みかけたような石の配列がわずかに残っていた。このことから、最初のこの落ち込み

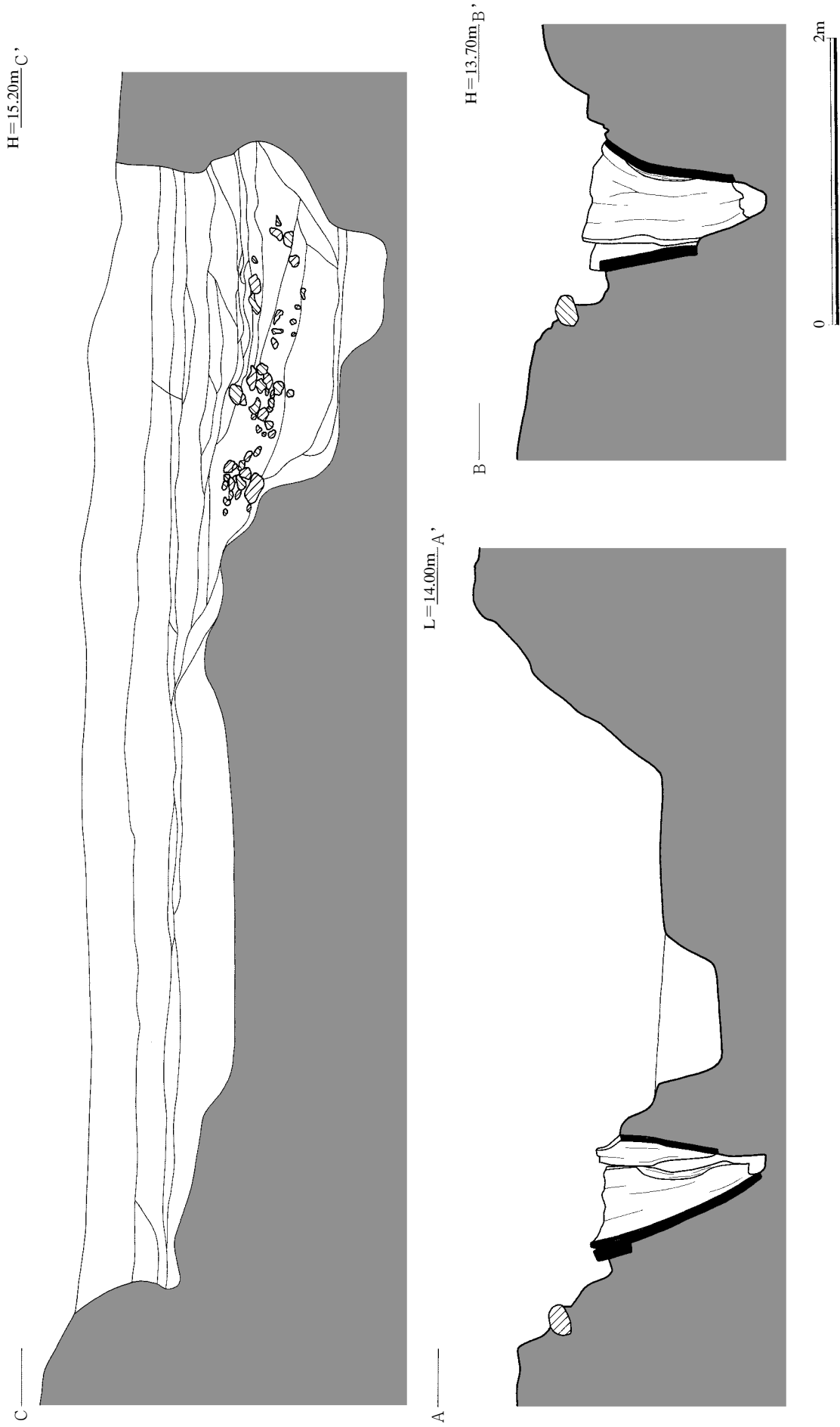


第99図 IIh区SE03下面実測図 S=1/40

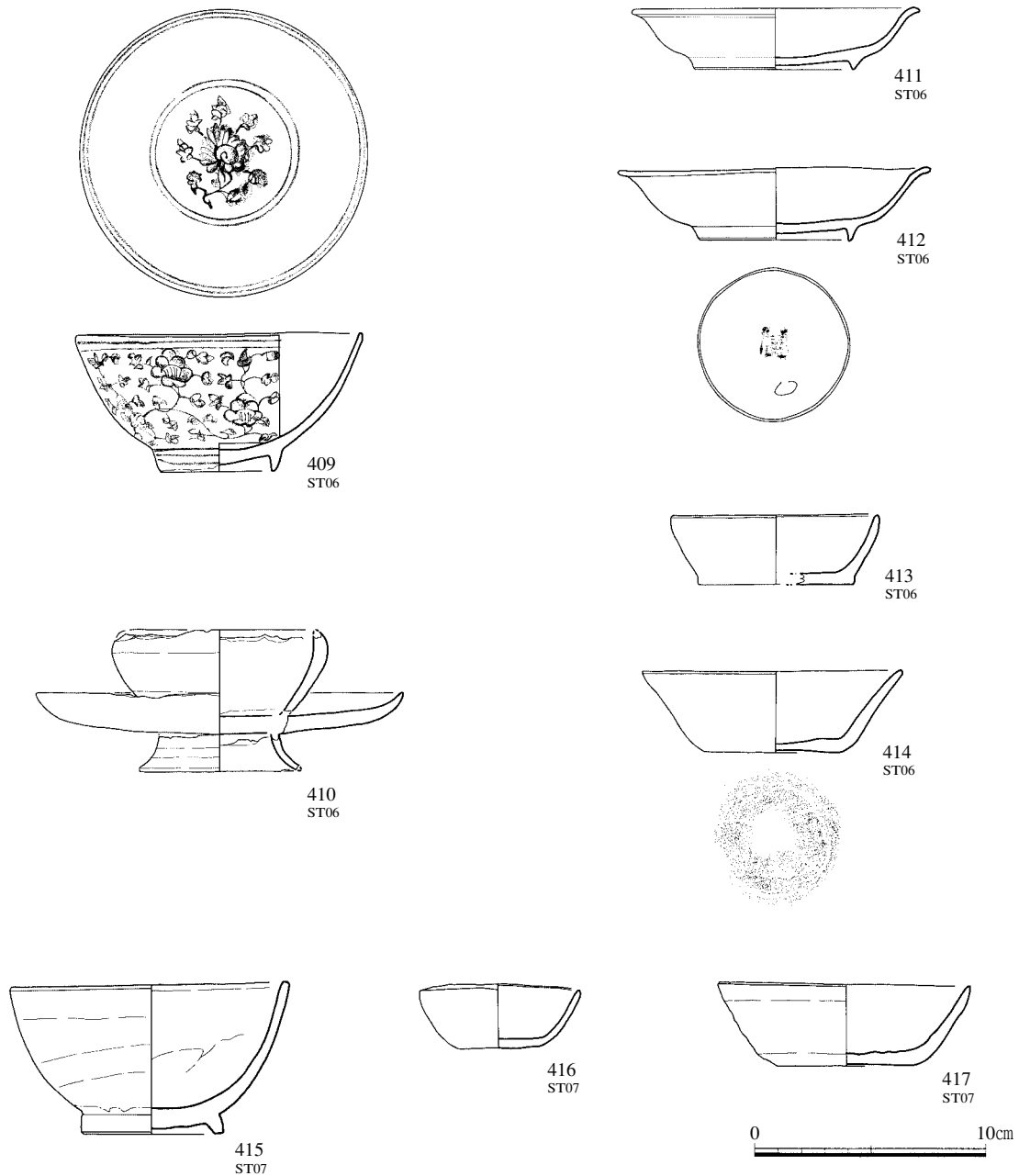
位置に井戸を作ったか、作りかけたが、何らかの理由でこの落ち込み部分をあきらめ、新たに北側方向に井戸を作った可能性がある。他に可能性としては、北側井戸を掘る際に、一段ステップを設けることで井戸掘削の作業効率を上げたとも考えられる。

さらに、この井戸が使われなくなった後、上部はかなり破壊されている。それだけでなく、ゴミだめかといえるほど様々な遺物が放り込まれている。このことが廃絶時になされたか、その後しばらくしてなされたかは、明確ではない。ただ、他地域でも廃絶後に同様の扱いを受けている例がある。当時の社会で井戸の廃棄後の扱いについてなんらかの慣習があったことを示すものかもしれない。この井戸跡に放り込まれたものとして宝篋印塔や五輪塔等の部材、白片、瓦片、磁器・陶器、土器類、木製の漆椀、曲物、削り貫き容器などがある。

この遺構の時期は、出土遺物の出方が分からないので、明確な想定はできないが、瓦片で最終的な段階は椀瓦の出土から古くも近世中期としておく。ただ、他の遺物をみると、近世初頭まで遡ってもよいかもしれない。



第100図 Ⅱh区SE03土層断面図 S=1/40



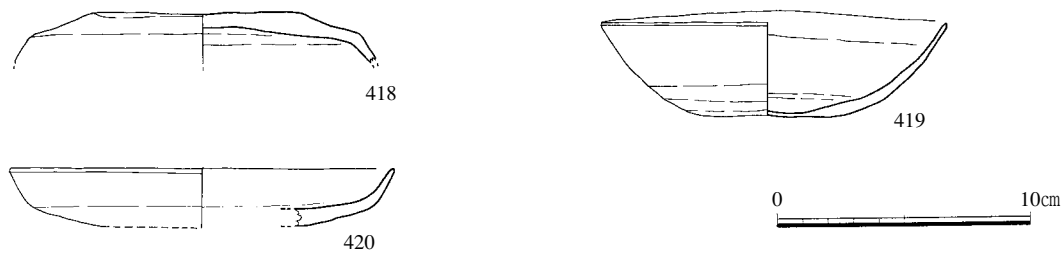
第101図 IIh区ST06・ST07出土遺物実測図 S=1/3

(4) 遺物

【ST06の出土遺物】(第101図上)

409～414はいずれも棺外から出土している。

409は、景德鎮系の染付碗である。口径が12.2cm、器高が5.9cm、高台径4.9cmを測り、完形品である。外器面口縁部には2条の圈線、体部には花文が描かれる。高台は削り出しによるもので、山形になっている。圈線が3条巡る。胎土は良く精製されているが、細砂粒・輝石を少量含む。胎土色は薄白茶色を呈する。文様の発色は深い藍色を呈する。焼成は良好である。内器面にはやや薄い真珠光沢を帯びた淡褐色の汚れが付着している。時期は16世紀中期である。



第102図 Ⅱh区SX04出土遺物実測図 S=1/3

410は、木製品で、黒色の漆塗りの天目台で、漆の塗りは濃い。取り上げに際し、ほうづき部、皿部、脚台の3つに分裂してしまったので、実測図では復元している。復元した器高が6.0cm、ほうづき部径が8.0cm、全体径が15.8cmを測る。木取りは漆が厚く不明である。

411・412は、白磁の皿で、共に完形品である。411が、口径12.3cm、器高が2.6cm、高台径が7.8cmを測る。胎土にはよく精製され、わずかに細砂粒を含む。透明釉である。412は、口径が13.1cm、器高が3.2cm、高台径が6.4cmを測る。高台内に染め付けによる方形の印判が書かれる。413は、土師質土器の坏である。復元口径が8.7cm、器高が3.0cmを測る。調整は摩耗のため不明である。外底部に糸切り痕がある。414も土師質土器の坏で、復元口径が11.1cm、器高が3.6cm、底径が5.8cmを測る。器面調整は摩耗のため不明である。外底部に回転糸切り痕がある。

【ST07の出土遺物】(第101図下)

415～417は大部分が桶棺の下もしくは中から出土している。

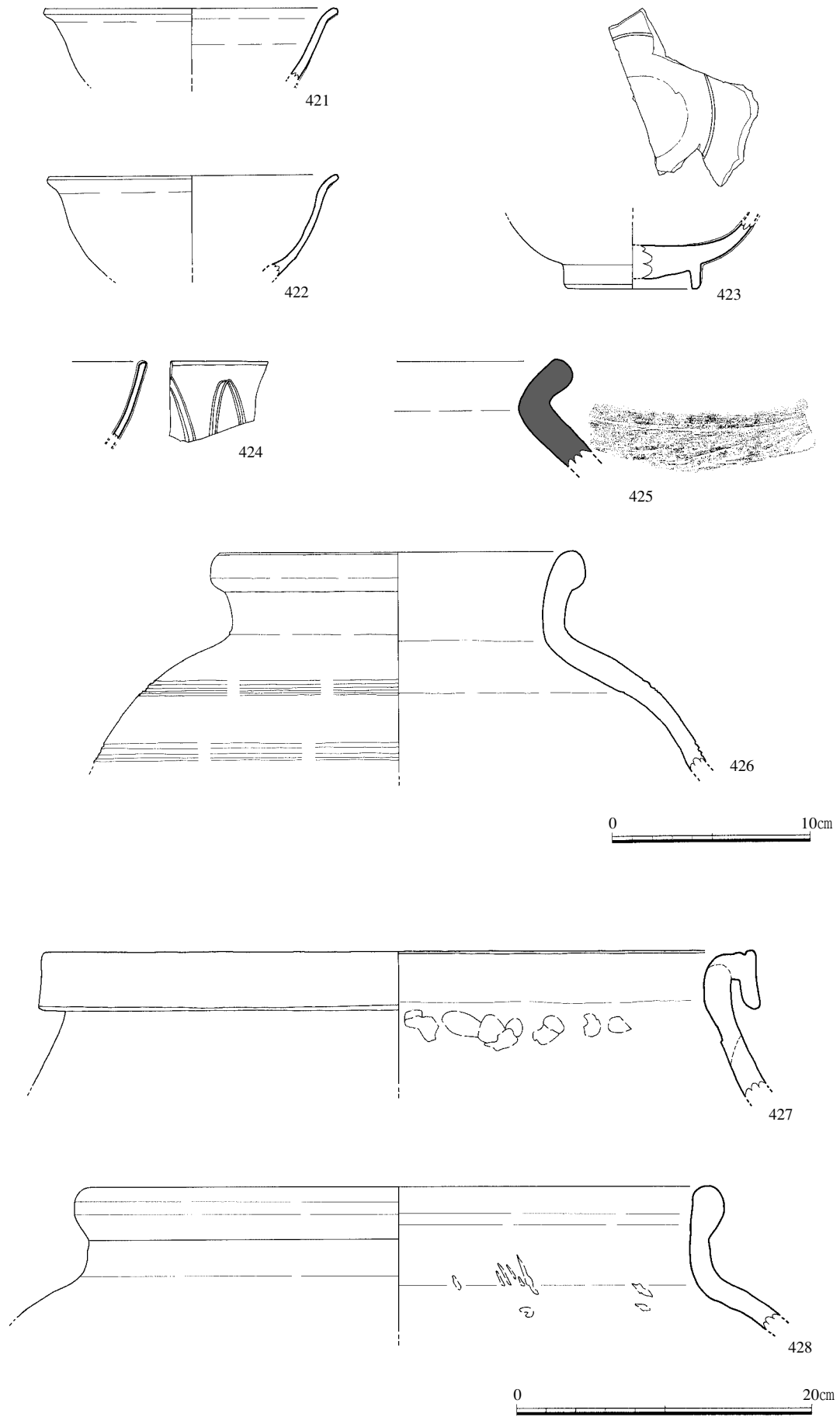
415は、陶器の鉄釉の平碗である。口唇部は削りにより無釉となり、角張っている。高台は削り出しによるもので、その部分は釉が剥ぎ取られ、無釉となっている。体部の下方がやや膨らむ。底部はやや厚くなっているが、口縁部付近は薄くなっている。口径が11.9cm、器高が6.5cm、高台径が6.0cmを測る。内器面底部には真珠光沢の物質が付着している。胎土には輝石・長石・砂粒を含む。釉の色調は、油煙墨(C-304)を呈する。高台は削り出しによるもので、高台円に赤色顔料がわずかに付着する。産地は瀬戸美濃系の範疇としておく。

416・417は、土師質土器の坏である。416は小型の坏で、口縁部から底部までほぼ完形である。調整は摩耗のため不明である。胎土には輝石・赤色酸化粒・細砂粒を含む。口径が6.8cm、器高が2.8cm、底径が3.4cmを測る。焼成は良い。417は大型の坏で、口縁部から底部までがほぼそろそろ。調整は回転ヨコナデによるものである。胎土には輝石・細砂粒を含む。復元口径が10.7cm、器高が3.7cm、底径が6.0cmを測る。

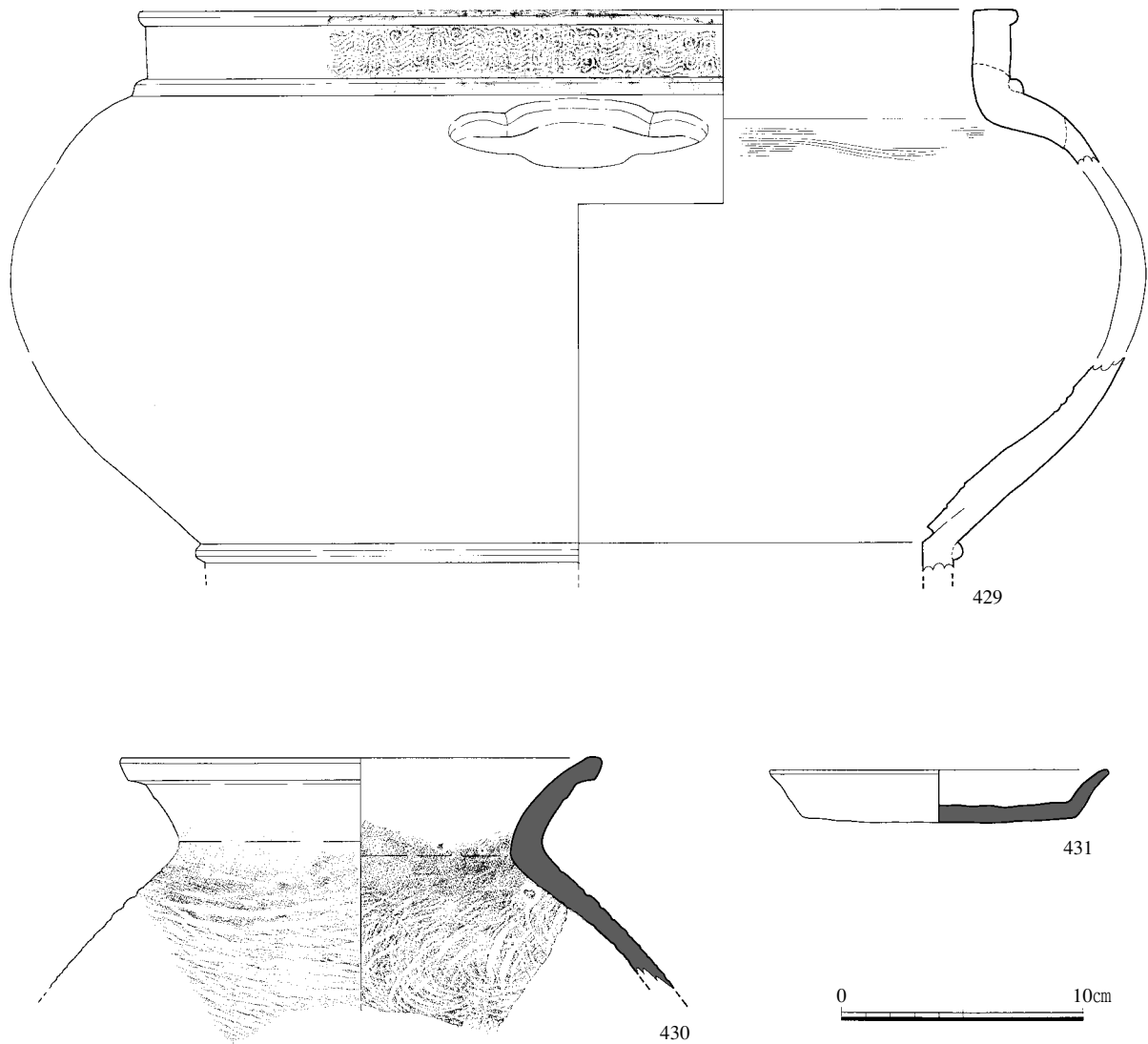
【SX04の出土遺物】(第102図)

418～420は、いずれも古代のものである。

418は須恵器の蓋で天井部の破片である。器表面の摩耗が進み、調整は明確ではない。天井部外器面にはヘラ削りによる痕跡が残る。胎土には長石・輝石・角閃石・細砂粒を少量含む。焼成は良好でなく、色調は灰白色を呈する。419は土師器の坏で口縁部から底部まで全体の半分ほどが残る。器表面の調整は摩耗のため不明である。胎土には長石・輝石・砂粒を僅かに含む。復元口径が13.6cm、器高が4.2cmを測る。底径は不明瞭であるが、復元で6.5cmを測る。420は須恵器皿の形態を模した土師器の皿である。口縁部から底部の一部まで残る。器表面の調整はナデによる。胎土は長石・赤色酸化粒・砂粒をやや多く含む。復元口径が15.1cmを測る。



第103図 IIh区SE03出土遺物実測図(1) S=1/3・1/4

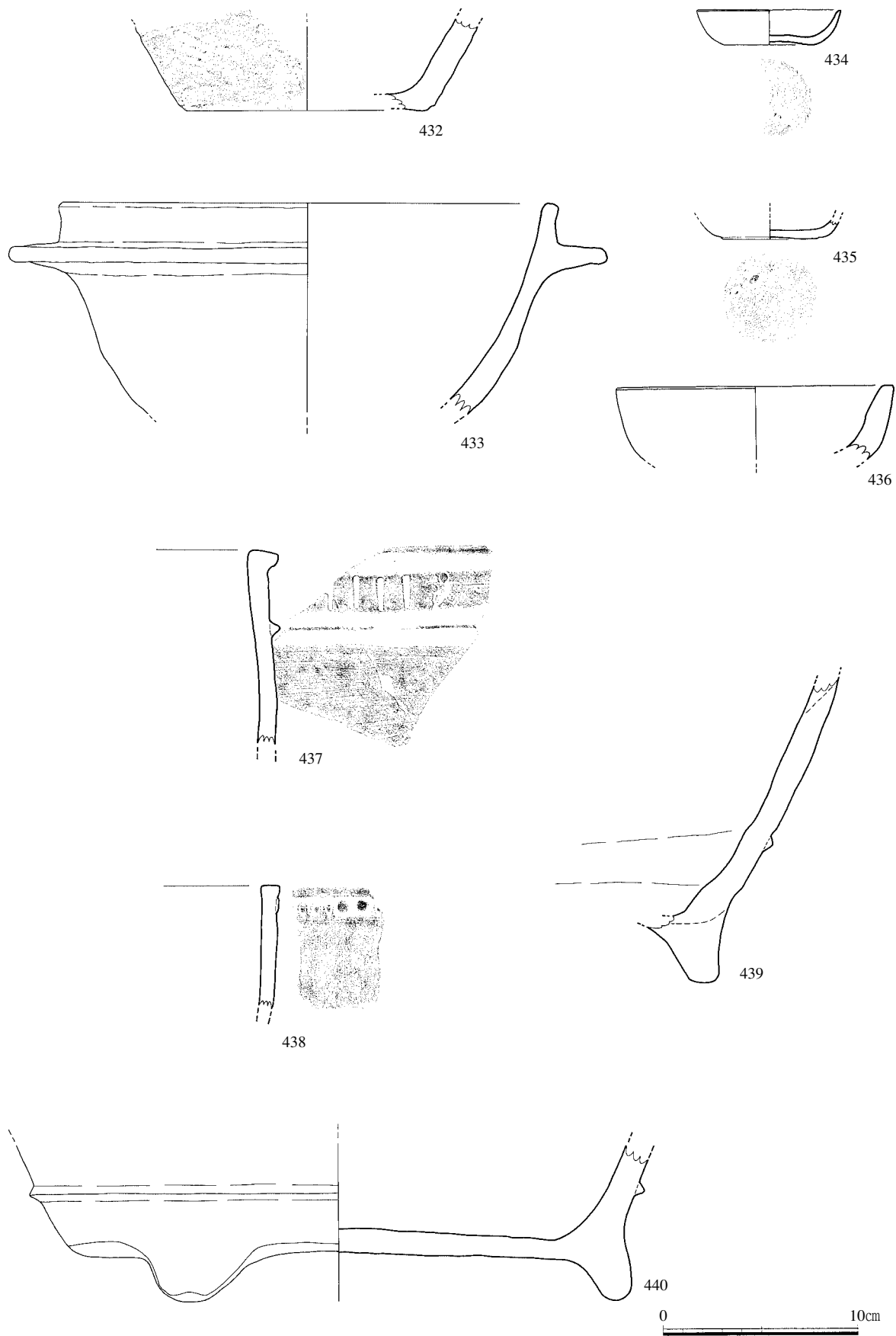


第104図 Ⅱh区SE03出土遺物実測図(2) S=1/3

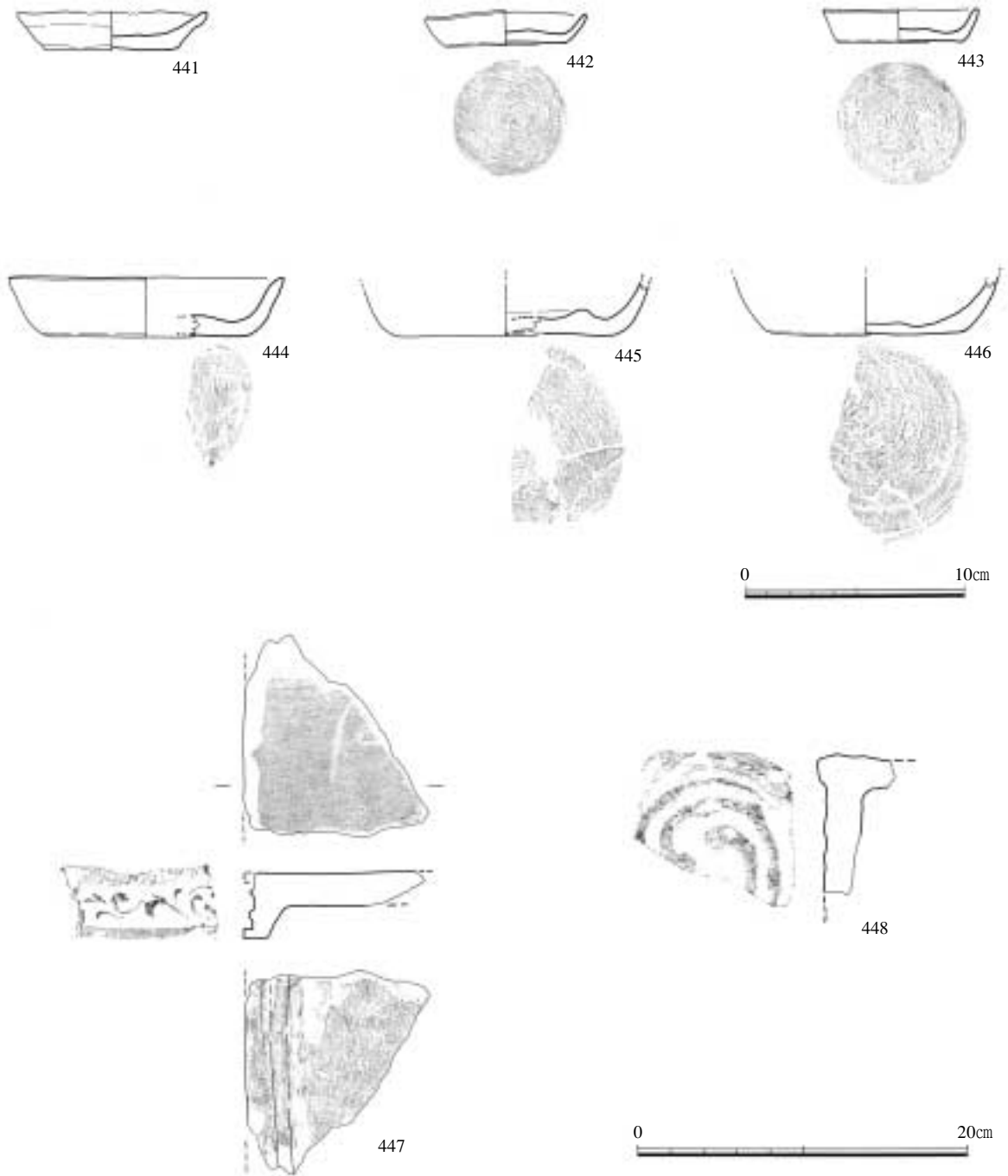
【SE03の出土遺物】(第103図～第110図)

421～424は中国産の磁器片である。426～428は陶器である。430は須恵質土器、431は古代の須恵器である。429、432、433、436～440は瓦質土器である。434、435、441～446は土師質土器である。447・448は瓦片である。449～456は石塔の一部である。457～459は石器類である。460～464は木製品類である。

421は、SE03最下層から出土した白磁の碗である。口縁部から体部の一部が残る。口縁部は口唇部が強く外反している。復元口径が14.8cmを測る。胎土はきめ細かい。422は青磁の碗である。口唇部が強く外反する。口縁部から体部まで残る。復元口径が14.7cmを測る。胎土はきめ細かい。釉色はカーキー色を呈している。器表面には細かい貫入が入る。423はSE03の南西中層・K-26グリット⑥層からの出土した青磁の皿である。体部下位から高台まで残る。内器面見込には蛇の目釉剥ぎが施される。高台は削り出しによるものである。高台径は3.5cmを測る。胎土には長石・輝石・細砂粒を含む。釉は外器面の高台部分までかかる。424はSE03の上層南西部出土の青磁碗の破片である。外器面に連弁文がみられる。胎土は良く精製されている。釉は厚くかけられている。

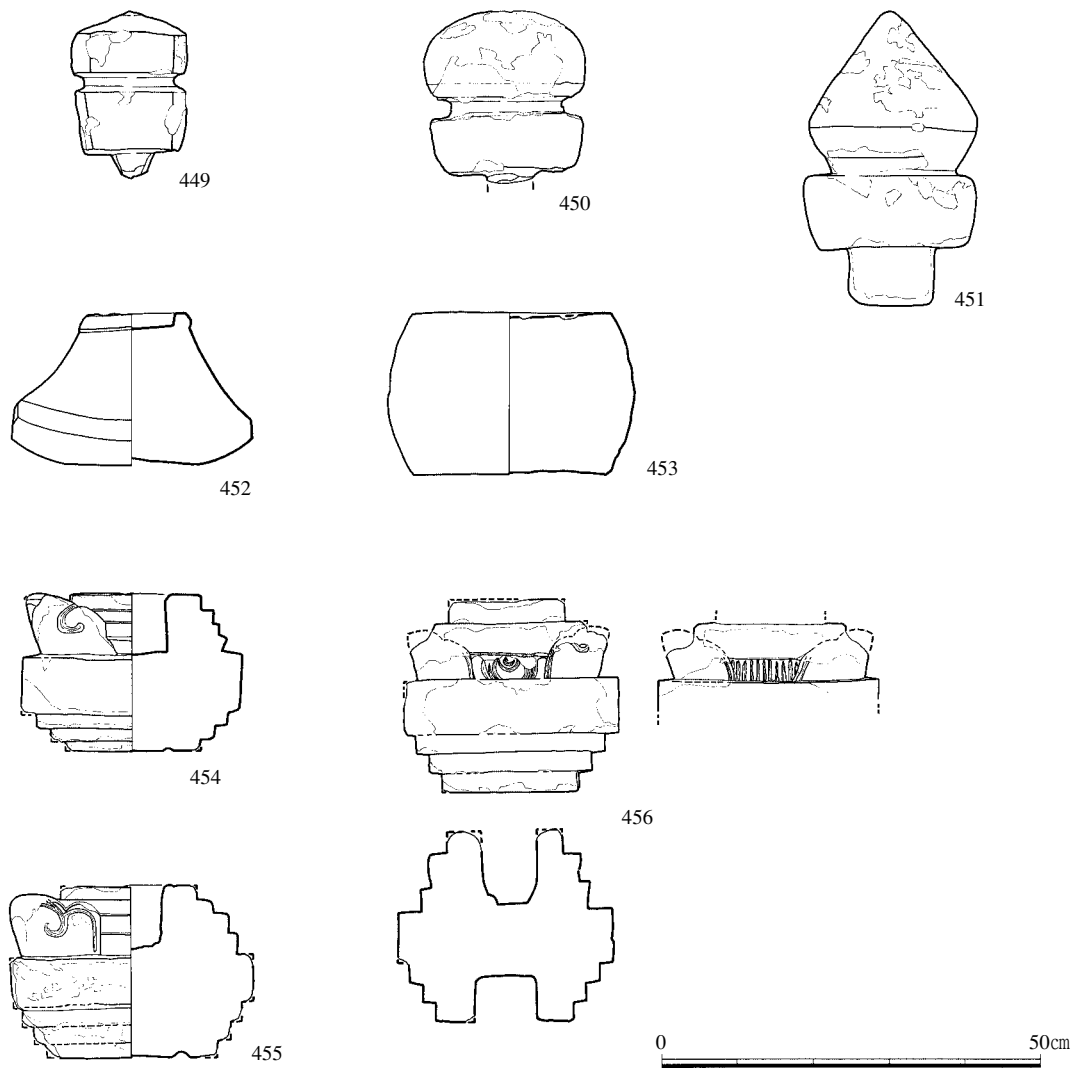


第105図 IIh区SE03出土遺物実測図(3) S=1/3



第106図 Ⅱh区SE03出土遺物実測図(4) S=1/3・1/4

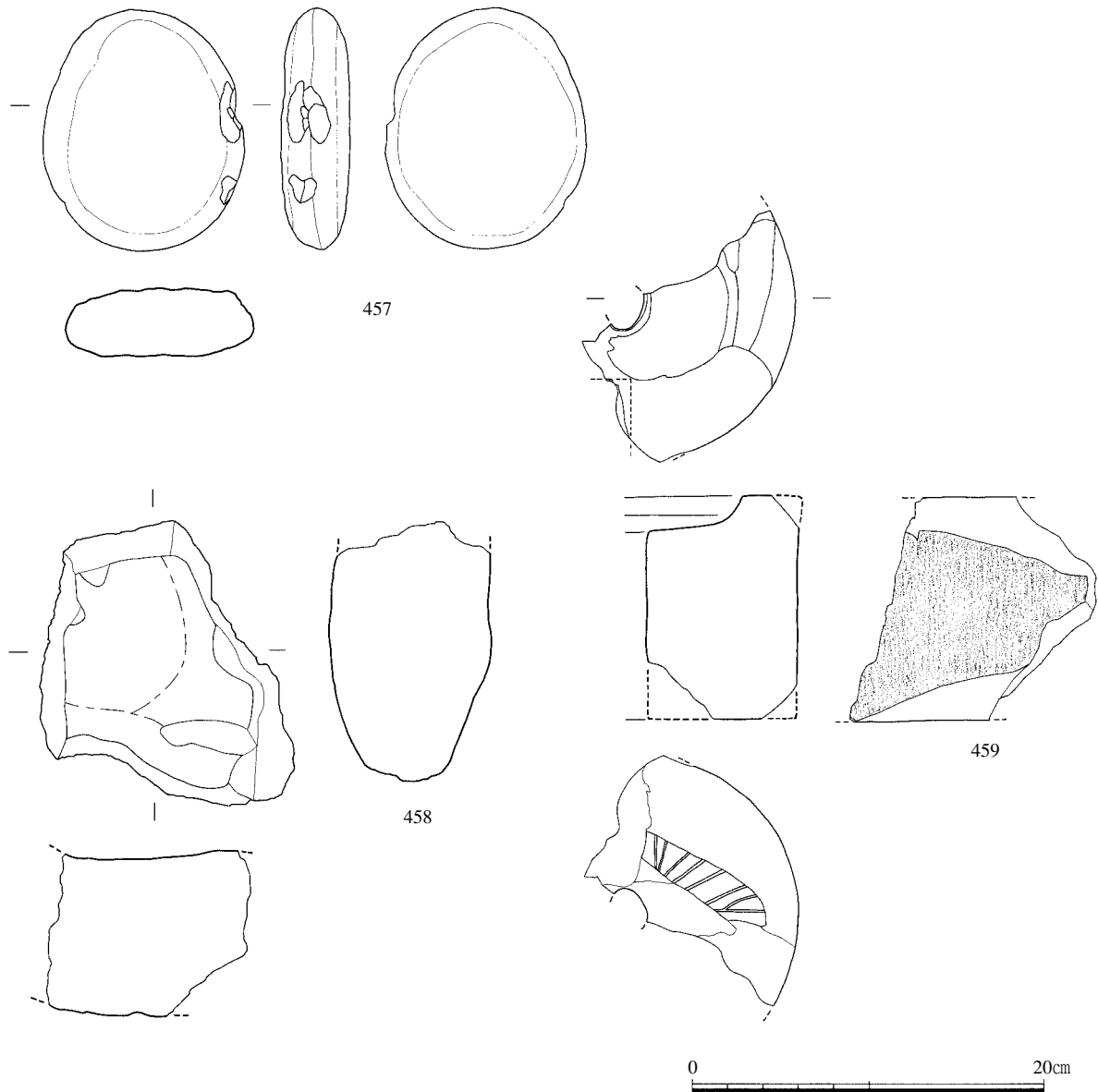
425は、SE03上層南西部で出土した須恵質土器の甕である。口縁部から頸部までの一部の破片である。頸部から口唇部までは短く、口唇部は断面を丸く収める。調整は回転ヨコナデによる。外器面にはやや大きめの格子目叩きが施されている。胎土には角閃石・長石・輝石を少量含む。色調はやや灰色かかっている。426はSE03の上層K-27グリット暗褐色層からの出土した陶器の壺片である。口縁部から胴部の上位まで残る。頸部からはほぼ垂直に立ちあがっており、頸部から4cmほど立ち、口唇部は肥厚し端部は断面が丸くなる。胴部上位には横方向のカキメが施されている。胎土には石英・長石を僅かに含む。回転ヨコナデにより調整される。復元口径は18.1cmを測る。焼成は良好である。427は陶器の大甕の口縁部の一部である。備前焼のも



第107図 IIh区SE03出土遺物実測図(5) S=1/10

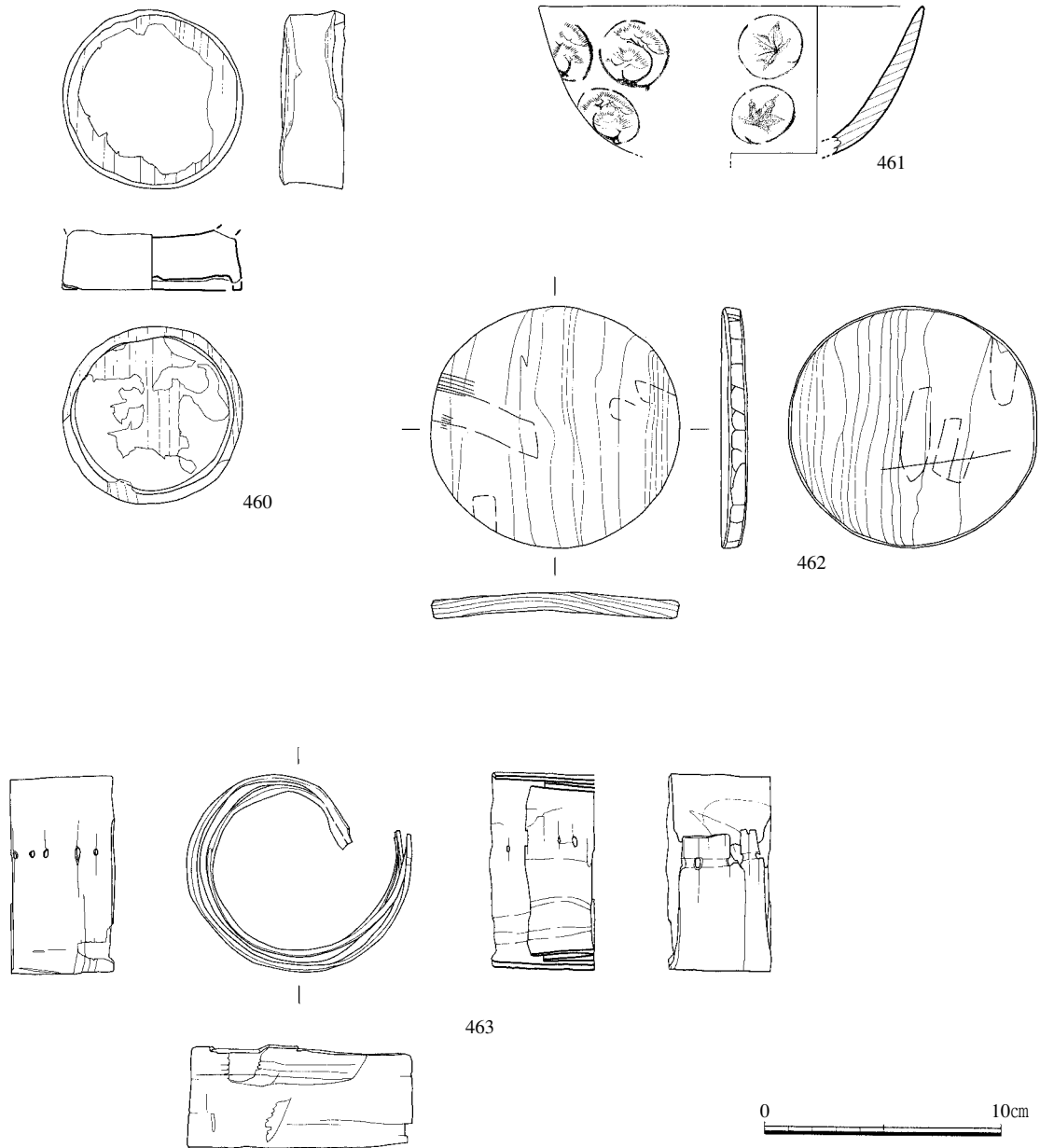
のと考えられる。復元口径は48.0cmを測る。口縁部は頸部から内傾し、口唇部で大きく外反しさらに屈曲させ、幅広の口唇部を造り出している。調整は大部分ヨコナデによるものである。内器面の一部に指頭状の圧痕がみられ、何らかの当て具痕と考える。胎土にはかなり大きめの砂粒が入っている。色調は暗赤褐色を呈している。428は、陶器の大甕の口縁部の一部である。復元口径は、42.0cmを測る。口唇部は断面が丸くなっている。全体的にヨコナデが施されるが、外器面にはヘラケズリもみられる。胎土は石英、長石、砂粒が混じり、きめが粗い。部分的に自然釉がみられる。色調は、赤褐色を呈する。

430は、最下層から出土した中世の須恵質土器の甕片で口縁部から胴部の上位まで残る。頸部から急激に外反した口縁部は端部で肥厚している。調整はヨコナデによる。胴部外器面には平行タタキが、内器面には同心円文の当て具痕が残る。胎土には角閃石・長石・輝石・細砂粒を含む。復元口径が19.7cmを測る。色調は焼きが甘いためか灰白色を呈する。431はSE03の上層南西部で出土した古代の須恵器の皿である。全体の1/4の残存で、口縁部から底部まで確認できた。焼成が不十分なため、摩耗が進み、調整痕は不明瞭である。ただ、ナデによる調整が主と考える。胎土には長石・輝石・細砂粒を少量含む。復元口径が14.0cm、復元底径が11.3cm、復元器高が2.2cmを測る。



第108図 Ⅱh区SE03出土遺物実測図(6) S=1/4

429は、大和系の瓦質土器の有窓鉢形土器で、金属器を模倣したものとされている。用途は風炉とされる。全体の破片は出土していないが、他の出土例から復元実測を行っている。口縁部は頸部から垂直に立ち上がる。頸部と口唇部に1本ずつの隆起帯が巡り、その間にスタンプによる波文が押される。胴部の上位には風孔が空けられている。胴部は頸部から広がり、銅部下位に至り、脚部につながる。脚部と胴部の境に1本の隆起帯が巡る。器表面はやや摩耗して不分明な部分があるものの、全体が黒色に炭素を吸着させ、ミガキによって仕上げられている。残りが良いところでは非常に丁寧に調整が施されていることが分かる。胎土には、石英・長石・輝石・赤色酸化粒を含む。この個体と非常によく似た個体をもう1点確認している。この土器は、15世紀後半～16世紀前半のものであろう。432は瓦質土器の鉢の破片である。外器面にタタキ痕が残る。摩耗のため調整痕は不明確である。433は瓦質土器の鐔付きの鉢で羽釜ともみられる。436は、瓦質土器の小型鉢である。437～440は火鉢である。破片であるがいずれも奈良火鉢系統のものである。437は、口縁から胴部上位の破片で、ほぼ直に伸びる。口唇部が肥厚し突帯状に巡り、その下4cmほどで突帯が回る。その間

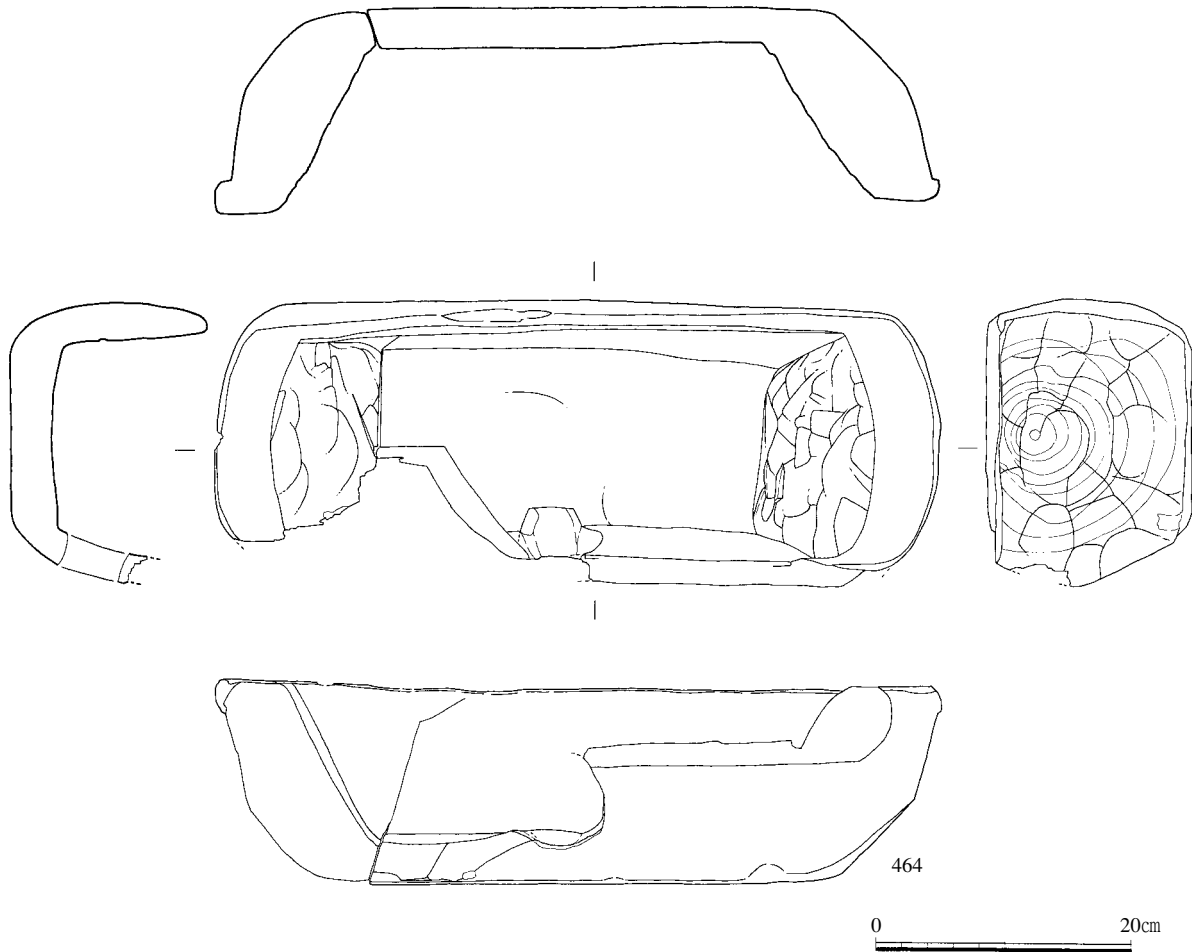


第109図 IIh区SE03出土遺物実測図(7) S=1/3

には縦方向の沈線と梅のスタンプがみられる。胴部は横方向のナデ調整が施される。438は、口縁部付近に貼り付け突帯が巡り、突帯上に刺突文がみられる。439・440は火鉢の底部付近で、同一個体ではないが、同一の特徴を持つ。底部には3脚が付き、そのやや上位に貼付の断面三角形を呈する突帯が巡る。

434・435・441～443は小型の土師質土器の皿である。口径7.0～8.6cmで底面には糸切り痕が残る。また、444はやや大きい皿である12.4cmを測る。445・446は坏片である。口径などは不明である。外底面には、糸切り痕が残る。

447は棧瓦片である。文様はすっきりした唐草文で、片面のみがみられる。丸瓦当部分は欠落している。文様自体はあまり盛り上がっていない。外縁が広がっており、特に左外縁はさらに広がっているが、欠損のため広さは不明である。焼成は良好で硬く締まっている。瓦当は、平瓦の凸面に櫛状工具で掻き傷を接合面の両側につけて接合している。顎は付け根部分よりも顎凸面がより狭くなっている。これは付け根より



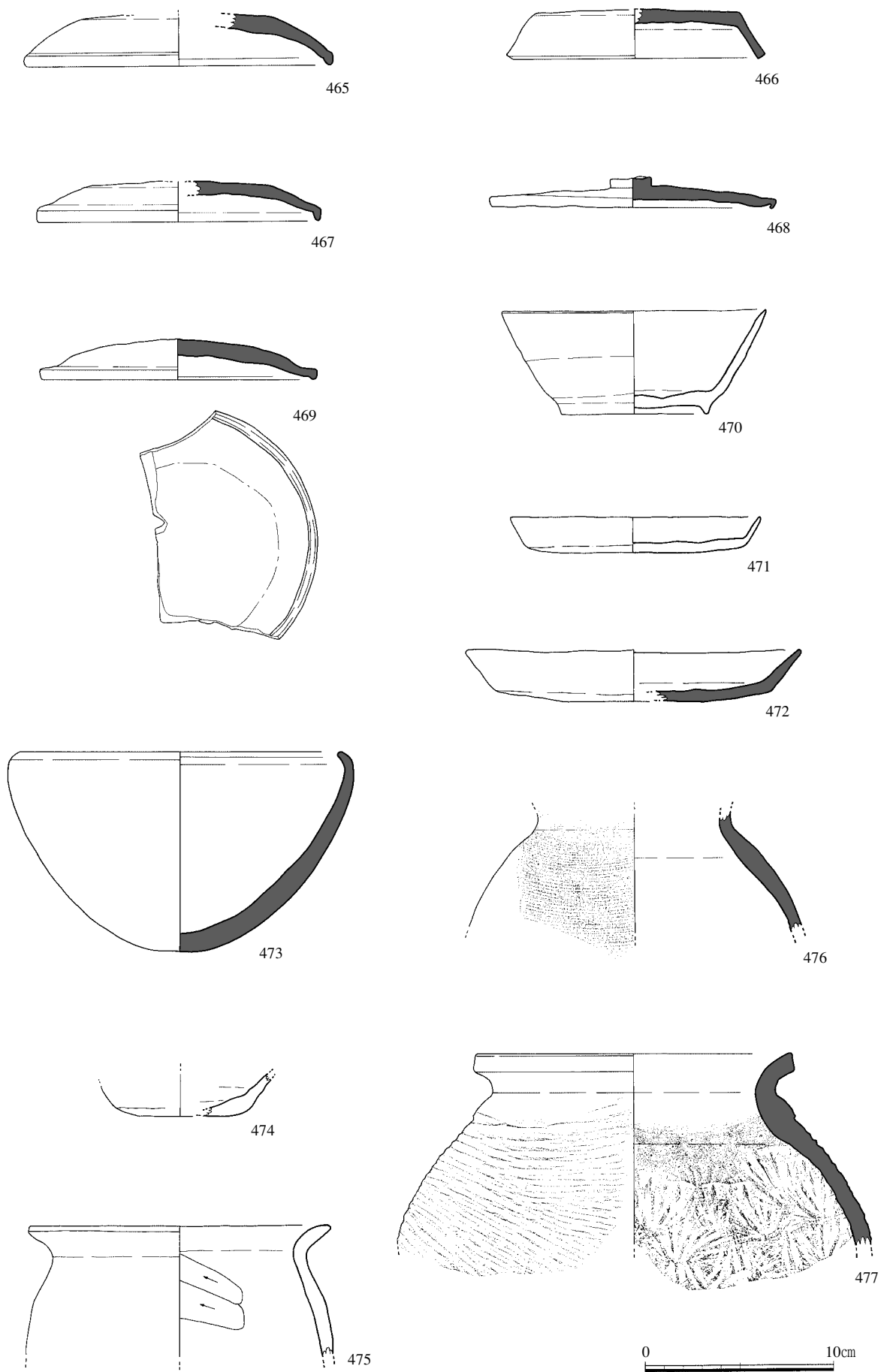
第110図 Ⅱh区SE03出土遺物実測図(8) S=1/6

少し上部で斜めに横方向で削り取りを行っているためである。凸面の瓦当付近が横方向のナデ、胴部にかけてはナデ調整である。凹面は横方向のナデ調整が行われる。448は軒丸瓦片である。外縁の中に大きく三巴文を作り出している。巴頭部分は丸く、屈曲を作っている。尾は長く伸びている。珠文はない。焼成は悪く表面が灰色を呈する。かなり磨耗しているので、明確な調整痕は不明である。

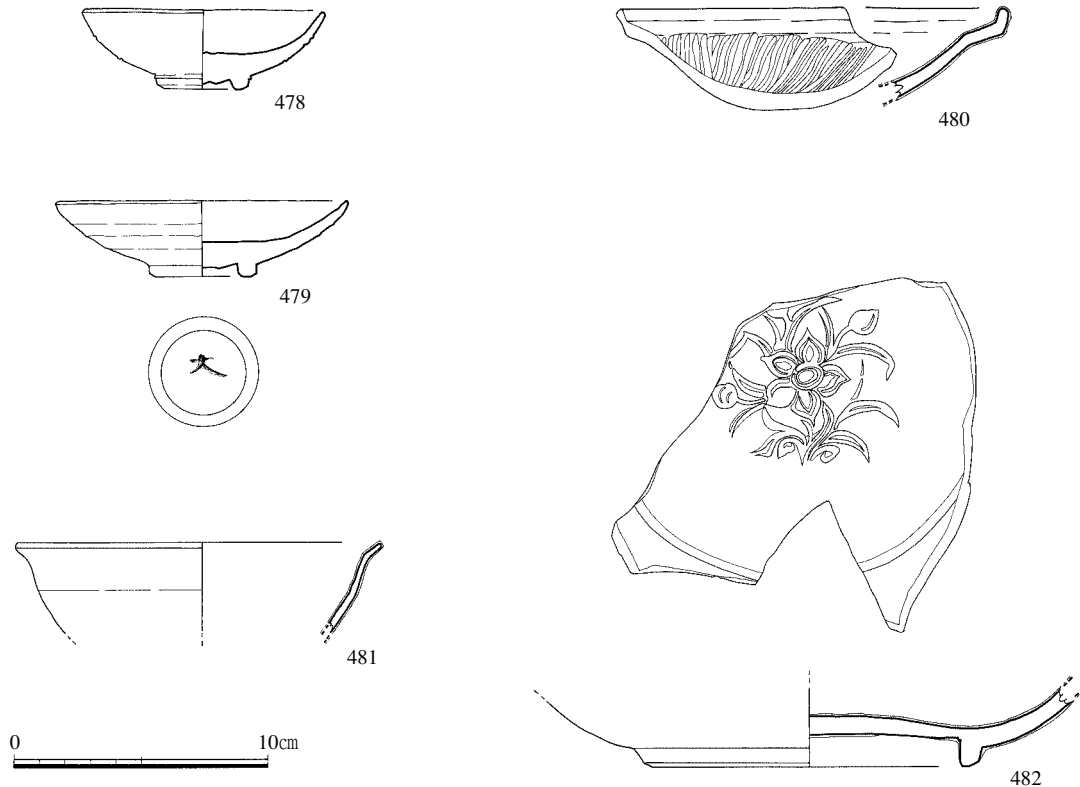
449～455は、五輪塔、及び宝篋印塔の残欠である。井戸の石材もしくは廃棄後に内部に捨てられていたものを図化している。449～451は空風輪である。449は頂部がやや尖り、空輪部が低く、風輪部が角張りや高いものである。空輪と風輪の間は溝状になっている。下部には方形の指し込み部が残る。450は頂部が丸くなって半円状になっており、風輪よりも空輪部分がわずかに大きい。451は他に類例のないもので、頭頂部が鋭角の三角に尖り、風輪が低く、間はくびれる。全体的に非常に大型のものである。下部の指し込み部は方形である。

452は一応火輪とする。軒の反りが弱く、石材も砂岩質のもので他の石塔と異なっている。頂部の柄穴と考える部分は頂部全体に浅く四角形に彫られており、組み合わせる空風輪の指し込み部はかなり大きくなる必要があり不自然である。453は水輪であるが、上面がややくぼむのみでほとんど上下の差はない。胴部の膨らみもほぼ中央部である。石材は凝灰岩である。

454～456は宝篋印塔の笠部分のみである。このうち454・455は若干の差はあるもののほぼ同一の形態である。笠の隅飾突起の特徴がよく類似し、法量的にも似ている。隅飾突起は直に立ち上がり、上面は緩やかな



第111図 Ⅱh区包含層出土遺物実測図(1) S=1/3



第112図 IIh区包含層出土遺物実測図(2) S=1/3

カーブを付けられ、笠中位から3段目の段とつながっている。突起の端部は欠損しており、尖るかどうかも不明である。ただ、隅飾の文様は、454が内側に巻く一弧パルメット形に対し、455は逆向きに弦が巻いている。456は上下に穴が開けられている。笠の4段目で、両隅飾間の文様が面によって異なる。正面にした部分の装飾は蓮華文的なものが彫られ、側面には蓮子が彫られている。文様は対面ごとに対となっている。

457～459はその他の石製品もしくは石器の一部である。

457は大きめの磨石である。扁平の自然石を利用している。側片に敲打痕が残る。時期は不明である。458は台石もしくは石皿状の使用方法が考えられる石片である。破損しているため本来の形状は不明であるが、平面に窪む部分があり、磨耗しているので一応先のように想定している。石材は安山岩の一種である。459は、茶臼の残欠である。上臼のほうで、頂部の面取りと、穴が残り、側面は丁寧な彫削により仕上げられ、底面には部分的に残る部分に溝が掘られている。石材は砂岩である。

460～464は井戸内から出土した木製品類である。460は漆器の椀の底部で、高台は厚く作られ、ごくわずかに輪高台内が薄く見られる。面は漆により内器面は赤く、外器面は黒く塗られている。木取りは柾目取りである。高台部分のみのため、胴部文様の有無は不明である。461はやはり漆器の椀で、体部から口縁部のみの破片である。外器面には黒漆の地に赤漆で丸に松、丸に紅葉を三個セットにした文様を交互に並べて描いているようである。木取りは板目の横木取りである。462は曲げ物の桶類の底板もしくは蓋である。木取りは、板目取りである。463は曲げ物で、へぎ板を2重もしくは3重にして曲げたものである。側面に対照に2箇所の綴じ皮を通す細かい穴が開けられている。製品としては丸い容器としかいえない。464は、槽に似た木製品である。心持ちの針葉樹を材として、中を刳り貫き、上下を船縁状に作り出し、片側面に丸い穴が開いている。のこぎりのような刃物で部分的に切り取られ、本来の形状はつかめないが、何らかの容器物であろう。

【包含層の出土遺物】（第111図～第114図）

このうちいくつかは、調査時に遺構としたものから出土している。

465～475は古代の須恵器・土師器である。465～469は須恵器の蓋である。465は口縁端部の屈曲がほとんどなく、467はわずかにあり、469は名残としての屈折がある。この内器面はかなり磨耗しており転用硯として利用されていた可能性がある。これらは形態上近く、時期的にもそう離れていない。466は古代とすれば例のないもので、口縁部を強く屈曲させて作り、端部は角張ったまま収める。この土器は須恵質土器のようであるが、近世陶器の一種の可能性もある。468は天井部と口縁部がほぼ直線になるもので、端部にわずかな屈曲が見られる。ツマミは平たくなり、わずかに中央部がへこむ。これは椀の蓋であろう。470は須恵器で、体部の高さがやや低いが、高台付椀としておく。471・472は須恵器の皿で器高はさほど違わないが口径がかなり異なる。時期差もしくは用途差によるものとする。473は須恵器のいわゆる鉄鉢模倣の鉢である。口唇部が強く内傾し、器壁はやや厚く、底部は尖り気味に整形される。外器面は丁寧にヘラケズリとナデ調整が施される。474は土師器の坏の破片である。475は土師器の甕で、口縁部から胴部上位までの破片である。内器面に斜め上方向へヘラケズリが施される。

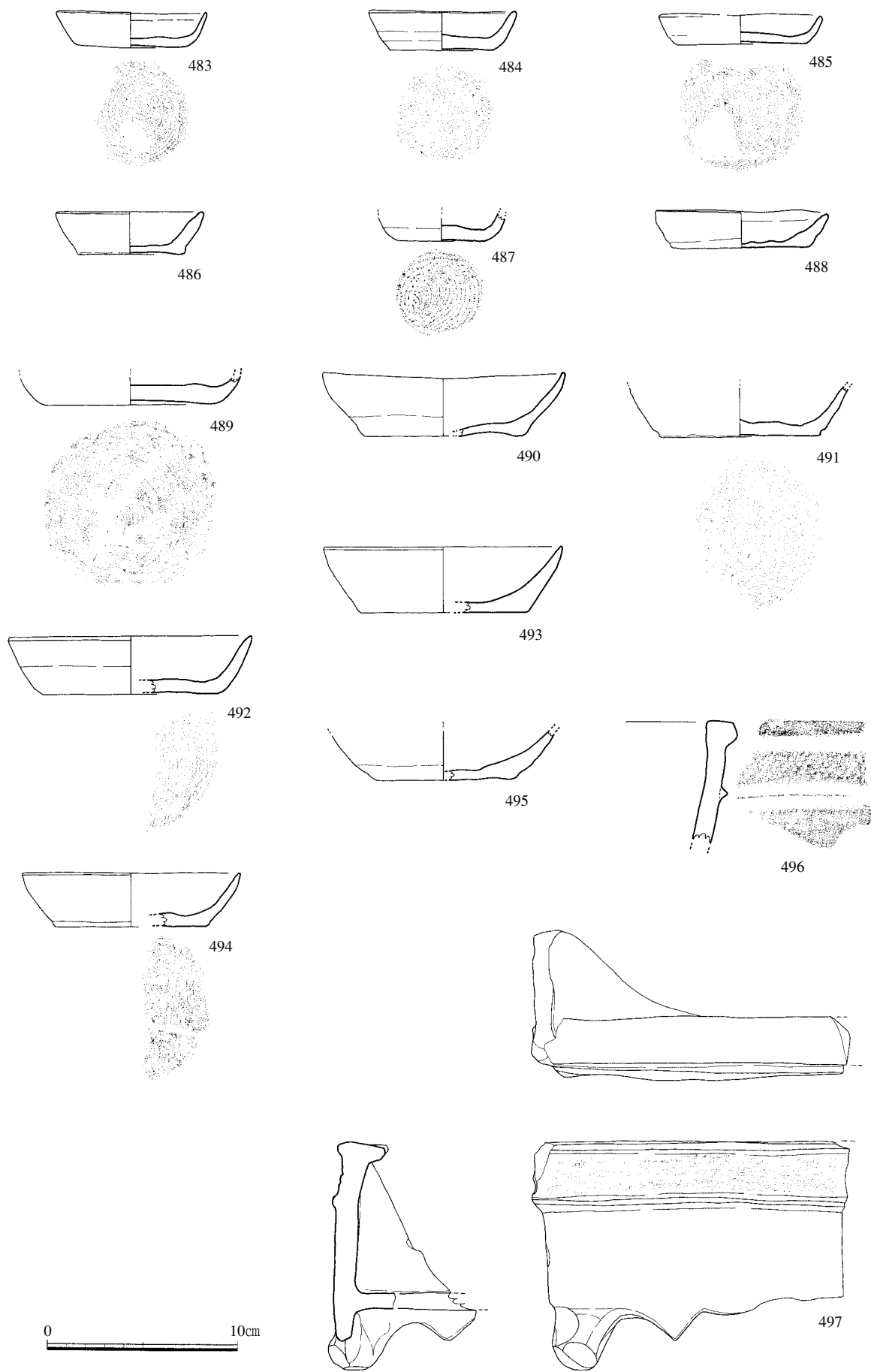
476・477は器形と調整が古代までの須恵器のものとは異なるので、中世のものである可能性が大きい。476は須恵器の甕である。ただ、器形と調整が通常の方法と異なる。外器面は口縁部から胴部まで横方向のナデもしくはカキメが施される。器形も撫で肩様で通常の甕のような肩張りが無い。次の477も同様に肩が張らない。外器面は横方向のタタキ痕が強く残り、内器面には放射線状に広がる菊花文タタキ当て具痕が残る。

478～482は白磁・青磁である。478は白磁の皿で、低い高台は削り出しによるもので、高台内には削りの痕跡が残る。縁に煤が付着しているところから灯明皿として利用されている。復元口径は9.3cm、器高3.1cmを測る。479はやはり白磁の皿で、高台は削り出しによる。高台内には墨書で「大」の文字が書かれる。口縁部はやや立ち上がり気味である。復元口径は11.2cm、器高は3.0cmを測り、478より一回り大きい。480は青磁の皿で口縁部付近の破片である。口唇部が一旦折れ、端部でさらに折れて立ちあがっている。内器面には櫛描きによる文様が彫られる。481は青磁の碗で、口縁部近くで強く外反する。復元口径は13.1cmを測る。482は青磁の皿の底部である。底径が12.4cmを測るので、大皿である。見込みには花文が描かれる。高台内には釉がかからない。

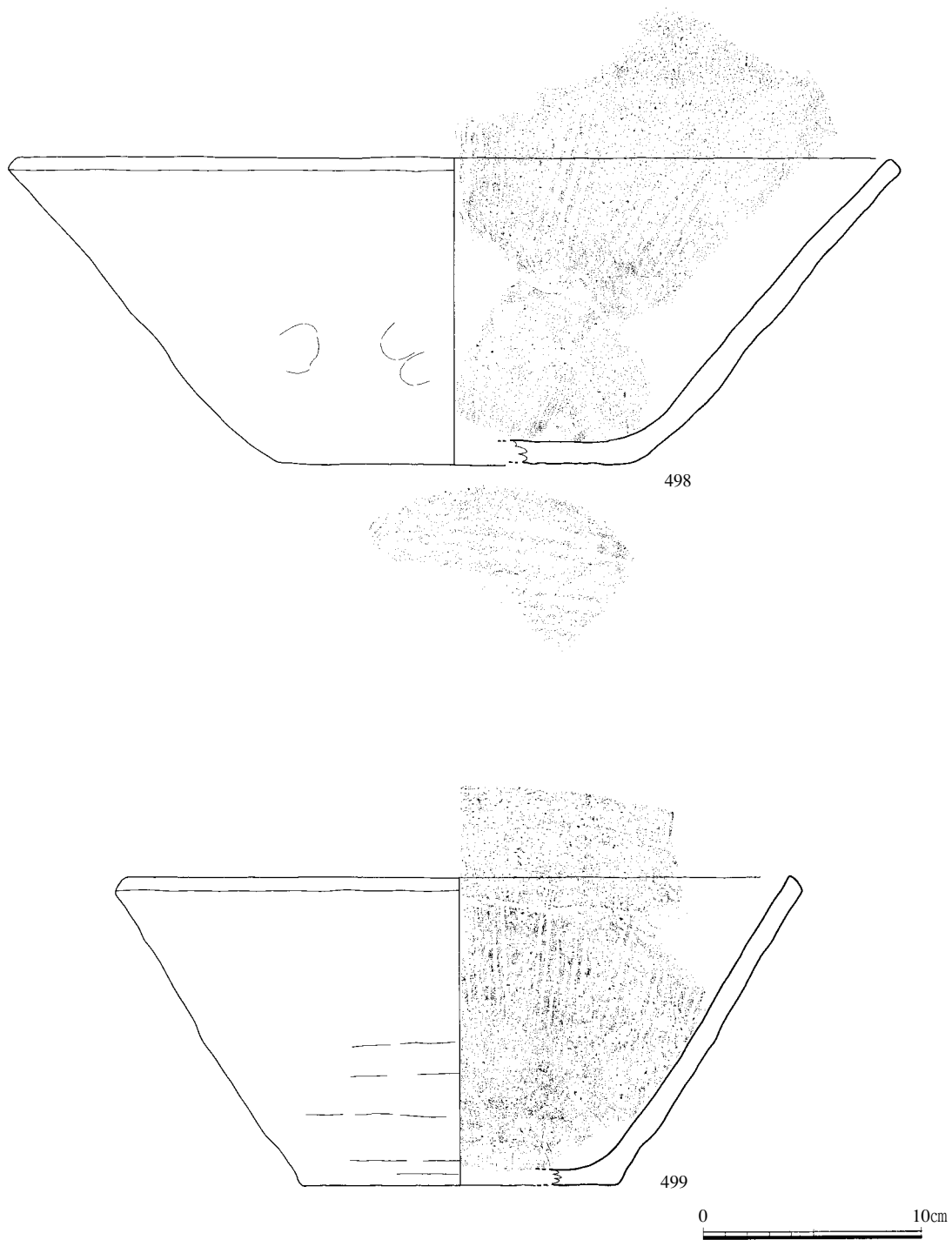
483～495は中世の土師質土器である。483～488は皿である。底部と体部に強い屈曲部を持たない483～485、487と体部と底部に明瞭な屈曲部を持つ486・488に分けられる。また口径によっても分類できる。489～495は坏である。体部・底部の明瞭さ、口径/底径の比、器高の違いでいくつかに分類できる。

496～499は瓦質土器である。496は火鉢の口縁部付近である。口唇部の凸帯とその下の微隆起した突帯の間に連点を単位とするスタンプ文が押されている。497は方形の浅鉢形の火鉢で、四脚を角に持つものである。口縁部には低い突帯の間に菊花文のスタンプが周囲を巡って押されている。15世紀代のものであろう。

498・499は擂鉢である。498は、内器面の摺り目は少なく、6条を単位とする櫛描きによってまばらに作られている。体部の開きは大きく、口が開く。外底面には、板状の圧痕がみられる。外体部には指の圧痕がみえる。499は表面が磨耗して摺り目ははっきりしないが、6条ほどの櫛描きによって作られている。底部から体部への立ち上がりは、498に比べ急である。



第113図 Ⅱh区包含層出土遺物実測図(3) S=1/3



第114図 IIh区包含層出土遺物実測図(4) S=1/3

第10節 調査Ⅱi区

(1) 調査区の概要(第115図)

調査Ⅱi区は調査Ⅱh区と調査Ⅱj区の間に位置する。調査区の位置は、南北が $X=-56441$ 、 $Y=-33782$ から $X=-56468$ 、 $Y=-33778$ まで、東西が $X=-56447$ 、 $Y=-33790$ から $X=-56467$ 、 $Y=-33777$ までの範囲である。南北方向に細長く伸びる。

(2) 土層

基本土層は以下のとおりである。

I層：表土

II層：暗黄褐色土；粘質で締まる。1 cm大の凝灰岩粒を多く含む。

III層：暗黄褐色土；上層よりやや暗い。凝灰岩の割合が多く、粒子も大きい。白磁D類、土師器片を含む。

IV層：暗褐色土；土色はIII層より暗い。凝灰岩の割合は減り、青海色の粘土粒子が混じる。

V層：暗褐色土；粘質で締まる。凝灰岩の粒子を含む。炭化物・土師器片を含む。青磁I・V類を含む。

備前甕も含む。

VI層：黄褐色土；粘質ながら柔らかい。炭化物を含む。

VII層：地山

(3) 遺構

【SD04】(第117図)

この遺構は調査区の中央部付近で検出した溝状遺構である。攪乱によって一部不明である。蛇行しながら走っているが、途中で消えている。幅は30cm、確認面からの深さは25cmを測る。

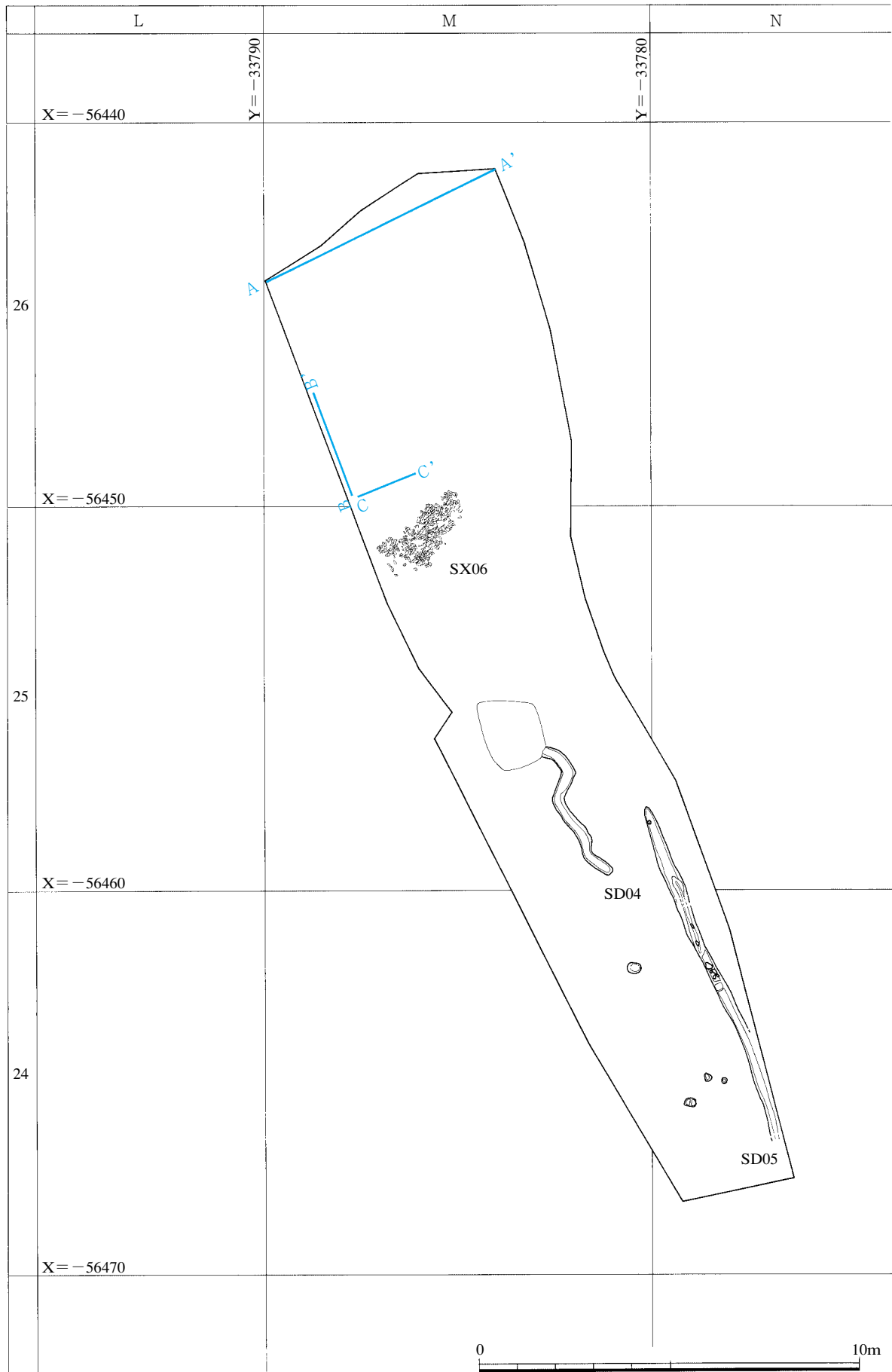
【SD05】(第115図)

この遺構は調査区の南側で検出した溝状遺構である。調査区外から伸びてくるものである。区内では長さ10m、幅40cmほどを測る。深さは確認面から20cmを測る。区画溝である可能性が高い。

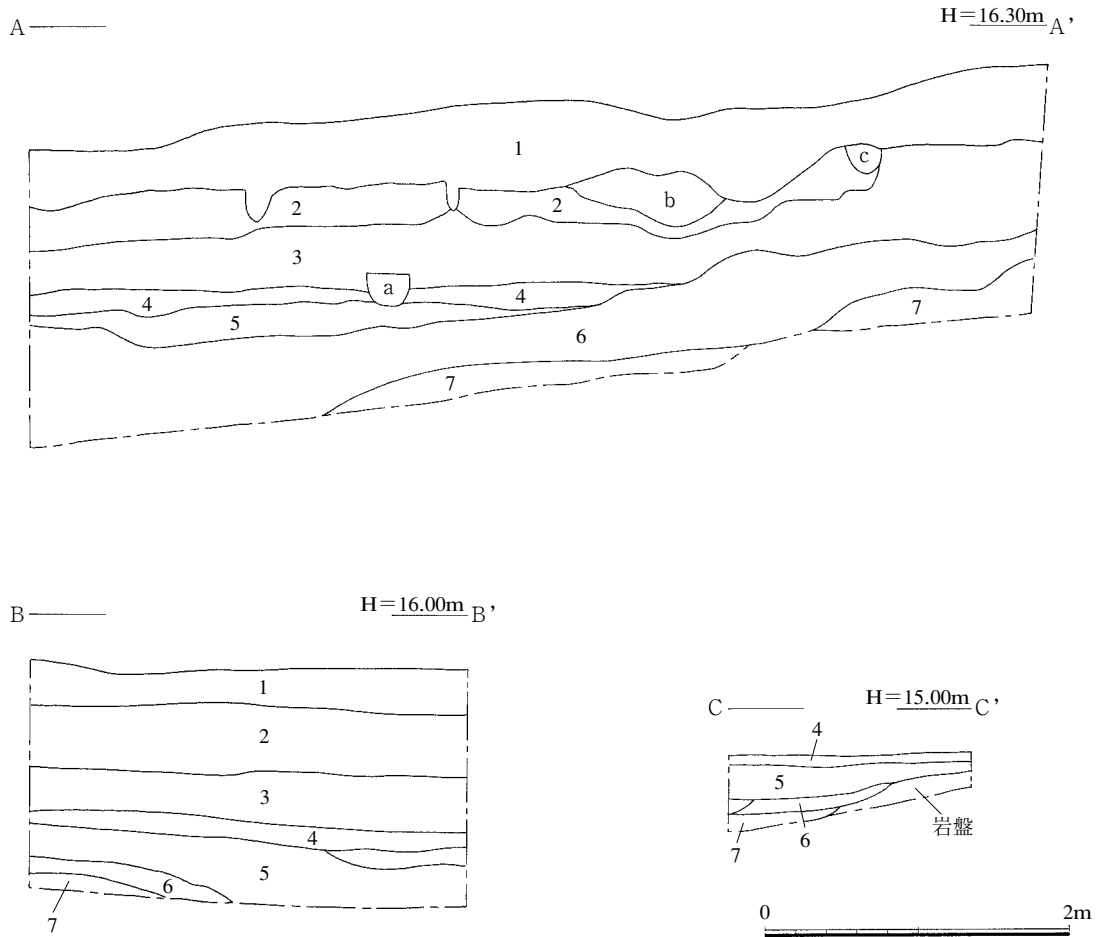
【SX06】(第118図)

礫群である。ただ、一字一石経のようにほぼ均一的な礫ではなく、角礫を主体とするもので経塚とは考えられない。調査Ⅱj区にも礫の集中する遺構SX07があるが、礫の大きさが異なる。

時期も異なるようである。溝の上面で確認しているが、溝が廃絶した跡、もしくは埋まる途中で形成されたもので、時期は古代以降と考える。

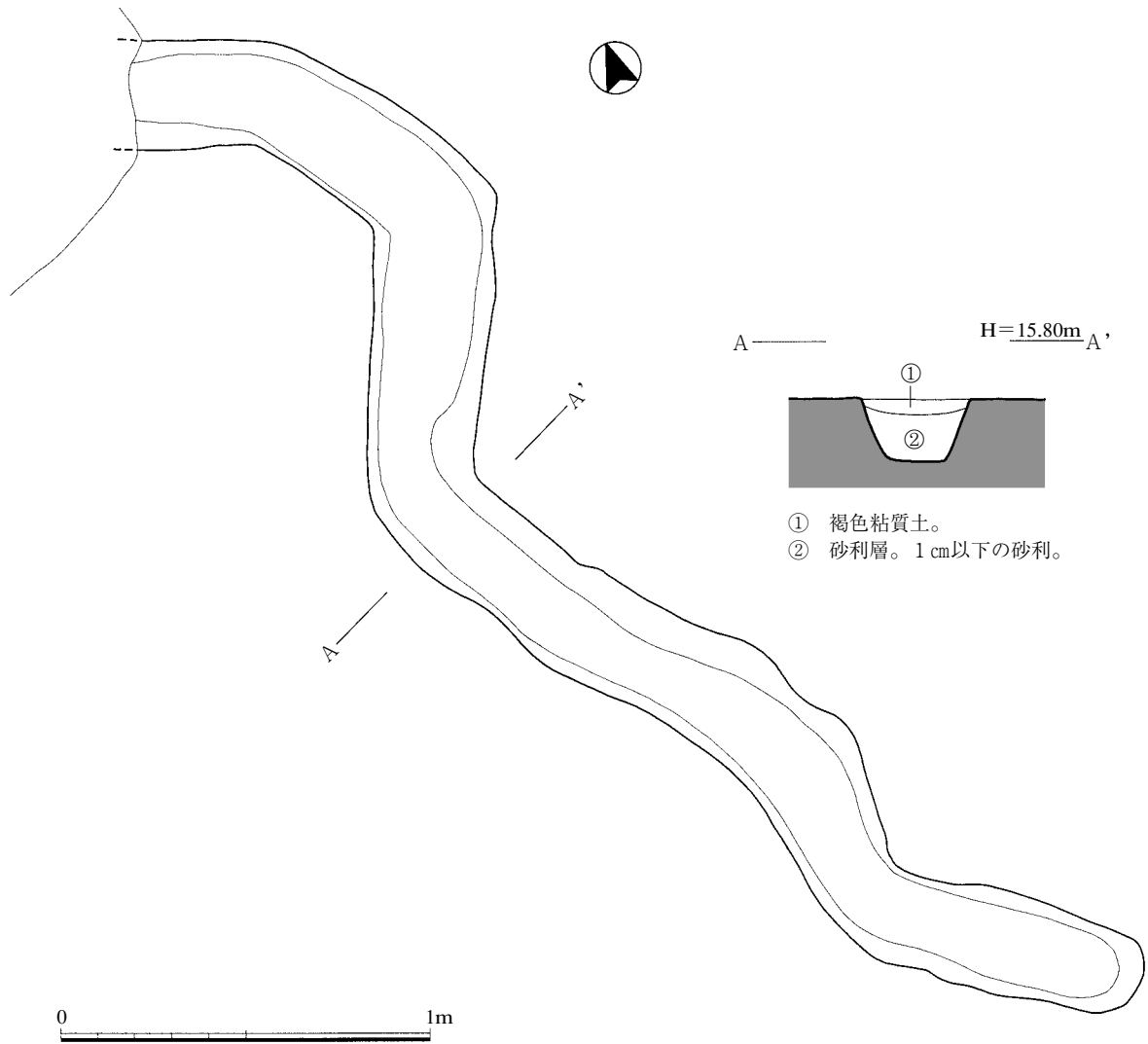


第115図 II区遺構配置図 S=1/150



- 1 表土。
- 2 暗黄褐色土。粘質で締まる凝灰岩の1cm大の粒を多く含む。
- 3 暗黄褐色土。2層よりやや暗い土色、凝灰岩の割合が多く粒が大きい。
- 4 暗褐色土。3層より土色は暗く、凝灰岩粒の割合は減る。青灰色の粘土の粒が混じる。
- 5 暗褐色土。粘質で締まり凝灰岩の粒を含む。炭化物、土器片含む。
- 6 黄褐色土。粘質を帯び柔らかい。炭化物含む。
- 7 暗褐色土。粘質を帯び柔らかい。灰青色粘土が筋状に入る。
- a 暗褐色土。礫がまじりサラサラとした土質。
- b 暗黄褐色土。粘質で小石やロームが混じる。
- c 暗褐色土。粘質で礫が混じる。

第116図 II区土層断面図 S=1/50



第117図 II区SD04実測図 S=1/20

(4) 遺物

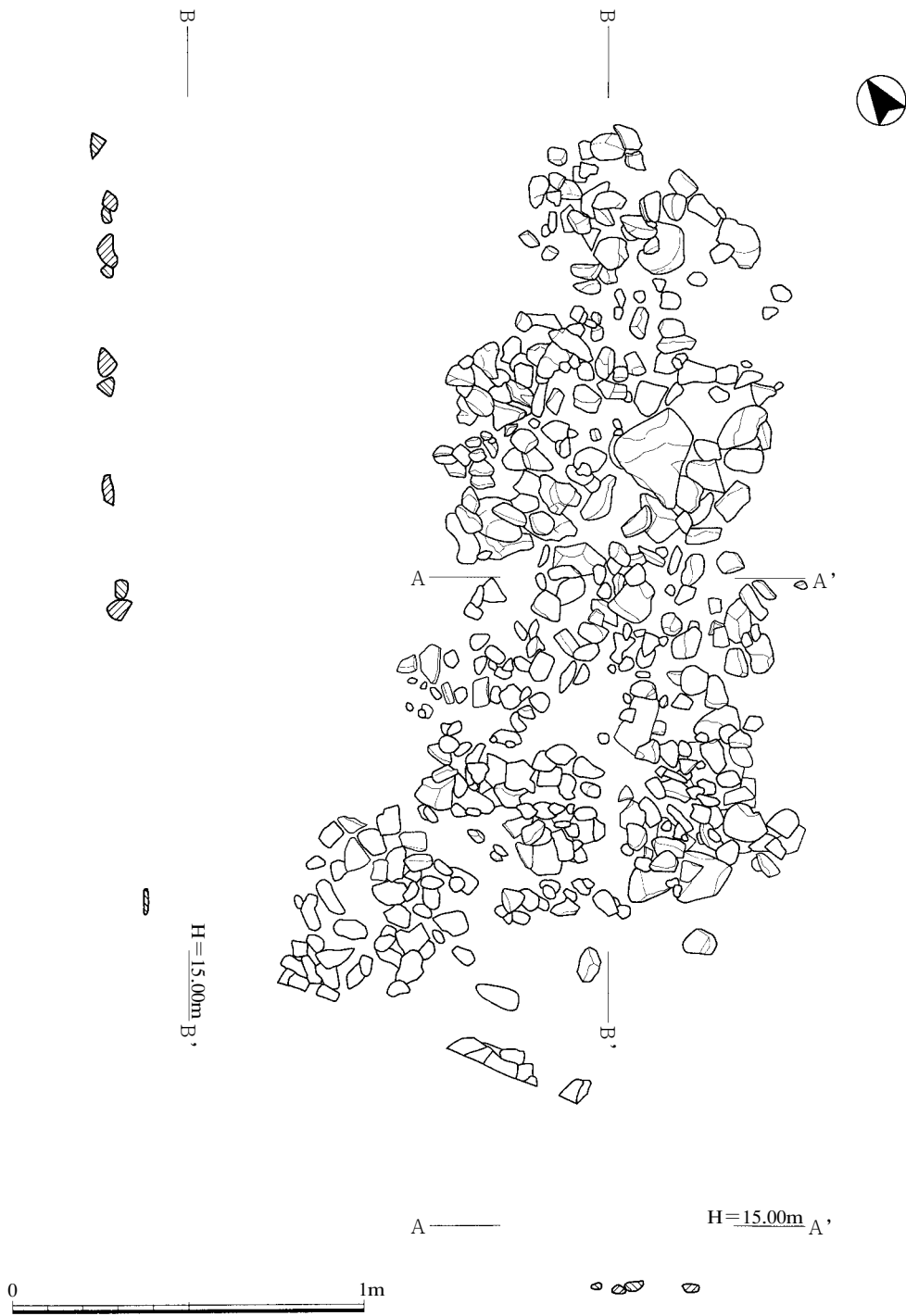
【SX06の出土遺物】(第119図)

出土遺物のうち図化したのは2点である。500は須恵質土器の播鉢片でよく締まっている。口唇部は回転ヨコナデにより縁を作り出している。内外器面には丁寧なヨコナデ調整が施される。内器面には底部から上部斜め方向へ、6条の櫛描きによる播目を2箇所確認できる。やや不正確ながら、復元口径は21cmほどを測る。501は、須恵器の甕形土器である。頸部から胴部の上面にかけて残っている。頸部の立ち上がり状況から長頸のものである。頸部より上部はロクロによる仕上げ調整がなされる。胴部内器面にはタタキの当て具の痕跡が残る。古代のものであろう。

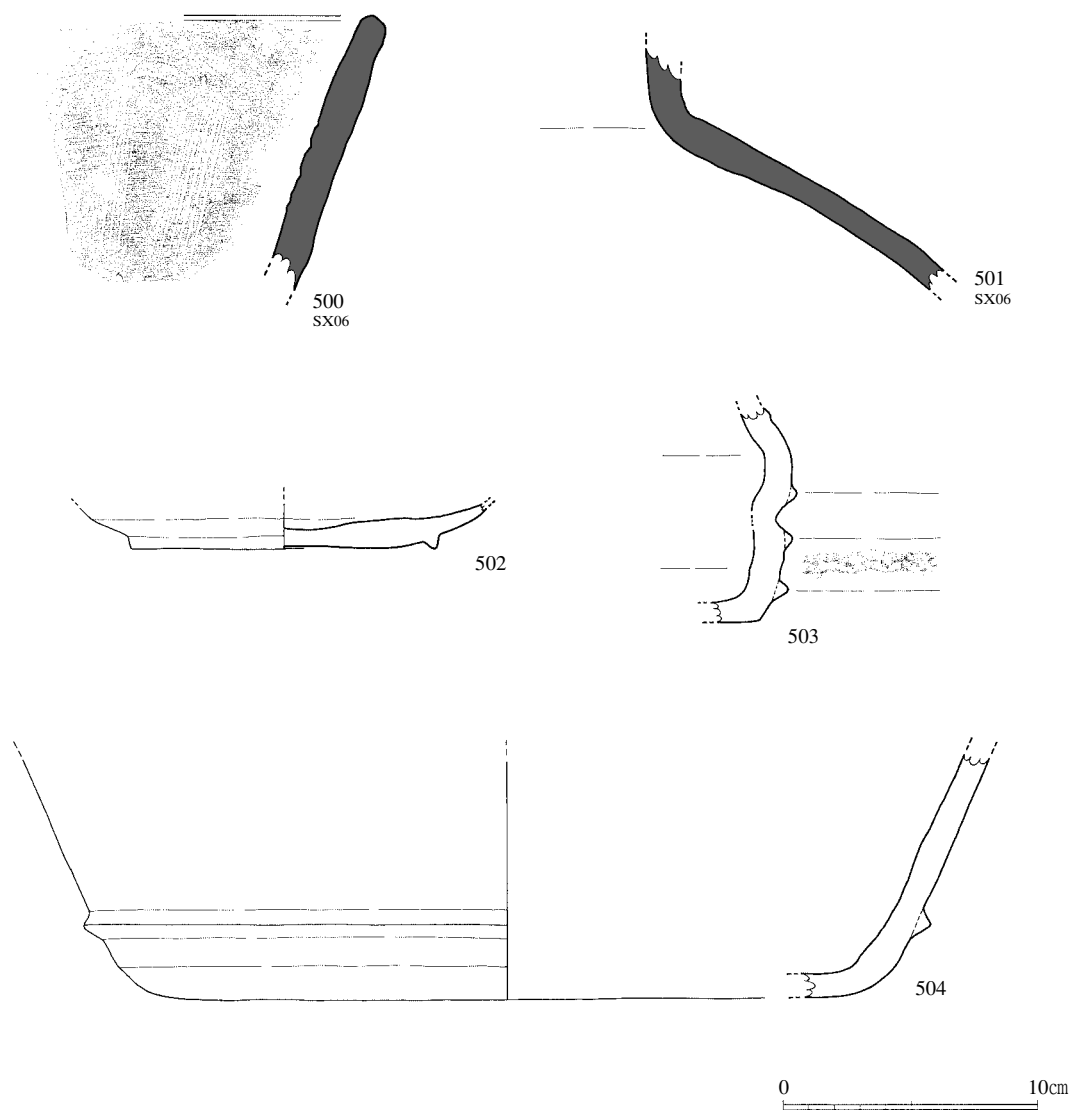
【包含層の出土遺物】(第119図)

この調査区の中からは包含層の出土遺物として以下の4点を図化した。

502は、M-25グリットの4層から5層までの一括遺物として収集したもので、古代の須恵器の盤である。高台を有しており、復元底径は12cmを測る。内外器面とも摩耗が進み、調整は不明である。高台は1cm未満と低く、高台の畳付け部分と底面とがほぼ同じくらいである。



第118図 SX06実測図 S=1/20



第119図 Ⅱ区SX06・包含層出土遺物実測図 S=1/3

503は、土師質土器で、器種は鉢と考えるが類例を確認していない。底部は平底で、胴部には窪みが入る。その窪みを境として下部には2条の断面三角を呈する突帯が巡る。その間に波状の沈線が巡る。窪みのすぐ上位にも同じ突帯が巡る。その上位になると頸部を呈するためかややすぼまる。

504は、瓦質土器の深鉢形土器で、火鉢である。脚が付くと思われるが、残った部分だけではその形態は不明である。器面は丁寧なミガキによって調整されている。器表面は炭素を吸着させ、黒色を帯びている。胴部最下面近くに断面三角を呈する突帯が巡る。器壁は厚く、1cmほどを測る。復元最大胴径は30cmほどである。さらに上部は開くようである。復元底径は28cmほどを測る。

第11節 調査Ⅱj区

(1) 調査区の概要(第120図)

調査Ⅱj区は調査Ⅱi区の北東側に位置する。丘陵の裾部に当たる。調査区の位置は、南北が $X=-56448$ 、 $Y=-33780$ から $X=-56425$ 、 $Y=-33782$ まで、東西が $X=-56430$ 、 $Y=-33779$ から $X=-56430$ 、 $Y=-33787$ までの範囲である。

この調査区は、調査Ⅱi区と道を挟んで設定されている。裾部付近に、トレンチにより調査区は設定され、一部傾斜面に掛かる。

(2) 土層(第121図)

傾斜部分は、上部から流れ込むような、地形に沿った土層堆積である。遺構が確認された部分はやや平坦な場所で、そこに自然堆積があったものと思われる。

いくつかの箇所のトレンチを参考に標準的な土層を決める次のようになる。

1層は表土で腐葉土層である。遺物を多少含む。2層は暗褐色土で焼土を含み、締まりが少ない。3層は黄褐色粘質土で小石が混じり、硬い土である。その下位の4層は部分的にあらわれる層である黄褐色を呈し、石粒が多く硬く締まる土で、土器粒のような土が混じる。その下もしくは暗褐色土の下に岩盤層がある。

(3) 遺構と遺物

この調査区では、いくつかの土坑と礫の集中域を確認した。中世城跡に関連する遺構が存在するものと予想していたが、実際にはこの時期の遺構と認識できるものはほとんどなかった。

以下の遺構については調査者の記録を基に記述する。ただし、埋土の記述がない場合は、それを省略する。

【SK14】(第120図)

この遺構は調査区の中央部よりやや南側で検出した土坑である。ピット状の落ち込みである。径が55cmを測るほぼ円形の土坑である。

【SK15】(第120図)

この遺構はSK14の北側の、調査区の西側で検出した土坑である。調査区外に伸びている。径が1.4m、確認面からの深さ47cmを測る。

【SK16】(第120図)

この遺構は調査区の北側で検出した土坑である。図上では、SK16がSK17を切っている。ほぼ円形の土坑である。径はほぼ1.1m、確認面からの深さ33cmを測る。

【SK17】(第120図)

この遺構は調査区の北側で検出した土坑である。SK16に切られている。正確な形は不明である。図上で見る限り、さらに2つの遺構の切りあいの様でもある。ここではSK16の東側のものだけについて考える。隅丸方形の土坑で長軸1.1m、短軸0.9m、確認面からの深さ39cmを測る。埋土は褐色粘質土で、あまり締まりがなく、黄褐色の地山土を一部含む。

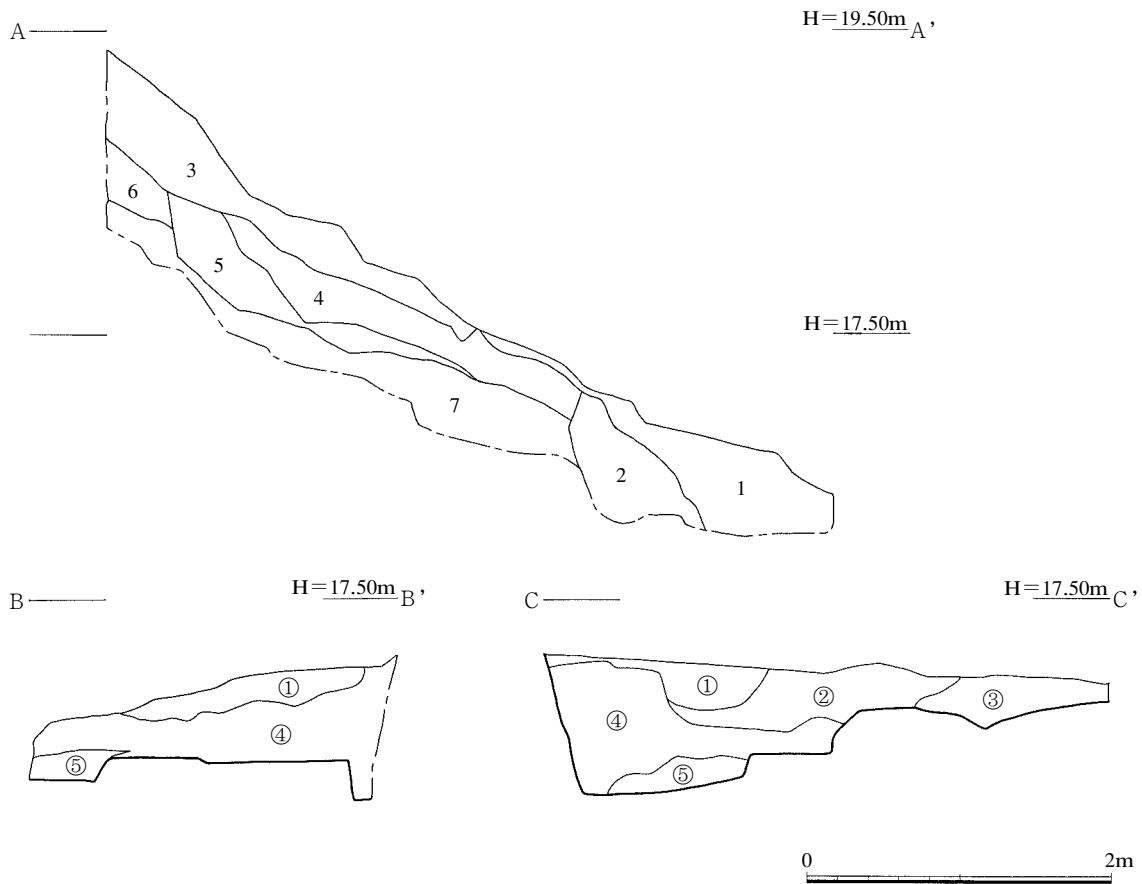
また、実測図によれば、SK16とSK17の西側に調査区外に伸びる溝状遺構もあるが、これはどちらかの遺構の延長になるものとした。ただ、どちらかは不明である。

【SK18】(第120図)

この遺構はSK16・SK17の北側にあり、調査区外にも一部伸びている土坑である。現在確認できる径では1.1mを測る。確認面からの深さ33cmを測る。埋土は黄褐色粘質土で、やや締まりがあり、砂粒を含む。色



第120図 IIj区遺構配置図 S=1/100



- 1 表土。
- 2 黄褐色土。ローム地で粘質。岩盤の凝灰岩のブロック含む。
- 3 暗褐色土。粘質で砂粒多く、やややわらかい。凝灰岩の砂砂利を含み。
- 4 暗褐色土。粘質で凝灰岩の細かな粒を含む。
- 5 暗黄褐色土。4層より砂粒が多い。
- 6 暗褐色土。凝灰岩の砂利層。
- 7 暗黄褐色土。粘性で硬く締まっている。大粒の凝灰岩の砂利を含む。

- ① 表土。
- ② 暗褐色土。焼土をふくみやわらかい。
- ③ 暗褐色土。樹根。
- ④ 暗黄褐色土。小石が混じりかたい。
- ⑤ 黄褐色土。石粒が多く硬く締まる。茶褐色粒が混じる。

第121図 IIj区土層断面図 S=1/50

調は地山よりやや暗い。

【SX07(集石遺構)】(第120図)

この遺構は調査区を中心地付近で検出した集石遺構である。傾斜に沿って2列並ぶものである。やや離れたところにも石があるが、それはこの遺構に含まない。また、やや離れた位置に五輪塔の火輪や空風輪が出土している。

遺構としては、大小様々な礫を集めてきており、円礫や角礫などが混じる。これらの礫石は人為的に持ち込まれたものには違いないが、時代の特定は難しい。この礫石の東側の傾斜地には墓碑群があり、調査Ⅰ区にあるような墓地造成を行った際に使用されたものの可能性がある。もし、そうならば中世末にまでは遡ることになる。

【廻国塔】（第122図）

この石塔は、調査Ⅱj区の東側の調査区外とした箇所 の 墓碑群中から確認したものである。墓碑群は散在した状態であった。墓所としては廃絶したもののように、骨を掘り上げた後か、無縁仏としてそのまま放置されたかのどちらかであろう。他に、五輪塔類の残決もあったため一応精査をおこなった。墓石塔や五輪塔類が散在する中に混じって、この塔身を検出した。

廻国塔は、經典供養塔のうち納経塔の一種である。釈迦滅後、弥勒菩薩がこの世に下生するまで、大乘妙典とよばれる法華経を書写し、我が国六十六カ国の霊場に保存する目的によって六十六部作り、それを一部ずつ霊場に納める目的で全国を巡ったり、回ったりしていることを銘文にした塔のことで、近世のある時期にかなり流行したものである。

塔の形式は角柱のもので、形態的にはあう。銘文は正面と左右面にある。

銘文には、

（正面）

「 天下泰平
 奉納 大乘妙典六十六部日本廻国
 日月清明 」

（右側面）

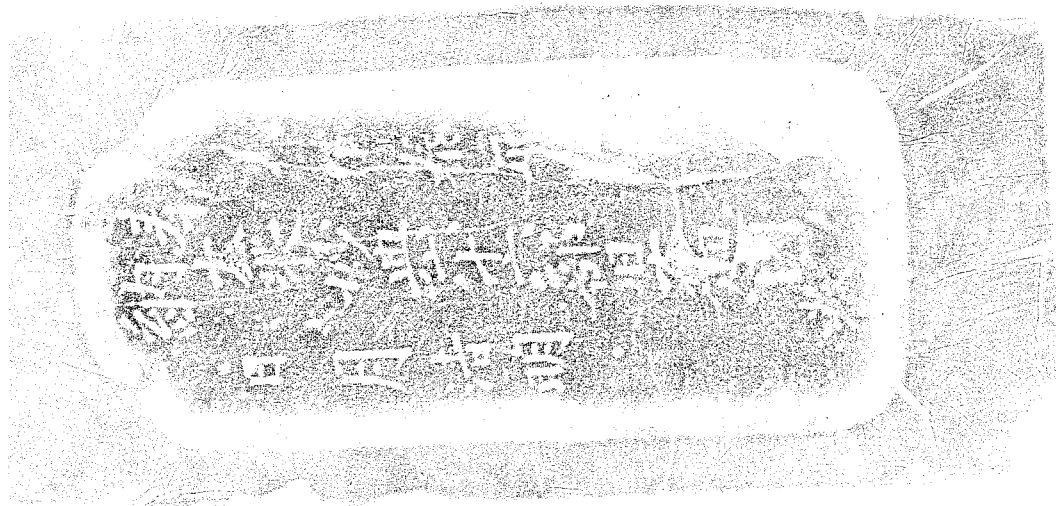
「 佐州 治右衛門
 願主 長門 平次良
 立合同行中 」

（左側面）

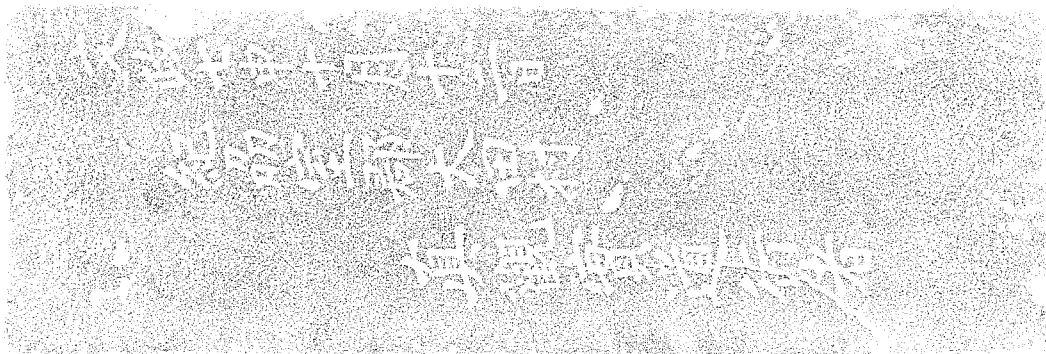
「 文政七申十月十二日
 紀州室郡大田村
 眞観實道行者」

とある。

この銘文から、この石塔が文政7年(1694)10月12日に紀伊国室(牟婁)郡大田村實道行者によって建てられたもので、その願主として、佐州の治右衛門と長門の平次良があげられている。「立合同行中」とあるので、實道に同行している「廻国聖」であろう。他にも江戸中期以降には、このように複数名を俗名で多く記す場合があるという。



第122図 Ⅱ区廻国塔



第6章 自然科学的分析

パリノ・サーベイ株式会社

古麓城跡出土木製品の樹種同定

(1) はじめに

古麓城跡では、中世(13世紀～16世紀)の掘立柱建物跡、柵状遺構、構状遺構、井戸、土坑、桶棺墓等の遺構が検出されている。これらの遺構からは、柱材、桶棺、井戸枠、漆器椀等の木質遺物が出土している。

本報告では、これらの木質遺物の樹種同定を行い、木材利用に関する資料を得る。

(2) 試料

試料は、出土した木質遺物10点(試料番号1～10)である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表4に記した。

(3) 方法

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柁目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール(抱水クロラール, アラビアゴム粉末, グリセリン, 蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

(4) 結果

樹種同定結果を表1に示す。木質遺物は、針葉樹3種類(マツ属複維管束亜属・モミ属・スギ)と広葉樹5種類(クリ・クスノキ・イスノキ・トネリコ属・チシャノキ)に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・マツ属複維管束亜属(*Pinus* subgen. *Diploxylo*) マツ科

軸方向組織は、仮道管を主とし、早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道および水平樹脂道が認められる。分野壁孔は窓状で、1分野に1個。放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高。

・モミ属(*Abies*) マツ科

軸方向組織は仮道管のみで構成され、早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は粗く、じゅず状末端壁が認められる。分野壁孔はスギ型で1分野に1～4個。放射組織は単列、1～2.0細胞高。

・スギ(*Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞がほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

・クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は1～4列、孔圏外でやや急激～緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

・クスノキ(*Cinnamomum camphora* (L.) Presl) クスノキ科クスノキ属

散孔材で、道管径は比較的大径、管壁は薄く、横断面では楕円形、単独または2～3個が放射方向に複合

して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅲ型、1～3細胞幅、1～20細胞高。柔組織は周囲状～翼状。柔細胞には油細胞が認められる。

・イスノキ (*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.) マンサク科イスノキ属

散孔材で、道管は横断面で多角形、ほとんど単独で散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は階段穿孔を有し、段数は5前後。放射組織は異性Ⅱ型、1～3細胞幅、1～20細胞高。柔組織は、独立帯状または短接線状で、放射方向にほぼ等間隔に配列する。

・トネリコ属 (*Fraxinus*) モクセイ科

環孔材で、孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減する。道管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、単独または2個が複合、複合部はさらに厚くなる。道管は単穿孔を有し、壁孔は小型で密に交互状に配列する。放射組織は同性、1～3細胞幅、1～40細胞高。

・チシャノキ (*Ehretia ovalifolia*) ムラサキ科チシャノキ属

環孔材で、孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減する。小道管、横断面では円形～多角形で単独または塊状に複合して配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1～5細胞幅、1～50細胞高。

表5 古麓城跡の樹種同定結果

番号	調査区	遺構	位置など	時代	品名	樹種
1	Ⅱh区	SE03		中世(13～16世紀)	舟形木製品	ヒノキ
2	Ⅱh区	ST06		中世(13～16世紀)	桶棺側板	スギ
3	Ⅱh区	ST07		中世(13～16世紀)	桶棺蓋	モミ属
4	Ⅱh区	SE03		中世(13～16世紀)	不明品	クリ
5	Ⅱh区	SE03		中世(13～16世紀)	井戸枠	クスノキ
6	Ⅱh区	K27グリッド		中世(13～16世紀)	柱材	チシャノキ
7	Ⅱh区		pit内	中世(13～16世紀)	柱材	イスノキ
8	Ⅱh区		pit内	中世(13～16世紀)	柱材	マツ属複雑管束重属
9	Ⅱh区	SE03	No. 1	中世(13～16世紀)	漆器椀(胴部)	トネリコ属
10	Ⅱh区	SE03	No. 2	中世(13～16世紀)	漆器椀(底部)	トネリコ属

(5) 考察

木質遺物は、舟形木製品、不明品、漆器椀、桶棺、建築部材(柱材、井戸枠)に分けられる。舟形木製品は、針葉樹のヒノキであった。古代を中心とした舟形とされる製品の樹種同定結果ではヒノキが多くみられ(島地・伊東, 1988)、今回の結果とも一致する。ヒノキ材の加工性や耐水性、殺菌性などの材質が考慮された可能性があるが、詳細は不明である。

桶棺は、側板にスギ、蓋にモミ属が認められた。このうち、スギについては、八代市平原野中遺跡で桶棺の底板に認められた例がある(山田, 1993)。いずれも針葉樹材で、木理が通直で加工が容易である。桶棺の樹種同定を行った例は少ないため、どのような木材利用であったのか詳細は不明である。しかし、木棺の民俗事例では外観をヒノキ、内部にキリを用いた二重構造が最も上とされ、モミやマツを代用とする(農商務省山林局, 1912)。また、江戸時代の一般庶民用の木棺は、ヒノキとモミが高級品で、普通はスギやマツが多かったとの指摘もある(満久, 1983)。これらの記述や指摘は、今回の桶棺の樹種同定結果とも一致してお

り、近世に見られた木棺の木材利用と同様の利用が行われていたことが推定される。また、樹種の違いは、棺のランクの違いなどを反映している可能性があるが、詳細は不明である。

柱材は、チシャノキ、イスノキ、複維管束亜属(ニヨウマツ類)が認められた。このうち、イスノキは重硬で強度に優れた材質を有し、柱材としては適材といえる。また、複維管束亜属も針葉樹としては比較的強度が高く、松脂を含むために耐水性も高い。これらは、材質を考慮した上で、柱材として利用されたことが推定される。一方、チシャノキは、やや重硬であるが加工は容易であり、柱材としてはイスノキや複維管束亜属よりも劣る。

県内では、玉名市玉名郡銜跡に伴う古代の掘立柱建物跡の炭化材について樹種同定が行われており、庁院や講堂では複維管束亜属、倉院ではコナラ節がそれぞれ多い結果が得られており、建物の性格等によって木材利用が異なる可能性がある(パリノ・サーヴェイ株式会社, 1994a, 1994b, 1994c)。本遺跡の種類の違いについても、建物の規模、用途、性格の違い等が樹種の違いを反映している可能性があるが、同時期の類例が少ないため詳細は不明である。今後、さらに資料を蓄積したい。

(6)引用文献

満久崇麿(1983)木のはなし. 238p., 思文閣出版.

農商務省山林局編(1912)木材ノ工藝的利用. 1308p., 大日本山林會.

パリノ・サーヴェイ株式会社(1994a)講堂の建築材.「玉名市歴史資料集成第十二集 一市制40周年 記念一玉名郡銜」, p.36-41, 玉名市・秘書企画課.

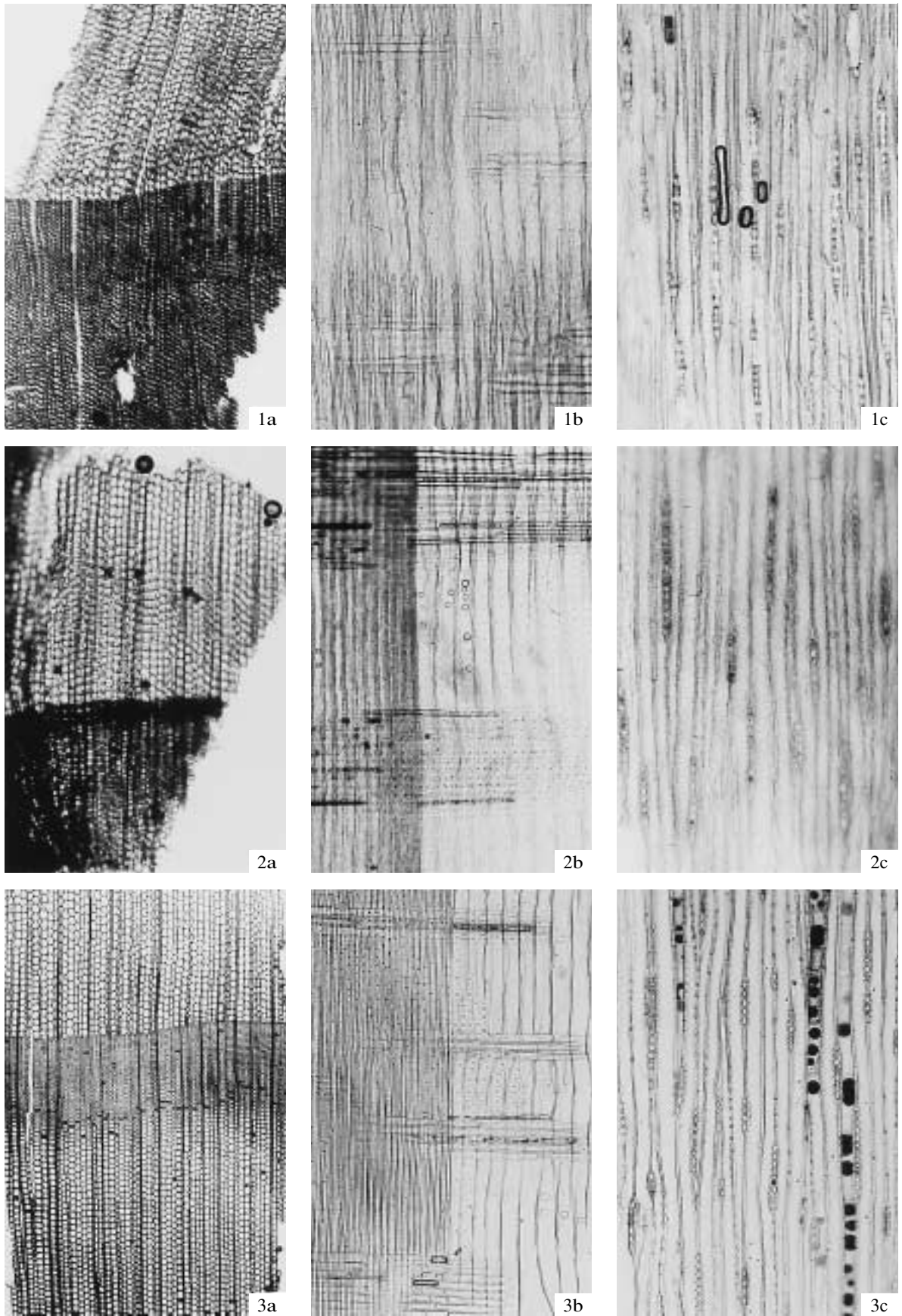
パリノ・サーヴェイ株式会社(1994b)炭化材の樹種.「玉名市歴史資料集成第十二集 一市制40周年 記念一玉名郡銜」, p.336-338, 玉名市・秘書企画課.

パリノ・サーヴェイ株式会社(1994c)倉院の自然科学分析.「玉名市歴史資料集成第十二集 一市制 40周年 記念一玉名郡銜」, p.418-427, 玉名市・秘書企画課.

島地 謙・伊東隆夫編(1988)日本の遺跡出土木製品総覧. 296p., 雄山閣.

山田昌久(1993)植生史研究特別第1号 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成 一用材から見た人間・植物関係史. 242p., 植生史研究会.

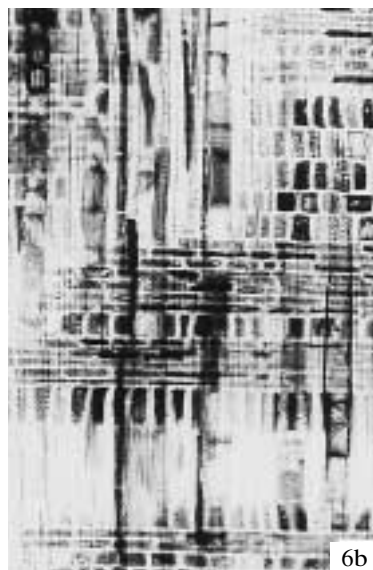
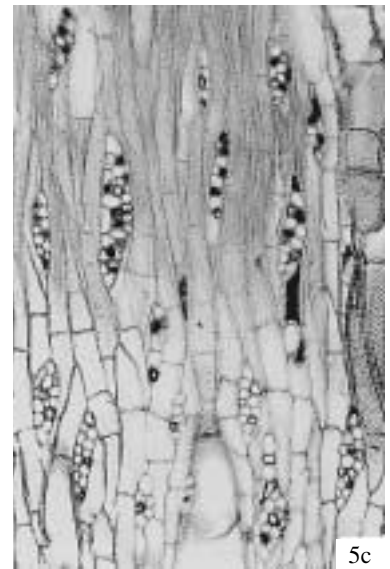
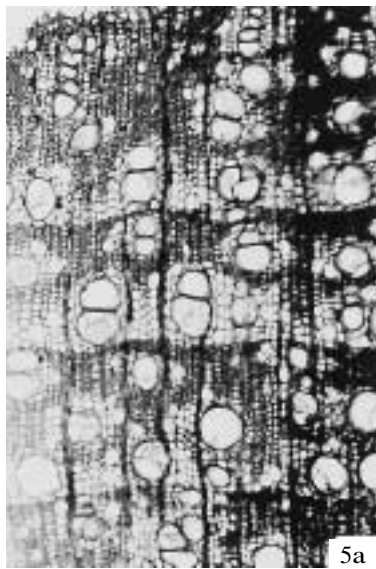
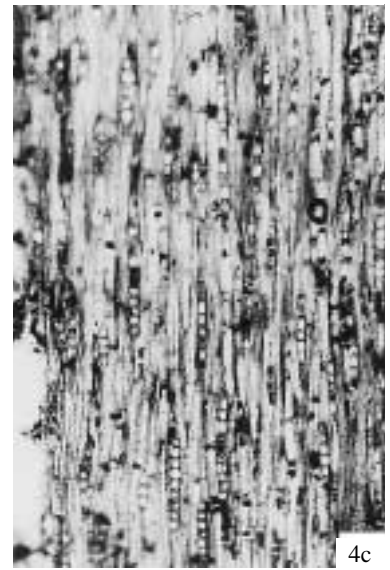
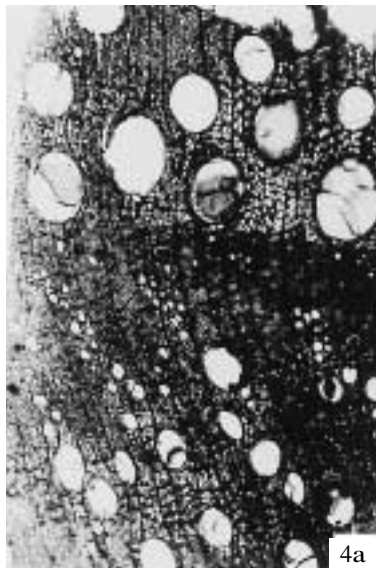
図版1 古麓城跡の木材(1)



- 1. マツ属複維管束亜属 (試料番号8)
 - 2. モミ属 (試料番号3)
 - 3. スギ (試料番号2)
- a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 μ m : a
200 μ m : b, c

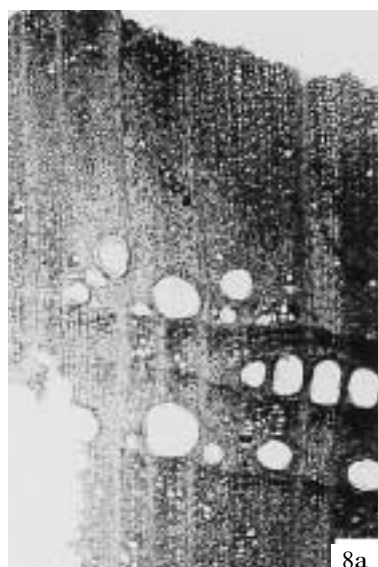
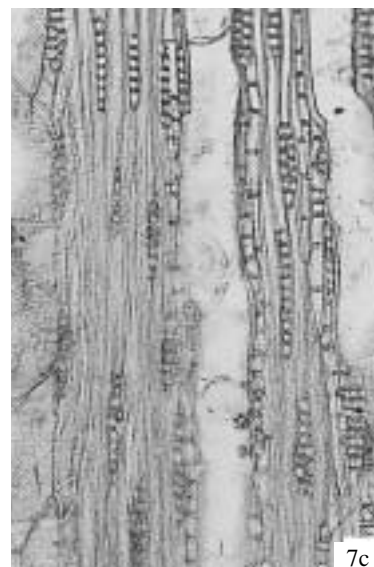
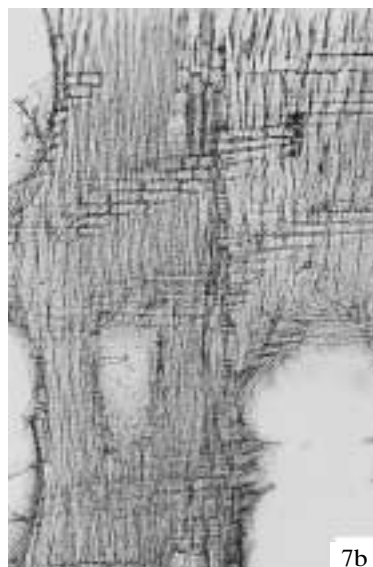
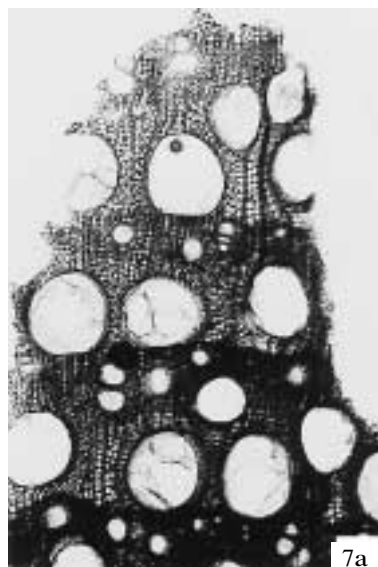
図版 2 古麓城跡の木材 (2)



- 4. クリ (試料番号 4)
 - 5. クスノキ (試料番号 5)
 - 6. イスノキ (試料番号 7)
- a: 木口, b: 柀目, c: 板目

200 μ m : a
200 μ m : b, c

図版3 古麓城跡の木材(3)



7. トネリコ属 (試料番号9)
8. チシャノキ (試料番号6)
a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 μ m : a
200 μ m : b, c

第7章 調査のまとめ

第1節 調査I区の墓地群について

(1) 配置と時期

調査I区では、ほぼ南北に伸びる谷筋の北側斜面を、造成して墓地が造営されており、五輪塔を中心とした墓地群が遺跡の中心である。この墓地群について、調査担当者の報告文及び専門調査員の(財)元興寺文化財研究所の狭川真一氏の所見等を参考にまとめることとする。

まず、時期の想定を行う。ここでは、調査I区の中心的な遺構であるI-①区の墓所について、時期を想定しながら述べる。時期設定はすでに大きくは、基本層序において述べている。ここではさらに詳述していくことにする。

【第I期】

第I期は、ここに墓地を設定し、造営を始めた時期(I-①期)と墓の再配地を行って造墓活動を行った時期(I-②期)に分けられる。

地輪のほとんどは、五輪塔群埋土(第Ⅲ層)の最下層面に座っている。地輪138(SG19)(幅56cm高さ47cm)、140(SG23)(幅57cm高さ49cm)、170(SG67)(幅57cm高さ49cm)、171(SG68)(幅61cm高さ49cm)は、他の五輪塔に比べ大型である。これらの高さは、出土したセットとなる空風輪の大きさから推定して、いずれも2mを超えるものと思われる。さらにこの170・171の2基のみが四面に薬研彫りで梵字が陰刻され、梵字部分に墨が塗り込められている。

地輪145(SG36)と水輪131(SG197)は、当初の位置を保ったまま出土している。地輪の下には、大きな石材や礫から形成される基礎や、水輪の納骨孔からは火葬骨が検出された。また、この地輪は石組遺構ST04の中に座っている。

隣接する地輪142(SG29)も下に礫が敷き詰められ石組遺構ST04を拡張すれば同じ区画の中に座っており、当初の位置を動いていない可能性がある。

地輪141(SG25)、143(SG30)も下に礫が敷き詰められていて、当初の位置を動いていない可能性がある。地輪146(SG38)は天地逆配置のため、移転してきた可能性が高い。

地輪137(SG18)、138(SG19)、139(SG20)、140(SG23)の下からは根石が検出され、いずれも当初の位置を動いていると思われるが、根石を敷きほぼ同一間隔で地輪145、142の延長上に並べてあることから、この位置に意図的に据え直したものと思われる。

170、171以外の地輪には立方体状の内削りが施されており、粗い鑿跡が見られる。地輪の座りを良くするためとか、重量を軽くする等の目的があったのではと考えられる。

地輪2(SG193)(上幅37cm下幅39cm高さ32cm)の一面には、左に「元中九年壬申二月十五日」、右下に「昌寿」と陰刻されており、唯一の記年銘を持つ五輪塔として重要である。当初の位置を動いていると思われるが、第I期五輪塔群と同一面より出土し、造営時期の1時点を知ることができる。この地輪の形態的特徴は、上幅より下幅が2cm長く4側面ともに台形状になっていることである。同形式の地輪151(SG89)が石組遺構ST05から検出されている。

石組遺構ST08、ST06、の地下には炭化した木片等を大量に含む炭化物層があった。ST08からは火葬骨片も検出されている。石組遺構ST01、ST04、ST05は地下遺構を伴わない。集石遺構SX02、SX03が何なのかは不明である。沼状遺構SX04からは、須恵器片(捏鉢13～14世紀前半)が出土している。

【第Ⅱ期】

岩盤の斜面際に沿って、小型の地輪が一行に並ぶ。大きさは幅20～30cm、高さ20cm程度である。地輪はいずれも地面に直接おかれていて、石組、石敷、地下遺構等を伴わない。第Ⅲ層の上に堆積する第Ⅱ層中に座っていた。

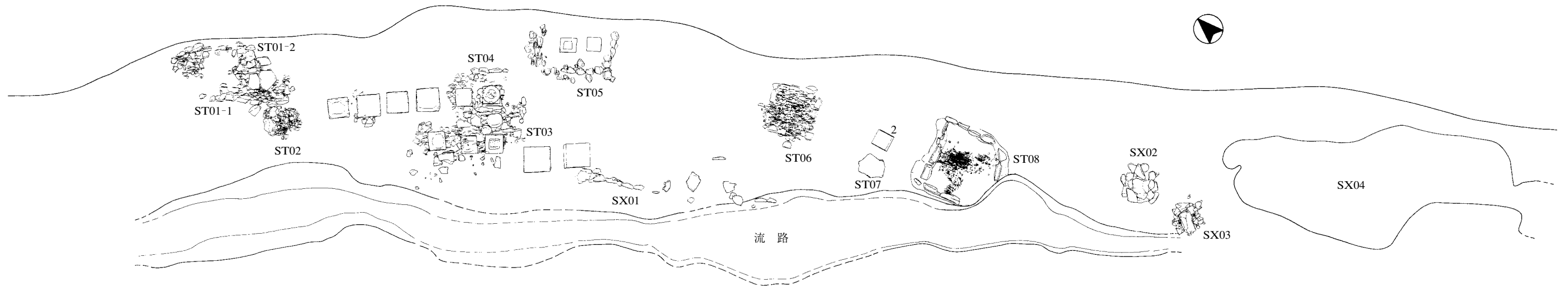
石敷遺構ST10は、第Ⅱ層最下層より出土した。礫石経と思われる遺構SR01からは、厚さ10数cmにわたり多量の川原石層が出土した。その中から1個「阿」と墨書された礫を発見し、その後の整理作業で12個ほどの墨書による礫石経が出土していたことが分かった。

葺石墓と思われるST11、ST13より出土した礫は、ST10より不ぞろいの河原石である。直径1～5cm程度のもので、角張った礫等も混じっていた。

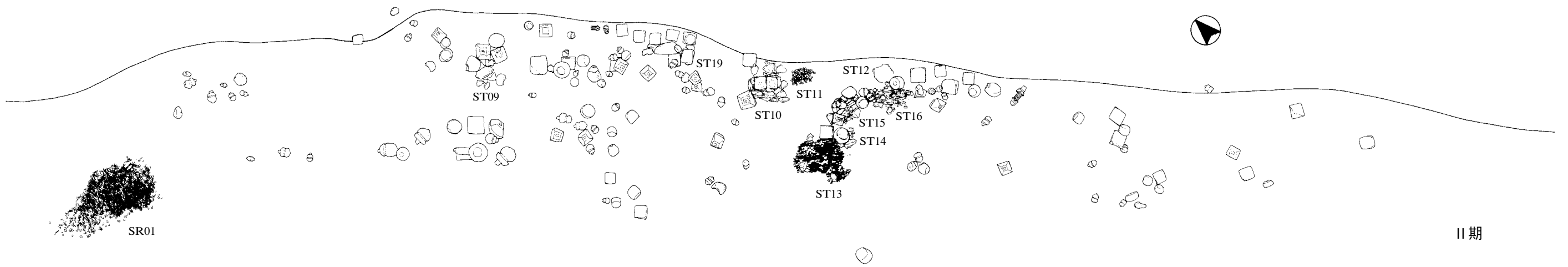
(2) 専門調査員狭川真一氏の所見

狭川氏の所見のうち重要な項目として以下のものがあげられている。

- a) 遺構面は大きく2面あり、下層遺構面は区画墓と大型の五輪塔群とからなる。上層遺構は主として小型の五輪塔群からなる。
- b) 下層遺構の区画墓のうちST04には五輪塔(地輪145+水輪132)が当初の位置のまま出土している。また、隣接する地輪142はST04を西側へ拡張した区画の中に座っており、これも当初位置を動いていないものと考えられる。
- c) 他に検出された区画墓は10基あまりある。
- d) 当初位置を動いていないと考えられる2基の地輪の西側と南側にほぼ同一の間隔をもって並べられた五輪塔の地輪がある(計11基)。これらの多くは当初位置を動いているようであるが、この位置でも意識的に据えられており、地輪下から根石が検出されている(141、143は当初位置の可能性あり。146は天地逆配置のため移転してきた可能性が高い)。
- e) 再配置された五輪塔のうち170、171には梵字があり、両者と大日心身真言、大日親身真言、大日法身真言(この3者で三種悉地真言という)+金剛界五仏を刻んでいる。梵字は薬研彫りで、171の梵字には墨を入れている(これと対になるのが空風輪26とみられる)。
- f) 並べられた五輪塔以外に同様のものがやや離れた位置に1基あり(下層出土)、それには「元中九年/1392年…南朝年号」とあり、下層墳墓群の造営時期の1時点を知ることができる。これを含めると大型の五輪塔は全部で12基となる。
- g) 区画墓のうち内部構造の判明するものは少ないが、区画内側に土坑を掘り込むもの、ピット状に穿つもの等があり、骨片を見いだす例もある。
- h) 再配置された五輪塔群は上層遺構形成に伴う整地土(第Ⅲ層)で一部埋没するが、すべての地輪上面は顔を出していた状態であり、上層墓地形成段階でも整然と配置されていた様子が窺える。同じことは並べられた地輪に伴うとみられる空風輪が上層遺構(第Ⅲ層上面)中から見いだされることでも理解できる。
- i) 上層遺構検出の五輪塔は総じて小型化しており、下層の五輪塔のあり方と大きく異なることが指摘できる。
- j) 上層遺構面には礫石径とみられる礫の集石遺構がある。
- k) 遺跡の西端近くから国産陶器の大甕が出土している。甕は正位置に据えられた状態で出土したようであるが、表土除去段階ですでに顔を見せている。この陶器は、下層遺構廃絶に近い時期の所産である可能性も考えられる。また第Ⅲ層中出土の土器は墓地整理の時期を考えるうえできわめて重要な位置にある。このような所見をふまえて狭川氏は、この遺跡の内容と変遷を以下のように述べられている。



I期



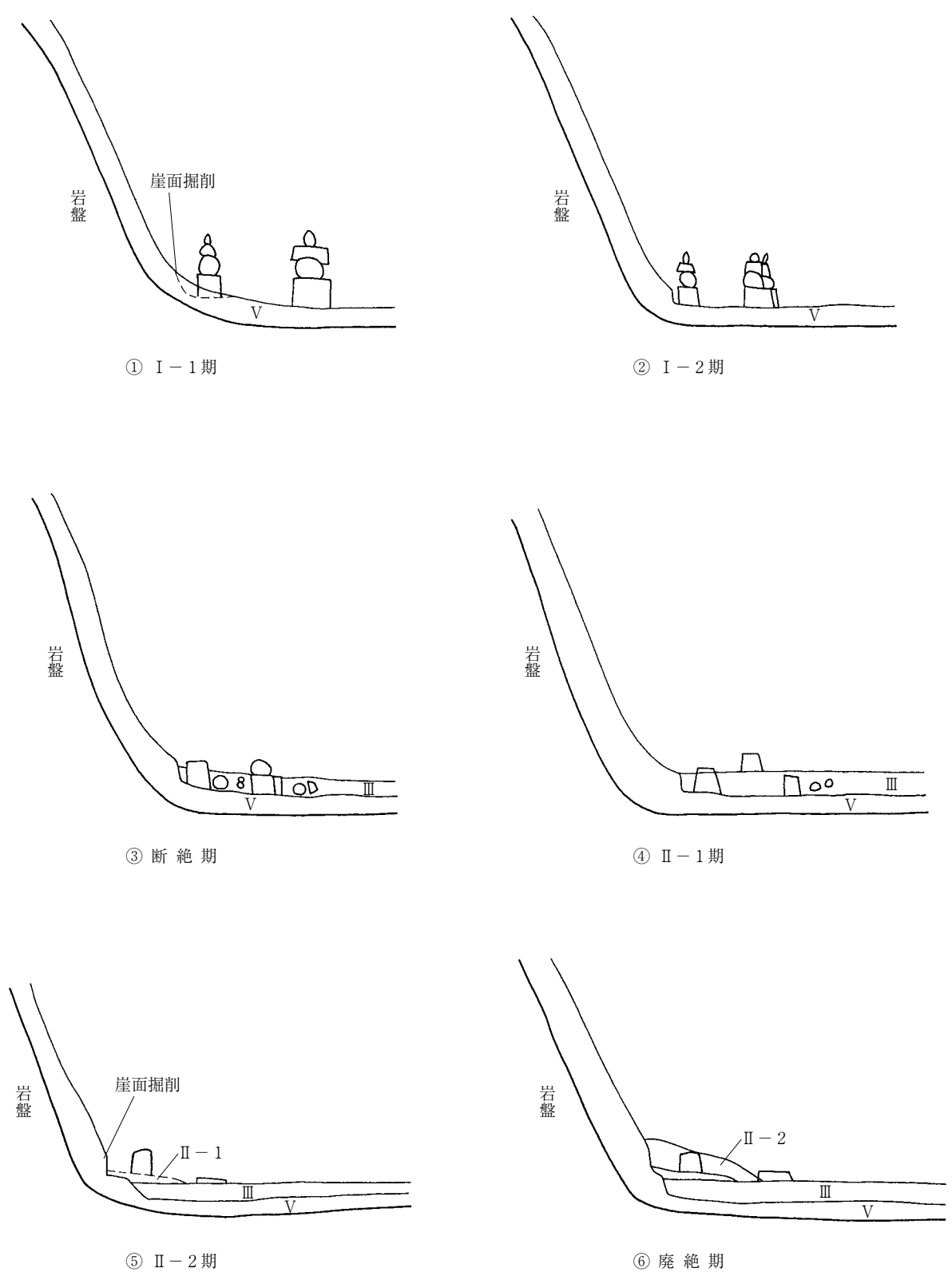
II期



SK01



第123图 I区时期别遺構配置図



第124図 I区墓地変遷模式図

「まず谷部分を造成して区画墓が作られる。区画墓には各々五輪塔が置かれていたとみられ、その水輪内もしくは地輪下に火葬骨を埋納していた。

五輪塔は残存する地輪の大きさから推測して、大きなものは高さ約2m(6～7尺)、小さいものでも約1.4m(5尺弱)を測るものと考えられる。区画墓の数と残存する五輪塔の数は一致しないまでも近似値であり、おそらく1区画に1基と想定して間違いなからう。したがって地輪の数から少なくとも12基の五輪塔を建てる墓地がこの谷に集中して営まれた姿が復元できる。

この墓地の造営時期は、五輪塔の年号から1392年に1点を求められるが、梵字を持つ資料の文字配置は一般的にみられるものと異なり、三種悉地真言+五仏である。これは最も初期的な大分県臼杵市中尾五輪塔にもみられるが、後の時代で集中的にみられるのは鎌倉時代後期から南北朝時代にかけてである(ex・小国町満願寺塔、和歌山県高野山源空塔/1315年、宮崎県一丁田塔ほか)。したがって当遺跡出土の一群が先の年号と併せて南北朝時代(14世紀代)を中心に造営されたものとみるのが妥当であろう。

こうした墓地景観は熊本県内では、南小国町満願寺に3基の区画墓の上に五輪塔が建つ遺構(南北朝期)が知られ、玉東町西安寺跡墓地(鎌倉中期)もやや古いながら大型五輪塔を配置する墓地としてあげられよう。また深田村勝福寺墓地はやはり鎌倉時代後期からはじまる五輪塔を中心とする大型墓地で知られる。このうち西安寺跡例は銘文から相良氏の墓所であることは明らかであり、満願寺例は各塔の背後に石製の露盤があることから3基の墳墓堂が想定でき、そうしたものを造営できる階層と推定できる。

他府県では、奈良県西大寺奥の院墓地五輪塔群、同県額安寺墓地五輪塔群、同県長岳寺墓地五輪塔群、京都府西小墓地五輪塔群等があげられる。西大寺例は叡尊墓所を中心に形成されたもの、額安寺例は忍性墓所を中心としたもの、西小墓地はおそらく浄瑠璃寺の墓所と考えられるもので、いずれも高僧の墓地として注目される。

これらのことから、南北朝期を中心に営まれる大型の五輪塔を中心とした墓所は在地で有力な豪族層あるいは高僧の墓所である可能性が高く、本遺跡の下層遺構にみられる五輪塔を建てる墓所もおそらくこの地で活躍した有力な在地領主層に求められるのではなかろうか、とされる。

次に墓地を整理する事例をみると、福岡県太宰府市横岳遺跡がある。やはり区画墓上に五輪塔を配置していたであろうと想定される墓地を整理し、一所に大きな方形土坑を穿ち、そのなかに礫石経を埋納する。そして、土坑中程に段を形成してそこに五輪塔を並べ、埋納する。その上には大甕(常滑産)を埋置し、さらにその上に方形建物を建てるというものである。この遺跡の意味は墓地整理に伴ってその時の墓塔を整理埋納するとともに、これ以後は方形建物を祭壇としてその中央に大甕を埋め、そこに随時納骨しようとした遺跡と理解できることにある。五輪塔下に大甕を埋める例は長野県文永寺が有名であるが、他にも多々事例があり、歴代の人々を一所に埋納する海会(かいえ)の思想の反映と考えられる。

当遺跡もおそらくはこれと同義で捉えられる可能性が高く、墓地整理の事実だけでなく当遺跡で出土している大甕の存在意義を強調するならば、太宰府市横岳遺跡とほぼ同じ意義、性格を与えられるものと考えられる。また五輪塔が整理されたエリアで当初位置を動いていないものが存在することは、それらが最も新しく、墓地整理者からみてきわめて近縁のものであった可能性が考えられ、そこを基盤として墓地を再造成したものである。したがって上下両層の遺構は互に関連したものであると言え、しかも時期的に連続して存在したものと理解する。

次に、その上層遺構に関しては、石塔が急激に小さくなり、製作技法もきわめて簡素になる点を踏まえると、中世後期以降の所産とみるのが妥当である。もう少し時期を絞れば、九州の中世墓における小型石塔の出現時期をみると、概ね15世紀の範囲に限られる。下っても16世紀前半に辛うじてみられる程度となる。

五輪塔の年代を残欠から想定するのは難しいが、上記した状況から近世に下るものは存在しない可能性が

高い。ただ礫石径の存在が近世まで下る可能性を示すが、大分県大野郡の事例では暦応二(1339)年のものが知られているので、近世まで下らせる必要はない。

これらのことから、概ね次のような変遷が考えられる。

鎌倉時代後期から南北朝時代前半頃(14世紀前半～中頃)に最初の墓地造営がなされ、次々と五輪塔を建てる墓地が作られる。墓地景観が一定程度整った14世紀末～15世紀前半頃に墓地を整理し、五輪塔のみを集中的に配列し、全体を大規模に整地する。整地後も五輪塔群は顔を出した状態で供養され続けたとみられるが、その周囲には小型の五輪塔を中心とする墓地群が形成されはじめる。これらもおそらく近世に入るまでには廃絶していたとみられ、中世後期までにはこの墓地は終焉を迎えたと考えられる。」

このように、狭川氏に墓地の変遷過程まで想定していただいた。この所見に対し、特に異論及び付加するところはない。さらに狭川氏によれば、このように「当遺跡は、初期の段階から大型の五輪塔を建設するという特徴があり、九州圏内でこれまで発見されている中世墓地にはほとんど例を見ないものである。こうした墓地は在地領主の中でもかなり有力な一族(人物)の墓所であったと考えられる。」とされ、当該遺跡に葬られたのは、この地で重要な地位を占める有力氏族の一族との見方を示された。調査担当者は、この有力氏族を紀年銘や遺物の年代と文献史料から、名和氏と推定している。

(3) 遺跡の時期及び性格(第124図)

以上のことをふまえ調査担当者の意見をまとめる。この遺跡の第I期は、さらにI-1期とI-2期に分けられる。I-1期は、この墓地の誕生期である。「元中九年」の銘を持つ地輪が出土していることから、少なくとも14世紀末前後を含むと思われる。この時期にあたる大型の五輪塔を中心とした墓地は、在地で有力な家族層あるいは高僧の墓地である可能性が高いことから、本遺跡の墓地は、この地で活躍した有力な在地領主層の可能性が高いと思われる。それは名和氏であろう。I-2期は、この墓地の再配置を行った時期である。当初の墓地をまとめなおして、新たな墓所を造営する。この時期が概ね鎌倉時代末から南北朝時代に当たる。

第II期も、さらにII-1期とII-2期に分けられる。一旦墓所の断絶期が入る。しばらくした後、この墓所に再び新たな墓を造営する。これがII-1期である。このときI期の墓の頭は地上に出ているものと推定できる。かなり小振りの五輪塔に変化するが、これは時代の変化を示すものである。さらに岩盤を削り、墓所の範囲を広げる時期がある。これがII-2期である。最終的にここに墓を営まれなくなるのが、五輪塔の形や地輪の出土状況から、新しくても16世紀末までで、近世には入らないと考える。

この遺跡が、在地の有力豪族によるもので、有力豪族の関係者が葬られた。その後一旦、墓地は途絶えたかに見えるが、相良氏の時代に再び多くの墓が作られ、最終的に墓所をまとめることが行われる。そういう一連の墓所の変遷を追える場所として、この遺跡は重要な意味を持つといえる。

ここでは、石塔の産地や石工集団については触れなかった。最初の頃に作られた石塔は大型品で、この石塔に関わった石工として考えられるのが、西大寺系の石工集団である。当時、石塔をこのように大きく作っていく石工として有名だからである。また、それに伴って当然真言律宗の寺院、僧侶も関係することが予想できる。ちなみに八代地方にも西大寺の末寺に列する寺院がある。

石材の産地については、今後の研究に待ちたい。

(4) 石塔群の分類

調査I区で出土した石塔群の数量は、空風輪60個、火輪26個、水輪43個、地輪37個、相輪5個の総計171個を数える。この他に形状を留めない材もある。また、それらは、完全に全体がそろっているものはほぼ皆

無である。地輪は座ったものが多いが、原位置を保つものは少ない。その他の部位はほとんど移動している状態である。ただ、そのうちのいくつかは水輪まで原位置を保っていると考えられるものもあった。さらに一基のみは空風輪から地輪まで並べられるものもあった。ただ、これは全体のバランスが悪く、寄せ集めた可能性がある。

I期、II期のそれぞれを厳密にみると、本来は別々のものであった可能性が高い。地輪については本来の位置を保つものが多いのも事実である。

ここでは、石塔をそれぞれの部位ごとに分けて分類を試みてみたい。方法的には統計処理を行って、実測図などを参考にさらに分類する方法をとった。したがってかなり恣意的な部分が多いかもしれない。

【空風輪】

空風輪は、大きさや形態の違いからいくつかに分類を試みる事ができた。他の部位にくらべれば、60個体はかなり多い方である。ただ内容的には、破損しているものも多く、漠然とした大きさや形態の違いを想定できるに過ぎない。ここでは、統計的処理でまず大まかな状況をつかみ、その上でそれぞれの石塔の類似度をもとめ、さらに統計処理で数値化できなかった部分を実測図にもとめ、分類を試みた。これは大きさが小さく残りやすさによるものかもしれない。

まず、頂部の形態により円頭・圭頭・尖頭に分けた。さらに全体的な法量を基に、5つに分類した。縦長43.0cm以上、横幅29.0cm以上を大型とし、縦長/横幅の比が0.93~1.3を中型1とし、それよりやや小振りでも1~1.57を中型2とした。さらに縦長21.8cm~26cm、横幅13.2cm~15.4cmを小型1とし、それよりやや小振りを小型2とした。さらに空風輪間の形態や縦横比による細身と太身による分類を行った。分類したものが第125図である。

【火輪】

火輪の総数は26個しかなく、他の部位に比べてかなり少ない。これは地輪と風化により混同したものもあるかもしれないからである。時期が下るにつれて形態がやや曖昧なものもあるからである。

空風輪よりもさらに数量的には26個と少ないので、統計的に有意な結果はでにくい。そこで、火輪については、全体的な大きさ、全体形の厚手と薄手・軒下の出入り・そりの有無の3つの要素によって分類する。厳密に数値的には処理せず、主に実測図上の外観から分けた。厚手・薄手に関しては、高さ(C)/幅(p)の数値で分けた。

全体的に小ぶりのものも多く、他の部位の大きさのものがない。梵字を彫ったものもないので、形のよい大型のものは持ち去られた可能性がある。

分類したものが第126図である。

【水輪】

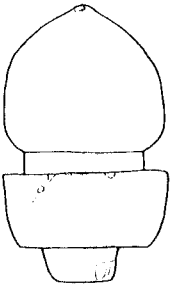
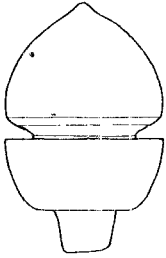
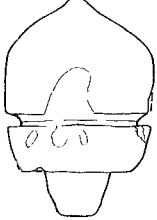
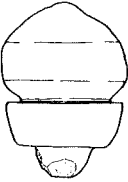
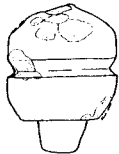
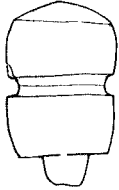
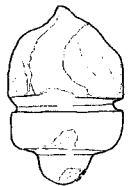



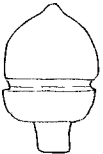







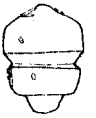

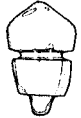

水輪はかなり特徴的なものも多く、いくつかに分類できた。

上部に蔵骨部分を持つもの(納骨孔)が特徴的である。埋納孔の形態はすべて円形のため、その有無で大きく分けた。プロポーシヨンのなものでは胴張り位置で分け、さらに胴張り位置が中位のものの大小で3つに分けた。埋納孔の中には、火葬骨が残っているものがあり、原位置を保ったものと判断した。


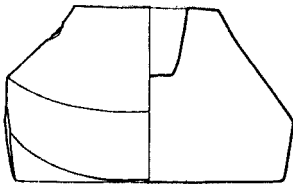
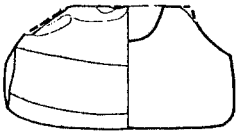
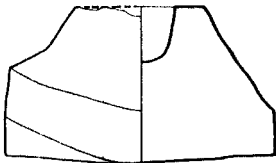
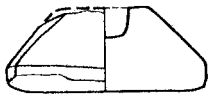
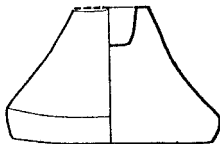
分類したものが第127図である。

【地輪】

地輪は大きさによる違い、窄孔の違いによるものが特徴として分類基準になる。その上下も基準になりそうであるが、原位置とするに難があるものもあるので、基準からはずした。穴の形態もあるが十分関連をつかめていない。また、形態的に上下辺と高さの比率も分類基準とできそうであるが、今回は利用しなかった。また、器面の調整の違いもあろうが、石材の善し悪し、風化の度合いもあるのではっきりと基準とはしなかつ

	空風間広 宝珠独立 丸頭	空風間狭 丸頭	空風間広 三角頭	横 広 三角頭	縦 長 三角頭	空風間狭 尖頭
大型			 26	 35		 24
中型 1			 25	 21	 33	 14
中型 2	 62		 42	 48		 66
小型 1		 52	 63	 51	 13	 45
小型 2	 31	 67	 18	 58	 19	 60

第125図 空風輪分類図

	薄 型	厚 型
軒上内	 <p>85</p>	 <p>71</p>
軒上外	 <p>89</p>	 <p>73</p>
軒平担	 <p>82</p>	 <p>88</p>

第126図 火輪分類図

た。ただ、大型品に調整の丁寧なものが多い。

最終的に分類基準としたのは大きさ・受部の形態(無・円形・四角形)・プロポーションの厚薄の3要素によって分類する。特に文字は大型品で丁寧な仕上げによるものだけでみられた。

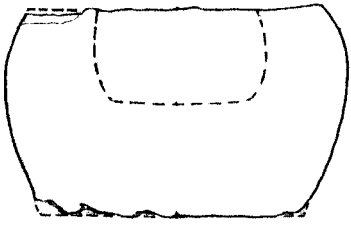

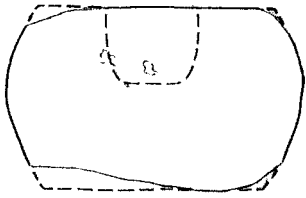
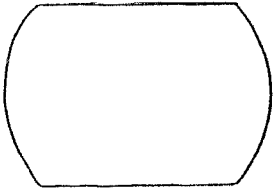
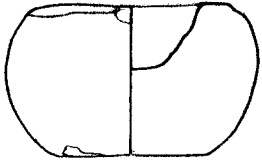


分類したものが第128図である。

【相輪】

点数が少なく破損した状態がほとんどのため、分類するほどでもないが、本文中ですでに触れたように大きさの違いと、意匠の違いで分類している。ただ、個体ごとのバリエーションの範囲で済ませるべきところかもしれないが、一応分類しておく。

【宝塔身】

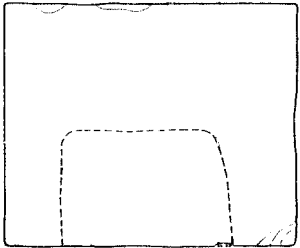
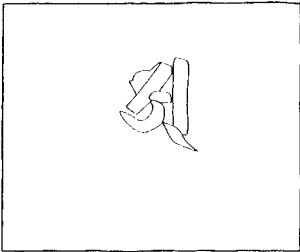
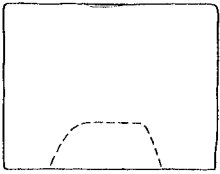
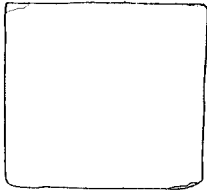
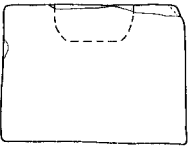





当初水輪と認識していたものであるが、塔身部分に段が一段あったので宝塔の塔身と判断した。梵字や石仏の彫刻などはないが、一応121・124を宝塔にした。五輪塔の火輪のなかに、上部の段を火輪部に差し込む形態があれば、五輪塔としてもよいが、なかったためここでは、宝塔とする。2点しかないが、概ね大中の2つに分類した。

	埋納孔有	埋納孔無
胴張上	 <p>105</p>	 <p>102</p>
胴張中(大)	 <p>106</p>	 <p>109</p>
胴張中(中)	 <p>125</p>	 <p>101</p>
胴張中(小)		 <p>111</p>

第127図 水輪分類図

【宝篋印塔笠部】

この宝篋印塔笠部は、調査II区からの出土品であるが、3点と点数が少ないので、分類は最小限にとどめる。ここでは大きく意匠の違いから2類に分けている。基準に使用しなかったが、穴の有無もある。

	内 刳 り 孔 有	内 刳 り 孔 無
大	 <p>140</p>	 <p>170</p>
中 ₁	 <p>145</p>	 <p>144</p>
中 ₂	 <p>149</p>	 <p>151</p>
小 ₁	 <p>168</p>	 <p>154</p>
小 ₂	 <p>148</p>	 <p>165</p>

第128図 地輪分類図

	小 型		大 型	
	露盤有	露盤無	九輪幅狭	九輪幅広
宝塔分類 (1)	7	6	3	4

	小 型	大 型
宝塔分類 (2)	121	124

	隅飾間文様無	隅飾間文様有
宝篋印塔分類	455	456

第129図 宝塔、宝篋印塔分類図

第2節 古代の遺構と遺物

今回の調査で古代の遺構を検出したのは調査Ⅱa区、Ⅱf区、Ⅱh区付近である。特に調査Ⅱa区の遺構は隣接する古麓能寺遺跡と関係すると考えられる。しかし、調査期間の違いや現場の調査状況からお互いの遺構の出土層位や、遺構の連続性などをつかめていない。遺物としては共通する時期のものが多く出土している。次に間が開いて調査Ⅱf区からも古代の遺構が多く出土している。ここでも掘立柱建物跡もしくは柵列状の柱穴を多く検出し、この付近まで古代の建物跡が続くことが分かった。その一方、調査Ⅱh区では、掘立柱建物跡より、焼土を伴う土坑など特殊な遺構が出土している。このことは、古麓能寺遺跡と調査Ⅱa区、Ⅱh区が山裾の平地に広がる遺跡であるのに対し、調査Ⅱf区は谷部に入り込んだ、やや山手の遺跡であることと関係すると考えられる。ただ、これらの遺構がいつごろ、どのように組み合わせられていたのか十分つかめていない。特に掘立柱遺構の時期判別が不十分なので、建物などを想定する場合、その性格もつかめない状況にある。

また、調査Ⅱf区で出土した方形の焼土や焼けた粘土塊が出土する方形の遺構について、今のところ何の遺構か確認できていない。ただ、かなりしっかり焼けていることから、常時火を使ったあとであるのは間違いない。谷部でなければならない遺構なのかどうかもわからない。鉄滓などの出土もないので、製鉄遺構とは考えられない。今後の調査事例に待ちたい。

遺物のうち須恵器は在地の窯で焼成されたと考えられるものが多いが、明らかに荒尾産とみられるものも出土している。土師器はほとんど在地産であろう。

第3節 調査の総括

今回調査した地点は、本来の古麓城本体の裾部から、城下町と推定される場所に連なる一帯と考えられる。

古麓城跡は、名和氏時代の飯盛城・丸山城・鞍掛城・勝尾城・八町嶽城の五城に、相良氏時代の新城・鷹峰城を併せて総称したものである。したがって、時代により城として展開した範囲も異なると考えられる。

今回調査した調査Ⅰ区と調査Ⅱ区は、尾根線を境に分かれる谷部及び、丘陵の一帯である。ここは、新城の一角であることはいえる。しかし、地形や検出した遺構は、必ずしも城跡との関連を伺わせるものばかりでもない。古代の不明焼土坑、中世の井戸や建物跡や墓所の存在は、城とはまた違った役割を担った場所の可能性もある。ただ、調査Ⅱ区から古麓能寺遺跡付近、古麓城下遺跡に広がる中世遺構は古麓城跡に連なる遺構であろう。古代と中世の遺構には時代的にはやや断絶があるが、周囲の調査成果次第ではその繋がりが想定できるかもしれない。

調査Ⅰ区出土の紀年銘の入った地輪の時期は、相良氏が八代に侵攻してきた時期に近く、墓所として断絶を伺わせる状況が、当時の政治的な動きに連動していることを伺わせる。特に紀年名の年号が南朝年号であり、名和氏及びその家臣が南朝方であったことと関係するのであろう。ただ、時代を特定できそうな遺物としてはこれしかないので、墓所がどのような変遷をたどり、時の政治と絡んでいったのか不明である。そしてその後、廃絶もしくは破壊により、一時期ここに墓所が造営されないのも政治的な絡みの証左であろうか。

調査Ⅱ区で検出した井戸跡と建物跡の存在は、ここに人々の生活があった状況を示す。特に遺物として中世末のものが多く出土し、相良の支配から薩摩の島津の進入、さらには秀吉の九州平定に絡む時期に遺構の一部は形成されたという見方もできる。これよりやや先んじて、調査Ⅰ区の第Ⅱ期の墓所の改変と造営が行われたと想定できる。

このような今回の調査状況のみから、古麓城本体の動きを明確にすることは困難である。さらなる発掘調査と文献資料から、種々の検証を経ながら、古麓城跡の実態が明らかになるものとする。

觀 察 表

第6表 五輪塔観察表

図版番号	掲載番号	種類	調査区	取上げ番号	出土層	標高	時期	備考	イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	E	チ	リ	ヌ	ル	ヲ	ワ	カ	ヨ
28	3	相輪	I区	166	I	26.09			9.8	8.2	—	15.6	9.4	5.2	8.8	57.0	13.0	(14.8)	—	12.5	14.8	16.5	(16.8)	10.2
28	4	相輪	I区	230	表探				8.0	4.0	6.0	(24.0)	8.0	4.0	10.6	(46.6)	13.2	13.8	13.5	12.5	12.0	15.0	(17.0)	11.8
28	5	相輪	I区	229	表探				(11.0)	4.5	7.4	(1.4)	—	—	—	(24.3)	9.5	15.4	15.0	—	—	—	—	—
28	6	相輪	I区	87	III	25.34	I		—	—	—	(15.0)	6.0	—	2.4	23.4	—	—	—	9.5	8.6	11.5	—	6.5
28	7	相輪	I区	88	III	25.34	I		—	—	—	(6.2)	6.0	5.2	(3.8)	(21.2)	—	—	—	9.6	9.0	13.8	13.2	8.8

図版番号	掲載番号	種類	調査区	取上げ番号	出土層	標高	時期	備考	a	b	c	d	e	f	g	A
28	8	空風輪	I区	173	I	26.02	II	空風8、火9、水10、地11セット	11.0	3.2	4.8	2.8	18.8	19.0	9.0	21.8
29	12	空風輪	I区	1	I	24.59			10.5	2.5	6.4	4.4	16.0	14.9	6.9	23.8
29	13	空風輪	I区	3	II	24.81			11.8	(3.0)	(7.0)	4.2	(17.0)	(16.0)	(9.5)	26.0
29	14	空風輪	I区	4	II	25.02			(17.4)	(3.0)	8.4	6.0	22.9	22.2	11.2	34.8
29	15	空風輪	I区	5	II	25.11			9.0	2.6	4.0	4.0	(12.6)	(11.8)	7.2	19.6
29	16	空風輪	I区	6	II	24.93			11.8	3.2	7.0	4.8	20.0	20.0	8.8	26.8
29	17	空風輪	I区	7	II	24.99			9.0	2.3	5.0	2.7	(13.0)	(12.0)	(6.0)	19.0
29	18	空風輪	I区	8	II	24.94			9.3	3.0	5.4	3.8	15.8	(14.4)	7.3	21.5
29	19	空風輪	I区	10	II	25.16			9.8	2.0	7.0	4.0	13.2	11.9	4.8	22.8
29	20	空風輪	I区	13	II	24.82			9.6	2.8	6.7	3.6	13.0	12.0	6.0	22.7
29	21	空風輪	I区	15	II'	24.84			10.8	3.5	8.8	6.3	21.2	21.3	9.9	29.4
29	22	空風輪	I区	17	II'	24.89			(9.5)	2.5	6.2	3.8	(14.0)	12.6	5.5	22.0
29	23	空風輪	I区	21	I	25.08	I	大型	24.2	2.8	13.5	8.0	30.5	31.0	12.0	48.5
29	24	空風輪	I区	24	I	25.24	I	大型	23.0	2.0	9.5	8.5	29.0	28.0	12.5	43.0
29	25	空風輪	I区	39	I	25.38	I		15.4	4.2	8.6	6.0	25.0	22.6	11.2	34.4
29	26	空風輪	I区	41	I	25.35	I	大型、梵字有り、地輪171とセット	29.2	3.8	14.6	6.4	31.2	32.2	14.8	54.0
29	27	空風輪	I区	44	II	25.52			12.8	3.0	7.2	—	20.2	18.3	—	23.0
29	28	空風輪	I区	45	II	25.51			8.0	2.6	6.6	3.5	14.6	14.9	6.5	20.7
29	29	空風輪	I区	46	II	25.35			9.7	2.2	6.0	4.8	16.4	(15.8)	7.3	22.7
29	30	空風輪	I区	51	II	25.46			8.7	4.4	5.7	4.8	19.0	18.3	8.7	23.6
29	31	空風輪	I区	58	I又はII	25.52			13.4	0.6	7.2	(2.0)	16.4	(15.0)	9.8	(23.2)
29	32	空風輪	I区	62	II	25.54			7.9	2.2	6.8	3.4	13.0	12.6	5.5	20.3
29	33	空風輪	I区	64	I	25.79			14.8	4.0	11.4	6.2	21.6	20.8	8.8	36.4
29	34	空風輪	I区	70	I	25.55			(13.8)	4.8	7.1	(4.8)	20.4	19.4	9.2	(30.5)
29	35	空風輪	I区	76	I	25.54			9.8	3.0	5.7	5.0	17.5	16.0	6.8	23.5
29	36	空風輪	I区	80	II	25.48			10.0	3.2	4.6	4.2	(16.0)	(14.8)	(7.1)	22.0
29	37	空風輪	I区	85	II	25.47			12.3	3.2	7.0	5.0	18.0	18.0	8.0	27.5
29	38	空風輪	I区	95	II	25.49			9.0	(2.0)	(6.5)	2.0	15.6	14.8	(8.0)	19.5
29	39	空風輪	I区	98	I	25.63			10.5	2.2	6.2	4.2	16.2	15.6	6.7	23.1
29	40	空風輪	I区	100	II	25.63			10.2	2.6	6.6	(3.6)	16.0	16.2	7.5	(23.0)
30	41	空風輪	I区	106	II	25.61			11.0	2.5	7.5	(4.5)	(17.9)	(18.0)	7.8	(25.5)
30	42	空風輪	I区	115	II	25.53			(14.0)	4.5	9.0	5.8	21.5	21.0	10.5	(33.3)
30	43	空風輪	I区	117	II	25.59			13.0	3.6	6.4	3.6	(20.4)	(18.0)	(8.6)	26.6
30	44	空風輪	I区	120	II	25.71			11.5	2.0	7.5	3.2	18.0	17.5	7.4	(24.2)
30	45	空風輪	I区	129	I	25.52			11.0	1.5	7.0	3.7	(16.0)	15.8	8.0	23.2
30	46	空風輪	I区	131	I	25.62			11.6	3.2	6.2	(4.6)	18.5	16.6	8.0	(25.6)
30	47	空風輪	I区	139	I	25.65			10.5	2.3	6.4	4.2	16.2	16.0	7.9	23.4
30	48	空風輪	I区	145	I	25.70			10.7	5.3	7.2	5.3	20.3	20.6	9.5	28.5
30	49	空風輪	I区	146	I	25.76			(11.9)	1.5	9.0	3.0	19.0	19.0	(9.0)	(25.4)
30	50	空風輪	I区	154	II	25.72			10.4	2.6	6.0	4.6	16.4	16.2	8.2	23.6

図版番号	掲載番号	種類	調査区	取上げ番号	出土層	標高	時期	備考	a	b	c	d	e	f	g	A
30	51	空風輪	I区	155	II	25.78			11.2	2.0	7.3	(5.2)	18.2	17.4	7.5	(25.7)
30	52	空風輪	I区	156	II	25.80			10.0	2.7	5.5	3.6	15.4	(14.8)	7.0	21.8
30	53	空風輪	I区	158	II	25.67			13.0	2.0	10.0	2.5	21.2	20.8	7.0	27.5
30	54	空風輪	I区	160	II	25.61			(13.5)	2.3	9.0	2.2	21.6	21.6	9.2	(27.0)
30	55	空風輪	I区	161	III	25.85			(10.8)	2.7	7.8	(3.5)	(18.3)	(18.3)	8.5	(24.8)
30	56	空風輪	I区	175	II	25.92			10.5	3.1	6.4	3.4	(18.0)	(15.6)	6.9	23.4
30	57	空風輪	I区	183	I又はII	26.52			(9.8)	2.5	7.4	5.3	19.6	18.4	11.0	(25.0)
30	58	空風輪	I区	194	III	25.99			10.0	1.0	5.2	2.8	14.0	(14.4)	7.0	19.0
30	59	空風輪	I区	200	II	25.39			10.8	3.5	6.7	3.8	18.0	18.3	11.1	24.8
30	60	空風輪	I区	202	I又はII	24.99			11.0	2.0	6.2	2.4	14.5	14.0	6.2	21.6
30	61	空風輪	I区	203	II	25.42			9.0	3.1	5.4	3.5	(14.7)	(14.5)	7.8	21.0
30	62	空風輪	I区	204	III	25.16			13.5	5.2	6.5	6.3	20.8	19.5	8.5	31.5
30	63	空風輪	I区	208	I	25.94			12.5	2.3	7.0	3.2	18.5	17.0	8.5	25.0
30	64	空風輪	I区	209	流路	—			11.4	2.0	9.2	(0.6)	19.4	19.2	(9.0)	(22.5)
30	65	空風輪	I区	210	II	25.49			11.2	2.8	6.0	4.4	16.3	15.6	7.0	24.4
30	66	空風輪	I区	212	I又はII	25.13			14.8	2.2	6.0	6.0	18.5	18.5	7.5	29.0
30	67	空風輪	I区	221	表採	—			4.2	2.2	6.0	2.6	11.5	12.3	10.3	15.0
30	68	空風輪	I区	222	表採	—			9.5	2.3	7.9	3.1	(16.5)	16.0	6.4	22.8
30	69	空風輪	I区	223	表採	—			13.0	2.6	9.2	6.6	21.0	20.2	7.0	31.4
30	70	空風輪	I区	224	流路	—			10.0	3.4	7.2	4.0	18.0	17.0	9.0	24.6

図版番号	掲載番号	種類	調査区	取上げ番号	出土層	標高	時期	備考	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	B
28	9	火輪	I区	172	I	26.07		空風8、火9、水10、地11セット	(11.8)	(3.2)	(4.0)	7.0	3.0	(22.0)	(9.0)	16.5	16.5	16.5	6.0	19.0
31	71	火輪	I区	40	III	25.14	I		15.0	8.0	—	7.4	6.5	19.2	9.8	19.0	19.0	18.5	9.0	23.0
31	72	火輪	I区	50	II	25.45			12.2	4.0	1.4	7.0	2.5	13.0	7.0	12.2	14.4	13.5	4.6	17.2
31	73	火輪	I区	52	II	25.44			13.5	3.0	3.0	6.4	6.5	17.0	9.0	18.0	17.5	18.0	7.0	20.5
31	74	火輪	I区	57	II	25.41			16.8	9.6	—	3.8	9.6	20.0	10.0	20.8	21.8	14.0	3.0	26.4
31	75	火輪	I区	66	III	25.02			13.0	4.5	2.5	5.8	2.6	15.0	9.0	14.2	14.2	14.8	6.0	20.0
31	76	火輪	I区	69	I	25.56			9.4	4.6	1.0	3.6	1.2	13.2	10.0	16.8	17.0	16.0	5.6	15.2
31	77	火輪	I区	73	III	25.09			10.4	5.0	2.5	6.2	3.6	13.0	8.6	9.4	15.6	15.0	6.0	18.0
31	78	火輪	I区	78	II	25.42			5.7	6.0	1.2	6.2	2.5	17.5	9.6	14.2	14.0	14.0	4.0	12.8
31	79	火輪	I区	96	II	25.56			9.4	4.8	1.0	5.0	1.2	14.5	8.0	14.4	14.4	14.6	5.2	15.4
31	80	火輪	I区	101	II	25.47			7.4	6.0	1.2	8.2	1.0	12.4	8.0	13.5	14.5	13.2	6.0	14.0
31	81	火輪	I区	113	II	25.58			6.4	3.7	2.7	(4.8)	2.5	18.4	11.2	(14.4)	14.0	14.0	5.2	12.6
31	82	火輪	I区	114	II	25.51			7.6	3.0	0.5	2.0	1.4	12.0	6.4	13.0	13.0	12.8	4.0	11.2
31	83	火輪	I区	118	I	25.67			12.7	5.0	2.7	4.2	3.0	14.4	7.2	16.0	16.0	15.4	6.5	20.8
31	84	火輪	I区	121	II	25.5			8.0	12.0	1.4	9.0	5.2	18.8	11.2	18.3	18.0	19.0	6.5	23.5
31	85	火輪	I区	138	I	25.71			9.0	4.2	1.0	6.6	1.0	15.0	8.0	10.8	14.5	13.6	5.0	14.0
31	86	火輪	I区	150	II	25.69			7.8	4.0	2.5	3.4	4.6	14.0	8.0	14.0	12.6	12.5	4.6	13.5
31	87	火輪	I区	157	II	25.81			10.8	3.8	1.8	4.0	0.8	11.2	8.4	15.5	15.4	15.0	4.0	17.0
31	88	火輪	I区	163	III	25.77			13.0	4.0	1.0	4.0	1.0	(10.0)	6.8	14.0	14.2	13.0	5.0	13.0
31	89	火輪	I区	184	III	26.31			6.5	6.8	2.0	6.0	2.5	16.5	9.0	16.4	16.0	14.8	4.6	16.0
31	90	火輪	I区	185	III	26.23			20.4	6.0	—	7.0	3.8	(22.0)	12.0	21.0	20.0	20.0	(11.5)	26.5
31	91	火輪	I区	195	II	25.77			8.4	3.2	1.6	(3.4)	(1.6)	(13.0)	9.0	(13.0)	13.0	(11.4)	5.0	13.0
31	92	火輪	I区	198	II	25.49			9.4	3.2	1.4	2.0	2.0	12.4	8.8	13.5	13.5	12.5	4.0	14.2
31	93	火輪	I区	207	II	25.39	I		14.2	5.5	1.0	(5.5)	4.2	(15.0)	8.0	(17.8)	17.0	17.0	6.2	20.7
31	94	火輪	I区	220	表採	—			20.4	5.0	3.2	(8.6)	(4.2)	(23.0)	(13.0)	21.2	21.2	21.2	(11.2)	28.2
31	95	火輪	I区	232	表採	—			11.2	4.8	0.5	11.8	0.5	(18.5)	(14.0)	15.5	15.4	14.5	(3.4)	16.5

図版 番号	掲載 番号	種類	調査区	取上げ 番号	出土層	標高	時期	備 考	s	t	u	v	w	C
28	10	水輪	I区	171	I	26.06		空風8、火9、水10、地11セット	5.0	25.0	(13.0)	30.3	20.0	21.0
32	96	水輪	I区	9	II	25.10			—	(25.2)	—	(31.0)	(25.0)	13.0
32	97	水輪	I区	28	I	25.51	I		—	32.0	—	40.0	30.0	22.0
32	98	水輪	I区	22	I	25.01	I		—	—	—	35.0	28.6	14.0
32	99	水輪	I区	31	I	25.34			(11.2)	(22.0)	(21.0)	(38.2)	(30.7)	18.3
32	100	水輪	I区	37	I	25.33	I	火葬骨検出、梵字有り	12.0	38.0	24.0	44.0	32.0	29.0
32	101	水輪	I区	47	II	25.41			—	24.5	—	31.5	24.7	18.4
32	102	水輪	I区	48	II	25.40			—	28.0	—	34.0	23.0	22.7
32	103	水輪	I区	49	II	25.43			—	24.2	—	27.5	21.5	17.7
32	104	水輪	I区	53	II	25.48			—	24.0	—	35.0	(25.0)	23.3
32	105	水輪	I区	54	II	25.62			12.0	39.0	21.0	45.0	(35.0)	27.0
32	106	水輪	I区	60	II	25.38	I		10.0	(31.0)	12.0	39.0	(29.0)	(24.0)
32	107	水輪	I区	65	II	25.43			—	16.0	—	23.0	17.5	14.8
32	108	水輪	I区	71	III	25.03			—	23.8	14.6	25.3	19.3	14.0
32	109	水輪	I区	72	I	25.41		取上げ130と接合	7.3	29.0	22.2	35.2	26.0	23.2
32	109	水輪	I区	130	II	25.59		取上げ72と接合						
32	110	水輪	I区	74	I	25.50			—	20.0	—	28.5	(18.0)	18.0
32	111	水輪	I区	75	I	25.43			—	22.5	—	27.0	19.0	15.2
32	112	水輪	I区	77	III	25.19			—	26.0	—	34.6	25.0	20.0
32	113	水輪	I区	81	II	25.45			—	(14.5)	—	22.0	(14.0)	(13.4)
33	114	水輪	I区	83	II	25.43			—	26.0	—	35.0	26.0	24.0
33	115	水輪	I区	99	II	25.60			—	16.0	—	(27.2)	19.4	16.4
33	116	水輪	I区	108	II	25.69			—	(21.5)	—	26.5	(20.0)	12.5
33	117	水輪	I区	112	II	25.51			—	(19.7)	—	23.6	(17.5)	12.2
33	118	水輪	I区	137	I	25.80			—	33.0	—	39.5	26.5	23.5
33	119	水輪	I区	143	I	25.65			—	(27.0)	—	(34.2)	(19.0)	19.0
33	120	水輪	I区	144	I	25.67			—	22.5	—	31.0	(22.0)	20.0
33	121	水輪	I区	159	II	25.61			—	28.0	—	31.0	18.0	20.4
33	122	水輪	I区	147	I	25.76			4.0	28.6	7.0	34.8	24.0	22.5
33	123	水輪	I区	164	I	25.93			—	26.0	—	30.0	(18.0)	19.0
33	124	水輪	I区	165	I	25.93			—	(38.0)	—	39.0	25.0	27.0
33	125	水輪	I区	169	I	26.24			8.4	26.0	17.0	33.0	20.8	19.8
33	126	水輪	I区	176	II	25.92			—	29.2	—	34.4	26.5	15.6
33	127	水輪	I区	177	II	25.94			—	20.8	—	28.0	—	12.2
33	128	水輪	I区	179	II	26.06			—	21.5	—	25.8	13.2	14.0
33	129	水輪	I区	180	II	26.08			—	(14.2)	—	23.2	18.0	15.3
33	130	水輪	I区	186	III	26.38			—	25.6	—	27.5	17.0	14.9
33	131	水輪	I区	196	II	25.67			—	21.0	—	25.5	19.5	12.0
33	132	水輪	I区	197	II	25.46	I	火葬骨、当初位置、地輪145とセット	11.8	(36.0)	17.0	44.0	33.5	26.0
33	133	水輪	I区	213	I	25.62		地輪158とセット	—	23.0	—	29.0	(20.2)	16.0
33	134	水輪	I区	225	表採	—			12.0	(33.0)	21.0	42.0	30.0	27.0
33	135	水輪	I区	231	流路	—			1.5	25.9	21.0	31.6	(24.4)	18.8
33	136	水輪	I区	226	流路	—			5.0	19.0	14.0	30.0	19.2	20.0

図版番号	掲載番号	種類	調査区	取上げ番号	出土層	標高	時期	備 考	x	D
27	2	地輪	I区	193	III	25.32	I	紀年銘「元中九年」	40.0	32.0
28	11	地輪	I区	170	I	26.08	II	空風8、火9、水10、地11セット	(34.0)	24.5
34	137	地輪	I区	18	III	24.90	I	根石有り、再配置	50.0	43.5
34	138	地輪	I区	19	III	24.91	I	大型、根石有り、再配置	54.0	43.0
34	139	地輪	I区	20	III	24.92	I	根石有り、再配置	52.5	44.0
34	140	地輪	I区	23	III	24.95	I	大型、根石有り、再配置	57.0	47.5
34	141	地輪	I区	25	III	25.00	I	石敷き	42.0	37.5
34	142	地輪	I区	29	III	25.03	I	石敷き	40.0	32.4
34	143	地輪	I区	30	III	25.00	I	石敷き	39.0	29.6
34	144	地輪	I区	35	III	—	I		40.0	35.0
34	145	地輪	I区	36	III	25.10	I	石敷き、当初位置、水輪132とセット	42.0	32.4
34	146	地輪	I区	38	III	25.04	I	石敷き	42.5	37.0
35	147	地輪	I区	43	II	25.38	II	当初の位置	(29.0)	12.0
35	148	地輪	I区	55	II	25.43	II	当初の位置	31.0	17.2
35	149	地輪	I区	59	III	25.30	I	石組	36.5	26.6
35	150	地輪	I区	82	II	25.47	II		(18.5)	12.5
35	151	地輪	I区	89	III	25.33	I	台形、石組	34.0	26.0
35	152	地輪	I区	97	II	25.55	II	地下遺構無し、当初の位置	24.0	9.0
35	153	地輪	I区	102	II	25.72	II	地下遺構無し、当初の位置	(28.0)	17.8
35	154	地輪	I区	103	II	25.70	II	地下遺構無し、当初の位置	(28.5)	22.5
35	155	地輪	I区	104	II	25.79	II	地下遺構無し、当初の位置	(29.0)	13.5
35	156	地輪	I区	107	II	25.67	II	地下遺構無し、当初の位置	(29.5)	17.0
35	157	地輪	I区	109	II	25.82	II	地下遺構無し、当初の位置	(27.5)	13.5
35	158	地輪	I区	110	II	25.82	II	地下遺無し、当初位置、水輪133セット	29.8	12.5
35	159	地輪	I区	124	II	25.89	II	地下遺構無し、当初の位置	(29.0)	14.0
35	160	地輪	I区	125	II	25.73	II	石敷き、当初の位置	(25.0)	15.0
35	161	地輪	I区	126	II	25.85	II	地下遺構無し、当初の位置	(34.0)	16.0
35	162	地輪	I区	132	II	25.83	II	地下遺構無し、当初の位置	29.0	17.0
35	163	地輪	I区	136	I	25.67	II	台形、地下遺構無し、当初の位置	34.0	20.5
35	164	地輪	I区	148	II	25.76	II	地下遺構無し、当初の位置	(36.5)	22.5
35	165	地輪	I区	181	II	26.12	II		(26.5)	15.0
35	166	地輪	I区	188	II	—	II		(27.0)	11.5
35	167	地輪	I区	191	I	26.71	II		(32.0)	16.0
35	168	地輪	I区	233	流路	—			27.0	17.5
35	169	地輪	I区	227	表探	—			31.8	27.0
36	170	地輪	I区	67	III	24.97	I	大型、梵字有り	57.6	48.5
36	171	地輪	I区	68	III	24.94	I	大型、梵字有り	60.9	48.8

図版番号	掲載番号	種類	調査区	遺構	取上げ番号	標高	時期	備 考	a	b	c	d	A
73	375	空風輪	II C	一括					11.2	3.0	5.9	—	(19.6)
73	376	空風輪	II C	SE02	Na.7				10.5	0.8	5.4	(2.1)	(18.8)
73	377	空風輪	II C	SE02	砕石中 No.10			凝灰岩	15.4	0.8	9.0	4.4	29.4
73	378	空風輪	II C	SE02					18.5	1.5	10.2	4.3	34.4
107	449	空風輪	II h	SE03	Na.14				8.3	2.9	7.8	3.4	22.0
107	450	空風輪	II h	SE03	Na.17			凝灰岩	11.3	2.3	6.8	(2.1)	(22.7)
107	451	空風輪	II h	SE03	Na.18				20.9	0.7	9.5	7.6	38.7

図版番号	掲載番号	種類	調査区	遺構	取上げ番号	標高	時期	備考	h	i	j	k	l	o	p	q	m	n	r	B
73	379	火輪	II C						4.3	4.3	1.0	3.1	1.4	—	—	—	11.0	7.9	2.5	9.6
107	452	火輪	II h	SE03	No.16				12.1	4.5	3.5	3.9	4.0	15.8	15.3	15.3	12.8	11.6	2.1	20.1

図版番号	掲載番号	種類	調査区	遺構	取上げ番号	標高	時期	備考	C	t	v	w
107	453	水輪	II h	SE03				凝灰岩	21.5	26.3	32.4	25.2

図版番号	掲載番号	種類	調査区	遺構	取上げ番号	標高	時期	備考
107	454	宝篋印塔	II h	SE03				
107	454	宝篋印塔	II h	SE03				
107	456	宝篋印塔	II h	SE03	No.15			

第7表 一字一石観察表

図版番号	掲載番号	調査区	縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
37	172	I	4.5	3.9	0.8	18.0	「阿」
37	173	I	3.6	2.8	1.2	17.8	「阿」
37	174	I	4.0	3.7	1.1	27.0	「西」
37	175	I	4.7	4.2	1.5	44.1	「陀」
37	176	I	5.5	3.4	1.3	39.6	「陀」
37	177	I	5.5	3.2	1.4	38.3	「？」
37	178	I	4.9	3.8	1.7	45.2	「佛」
37	179	I	4.4	4.1	1.2	33.7	「佛」
37	180	I	5.6	3.6	1.4	39.5	「佛」
37	181	I	3.9	3.3	1.1	19.3	「？」
37	182	I	4.0	3.9	1.5	35.8	「大」
37	183	I	3.0	2.9	1.3	16.2	「十」

第8表 土錘観察表

図版番号	掲載番号	調査区	注記	長さ(cm)	最大径(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	色調	調整
89	405	II f	4層一括	(4.6)	1.1	0.3	4.6	にぶい橙7.5YR7/4	ナデ
89	406	II f	4層一括	(4.2)	1.1	0.4	3.4	橙5YR6/6	ナデ
89	407	II f	4層一括	(4.6)	1.1	0.3	4.2	にぶい橙7.5YR7/4	ナデ

第9表 石器・石製品観察表

図版番号	掲載番号	調査区	遺構番号	種別	器種	長径(cm)	短径(cm)	厚さ(cm)
108	457	II h	SE03	石器	磨石	13.8	11.4	3.9
108	458	II h	SE03	石器	台石か石皿?	(14.8)	(11.6)	(9.1)
108	459	II h	SE03	石製品	茶臼	(22.0)	(15.5)	(12.7)

第10表 土器観察表

図版 番号	掲載 番号	調査区	遺構 番号	注記	時代	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整(内)	調整(外)
38	185	I	SX02			土師質土器	皿	口～底	(9.1)	6.9	1.6	手びねり	手びねり
38	186	I	SX04			土師質土器	皿	口～底	(6.4)	7.0	1.7	手びねり	手びねり
38	187	I	SX04			瓦質土器	鉢(こね鉢?)	口～底	(26.2)	(11.0)	11.6	横方向のハケ目	縦方向のハケ目後ナデ
38	188	I	SK02		古代	須恵器	壺	肩～胴			(8.0)	回転横ナデ・指頭圧痕	回転横ナデ・ヘラケズリ後回転ナデ
39	191	I	B13 No.4		古代	須恵器	蓋	口～肩	(12.4)		(1.4)	回転横ナデ	回転横ナデ・回転ヘラケズリ後回転ナデ
39	192	I	B14 No.2			須恵器	鉄鉢形鉢	口～底	(19.3)		10.1	回転横ナデ・縦方向のナデ	回転横ナデ
39	193	I	J8			須恵質土器	甕	胴			(6.8)	斜め方向のハケ目	格子目叩き・横ナデ
39	194	I	III層一括			須恵質土器	擂鉢	口			(3.5)	横ナデ・カキ目	横ナデ
40	195	I	III層			土師質土器	皿	口～底	7.1	4.8	2.3	手びねり	手びねり
40	196	I	H7			土師質土器	皿	口～底	7.3	4.4	2.1	手びねり	手びねり
40	197	I	III層一括			土師質土器	皿	口～底	6.5	4.6	2.2	手びねり	手びねり
40	198	I	B13一括			土師器	坏	口～底	7.4	5.4	2.2	ナデ	ナデ
40	199	I	SG36			土師質土器	皿	口～底	(6.6)	5.4	1.8	手びねり	手びねり
40	200	I	SG38			土師質土器	坏	口～底	(6.7)	4.4	2.3	手びねり	手びねり
40	201	I	J8			土師質土器	皿	口～底	(7.2)	4.0	2.2	摩耗の為不明	摩耗の為不明
40	202	I	F12II層			土師質土器	皿	口～底	(7.5)	5.0	2.3	手びねり	手びねり
40	203	I	III層一括			土師質土器	皿	口～底	(7.2)	5.2	2.1	手びねり	手びねり
40	204	I	III層一括			土師質土器	皿	口～底	(7.0)	(5.5)	2.1	手びねり	手びねり
40	205	I	SG36			土師質土器	皿	口～底	(8.3)	5.4	1.8	手びねり	手びねり
40	206	I	J8			土師質土器	皿	口～底	(7.6)	6.1	1.9	摩耗の為不明	摩耗の為不明
40	207	I	III層一括			土師器	皿	口～底	(8.2)	(6.4)	1.8	ナデ	ナデ
40	208	I	III層一括			土師質土器	皿	口～底	(7.4)	(6.0)	2.1	手びねり	手びねり
40	209	I	SG36			土師質土器	皿	口～底	(8.5)	7.0	2.0	手びねり	手びねり
40	210	I	III層一括			土師質土器	皿	口～底	(7.7)	6.1	1.7	手びねり	手びねり
40	211	I	J8			土師質土器	皿	口～底	(7.7)	(6.0)	2.1	手びねり	手びねり
40	212	I	III層一括			土師質土器	皿	口～底	(7.8)	4.4	2.1	手びねり	手びねり
40	213	I	III層一括			土師器	坏	口～底	(8.0)	(5.0)	2.4	摩耗の為不明	摩耗の為不明
40	214	I	J7			土師質土器	皿	口～底	(7.6)	(4.8)	2.1	手びねり	手びねり
40	215	I	III層一括			土師質土器	皿	口～底	(7.2)	4.5	2.3	手びねり	手びねり
40	216	I	J8			土師質土器	皿	口～底	(7.9)	5.5	2.3	摩耗の為不明	摩耗の為不明
40	217	I	K7			土師質土器	坏	口～底	(10.4)	7.3	3.0	摩耗の為不明	摩耗の為不明
40	218	I	J8			土師質土器	坏	口～底	(12.0)	7.1	(3.2)	摩耗の為不明	摩耗の為不明
40	219	I	J8III層一括			土師質土器	皿	口～底	13.1	7.7	3.7	ナデ	ナデ
40	220	I	III層一括			土師器	坏	口～底	(11.8)	7.5	3.1	手びねり	手びねり
40	221	I	J7			土師質土器	皿	口～底	(11.7)	(8.3)	3.0	手びねり	手びねり
40	222	I	J8II層			土師質土器	坏	口～底	(11.4)	(7.6)	3.0	手びねり	手びねり
40	223	I	J9			土師質土器	皿	口～底	(10.6)	(8.0)	2.7	手びねり	手びねり
46	228	II a	SK01	一括	古墳	土師器	甕	胴～底			(15.9)	縦方向ヘラケズリ、ナデ	ナデ
46	229	II a	SK03	一括	古代	須恵器	高台付坏	胴～底		(8.0)	(3.6)	回転横ナデ	回転ヘラケズリ、回転横ナデ
46	230	II a	SK03	一括	古代	須恵器	大甕	胴			(8.3)	当て具痕	平行叩き
46	231	II a	SD01	一括	中世	土師器	坏	底		(7.5)	(1.7)		
46	232	II a	SD01	一括	中世	瓦質土器	羽釜	口		[23.0]	(7.4)	横ナデ	横ナデ、縦方向のハケ目後ナデ
46	233	II a	SD02	一括	中世	瓦質土器	茶釜	肩			(6.0)	ナデ	ミガキ
46	234	II a	K38pit5		古墳	須恵器	器台	脚			(7.3)	横ナデ	櫛描き波状文、沈線
46	235	II a	K39pit14No.6		中世	土師器	坏	口～底	(10.3)	5.5	3.8	回転横ナデ	回転横ナデ
46	236	II a	K39pit14		中世	土師器	坏	口～底	(12.1)	(7.2)	3.6	回転横ナデ	回転横ナデ
46	237	II a	K39pit14		中世	土師器	坏	口～底	13.6	8.0	4.4	回転横ナデ	回転横ナデ
47	240	II a	K39一括		古代	土師器	碗	胴～底		5.4	(1.9)	回転横ナデ	回転横ナデ

調整 (内底)	調整 (外底)	胎 土	色 調 (内)	色 調 (外)	備 考	掲載 番号
手びねり	糸切り後ナデ	角閃石・輝石・赤色酸化粒・細砂粒を含む	にぶい橙5YR7/4	にぶい橙5YR7/4	煤付着(口縁)	185
手びねり	糸切り後ナデ	長石・輝石・赤色酸化粒・細砂粒を含む	橙5YR7/6	橙5YR7/6		186
使用による摩滅	板目圧痕	石英・長石・輝石・砂粒をやや多く含む	灰白7.5Y8/1	灰白7.5Y7/1	煤付着(外)	187
		石英・長石・輝石・砂粒をやや多く含む	青灰5PB6/1	灰白10Y7/1		188
		長石・輝石・細砂粒を少量含む	青灰5B6/1	灰10Y5/1	つまみありかも	191
ナデ	横ナデ	胎土荒く砂粒を多く含む	赤褐10R4/3	灰黄褐10YR5/2	重ね焼き痕	192
		角閃石・長石・赤色酸化粒・細砂粒を少量含む	にぶい褐7.5YR5/3	灰黄褐10YR6/3		193
		長石・細砂粒をわずかに含む	オリープ灰2.5GY5/1	灰10Y5/1		194
手びねり	回転糸切り	長石・輝石・赤色酸化粒・金雲母・細砂粒をやや多く含む	橙5YR6/6	橙5YR6/6	煤付着(口縁)	195
手びねり	糸切り後ナデ	角閃石・長石・細砂粒を含む	橙7.5YR7/6	橙7.5YR7/6	煤付着(口縁)	196
手びねり	回転糸切り	角閃石・石英・長石・赤色酸化粒・金雲母・砂粒をやや多く含む	橙5YR6/6	橙5YR6/6		197
ナデ	摩耗の為不明	長石・輝石・赤色酸化粒・砂粒を少量含む	橙7.5YR7/6	橙7.5YR7/6		198
手びねり	糸切り後ナデ	輝石・細砂粒を含む	橙5YR7/6	橙5YR7/6		199
手びねり	摩耗の為不明	輝石・赤色酸化粒・細砂粒を含む	橙7.5YR7/6	橙7.5YR7/6		200
摩耗の為不明	摩耗の為不明	輝石・赤色酸化粒・細砂粒を少量含む	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR6/3		201
手びねり	糸切り後ナデ	石英・輝石・赤色酸化粒・細砂粒をわずかに含む	橙5YR7/6	橙7.5YR7/6		202
手びねり	糸切り後ナデ	輝石・赤色酸化粒・細砂粒を含む	にぶい橙5YR7/4	にぶい橙5YR7/4		203
手びねり		輝石・細砂粒を含む	橙5YR7/6	橙5YR7/6		204
手びねり	糸切り後ナデ	輝石・金雲母・細砂粒を含む	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4	煤付着(口縁)	205
摩耗の為不明	糸切り	輝石・赤色酸化粒・細砂粒を少量含む	橙5YR6/6	橙7.5YR7/6		206
	摩耗の為不明	長石・輝石・雲母・砂粒を少量含む	橙7.5YR6/6	橙7.5YR6/6		207
手びねり		輝石・金雲母・細砂粒を含む	橙5YR7/6	橙5YR7/6		208
手びねり	ナデ	輝石・細砂粒を含む	橙7.5YR7/6	橙7.5YR7/6		209
手びねり	回転糸切り	輝石・赤色酸化粒・細砂粒を少量含む	浅黄橙7.5YR8/3	にぶい橙7.5YR7/4		210
手びねり	ナデ	長石・金雲母・赤色酸化粒・細砂粒をわずかに含む	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい橙7.5YR6/4		211
手びねり	摩耗の為不明	輝石・金雲母・細砂粒を含む	橙5YR7/6	橙5YR7/6		212
摩耗の為不明	摩耗の為不明	長石・輝石・赤色酸化粒・細砂粒をわずかに含む	橙5YR6/6	橙2.5YR6/6		213
手びねり	回転糸切り後ナデ	輝石・金雲母・赤色酸化粒・細砂粒を含む	橙5YR6/6	橙5YR6/6		214
手びねり	糸切り後ナデ	長石・輝石・細砂粒をやや多く含む	にぶい橙5YR6/4	にぶい橙7.5YR6/4	煤付着(口縁)	215
摩耗の為不明	糸切り後ナデ	長石・輝石・赤色酸化粒・細砂粒を少量含む	橙5YR7/6	橙5YR6/8		216
摩耗の為不明	摩耗の為不明	輝石・赤色酸化粒・砂粒を含む	橙5YR6/8	橙5YR6/8		217
摩耗の為不明	摩耗の為不明	長石・輝石・赤色酸化粒・細砂粒をわずかに含む	橙5YR6/8	橙5YR6/8		218
ナデ	糸切り	長石・輝石・雲母・細砂粒をわずかに含む	橙7.5YR7/6	橙7.5YR7/6		219
手びねり	摩耗の為不明	石英・長石・輝石・赤色酸化粒・金雲母・砂粒をやや多く含む	橙5YR6/6	にぶい橙7.5YR6/4		220
手びねり	回転糸切り	角閃石・長石・赤色酸化粒・金雲母・細砂粒をやや多く含む	にぶい橙7.5YR6/6	にぶい橙7.5YR5/6		221
手びねり	回転糸切り後ナデ	輝石・金雲母・細砂粒を含む	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4		222
手びねり	回転糸切り後ナデ	角閃石・輝石・金雲母・細砂粒を含む	橙5YR6/6	橙5YR6/6		223
縦方向ヘラケズリ、 ナデ	ハケ目	角閃石・石英・長石・輝石・砂粒をやや多く含む	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR5/3		228
回転横ナデ	ヘラケズリ、貼付 高台	長石・輝石・細砂粒をわずかに含む	灰5Y6/1	灰5Y6/1		229
		長石・細砂粒を多く含む	灰5Y6/1	灰5Y5/1		230
	回転糸切り	石英・輝石・赤色酸化粒・細砂粒を含む	橙5YR6/6	橙5YR7/6		231
		角閃石・長石・輝石・砂粒を多く含む	灰5Y6/1	灰5Y5/1		232
		石英・輝石・赤色酸化粒・細砂粒を含む	にぶい褐7.5YR5/3	褐灰10YR4/1	印花文	233
		長石・輝石・赤色酸化粒を少量含む	灰N6/0	灰N6/0	透かし有	234
ナデ	回転糸切り	赤色酸化粒・細砂粒をわずかに含む	橙5YR7/6	黄橙7.5YR8/8		235
回転横ナデ	回転糸切り後ナデ	石英・長石・輝石・赤色酸化粒・細砂粒をわずかに含む	橙2.5YR6/6	橙5YR7/6		236
回転横ナデ	回転糸切り後ナデ	長石・輝石・細砂粒を少量含む	橙5YR7/6	にぶい橙7.5YR7/4		237
回転横ナデ	回転ヘラケズリ	石英・輝石・金雲母・細砂粒を含む	橙2.5YR7/8	橙2.5YR7/8	赤焼須恵器	240

図版 番号	掲載 番号	調査区	遺構 番号	注記	時代	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整(内)	調整(外)
47	241	IIa		K38III層一括	古代	土師器	椀	胴～底		6.6	(3.0)	横ナデ	回転横ナデ
47	242	IIa		K38III層一括	古代	土師器	甕	口			(8.8)	縦方向のヘラケズリ 後横・斜めのナデ	不明
47	243	IIa		K38III層一括	古代	土師器	甕	口	(23.6)		(6.3)	縦方向のヘラケズリ 後横ナデ	ハケ目後横・縦のナ デ
47	244	IIa		K38III層一括	古代	須恵器	蓋	つまみ～ 口	(8.2)		1.7	回転横ナデ	回転横ナデ
47	245	IIa		K38III層一括	古代	須恵器	蓋	つまみ～ 口	(15.0)		2.8	回転横ナデ後不定方 向ナデ	回転横ナデ後不定方 向ナデ
47	246	IIa		K39一括	古代	須恵器	坏	底		6.8	(1.8)	回転横ナデ	回転横ナデ
47	247	IIa		K38III層一括	古代	須恵器	高台付坏	口～底	(11.1)	(7.0)	4.0	回転横ナデ	回転横ナデ
47	248	IIa		石組攪乱No.1	古代	須恵器	高台付坏	胴～底		(7.5)	(4.5)	回転横ナデ	回転横ナデ
47	249	IIa		K39一括	古代	須恵器	高台付碗	口～底	(14.3)	(7.7)	5.3	回転横ナデ	回転横ナデ
47	250	IIa		III層一括	古代	須恵器	壺	肩～胴			(8.5)	回転ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ、 横ナデ
47	251	IIa		III層一括	古代	須恵器	甕	口	[21.4]			同心円文の当具痕、 ナデ、横ナデ	格子叩き、横方向の ハケ目
47	252	IIa		K38III層一括	古代	須恵器	大甕?	胴			(17.0)	同心円文の当具痕後 ナデ	擬格子叩き後ナデ
66	346	IIb	SW01	裏込一括		瓦質土器	柄付小型鍋	口～底	(16.4)	(14.9)	2.5	横ナデ	横ナデ
66	347	IIb	SW01	一括		瓦質土器	柄付小型鍋	口～底	(16.0)	(14.3)	2.4	回転横ナデ	回転ヘラケズリ後ナ デ
66	348	IIb	SW01	裏込一括		瓦質土器	柄付小型鍋	口～底	(15.3)	(13.8)	2.6	横ナデ	横ナデ
66	349	IIb	SW01	一括		瓦質土器	柄付小型鍋?	口～底	(15.2)	(14.0)	2.5	回転横ナデ	回転横ナデ、回転ヘ ラケズリ
66	350	IIb	SW01	裏込一括		瓦質土器	柄付小型鍋	柄					
66	352	IIb	SW01	裏込一括		瓦質土器	火鉢	口			(6.2)	ハケ目後ナデ	ナデ、花文スタンプ
66	353	IIb	SW01	一括		瓦質土器	火鉢	口			(5.3)	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ
66	354	IIb	SW01	裏込一括		瓦質土器	播鉢	口～胴			(7.5)	ナデ、櫛描き(8条)	ナデ
66	355	IIb	SW01	裏込一括		瓦質土器	火鉢	脚			(7.4)		ナデ
66	356	IIb	SW01	一括		瓦質土器	焜炉	口～胴	(17.6)		(12.2)	回転ヘラケズリ後ナ デ	回転ヘラケズリ後ナ デ
67	357	IIb	SW01	一括		瓦質土器	火鉢	口	(36.4)		(6.2)	回転横ナデ	回転横ナデ
67	358	IIb	SW01	裏込一括		瓦質土器	火鉢	口	26.6		(9.9)	横方向のナデ、ヘラ ケズリ	横方向のナデ
67	359	IIb	SW01	裏込一括		瓦質土器	火鉢	口			(4.5)	横ナデ	ヘラケズリ、横ナデ、 スタンプ
67	360	IIb	SW01	裏込一括		瓦質土器	播鉢	胴～底	[14.6]	(7.4)	(7.4)	ナデ、櫛描き(6条)	叩き痕、回転ヘラケ ズリ、指押さえ
68	372	IIb		一括		土師器	脚付盤?	脚部			(5.1)	ナデ	横ナデ、ケズリ
89	394	IIf	SK-10	一括	中世	瓦質土器	火鉢	口～胴			(11.1)	不明	ナデ
89	398	IIf		④層一括	中世?	土師質土器	皿	口～底	(7.3)	(6.2)	1.8	不明	不明
89	399	IIf		一括	中世	土師質土器	皿	口～底	(8.0)	(5.8)	1.6	摩耗の為不明	摩耗の為不明
89	400	IIf		一括	中世	土師質土器	皿	口～底	(9.4)	(7.9)	1.7	摩耗の為不明	横方向のナデ
89	401	IIf		K-30一括	中世	土師質土器	坏	口～底	(12.6)	(6.4)	3.8	ナデ	ナデ
89	403	IIf		K-31一括	中世	須恵質土器	播鉢	口～胴			(10.1)	ナデ、櫛描き(6条)	ナデ、指ナデ、ケズ リ、指頭圧痕
92	408	IIg		2上層一括	古代?	須恵器	鉢?	胴～底		(8.0)	(5.1)	回転横ナデ	ナデ
101	413	IIh	ST06	No.6		土師質土器	坏	口～底	(8.7)	(6.6)	3.0	摩耗の為不明	ナデ
101	414	IIh	ST06	No.51		土師質土器	坏	口～底	(11.1)	5.8	3.6	摩耗の為不明	摩耗のため不明
101	416	IIh	ST07	No.5		土師質土器	坏	口～底	6.8	3.4	2.8	摩耗の為不明	摩耗のため不明
101	417	IIh	ST07	No.3		土師質土器	坏	口～底	(10.7)	6.0	3.7	手練り、回転横ナデ、 ナデ	手練り、回転横ナデ、 ナデ
102	418	IIh	SX04	No.5	古代	須恵器	蓋	天井～口	(14.1)		(2.1)	摩耗の為不明	摩耗、ヘラケズリ
102	419	IIh	SX04	No.8	古代	土師器	坏	口～底	(13.6)	(6.5)	4.2	摩耗の為不明	摩耗の為不明
102	420	IIh	SX04	No.6 No.1	古代	土師器	皿	口～底	(15.1)		(2.3)	ナデ	ナデ
103	425	IIh	SE03	上層南西		須恵質土器	甕	口～頸	[26.6]		(5.4)	回転横ナデ	回転横ナデ、格子叩 き
103	429	IIh	SE03	No.13	15C後 16C前	瓦質土器	風炉	口	(36.2)		(6.3)	ハケ磨き、ナデ、摩 耗	スタンプ、ヘラ磨き
103	429	IIh	SE03	中層		瓦質土器	風炉	胴			(12.0)	ヘラケズリ、ハケ目後ナ デ、回転ヘラケズリ後ナ デ	ヘラ磨き、貼り付け
103	430	IIh	SE03	最下層	中世	須恵質土器	甕	口～胴	(19.7)		(9.5)	同心円文の当て具痕、 ナデ	平行叩き、横ナデ
103	431	IIh	SE03	上層南西	古代	須恵器	皿	口～底	(14.0)	(11.3)	(2.2)	ナデ	ナデ
105	432	IIh	SE03	南東中層		瓦質土器	鉢	底		(12.4)	(4.3)	摩耗の為不明	叩き痕
105	433	IIh	SE03	上層①		瓦質土器	羽釜?	口～胴	(25.6)		(10.9)	ナデ	ナデ

調整 (内底)	調整 (外底)	胎 土	色 調 (内)	色 調 (外)	備 考	掲載 番号
横ナデ	回転ヘラケズリ	長石・輝石・細砂粒を含む	橙7.5YR8/6	橙2.5YR7/8		241
		石英・長石・輝石・砂粒を多く含む	橙5YR6/6	橙5YR6/8		242
		角閃石・長石・砂粒を含む	橙7.5YR7/6	にぶい橙7.5YR7/4		243
		細砂粒を多く含む	灰5Y5/1	褐灰7.5YR5/1		244
		細砂粒を多く含む	灰N5/0	灰N5/0		245
回転横ナデ	回転ヘラおこし後ナデ	長石・輝石・細砂粒を少量含む	灰白10Y7/1	灰白10Y7/1		246
回転横ナデ後不定方向のナデ	回転ヘラおこし、貼付高台	長石・輝石少量含む	灰10YR5/1	灰10YR5/1		247
回転横ナデ、ナデ	回転ヘラケズリ、貼付高台	輝石・細砂粒をやや多く含む	灰N6/0	灰N6/0		248
ナデ	ヘラおこし後ナデ、貼付高台	輝石・細砂粒をやや多く含む	灰白N7/0	灰白N7/0		249
		輝石・赤色酸化粒・細砂粒を含む	灰白5Y7/1	灰白5Y7/1		250
		細砂粒を含む	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4	赤焼	251
		輝石・細砂粒を含む	灰N6/0	灰N6/0		252
横ナデ		長石・砂粒わずかに含む	灰黄褐10YR6/2	灰黄褐10YR6/2	煤付着(外)	346
回転横ナデ	布の当て具?	長石・輝石少量含む	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR7/3	煤付着(外)	347
回転横ナデ	布の当て具痕	長石・砂粒わずかに含む	にぶい橙7.5YR7/4	灰5Y4/1	煤付着(外)	348
回転横ナデ	布の当て具?	輝石・金雲母・赤色酸化粒・細砂粒を少量含む	にぶい橙5YR6/4	灰褐7.5YR6/2		349
		輝石含む	浅黄橙10YR8/3	浅黄橙10YR8/3	煤付着	350
		石英・雲母含む	橙5YR7/6	橙5YR7/6		352
		角閃石・長石・輝石少量含む	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR7/3	煤付着(内)	353
		長石・輝石・細砂粒を含む	褐灰10YR6/1	黄灰2.5Y6/1		354
		角閃石・長石・輝石・細砂粒を含む		灰5YR4/1		355
		角閃石・石英・輝石・細砂粒を含む	浅黄2.5YR7/3	浅黄2.5YR7/3	煤付着(口縁)	356
		角閃石・長石・砂粒を多く含む	灰黄2.5YR7/2	オリープ黒5Y3/1		357
		角閃石・石英・長石・砂粒を含む	にぶい黄褐10YR5/3	浅黄2.5Y7/3	補修孔	358
		角閃石・石英・長石・砂粒をわずかに含む	にぶい黄褐10YR7/4	にぶい黄褐10YR7/4		359
		角閃石・赤色酸化粒・細砂粒少量含む	にぶい橙5YR7/3	にぶい橙5YR7/3		360
横ナデ	貼付高台	長石・輝石・赤色酸化粒わずかに含む	橙5YR7/6	橙5YR7/6		372
		角閃石・長石少量含む	浅黄2.5Y7/3	浅黄2.5Y7/3	梅花文、突帯有り	394
不明	不明	長石・輝石・少量含む	橙7.5YR7/6	橙7.5YR7/6		398
摩耗の為不明	不明	長石・雲母・赤色酸化粒少量含む	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4		399
摩耗の為不明	糸切り	長石・輝石を多量に含む	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4		400
ナデ	不明	長石・小石をわずかに含む	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4		401
		長石・輝石・角閃石少量含む	灰5Y6/1	灰5Y6/1		403
指押さえ	回転ヘラケズリ、ナデ	細砂粒まれに含む	にぶい橙5YR6/4	にぶい橙7.5YR6/4		408
摩耗の為不明	糸切り後ナデ	細砂粒を含む	浅黄橙7.5YR8/6	浅黄橙7.5YR8/6		413
摩耗の為不明	回転糸切り	輝石・細砂粒を含む	にぶい橙10YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4		414
摩耗の為不明	摩耗の為不明	輝石・赤色酸化粒・細砂粒を含む	橙2.5YR7/6	橙2.5YR6/8		416
手びねり、回転横ナデ	摩耗の為不明	輝石・細砂粒を含む	橙7.5YR7/6	橙7.5YR7/6		417
		角閃石・長石・輝石・細砂粒を少量含む	灰白5Y8/1	灰白5Y8/1		418
摩耗のため不明	摩耗の為不明	長石・輝石・砂粒をわずかに含む	橙2.5YR6/8	明赤褐2.5YR5/6		419
ナデ	ナデ	長石・赤色酸化粒・砂粒をやや多く含む	橙7.5YR6/6	橙5YR6/6		420
		角閃石・長石・輝石を少量含む	灰N6/0	灰N6/0		425
		石英・長石・輝石・赤色酸化粒を含む	灰N9/0	暗灰N3/0	図面上接合	429
		輝石・細砂粒を含む	暗灰N3/0	灰N5/0	図面上接合	429
		角閃石・長石・輝石・細砂粒を含む	灰5Y6/1	灰白N7/0		430
横ナデ	摩耗の為不明	長石・輝石・細砂粒を少量含む	灰白5Y7/1	灰白5Y7/1		431
		細砂粒含む	灰黄2.5Y7/2	灰黄2.5Y7/2		432
		石英・細砂粒含む	灰黄2.5Y6/2	にぶい黄褐10YR4/3	煤付着(外)	433

図版 番号	掲載 番号	調査区	遺構 番号	注記	時代	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整(内)	調整(外)
105	434	IIh	SE03	井戸内		土師質土器	皿	口～底	(7.2)	(4.6)	1.8	ナデ	横ナデ
105	435	IIh	SE03	井戸内		土師質土器	皿	胴～底		(4.9)	(1.0)	ナデ	ナデ
105	436	IIh	SE03	井戸内		瓦質土器	鉢	口～胴	(14.2)		(3.8)	横ナデ	横ナデ
105	437	IIh	SE03	北側		瓦質土器	火鉢	口～胴			(9.9)	横ナデ	横ナデ、突帯、ス タンブ、沈線
105	438	IIh	SE03	南東中層		瓦質土器	火鉢	口～胴			(6.2)	ナデ	ナデ、突帯、刺突文
105	439	IIh	SE03	II層		瓦質土器	火鉢	胴～脚			(15.8)	摩耗の為不明	摩耗の為不明、突帯
105	440	IIh	SE03	東西ベルト、 東西中層		瓦質土器	火鉢	胴～脚		(29.2)	(8.1)	摩耗の為不明	摩耗の為不明、突帯
106	441	IIh	SE03			土師質土器	皿	口～底	(8.6)	6.0	1.7	ナデ	ナデ
106	442	IIh	SE03			土師質土器	皿	口～底	7.2	5.4	1.6	ナデ	横ナデ
106	443	IIh	SE03			土師質土器	皿	口～底	7.0	5.7	1.5	ナデ	横ナデ
106	444	IIh	SE03			土師質土器	皿	口～底	(12.4)	(9.4)	2.7	斜め方向ヘラケズリ	ナデ
106	445	IIh	SE03			土師質土器	皿	胴～底		(9.9)	(2.4)	摩耗の為不明	横ナデ
106	446	IIh	SE03	No31		土師質土器	坏	胴～底		(9.0)	(2.7)	摩耗の為不明	摩耗の為不明
111	465	IIh			古代	須恵器	蓋	天井～口	(16.7)		(2.7)	回転横ナデ	回転横ナデ
111	466	IIh		北側	古代	須恵器	蓋	天井～口	(12.8)		(2.8)	回転ヘラケズリ後、 ナデ	回転ヘラケズリ
111	467	IIh		L-26北側下 層	古代	須恵器	蓋	天井～口	(14.6)		(2.1)	回転ナデ	回転ヘラケズリ後、 回転横ナデ
111	468	IIh		南側上層	古代	須恵器	蓋	つまみ～ 口	14.7		1.6	回転横ナデ	粘土紐の巻き上げ痕、 擬宝珠つまみ、横ナデ
111	469	IIh		L-26灰褐色層	古代	須恵器	蓋	天井～口	(14.2)		(2.1)	転用硯使用の為、摩耗、 横ナデ	粘土紐の巻き上げ痕、 ナデ、横ナデ
111	470	IIh		東側	古代	須恵器	椀	口～底	(13.8)	(7.6)	(5.4)	摩耗の為不明	摩耗の為不明
111	471	IIh		南側	古代	須恵器	皿	口～底	(13.0)	11.3	1.9	摩耗の為不明	摩耗の為不明
111	472	IIh		No53	古代	須恵器	皿	口～底	(17.2)	(7.4)	2.7	横ナデ	横ナデ
111	473	IIh			古代	須恵器	鉢	口～底	(16.7)	(1.4)	10.4	回転横ナデ	ヘラケズリ、ナデ、 圧痕
111	474	IIh		南側上層	古代	土師器	坏	口～底		(4.6)	(2.2)	摩耗の為不明	摩耗の為不明
111	475	IIh		南側	古代	土師器	甕	口～胴	(15.6)		(6.9)	ヘラケズリ	不明
111	476	IIh				須恵器	甕	頸～胴			(6.0)	横方向のナデ	横方向のナデ、カキ メ
111	477	IIh		南側		須恵質土器	甕	口～胴	(16.2)		(10.0)	菊花文当て具痕、回 転ナデ	平行叩き、回転ナデ
113	483	IIh		北側、L-26 青灰色層	中世	土師質土器	皿	口～底	7.8	5.7	2.0	回転ナデ	回転ナデ
113	484	IIh		No44	中世	土師質土器	皿	口～底	7.6	5.4	2.1	ナデ	ナデ
113	485	IIh		No46	中世	土師質土器	皿	口～底	8.2	6.6	1.6	ナデ	ナデ
113	486	IIh		K-26暗褐色層	中世	土師質土器	皿	口～底	(7.5)	(5.4)	2.7	摩耗の為不明	摩耗の為不明
113	487	IIh		K-27灰層	中世	土師質土器	皿	胴～底		(4.6)	(1.4)	ナデ	ナデ
113	488	IIh		No49	中世	土師質土器	皿	口～底	8.4	7.2	2.0	横ナデ	横ナデ
113	489	IIh		L-27-1No36	中世	土師質土器	坏	口～底	(11.2)	8.8	1.6	摩耗の為不明	摩耗の為不明
113	490	IIh		K-27暗褐色層	中世	土師質土器	坏	口～底	(12.6)	(8.2)	3.3	不明	不明
113	491	IIh		K-27暗褐色層	中世	土師質土器	坏	口～底		(8.4)	(2.6)	横ナデ	横ナデ
113	492	IIh		K-26暗褐色層	中世	土師質土器	坏	口～底	(12.6)	(9.2)	3.0	ナデ	ナデ
113	493	IIh		K-27暗褐色層 F	中世	土師質土器	坏	口～底	(12.4)	(8.8)	3.5	摩耗の為不明	摩耗の為不明
113	494	IIh		K-27暗褐色層 F	中世	土師質土器	坏	口～底	(11.5)	(7.8)	2.8	摩耗の為不明	摩耗の為不明
113	495	IIh		K-27暗褐色層 F	中世	土師質土器	坏	胴～底		(7.2)	(2.6)	摩耗の為不明	摩耗の為不明
113	496	IIh		K-27暗褐色層	中世	瓦質土器	火鉢	口			(6.4)	横ナデ	横ナデ、スタンブ
113	497	IIh		No52	15C	瓦質土器	火鉢	口～底			12.0	不明	不明、菊花文スタン ブ
114	498	IIh		No58 K-27 L-26青灰色層		瓦質土器	播鉢	口～底	(39.4)	(14.2)	13.8	ナデ、櫛描き(5条)、 摩耗	ナデ、指押さえ痕
114	499	IIh		K-27黒色層		瓦質土器	播鉢	口～底	(29.8)	(14.2)	13.9	櫛描き(6条位)、摩 耗	摩耗の為不明
119	500	IIi	SX06	No6	中世	須恵質土器	播鉢	口～胴	(21.2)		(10.8)	横、斜め方向ナデ、 櫛描き(6条)	横、斜め方向ナデ
119	501	IIi	SX06	No29	古代	須恵器	甕	頸～胴	(29.6)			当て具痕、横ナデ、 ナデ	器面荒れている
119	502	IIi		M-25 4～5層	古代	須恵器	盤	胴～底		(12.0)	(1.8)	摩耗の為不明	摩耗の為不明
119	503	IIi		M-25 4～5層、 M-26 4～5層	中世	土師質土器	鉢	底			(8.5)	摩耗の為不明	突帯、沈線
119	504	IIi		M-25 4層	中世	瓦質土器	火鉢	胴～底		(28.4)	(9.4)	横ナデ	突帯、ミガキ

調整 (内底)	調整 (外底)	胎 土	色 調 (内)	色 調 (外)	備 考	掲載 番号
ナデ	糸切り	角閃石・長石・輝石・細砂粒を少量含む	にぶい黄橙7.5YR6/4	にぶい黄橙7.5YR6/4		434
ナデ	糸切り	角閃石・長石・輝石・細砂粒を少量含む	にぶい黄橙10YR7/4	にぶい黄橙10YR7/4		435
		角閃石・長石・輝石・細砂粒を少量含む	にぶい黄橙10YR6/3	にぶい黄橙10YR6/3	煤付着(外)	436
		石英・長石・輝石を多量に含む	灰N5/0	灰N5/0		437
		長石・輝石・雲母・角閃石を多量に含む	にぶい橙10YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4		438
摩耗の為不明	摩耗の為不明	長石・輝石・細砂粒を含む	灰5Y5/1	灰白5Y7/1	脚 3ヶ所	439
摩耗の為不明	摩耗の為不明	角閃石・長石・輝石・赤色酸化粒を含む	灰5Y6/0	灰5Y6/0	脚 3ヶ所	440
ナデ	糸切り	輝石・細砂粒を含む	浅黄橙10YR8/3	橙7.5YR7/6		441
ナデ	糸切り	輝石・金雲母少量含む	にぶい黄橙10YR7/3	灰黄2.5Y7/2	煤付着(外)	442
ナデ	糸切り	輝石・金雲母少量含む	灰白2.5Y8/2	浅黄2.5Y7/3		443
斜め方向ヘラケズリ	糸切り	輝石・金雲母・赤色酸化粒・小石少量含む	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR7/3		444
摩耗の為不明	糸切り	輝石・赤色酸化粒・細砂粒をわずかに含む	灰白10YR8/2	灰白10YR8/2		445
摩耗の為不明	糸切り	長石・細砂粒をわずかに含む	橙5YR7/6	にぶい橙7.5YR7/4		446
		長石、砂粒を少量含む	灰N6/0	灰N6/0		465
		輝石・細砂粒を含む	灰N4/0	灰N4/0	焼成時薬灰かかる、自然釉	466
ナデ	ヘラナデ	輝石・細砂粒を含む	灰N6/0	灰N4/0		467
		輝石・細砂粒をわずかに含む	灰N5/0	灰N5/0	転用硯の形跡あり	468
		輝石・細砂粒をわずかに含む	灰N5/0	灰N5/0		469
指頭圧痕	指頭圧痕	長石・輝石・赤色酸化粒少量含む	橙7.5YR6/6	橙7.5YR6/6	赤焼け	470
摩耗の為不明	摩耗の為不明	長石・輝石・赤色酸化粒・細砂粒をやや多く含む	橙2.5YR6/6	橙5YR7/8	赤焼け	471
横ナデ	ナデ	長石・輝石・細砂粒を含む	灰5Y6/1	灰5Y6/1		472
回転横ナデ	回転横ナデ	輝石・赤色酸化粒を少量含む	灰白7.5YR8/1	灰白7.5YR8/1		473
摩耗の為不明	摩耗の為不明	長石・細砂粒を含む	暗褐10YR3/2	褐7.5YR4/4	焼成時薬灰かかる、自然釉	474
		長石・輝石・赤色酸化粒を含む	橙7.5YR6/6	橙7.5YR6/6		475
		輝石・細砂粒を含む	灰N5/0	灰N4/0		476
		輝石・細砂粒を含む	灰N4/0	灰N6/0		477
ナデ	回転糸切り	金雲母・赤色酸化粒・細砂粒を少量含む	にぶい橙7.5YR7/3	にぶい黄橙10YR7/2		483
	糸切り	長石・輝石・砂粒を含む	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4	煤付着(口縁)	484
ナデ	回転糸切り	輝石・細砂粒を含む	灰白10YR8/2	灰白10YR8/2		485
摩耗の為不明	摩耗の為不明	長石・輝石・雲母をわずかに含む	橙5YR7/6	橙5YR7/6		486
	糸切り	長石・輝石・金雲母・砂粒を含む	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR7/3	煤付着(内外)	487
横ナデ	不明	長石・赤色酸化粒・細砂粒を含む	橙7.5YR6/6	橙7.5YR6/6		488
	糸切り	長石・輝石・砂粒を含む	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4	炭化物付着(内外)	489
不明	不明	長石・輝石・細砂粒を含む	橙5YR7/6	橙5YR7/6		490
横ナデ	回転糸切り	輝石・赤色酸化粒・細砂粒を含む	橙7.5YR7/6	橙7.5YR7/6		491
ナデ	糸切り	長石・輝石・雲母・赤色酸化粒を多量に含む	にぶい黄橙10YR7/4	にぶい黄橙10YR7/4		492
摩耗の為不明	摩耗の為不明	長石・輝石わずかに含む	浅黄橙10YR8/4	浅黄橙10YR8/4		493
摩耗の為不明	糸切り	長石・輝石・金雲母・赤色酸化粒を多量に含む	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙10YR7/3		494
指頭圧痕、摩耗のため不明	摩耗の為不明	長石・輝石・金雲母を少量含む	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4		495
		長石・黒雲母・細砂粒を含む	浅黄橙7.5YR8/6	浅黄橙7.5YR8/6		496
不明	不明	角閃石・長石・輝石・細砂粒を含む	灰白2.5Y8/2	灰白2.5Y8/2		497
櫛描き	板状厚痕	長石・砂粒を多く含む	にぶい橙7.5YR7/4	褐灰10YR5/1		498
摩耗の為不明	摩耗の為不明	長石・輝石・細砂粒を含む	にぶい黄橙10YR7/2	にぶい黄橙10YR7/2		499
		角閃石、長石、輝石、細砂粒を少量含む	灰白5Y7/1	灰白5Y6/1		500
		輝石、細砂粒を多量に含む	黄灰2.5Y5/1	褐灰5YR5/1	自然釉	501
摩耗の為不明	摩耗の為不明	角閃石、長石、輝石、細砂粒を少量含む	にぶい黄橙10YR7/4	橙5YR7/6	赤焼け	502
摩耗の為不明	摩耗の為不明	長石、砂粒を多く含む	橙2.5YR6/6	橙2.5YR6/6	スタンプ	503
横ナデ	ナデ	長石、輝石、雲母を多量に含む	灰N5/0	灰N5/0		504

第11表 陶磁器観察表

図版 番号	掲載 番号	調査区	遺構 番号	注記	時代	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整(内)	調整(外)
23	1	I	SK01			備前焼?	大甕	胴~底		32.8	(56.8)	刷毛目後ナデ・当具 痕(焼成時剥離)	刷毛目後ナデ・自然 釉
38	184	I	ST13			磁器	皿	口~底	(16.2)	(9.6)	(3.4)	施釉	施釉
38	189	I	SK04	No1		磁器	碗	口	[16.4]		(2.1)	施釉	施釉
38	190	I	SW01			磁器	不明	口	[9.0]		(2.2)	施釉	施釉
41	224	I		H9一括		磁器	碗	口~胴	(9.5)		(4.0)	施釉	施釉
41	225	I		J8		磁器	小坏	口~胴	(6.4)		(3.8)	施釉	施釉
41	226	I		J7		磁器	鉢	口~胴	[18.4]		(4.0)	回転ヘラケズリ後施 釉	回転ヘラケズリ後施 釉
41	227	I		J8		陶器	甕	底		[19.5]	(3.3)	回転横ナデ	ナデ
46	238	II a		K38pit9	中世	磁器	碗	底		5.4	(1.9)		施釉
46	239	II a		K38pit11	近世	陶器	皿	胴~底		4.2	(2.9)	回転ヘラケズリ後ナ デ、施釉	回転ヘラケズリ後ナ デ、施釉
54	253	II b	SW01	裏込一括		磁器	碗	胴~底		4.2	(2.3)	ナデ後施釉	ナデ後染付、施釉
54	254	II b	SW01	裏込一括		磁器	碗	口~底	9.7	3.9	5.2	ナデ後施釉	ナデ後染付、施釉
54	255	II b	SW01	裏込一括		磁器	碗	口~底	(10.5)	(4.2)	5.2	ナデ後施釉	ナデ後染付、施釉
54	256	II b	SW01	裏込一括	肥前系 16~18c	磁器	碗	口~底	9.6	3.9	5.2	回転ナデ後染付、施 釉	横ナデ後染付、施釉
54	257	II b	SW01	裏込一括		磁器	碗	口~底	(9.5)	(3.7)	5.2	ナデ後染付、施釉	ナデ後染付、施釉
54	258	II b	SW01	裏込一括		磁器	碗	口~底	9.7	4.0	5.4	ナデ後施釉	ナデ後染付、施釉
54	259	II b	SW01	裏込一括		陶器	碗	口~底	(10.5)		(5.4)	回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉
54	260	II b	SW01	裏込一括	18c 前 半?	磁器	碗	口~底	9.5	4.1	5.3	ナデ後施釉	ナデ後染付、施釉
54	261	II b	SW01	裏込一括		磁器	碗	口~底	(8.9)	(4.0)	4.9	回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉
54	262	II b	SW01	裏込一括		磁器	碗	口~底	(8.3)	(3.7)	6.1	ナデ後施釉	ナデ後染付、施釉
54	263	II b	SW01	裏込一括		磁器	碗	口~底	11.5	4.4	5.3	回転ナデ後施釉	回転ナデ後染付、施 釉
55	264	II b	SW01	一括		陶器	碗	胴~底	(3.1)		(4.6)	回転横ナデ、口縁施 釉	回転横ナデ、施釉
55	265	II b	SW01	裏込一括		磁器	碗	口~底	9.6	3.0	5.3	回転ナデ後施釉	回転ナデ後染付、施 釉
55	266	II b	SW01	裏込一括		磁器	碗	口~底	9.0	3.4	4.9	回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉
55	267	II b	SW01	一括		磁器	碗	口~底	6.9	3.4	5.4	ナデ後染付、施釉	ナデ後染付、施釉
55	268	II b	SW01	裏込一括		磁器	碗	口~底	(7.1)	2.8	3.3	施釉	施釉
55	269	II b	SW01	一括		磁器	碗	口~底	10.9	5.8	6.1	ナデ後染付、施釉	横ナデ後染付、施釉
55	270	II b	SW01	一括		磁器	碗	口~底	10.1	4.4	6.1	染付後施釉	染付後施釉
55	271	II b	SW01	裏込一括		磁器	碗	口~底	(10.6)	4.3	6.1	ナデ後染付、施釉	ナデ後染付、施釉
55	272	II b	SW01	一括		磁器	碗	口~底	11.0	4.2	6.0	横ナデ後染付、施釉	横ナデ後染付、施釉
56	273	II b	SW01	一括		陶器	碗	胴~底		(3.8)	(3.4)	施釉	施釉
56	274	II b	SW01	裏込一括、一括、 北セクq層		陶器	碗	口~底	(9.7)	(4.6)	5.5	ナデ後染付、施釉	ナデ後染付、施釉
56	275	II b	SW01	裏込一括		陶器	碗	口~底	10.6	4.5	6.7	施釉	回転ヘラケズリ、灰 釉後施釉
56	276	II b	SW01	裏込一括		陶器	碗	口~底	9.4	3.5	5.2	施釉	施釉
56	277	II b	SW01	裏込一括		陶器	碗	口~底	(9.8)	(4.7)	5.3	横ナデ後施釉	横ナデ後施釉、象嵌
56	278	II b	SW01	裏込一括、 一括		陶器	碗	口~底	(10.8)	(5.2)	7.6	ナデ後染付、施釉	ナデ後染付、施釉
56	279	II b	SW01	裏込一括、 K-36		陶器	碗	口~底	11.7	4.4	5.0	打刷毛目	打刷毛目
56	280	II b	SW01	裏込一括		陶器	碗	口~底	(9.0)	(3.8)	(9.2)	回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉
56	281	II b	SW01	裏込一括		陶器	碗	口~底	(9.2)	3.9	4.5	ナデ後施釉	ナデ後施釉
56	282	II b	SW01	裏込一括		陶器	碗	口~底	(11.2)	4.0	4.5	回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉
56	283	II b	SW01	裏込一括		陶器	皿	底		5.4	(1.7)	ナデ後染、施釉	ナデ、施釉
56	284	II b	SW01	裏込一括		陶器	坏	口~底	10.0	3.5	5.1	回転ナデ後施釉	ナデ後染付、施釉
56	285	II b	SW01	裏込一括		陶器	火入れ	口~底	(11.8)	(4.9)	4.5	回転ヘラケズリ後施 釉	横ナデ後施釉
57	286	II b	SW01	裏込一括		陶器	皿	口~底	(12.6)	(4.8)	(3.9)	回転横ナデ後施釉	回転ヘラケズリ、回 転横ナデ後施釉
57	287	II b	SW01	裏込一括		陶器	皿	口~底	11.5	3.8	3.7	施釉	回転ヘラケズリ後施 釉
57	288	II b	SW01	裏込一括		陶器	皿	口~底	(12.8)	4.7	4.0	施釉	回転ヘラケズリ後施 釉
57	289	II b	SW01	裏込一括、 一括		陶器	碗	口~底		4.6	3.7	ナデ、施釉	ナデ、施釉
57	290	II b	SW01	裏込一括		陶器	皿	口~底	(13.2)	(4.8)	(3.8)	回転横ナデ後施釉	回転ヘラケズリ、回 転横ナデ後施釉

調整 (内底)	調整 (外底)	胎 土	色 調 (胎土)	釉 調	染 め	備 考	掲載 番号
不定方向のナデ	不定方向のナデ	長石・輝石・砂粒を含む	椀皮色C-131	えび茶色C-121	チョコレート色C-113		1
	ヘラケズリ後施釉	混じりのない細砂粒	亜鉛華の白C-164	透明釉	海の青C-259		184
		混じりのない細砂粒	灰白C-144	銀灰色C-143		同安窯系青磁	189
		混じりのない細砂粒	鉛の白C-162	透明釉	瑠璃色C-252		190
		混じりのない細砂粒	貝の白C-163	透明釉	濃い灰藍C-257		224
		混じりのない細砂粒	鉛の白C-162	透明釉	海老の殻の灰緑C-217		225
削り、目跡、蛇の目釉剥ぎ		混じりのない細砂粒	藍白C-281	透明釉			226
回転横ナデ	ナデ	長石・輝石・赤色酸化粒・細砂粒をわずかに含む	灰褐7.5YR5/2	黄灰2.5Y5/1			227
施釉、釉掻き取り	施釉、削り出し高台	石英・輝石・砂粒を含む	灰白C-144	すずかけの樹の色C-216		龍泉窯系青磁、二次焼成	238
回転ヘラケズリ後ナデ、施釉、蛇の目掻き取り	回転ヘラケズリ後ナデ、削り出し高台	石英・輝石・砂粒を含む	薄白茶C-103	白茶C-135			239
ナデ後施釉	ナデ後染付、施釉	混じりのない細砂粒	亜鉛華の白C-164	透明釉	コバルトブルーC-258		253
ナデ後施釉	ナデ後染付、施釉、釉剥ぎ	混じりのない細砂粒	亜鉛華の白C-164	トルコ石の灰緑C-219	蘇州の錦色C-298	砂目跡(外底)	254
ナデ後施釉	削り出し、ナデ後染付、施釉、釉剥ぎ	混じりのない細砂粒	薄白茶C-103	灰白C-143	瑠璃色C-252		255
横ナデ後染付、施釉	削り出し高台、ナデ後染付、釉剥ぎ	混じりのない細砂粒	薄白茶C-103	透明釉	鉄紺C-278	銘款、染付がずれている	256
ナデ後染付、施釉	ナデ後染付、施釉、釉剥ぎ	混じりのない細砂粒	薄白茶C-103	鉛の灰色C-211	濃い灰藍C-257		257
ナデ後施釉	ナデ後染付、施釉、釉剥ぎ	混じりのない細砂粒	貝の白C-163	雪の灰白C-282	濃い灰青C-220	砂目跡(外底)	258
回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉	混じりのない細砂粒	真珠色C-99	透明釉	焦茶色C-129	釉が厚く、気泡が多く出ている	259
ナデ後施釉	削り出し高台、ナデ後染付、施釉	混じりのない細砂粒	貝の白C-163	透明釉	濃藍C-262	銘款	260
回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉	混じりのない細砂粒	灰白C-144	透明釉	蟹の藍C-239		261
ナデ後施釉	削り出し高台、ナデ後染付、施釉	混じりのない細砂粒	亜鉛華の白C-164	透明釉	サックスブルーC-249		262
蛇の目掻き取り	削り出し高台、釉剥ぎ		雪の灰白C-282	雪の灰白C-282	瓦色C-237	目跡(内底)	263
回転ナデ	削り出し高台	混じりのない細砂粒	亜鉛華の白C-164	西藏の藍C-266			264
回転ナデ後施釉	削り出し高台、回転ナデ	細砂粒を含む	白茶C-141	透明釉	棕櫚C-120	全体に貫入有り	265
回転ナデ後施釉	釉剥ぎ、砂目跡		銀灰色C-143	銀灰色C-143			266
ナデ後染付、施釉	削り出し高台、釉削り	白磁胎	亜鉛華の白C-164	透明釉	深い藍C-261		267
施釉	施釉、釉剥ぎ	精製、白磁胎	月の白石C-209	透明釉	薄青磁石C-206	白磁	268
ナデ後染付、施釉	横ナデ	混じりのない細砂粒	亜鉛華の白C-164	透明釉	仕事着の青C-264		269
染付後施釉	ナデ後施釉、釉剥ぎ	混じりのない細砂粒	亜鉛華の白C-164	透明釉	薄いコバルトブルーC-260		270
ナデ後染付、施釉	ナデ後染付、施釉	混じりのない細砂粒	亜鉛華の白C-164	透明釉	仕事着の青C-264		271
横ナデ後染付、施釉、蛇の目釉剥ぎ	ナデ後施釉	混じりのない細砂粒	灰白C-144	透明釉	藍鼠C-254	砂目跡	272
施釉	施釉	砂粒多く含む	代赭色C-74	瓦の鼠茶C-293			273
ナデ後施釉	ナデ後施釉	細砂粒をわずかに含む	くすんだクリーム色C-147	透明釉		京焼風	274
施釉	削り出し高台	細砂粒少量	かもしか色C-106	白茶C-107	薄藤C-284	2回目の施釉で口~底にかけて濡れ落ちあり	275
施釉	施釉、釉剥ぎ	混じりのない細砂粒	真珠色C-99	透明釉	碧玉色C-99	胎土目	276
横ナデ後施釉	削り、工具痕	混じりのない細砂粒	ねずみ色C-292	焦げ茶色C-134	銀灰色C-143		277
ナデ後染付、施釉	削り出し高台、ナデ後施釉	細砂粒をわずかに含む	ねずみ色C-292	灰白C-144	濃い灰青C-255		278
打刷毛目	施釉		承德灰C-292	燻茶色C-228	乳白色C-99		279
回転ナデ後染付、施釉	回転ナデ	混じりのない細砂粒	淡い肌色C-105	透明釉	焦茶色C-129	京焼風	280
ナデ後染付、施釉	削り出し高台、工具痕	長石・輝石ごくわずかに含む	かもしか色C-106	透明釉	燻茶色C-228	文字(底)、京焼風	281
回転ナデ後染付、施釉	回転ナデ	混じりのない細砂粒	真珠色C-99	透明釉	カーキ色C-76	京焼風	282
ナデ後染付、施釉	削り出し高台、回転ヘラケズリ	混じりのない細砂粒	真珠色C-99	薄白茶C-103、カーキ色C-138	青墨色C-275	底部に「松原」京焼風	283
ナデ後施釉	ナデ後施釉	混じりのない細砂粒	白茶C-141	くり色C-276			284
回転ヘラケズリ	削り出し	混じりのない細砂粒	かもしか色C-106	枯葉色C-126		砂目跡(内底)	285
施釉、蛇の目釉剥ぎ	削り出し高台	きめが細かい	かもしか色C-106	黄土色C-79		胎土目(畳付け)	286
施釉、蛇の目掻き取り	削り出し高台	きめが細かい	灰白C-144	白茶C-107		胎土目(畳付け)	287
施釉、蛇の目掻き取り	削り出し高台	きめが細かい	かもしか色C-106	白茶C-107・海松色C-227		砂目跡(内外底)	288
ナデ、施釉、蛇の目掻き取り	削り出し高台、回転ヘラケズリ	輝石・長石を含む	灰白C-144	黄土色C-79		砂目跡(内底)	289
施釉、蛇の目釉剥ぎ	削り出し高台	きめが細かい	真珠色C-99	玉子色C-150		胎土目(畳付け)	290

図版 番号	掲載 番号	調査区	遺構 番号	注 記	時代	種 別	器 種	部 位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調 整 (内)	調 整 (外)
57	291	IIb	SW01	裏込一括、北セクd層一括		陶器	碗	口～底	11.6	4.1	4.5	施釉	施釉
57	292	IIb	SW01	裏込一括		陶器	皿	口～底	11.9	4.5	3.5	施釉	施釉
57	293	IIb	SW01	裏込一括		陶器	皿	口～底	(8.7)	(3.8)	2.4	横ナデ後施釉	横ナデ後施釉
57	294	IIb	SW01	裏込一括		陶器	皿	口～底	17.6	7.9	7.2	回転ナデ後施釉	回転削り出し後施釉
57	295	IIb	SW01	裏込一括		陶器	皿	口～底	(18.4)	(9.9)	5.7	横ナデ後染付、施釉	回転ナデ後施釉
57	296	IIb	SW01	一括		陶器	鉢	口～底	(17.0)	8.6	7.2	回転横ナデ後施釉	回転横ナデ後施釉
57	297	IIb	SW01	一括	19C代	陶器	皿	口～底	(19.4)	(8.8)	4.3	回転ヘラケズリ後回転ナデ、施釉	回転ヘラケズリ後回転ナデ、施釉
58	298	IIb	SW01	裏込一括		磁器	皿	口～底	(20.4)	(12.6)	3.6	ナデ後染付、施釉	ナデ後染付、施釉
58	299	IIb	SW01	裏込一括		磁器	皿	口～底	12.6	8.0	3.4	ナデ後染付、施釉	ナデ後染付、施釉
58	300	IIb	SW01	裏込一括		磁器	大皿	底		(17.4)		ナデ後施釉	ナデ後施釉
59	301	IIb	SW01	裏込一括		青磁	皿	口～底	16.8	6.7	4.8	ナデ後施釉	ナデ後施釉
59	302	IIb	SW01	一括		磁器	大皿	口～底	(28.0)	(15.0)		横ナデ後染付、施釉	横ナデ後染付、施釉
59	303	IIb	SW01	裏込一括		磁器	皿	口～底	(21.8)	(12.2)	3.2	ナデ後染付、施釉	ナデ後染付、施釉
60	304	IIb	SW01	裏込一括		磁器	皿	口～底	(13.6)	(7.8)	3.0	ナデ後染付、施釉	ナデ後施釉
60	305	IIb	SW01	裏込一括		磁器	皿	口～底	9.4	4.5	2.7	施釉	施釉
60	306	IIb	SW01	一括		磁器	手塩皿	口～底	9.0	4.3	2.4	施釉	施釉
60	307	IIb	SW01	裏込一括		磁器	皿	口～底	10.4	6.2	2.6	ナデ後染付、施釉	ナデ後染付、施釉
60	308	IIb	SW01	裏込一括		磁器	皿	口～底	(11.6)	(5.8)	2.8	ナデ後染付、施釉	ナデ後染付、施釉
60	309	IIb	SW01	裏込一括		磁器	皿	口～底	(12.8)	4.1	3.9	施釉	施釉
60	310	IIb	SW01	裏込一括		磁器	碗蓋	つまみ～口	9.5	4.1	2.8	ナデ後染付、施釉	ナデ後染付、施釉
60	311	IIb	SW01	一括		磁器	皿	口～底	11.9	4.3	4.9	回転横ナデ後施釉	回転横ナデ後施釉
60	312	IIb	SW01	一括		磁器	手塩皿	口～底	8.2	4.9	2.2	施釉	施釉、口縁釉剥ぎ
60	313	IIb	SW01	一括		磁器	小皿	口～底	(8.6)	(4.6)	1.6	ナデ後施釉	ナデ後施釉
61	314	IIb	SW01	裏込一括		磁器	蓋	つまみ～口	(9.0)		2.5	回転ナデ後施釉	回転ナデ後染付、施釉
61	315	IIb	SW01	一括		磁器	小坏	口～底	(5.6)	(3.4)	3.7	施釉	施釉、彫り、色絵
61	316	IIb	SW01	裏込一括		磁器	小坏	口～胴	(6.6)		(3.5)	ナデ後施釉	ナデ後施釉
61	317	IIb	SW01	裏込一括	19C前後	磁器	仏飯具	口～底	(7.3)	(4.2)	6.3	ナデ後施釉	ナデ後染付、施釉
61	318	IIb	SW01	一括		磁器	仏飯具	口～底	(6.3)	4.3	6.0	ナデ後施釉	横ナデ後染付、施釉
61	319	IIb	SW01	裏込一括		磁器	?	胴～底		3.4	(6.0)	回転ナデ	回転ナデ後施釉、刻印(今新作)
61	320	IIb	SW01	裏込一括		陶器	花瓶(瓶子型)	胴～底			(2.9)	ナデ	ナデ後染付、施釉
61	321	IIb	SW01	裏込一括		磁器	仏飯具	胴～底		4.0	(4.0)	回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉
61	322	IIb	SW01	裏込一括		磁器	水滴	天井～底	縦(6.1)	横(6.0)	3.0	横ナデ後一部施釉	ナデ後染付、施釉
61	323	IIb	SW01	裏込一括		磁器	?	胴～底		3.0	(5.4)	ヘラケズリ後斜め方向のナデ	ナデ後染付、施釉
61	324	IIb	SW01	一括		陶器	火入れ	口～底	(7.4)	(3.8)	4.2	回転横ナデ、施釉	回転横ナデ後染付、施釉
61	325	IIb	SW01	裏込一括		青磁	香炉	胴～底	(10.9)	6.0	(5.6)	回転ヘラケズリ、施釉(2回)	施釉
61	326	IIb	SW01	裏込一括		磁器	徳利	胴～底	(6.8)	(5.2)	(5.4)	回転横ナデ	回転ヘラケズリ、施釉
61	327	IIb	SW01	裏込一括		磁器	香炉	口～底		5.8	(6.0)	回転横ナデ	施釉
61	328	IIb	SW01	一括		白磁	徳利	頸～底		6.4	(14.6)	ナデ	ナデ後施釉
62	329	IIb	SW01	裏込一括		陶器	蓋		(6.1)		3.1	回転ヘラケズリ後、ナデ	回転ナデ後施釉、宝珠つまみ
62	330	IIb	SW01	裏込一括		陶器	蓋	天井～口	(6.6)		3.2	回転ナデ	ナデ後染付、施釉、擬宝珠つまみ
62	331	IIb	SW01	裏込一括		陶器	土瓶	口～底	(8.8)		(6.4)	横ナデ後施釉	ナデ後施釉
62	332	IIb	SW01	裏込一括		陶器	土瓶	胴～底		(7.6)	9.0	回転横ナデ	回転横ナデ後施釉
62	333	IIb	SW01	裏込一括		陶器	花瓶	口～底	5.9		(9.8)	ナデ後施釉	ナデ後施釉、回転ヘラケズリ
62	334	IIb	SW01	裏込一括		陶器	壺	頸～底		11.9	(18.0)	回転ナデ	回転ナデ
62	335	IIb	SW01	裏込一括		陶器	鍋	口～底	(20.6)	(9.4)	(10.1)	回転横ナデ後施釉	削り、回転横ナデ後施釉
62	336	IIb	SW01	裏込一括		陶器	鉢	口～底			(7.7)	同心円文の当て具痕、ナデ後施釉	格子叩き、ハケ目
63	337	IIb	SW01	一括		陶器	甕	口～胴	(33.0)		(11.0)	施釉	施釉、流掛釉?化粧掛?
63	338	IIb	SW01	裏込一括		陶器	甕	口～胴	(37.4)		(15.5)	横方向のナデ後施釉	横方向のナデ後施釉、化粧土

調整 (内底)	調整 (外底)	胎 土	色 調 (胎土)	釉 調	染 め	備 考	掲載 番号
蛇の目釉剥ぎ	削り出し高台	混じりのない細砂粒	かもしか色C-106	透明釉	白茶C-107	内外底に砂目跡	291
施釉、蛇の目釉剥ぎ	ヘラケズリ、削り出し高台	混じりのない細砂粒	薄桜色C-101	透明釉	鉄の緑C-230、玉石の藍C-224		292
横ナデ後施釉、象嵌	削り出し高台、釉剥ぎ	混じりのない細砂粒	ねずみ色C-292	焦茶色C-134	銀灰色C-143		293
蛇の目掻き取り	高台削り出し		栗色C-127	瓦の鼠茶C-293			294
ナデ後施釉、蛇の目釉剥ぎ	工具痕	長石・赤色酸化粒わずかに含む	砂漠の駱駝色C-78	コーヒー色C-110	焦茶色C-134		295
回転横ナデ後施釉	回転横ナデ後施釉、釉剥ぎ	細かい黒色の斑点あり	亜鉛華の白C-164	透明釉	薄いコバルトブルーC-260		296
回転ヘラケズリ後回転ナデ、施釉、蛇の目釉剥ぎ	削り出し高台	輝石・長石・細砂粒をわずかに含む	煉瓦色C-28	コーヒー色C-110、淡いクリーム色C-100		高台接地部が均等でない	297
こんにやく印判ナデ後染付、施釉	ナデ後染付、施釉	混じりのない細砂粒	貝の白C-163	透明釉	鉄紺C-265	底に文字・目ハリ	298
こんにやく印判	施釉	混じりのない細砂粒	亜鉛華の白C-164	透明釉、鉄錆釉	藍鼠C-254	「大明年成」	299
ナデ後施釉	ナデ後施釉	細砂粒(黒色)を多く含む	亜鉛華の白C-164	雪の灰白C-282	コバルトブルーC-258	目ハリ(1ヶ所)	300
蛇の目掻き取り	ナデ後施釉、接地面ナシ	細砂粒(黒色)をやや多く含む	薄白茶C-103	海老の殻の灰色C-214			301
横ナデ後染付、施釉	削り出し高台、ナデ後染付、施釉、釉剥ぎ	きめが細かい	亜鉛華の白C-164	月の白色C-209	青金色C-280		302
ナデ後染付、施釉	削り出し高台、ナデ後染付、施釉	きめが細かい	亜鉛華の白C-164	あひるの卵の薄青C-204	薄いコバルトブルーC-260	「渦福」、目ハリ(2ヶ所)	303
染付後施釉、こんにやく印判、蛇の目釉剥ぎ	削り出し高台、施釉、釉剥ぎ	混じりのない細砂粒	鉛の灰白C-211	透明釉	湖の灰表C-247		304
施釉、蛇の目釉剥ぎ	施釉、釉剥ぎ	混じりのない細砂粒	銀灰色C-143	透明釉	銀灰色C-143	墨書有り	305
施釉、蛇の目釉剥ぎ	削り出し高台、施釉、釉剥ぎ	きめが細かい	亜鉛華の白C-164	透明釉	白群C-248		306
ナデ後染付、施釉	ナデ後施釉	混じりのない細砂粒	亜鉛華の白C-164	透明釉	海の青C-259	輪花型押し	307
ナデ後染付、施釉	削り出し高台、施釉、釉剥ぎ	混じりのない細砂粒	あひるの卵の薄青C-204	透明釉	薄いコバルトブルーC-260	水墨画、目跡(外底)	308
蛇の目釉剥ぎ	削り出し高台	混じりのない細砂粒	月の白石C-209	透明釉	鉛の灰色C-211、獣の皮色C-311		309
		混じりのない細砂粒	亜鉛華の白C-164	透明釉	海の青C-259		310
釉剥ぎ	回転横ナデ後施釉	混じりのない細砂粒	雪の灰白C-282	透明釉	サックスブルーC-249		311
施釉	削り出し高台	白磁胎					312
ナデ後施釉	削り出し高台、釉削り	白磁胎	雪の灰白C-282	透明釉	鉄サビ	「喜」	313
		混じりのない細砂粒	濃い灰藍C-257	透明釉	濃い灰藍C-257		314
施釉	削り出し高台、施釉、釉剥ぎ	きめが細かい	亜鉛華の白C-164	透明釉	トルコ石の青緑C-197・淡い黄色C-160		315
		混じりのない細砂粒	薄白茶C-103	透明釉			316
ナデ後施釉	回転削り	きめが細かい	亜鉛華の白C-164	鉛の灰色C-211	サックスブルーC-249		317
ナデ後施釉	ナデ後施釉	きめが細かい	貝の白C-163	薄白茶C-103	仕事着の青C-264		318
回転ナデ	ヘラケズリ後ナデ	混じりのない細砂粒	亜鉛華の白C-164	透明釉			319
削り	削り出し、ナデ後施釉、釉剥ぎ	混じりのない細砂粒	鉛の白C-162	透明釉	濃い灰藍C-257		320
	糸切り	混じりのない細砂粒	雪灰C-282	鉛の灰色C-211			321
布目	布目後施釉	きめが細かい	亜鉛華の白C-164	透明釉	白群C-248		322
ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	混じりのない細砂粒	亜鉛華の白C-164	透明釉	藍鼠C-254		323
回転横ナデ後染付、施釉	回転横ナデ後染付、施釉、削り出し高台	混じりのない細砂粒	亜鉛華の白C-164	透明釉	深藍C-261		324
回転ヘラケズリ、施釉	施釉、釉剥ぎ	きめが細かい	貝の白C-163	トルコ石の灰緑C-219・すずかけの樹の色C-216			325
回転横ナデ	回転ヘラケズリ	きめが細かい	雪の灰白C-282	大理石の色C-215			326
回転横ナデ	削り出し高台	混じりのない細砂粒	月の白石C-209	透明釉			327
不明	削り出し高台、ナデ後施釉、釉剥ぎ	きめが細かい	薄白茶C-103	トルコ石の灰緑C-219		目跡(外底)	328
		混じりが無い細砂粒	鉛色C-291	えび茶色C-121			329
		混じりのない細砂粒	砂漠の駱駝色C-78	焦茶色C-129			330
		長石・輝石・細砂粒を含む	淡い瑪瑙色C-88	(内)チョコレート色C-113・(外)焦茶色C-129		煤付着(外底)	331
回転横ナデ	回転横ナデ	長石・輝石・砂粒を含む	代赭色C-74	褐色C-128			332
		きめが細かい	かもしか色C-106	コーヒー色C-110			333
回転ナデ	削り出し高台、横ナデ	輝石・長石を含む	白茶C-141	煙草色C-112、しゅろ色C-120			334
叩き痕、回転横ナデ後施釉	ナデ	輝石・石英・細砂粒を少量含む	肉桂色C-81	煙草色C-112		煤付着(底)	335
		長石・赤色酸化粒・細砂粒を含む	チョコレート色C-113	チョコレート色C-113			336
		長石をわずかに含む	チョコレート色C-113	焦茶色C-129、真珠色C-99、カーキ色C-76			337
		長石・輝石・細砂粒を含む	代赭色C-74	栗皮色C-133、栗色C-127			338

図版 番号	掲載 番号	調査区	遺構 番号	注記	時代	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整(内)	調整(外)
64	339	IIb	SW01	裏込一括		陶器	甕	口～底	(16.0)	(20.3)	40.8	回転ナデ、格子当て 具痕、施釉	回転ナデ、格子叩き、 施釉、自然釉
64	340	IIb	SW01	裏込一括		陶器	甕	口～底	36.0	19.9	44.6	格子当て具痕、斜め・ 横方向のナデ	格子叩後ナデ、回転ナデ、釉剥 ぎ、貼花文、ボタン文、沈線
65	341	IIb	SW01	一括		陶器	鉢	口～胴			(7.3)	櫛描き、施釉	施釉
65	342	IIb	SW01	裏込一括		陶器	播鉢	口	(30.8)		(5.2)	回転ナデ、櫛描き (9条)、施釉	回転ナデ、施釉
65	343	IIb	SW01	裏込一括	18C後半	陶器	播鉢	口～底	(26.9)	(14.2)	14.7	櫛描き(12条位)、施 釉	回転ナデ、施釉
65	344	IIb	SW01	裏込一括		陶器	播鉢	口～胴	(39.2)		(11.5)	回転横ナデ、櫛描き (17条)	回転ヘラケズリ後横 ナデ
65	345	IIb	SW01	裏込一括		陶器	播鉢	胴～底		(11.7)	(10.9)	櫛描き	回転ナデ、回転ヘラ ケズリ
65	351	IIb	SW01	裏込一括		陶器	鉢	口～底	17.4	14.4	7.2	手びねり後、ナデ	手びねり後、ナデ
69	369	IIb		一括		陶器	鉢	胴～底		(11.4)	(7.0)	回転横ナデ	回転ヘラケズリ後回 転横ナデ、刷毛釉
69	370	IIb		k-37一括		須恵質土器	播鉢	胴～底			(5.8)	横ナデ、櫛描き(12 条)	回転横ナデ、ヘラケ ズリ
69	371	IIb		一括		須恵質土器	播鉢	口～胴			(8.7)	回転横ナデ、櫛描き (10条)	回転横ナデ
73	373	IIc	SE02	一括	近世	陶器	播鉢	胴～底		(11.1)	(7.0)	櫛描き(10条以上)	横ナデ
73	374	IIc	SE02	一括、No.11	近世	陶器	皿?	胴～底		10.8	(2.9)	回転横ナデ、施釉	削り後回転横ナデ、 施釉
89	395	II f		K-30④層一 括	中世	磁器	碗	胴			(4.3)	施釉	施釉
89	396	II f		K-30④層一 括	中世	磁器	碗	口～胴	(15.6)		(4.3)	横ナデ、施釉	回転横ナデ、施釉
89	397	II f		K-30④層一 括	中世	磁器	碗	口～底	(5.4)		(2.9)	ナデ後、施釉	ナデ、ヘラケズリ、 施釉
89	402	II f		K-30④層一 括	12～13 C半ば?	陶器	天目碗	口～胴			(5.2)	ナデ後、施釉	ナデ後、施釉(一部 釉ナシ)
101	409	II h	ST06	No.3	16C中	磁器	碗	口～底	12.2	4.9	5.9	染め付け後、施釉	染め付け後、施釉
101	411	II h	ST06	No.9		磁器	皿	口～底	12.3	7.8	2.6	施釉	施釉
101	412	II h	ST06	No.1		磁器	皿	口～底	13.1	6.4	3.2	施釉	施釉
101	415	II h	ST07	No.1	中世、 16C頃	陶器	天目碗	口～底	11.9	6.0	6.5	施釉、口縁一部釉剥 ぎ	施釉、口縁一部釉剥 ぎ
103	421	II h	SE03	最下層		磁器	碗	口～胴	(14.8)		(4.7)	施釉	施釉
103	422	II h	SE03			磁器	碗	口～胴	(14.7)		(5.1)	施釉	回転横ナデ、施釉
103	423	II h	SE03	南西中層・k -26⑥層		磁器	皿	胴～底		(6.5)	(3.5)	ナデ後施釉	ナデ後施釉
103	424	II h	SE03	上層南西		磁器	碗	口～胴			(4.0)	施釉	蓮弁文、施釉
103	426	II h	SE03	上層K-27暗 褐色層		陶器	壺	口～胴	(18.1)		(11.1)	回転横ナデ、横ナデ	回転横ナデ、横ナデ、 カキメ
103	427	II h	SE03			陶器	大甕	口	(48.0)		(10.0)	回転横ナデ、当具痕	回転横ナデ
103	428	II h	SE03			陶器	大甕	口	(42.0)		(8.8)	横ナデ、当具痕?	回転ヘラケズリ、ナ デ
112	478	II h		K-26灰褐色層		磁器	皿	口～底	(9.3)	(2.1)	3.1	回転横ナデ	ヘラケズリ、回転横 ナデ
112	479	II h		K-27暗褐色層		磁器	皿	口～底	(11.2)	(3.8)	3.0	横ナデ	ヘラケズリ後ナデ、 横ナデ
112	480	II h		K-27		磁器	碗	口～胴			(3.7)	櫛描き(5本)	施釉
112	481	II h		K-27黒色層		磁器	碗	口～胴	(13.1)		(3.7)		施釉
112	482	II h		K-27		磁器	皿	胴～底		(12.4)	(3.1)	ヘラケズリ後、施釉	ヘラケズリ後、施釉

調整 (内底)	調整 (外底)	胎 土	色 調 (胎土)	釉 調	染 め	備 考	掲載 番号
ナデ、施釉、自然釉	ナデ、施釉	細砂粒をわずかに含む	白茶C-135	煙草色C-112			339
ナデ、放射状の櫛描	ナデ	細砂粒をわずかに含む	代赭色C-74	鉄釉・弁柄色C-130			340
		石英・砂粒を多く含む	代赭色C-74	焦茶色C-129			341
		混じりのない細砂粒	赤茶色C-111	煙草色C-112			342
櫛描き、施釉	回転ナデ、施釉	混じりのない細砂粒	血の赤C-34	漆黒C-303		砂目跡(内外底)	343
		輝石・長石・砂粒をわずかに含む	灰褐5YR6/6	灰褐5YR6/6			344
櫛描き	回転ヘラケズリ、貼付け高台		代赭色C-74			砂目跡(内底)	345
手びねり後ナデ、指ナデ、指頭圧痕	布痕	長石・小石含み胎土荒い	ねずみ色C-292			やや楕円形	351
回転横ナデ	回転ヘラケズリ後施釉、削り出し高台	長石・細砂粒を多く含む	コーヒー色C-110	栗色C-127		胎土が底に付いたまま・胎土目跡(内底)	369
		長石・輝石多めに含む	ミンクの灰色C-244				370
		長石・輝石・細砂粒少量含む	代赭色C-74				371
櫛描文	回転糸切り		代赭色C-74				373
回転削り後ナデ、施釉	ナデ、施釉		コーヒー色C-110	焦茶色C-129		胎土目跡(外底)	374
		きめが細かい	雪の灰色C-241	龍泉窯青磁色C-207			394
		やや粗い	藍白C-281	すずかけの樹の色C-216		龍泉窯系青磁	395
ナデ後、施釉	回転削り出し高台、施釉、ヘラケズリ	細砂粒をわずかに含む	雪の灰色C-282			龍泉窯系青磁、鳥紋スタンプ(内底)	396
		石英・輝石・細砂粒をわずかに含む	真珠色C-99				401
染め付け後、施釉、花文	削り出し高台	混じりのない細砂粒、輝石を少量含む	薄白茶C-103	雪灰C-282	深い藍C-261	景德鎮系染付	409
施釉	施釉	混じりのない細砂粒	雪の灰白C-282	透明釉		砂目跡(外底)	411
施釉	染め付け後施釉、布目痕	混じりのない細砂粒	亜鉛華の白C-164	雪の灰白C-282	海の青C-259		412
施釉	ヘラケズリ後ナデ	輝石・長石・砂粒を含む	真珠色C-99	油煙墨C-304		付着物あり(内底) 赤色顔料付着(外底)	415
		きめが細かい	紅灰C-317	海老の殻の灰緑C-217			421
		きめが細かい	鉛の灰色C-211	カーキー色C-76		貫入が多い	422
蛇の目掻き取り	ヘラケズリ、蛇の目軸剥ぎ、削り出し高台	輝石・長石・細砂粒を含む	灰色C-144	すずかけの樹の色C-216			423
		混じりのない細砂粒	銀灰色C-143	すずかけの樹の色C-143			424
		長石・石英僅かに含む					426
		長石・細砂粒を含む	灰色C-144				427
		長石、石英、砂粒が混じりきめが粗い	赭紅C-74	珈琲色C-124		自然釉	428
回転横ナデ	削り出し高台	混じりのない細砂粒	真珠色C-99	透明釉		煤付着(口縁)	478
横ナデ	削り出し高台	混じりのない細砂粒	真珠色C-99	透明釉		墨書「大」	479
		混じりのない細砂粒	ミンクの灰色C-244	瓦の鼠茶C-293			480
施釉		きめが細かい	藍白C-281	大理石色C-215			481
ヘラ彫り	蛇の目掻き取り	輝石・細砂粒を含む	雪灰C-282				482

第12表 瓦察表

図版 番号	掲載 番号	調査区	遺構	注 記	時代	器種	部 位	長さ・直径	幅・外縁幅	厚さ・瓦当厚	瓦当高・外縁高	凹 面 ・ 瓦 当 裏
68	362	II b	SW01	裏込一括	近世	軒丸瓦	瓦当	(16.0)	1.8	1.2	0.5	ナデ
68	363	II b	SW01	裏込一括	近世	丸瓦	玉縁～胴	(20.2)	(11.4)	1.8	—	布目圧痕・内叩き(工具端部)・ 長軸方向のナデ
68	364	II b	SW01	一括	近世	丸瓦	玉縁	(9.8)	(7.4)	2.5	—	布目圧痕・内叩き(工具側面)・ 丁寧なヘラナデ
68	365	II b	SW01	一括	近世	丸瓦	胴	(10.1)	(6.8)	2.0	—	布目圧痕・ナデ
68	366	II b	SW01	裏込一括	近世	軒平瓦	顎～胴	—	—	1.8	(4.4)	長軸方向のナデ
68	367	II b	SW01	裏込一括	近世	軒平瓦	顎～胴	—	—	1.7	(4.8)	長軸方向のナデ
68	368	II b	SW01	裏込一括	近世	軒平瓦	顎	—	—	—	—	
79	380	II e	ST03	東西断面一括	近世	軒丸瓦	瓦当	(14.2)	2.1	1.5	0.6	ヨコナデ
79	381	II e	ST03	6層No.19・20	近世	丸瓦	玉縁	(13.8)	16.8	2.0	—	摩耗
79	382	II e	ST03	表土1層上層一括、ベルト 東西断面一括	近世	丸瓦	玉縁	(10.0)	(16.6)	2.7	—	布目圧痕
80	383	II e	ST03	6層No.10	近世	丸瓦	玉縁～広端	34.9	17.2	2.3	—	摩耗・布引き痕?
80	384	II e	ST03	南西表土1層上層一括、表 土腐植土一括	近世	丸瓦	玉縁～胴	(20.7)	16.8	2.5	—	布目圧痕・ナデ・布引き痕
81	385	II e	ST03	北西・南西表土1層上層一括、 ベルト東西断面一括	近世	丸瓦	玉縁～胴	(22.4)	(11.4)	2.1	—	布目圧痕・ナデ
81	386	II e	ST03	6層No.1～5・8・9・11	近世	丸瓦	玉縁～広端	(28.2)	17.0	2.2	—	ナデ
82	387	II e	ST03	北西表土1層上層一括、ベ ルト東西断面一括	近世	丸瓦	広端部	(11.1)	17.0	2.2	—	布目圧痕・ナデ
82	388	II e	ST03	東西表土1層上層一括、北 西表土、ベルト断面一括	近世	丸瓦	胴～広端	(22.5)	(16.5)	2.2	—	布目圧痕・工具痕・ナデ
83	389	II e	ST03	6層一括	近世	棧瓦	顎～胴	—	—	2.0	4.3	ナデ
83	390	II e	ST03	北西表土1層上層一括、表 土、表土腐植土一括	近世	軒平瓦	顎～胴	—	28.9	1.9	4.4	摩耗
83	391	II e	ST03	南西1層上面表土一括、表 土腐植土一括	近世	平瓦	狭端～広端	30.7	—	2.2	—	ケズリ後長軸方向のナデ
84	392	II e	ST03	北西表土1層上層一括、表土 一括、ベルト東西断面一括	近世	平瓦	狭端～広端	30.2	狭(24.0) 広(29.6)	1.8	—	ケズリ後丁寧な短軸方向のナ デ
84	393	II e	ST03	表土一括	近世	平瓦	狭端～広端	31.5	—	2.0	—	ケズリ後丁寧な短軸方向のナ デ
106	447	II h	SE03		近世	棧瓦	顎	—	—	2.0	(4.0)	横方向のナデ
106	448	II h	SE03		近世	軒丸瓦	瓦当	(16.0)	1.3	—	0.5	摩耗

凸面・瓦当表	連結側面	凹面・広端面	側面	胎土	凹面・瓦当裏	凸面・瓦当表	備考	掲載 番号
ナデ				細砂粒をわずかに含む	灰5Y4/1	灰5Y4/1	九曜文	362
ナデ後丁寧な長軸方向のナデ	短軸方向のナデ		面取り	細砂粒をわずかに含む	灰N4/1	灰N4/1		363
短軸方向のナデ後長軸方向のヘラナデ	短軸方向のナデ		面取り	細砂粒をわずかに含む	暗灰N3/0	黄灰2.5Y4/1		364
ナデ後丁寧な長軸方向のミガキ			面取り	細砂粒をわずかに含む	灰5Y6/1	灰N5/0		365
長軸方向のナデ			ナデ後 ミガキ	細砂粒をわずかに含む	黄灰2.5Y5/1	黄灰2.5Y5/1	包み込み技法	366
横方向の丁寧なヘラナデ				細砂粒をわずかに含む	黄灰褐10YR6/2	褐灰10YR5/1	包み込み技法	367
				細砂粒をわずかに含む	灰5Y5/1		顎貼り付け技法	368
長軸方向のナデ				砂粒・藁のようなものを 含む	灰5Y5/1	暗灰N3/0	巴文、文殊(6)	380
摩耗	摩耗		面取り	砂粒を含む	暗灰N4/0	暗灰N4/0		381
ヘラケズリ後ナデ	ナデ		面取り	輝石・赤酸化粒・小石	暗灰黄2.5YR5/2	暗灰黄2.5YR5/2	釘穴あり	382
ナデ後丁寧な長軸方向のナデ	ナデ・摩耗		面取り	砂粒・小石を含む	暗灰N4/0	暗灰N4/0	刻印	383
ケズリ後丁寧な長軸方向のナデ	短軸方向のナデ		面取り	砂粒・小石・藁のような ものを含む	灰5Y4/1	灰5Y4/1	刻印	384
格子叩き痕、ケズリ後丁寧な 長軸方向のナデ、スタンプ	短軸方向のナデ		面取り	長石・砂粒・藁のような ものを含む	灰7.5Y4/1	灰N4/0	刻印	385
磨耗			面取り	砂粒を含む	灰5Y4/1	灰5Y4/1		386
ヘラケズリ後丁寧な長軸方向 のナデ		ヘラケズリ後 丁寧なナデ	面取り	小石・藁のようなものを 含む	灰5Y5/1	灰N4/0		387
ヘラケズリ後丁寧な長軸方向 のナデ		ヘラケズリ後 丁寧なナデ	面取り	小石・藁のようなものを 含む	灰5Y6/1	灰5Y5/1		388
ナデ、金ウンモ付着				砂粒を含む	暗灰N5/0	暗灰N5/0	唐草文、顎貼り 付け技法	389
ヨコナデ				砂粒・藁のようなものを 含む	暗灰N3/0	暗灰N3/0	唐草文・顎貼り 付け技法	390
ケズリ後丁寧な長軸方向のナデ			面取り	砂粒を含む	黒褐2.5YR3/1	暗灰N3/0	刻印	391
ヘラケズリ後丁寧な長軸方向 のナデ			面取り	砂粒・藁のようなものを 含む	暗灰N3/0	暗灰N3/0	刻印	392
ミガキ後ナデ			面取り	砂粒・藁のようなものを 含む	灰5Y4/1	灰5Y4/1	刻印	393
ヨコナデ				キメ細かい・雲母意図的?	灰N4/1	暗灰N3/0	唐草文	447
磨耗				砂粒を含む	にぶい黄橙10Y R7/4	にぶい黄橙10Y R5/3	三巴文	448

写 真 图 版

図版4 I区遺構検出状況



I区 天神谷奥調査前状況



I区 天神谷奥調査前状況



I区 I期崖造成面



I区 ST01検出状況



I区 ST01-2 検出状況



I区 ST01-1 検出状況



I区 ST02検出状況



I区 ST03検出状況

図版5 I区遺構検出状況



I区 五輪塔群



I区 ST06~08・10・11検出状況



I区 ST06~08紀年銘地輪検出状況



I区 ST08検出状況(1)



I区 五輪塔配列



I区 ST08検出状況(2)



I区 五輪塔配列



I区 ST08検出状況(3)

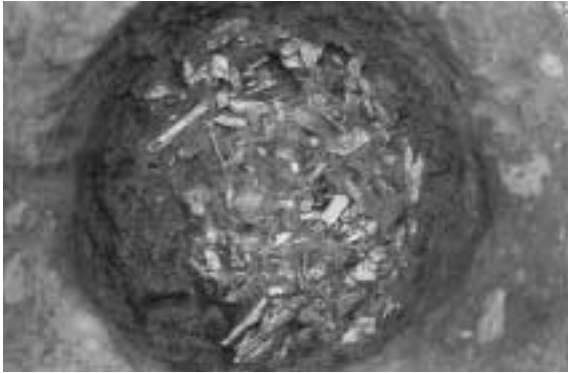
図版6 I区五輪出土状況



I区 五輪塔配列



I区 五輪塔配列



I区 水輪100火葬骨埋納状況



I区 水輪132火葬骨埋納状況



I区 地輪138下火葬骨検出状況



I区 地輪141下火葬骨検出状況



I区 地輪170

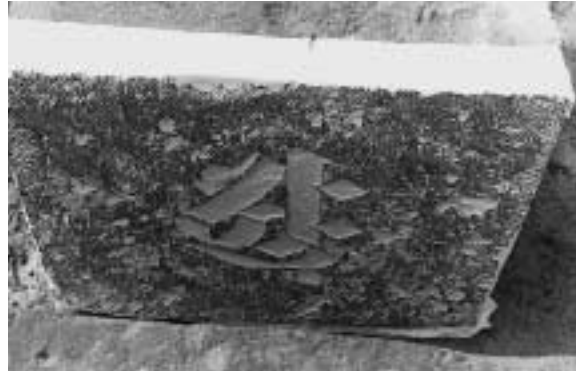


I区 地輪170

図版7 I区五輪・遺構検出状況



I区 地輪171



I区 地輪171



I区 地輪170・171配列状況



I区 ST09検出状況



I区 II期崖造成面



I区 ST13検出状況



I区 ST10・ST11検出状況



I区 ST19検出状況

図版8 I区遺構検出状況



I区 SK01検出状況



I区 SR01検出状況(1)



I区 SK01内甕検出状況



I区 SR01検出状況(2)



I区 SK01内甕除去後状況



I区 SR01発掘状況



I区 SW01検出状況

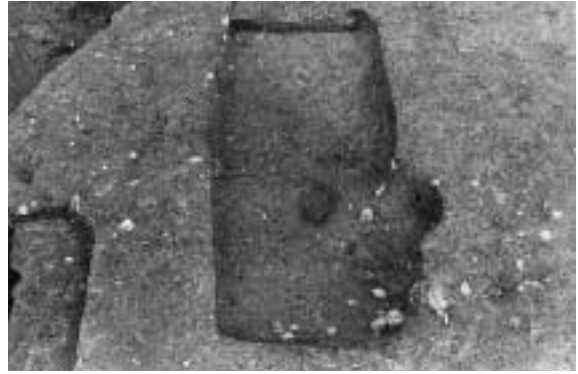


I区 ST18検出状況

図版9 II a・II b・II c区遺構検出状況



II a区 完掘状況



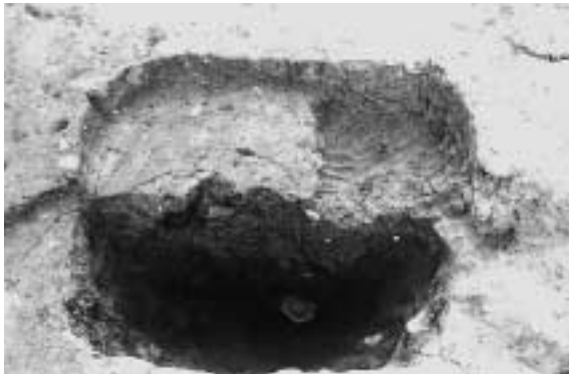
II a区 ST01完掘状況



II a区 ST02発掘状況



II a区 SD01検出状況



II a区 pit 2 半掘状況



II b区 SW01検出状況



II b区 SW02検出状況



II c区 SE02検出状況

図版10 IIe・II f・II g区遺構検出状況



IIe区 ST03検出状況(1)



IIe区 ST03検出状況(2)



IIe区 ST03検出状況(3)



IIe区 ST03検出状況(4)



IIe区 ST03検出状況(5)



IIe区 ST05・ST06検出状況



II f区 調査状況



II g区 完掘状況

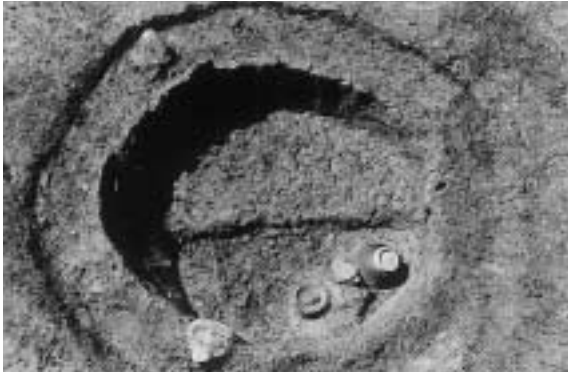
図版11 II h・II i・II j区遺構検出状況



II h区 ST07検出状況



II h区 ST06検出状況



II h区 ST07内遺物出土状況



II h区 SE03検出状況



II h区 SX04検出状況



II h区 SE03内遺物出土状況



II i区 SX06検出状況



II j区 SX07・廻国塔検出状況



I区 空風輪・相輪



I区 火輪



I区 水輪



I区 地輪





図版15 I区空風輪65・67・68・69、火輪71・75・90・93



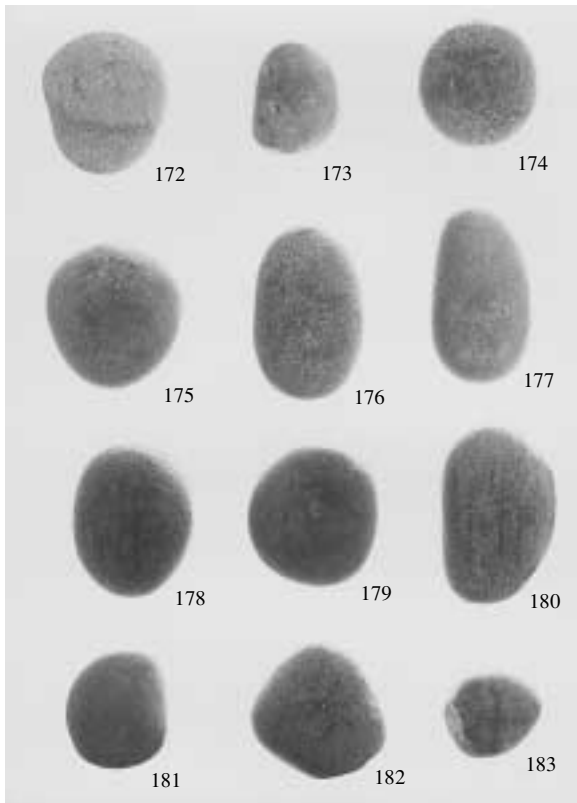




図版18 I区土師質土器・一字一石・SK01(1)

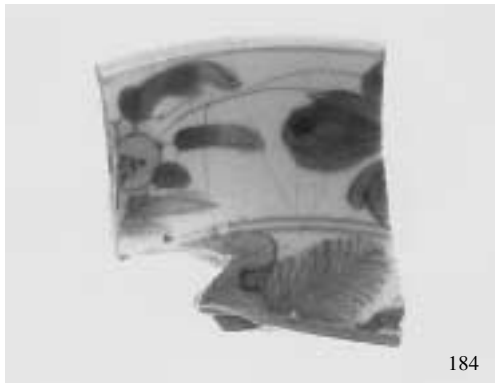


I区 土師質土器

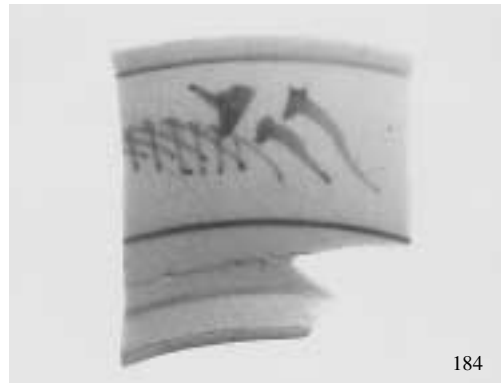




I区 土師質土器



184



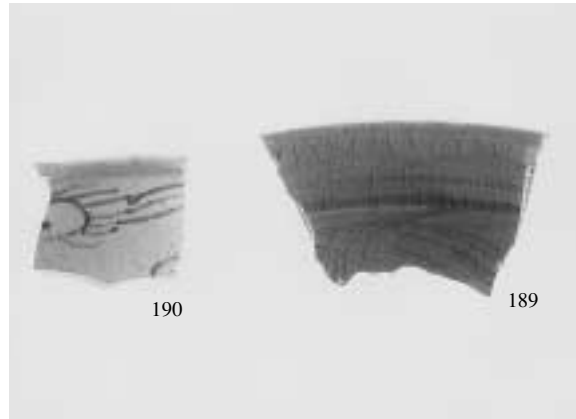
184



187

185

186



190

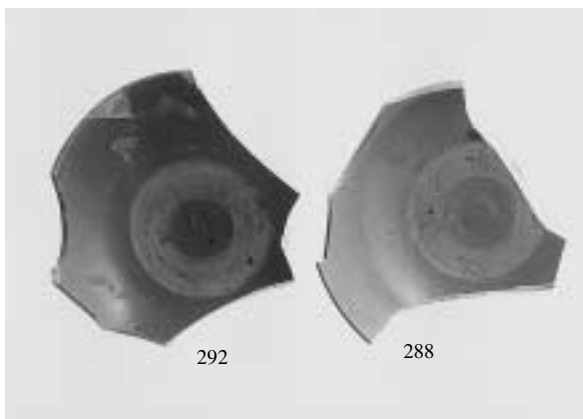
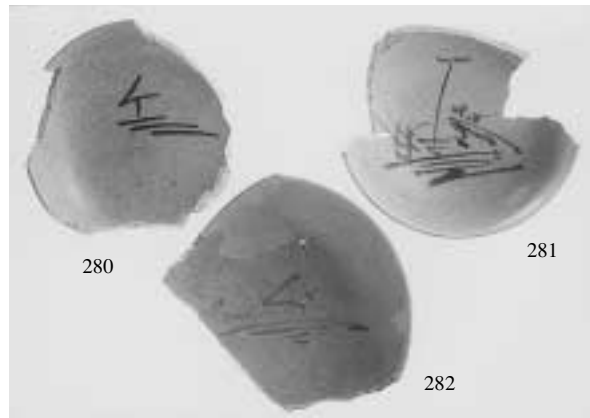
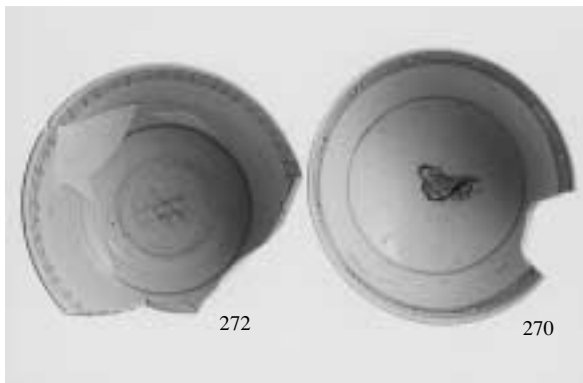
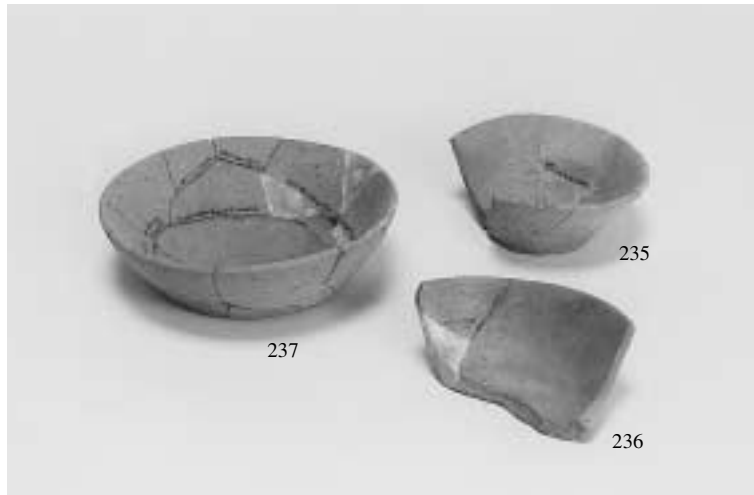
189



191

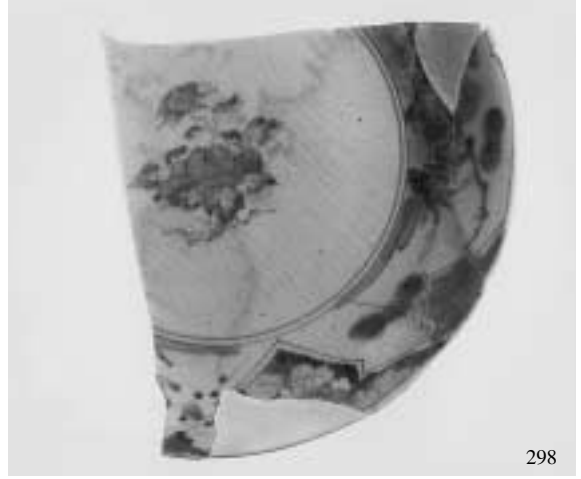


192

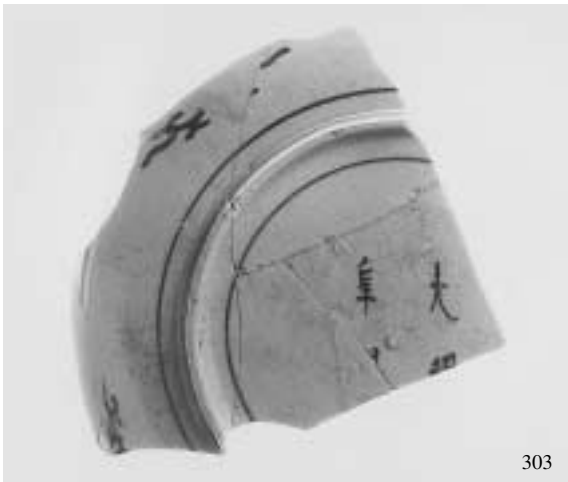




298



298



303



303



339



340





ST07



415



417

416



464



図版25 IIc区空風輪377・378、IIh区火輪452、水輪453、宝篋印塔454～456







あ と が き

今回この報告書をまとめるに当たって、いくつかの問題点があったので提起する。

- (1)新幹線事業全体の調査方針、調査方法などへの共通意識の形成がなかったこと。
- (2)調査期間の設定が十分でなかったこと。
- (3)各調査員間の意見交換が不十分であったこと。
- (4)調査時及び調査後の図面整理の徹底が不十分であったこと。
- (5)本調査担当者と報告書担当者が全く異なっていたこと。

以上のような現場調査への問題提起に加えて、整理作業、報告書作成を担当した者の問題点もある。

- (1)担当者が十分調査現場の状況を把握せず作業を行ったため、手間がかかったこと。
- (2)他の調査員が行った調査の報告を安易にできると思ったこと。
- (3)報告書に専念できる状況を作れなかったこと。

上記のことは、本調査から報告書作成までを含めた調査組織を運営するうえで、今後の調査の戒めになれば幸いである。

ただ、この報告書における文責はすべて、最終的にこの報告をまとめた坂田にある。

最後にこの調査を支えて頂いた現場作業員、整理作業員の方々に謝意を表したい。

報告書抄録

フリガナ	フルフモトジョウアト
書名	古麓城跡
副書名	九州新幹線新八代・西鹿児島間建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	熊本県文化財調査報告 第227集
編著者	坂田 和弘
編集機関	熊本県教育庁文化課
所在地	〒862-8609 熊本県熊本市水前寺6丁目18番1号
発行年	2005年

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
フルフモトジョウアト 古麓城跡	ヤツシロシフルフモトマチ 八代市古麓町 シンジョウ 新城	202	111	I区 32度29分 32秒	130度38分 16秒	(第1次) 2000.12.14 ～ 2001.5.31	3,800m ² 2,200m ²	九州新幹線 新八代・西 鹿児島間建 設工事
				II区 32度29分 42秒 ～ 32度29分 37秒		(第2次) 2001.10.9 ～ 2002.4.30		

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
古麓城跡	城跡 集落	古墳 古代 中世 近世	掘立柱建物跡 墓 井戸	五輪塔 土師器 須恵器 瓦質土器 陶磁器 木製品 石器	紀年銘五輪塔

熊本県文化財調査報告 第227集

古 麓 城 跡

九州新幹線建設事業鹿児島ルートに伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 平成17年3月31日

編集・発行 熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市水前寺6丁目18-1

TEL 096-383-1111

印刷・製本 白木メディア株式会社

〒862-0976 熊本市九品寺5丁目9番35号

16 教委 教文

② 005

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 227 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名： 古麓城跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL： <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2015 年 12 月 8 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL： <http://www.kumamoto-bunho.jp/>